

鏡映のモノポリー

まみゅう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、キヨウの知人の娘だと名乗る女がゾルディック家を訪れる。

一見したところ無力で無害そうに見える女だったが、初見でイルミは彼女に言い知れぬ不快感を抱いた。そしてその直感通り、女は家族に受け入れられ、じわじわとゾルディック家の日常を侵食していく。女の能力は何なのか、何を目的に近づいたのか。

これはイルミを主人公にした、ゾル家をめぐる水面下の攻防の話。基本は敵対から。後半さして甘くないものの恋愛要素もありますのでご注意ください。

22話から原作沿いになります。

※同作者名で自サイトで連載中のものの転載です。ハーメルン様は初めてなので、追加したほうがよいタグやその他ご指導どうぞよろしくお願ひします。

目 次

01.	忍び寄る異物	1
02.	不都合はないの	1
03.	冷たい光	4
04.	孤立無援	8
05.	裏切りは胸のうちに	11
06.	挑発と本性	14
07.	黄泉間違い	17
08.	違和の足音	21
09.	憶測は役立たず	27
10.	稚拙な動機	33
11.	疑わしきは罰せよ	39
12.	買収	44
13.	疑心暗鬼	50
14.	斜め上	55
15.	魂の器	63
16.	利用価値	72
17.	婚前契約	87
18.	罪悪の枷	92
19.	潜在的感情	98
20.	嫌よ嫌よも嫌がらせ	104
21.	遠回りな感情	110
22.	保険	120
23.	事故死の想定	129
24.	価値と借り	135

25.	柄にもなく
26.	遊行
27.	心当たり
28.	安らぎの道
29.	幼子
30.	ストックホルムの夜明け前
31.	ゆりかごの腕
32.	酷い女
33.	きつかけの爆弾
34.	内なる望み
35.	埃を被つた愛情
36.	弱り目
37.	鏡映のモノポリー
38.	きっと、解けてなくなる

260 253 247 238 226 219 207 201 185 179 169 161 152 144

01. 忍び寄る異物

家の中で、他人の気配がするのはよくあることだ。

そう言うと不思議に思われるかもしれないが、一人一人の執事を覚えているわけでもなく、ましてや家族とも思っていないイルミにとってはそれらの気配など判別がつくはずもない。

だからたとえ見知らぬ気配が家の中にあるうと、普段は少しも気がしないのだ。いや、いちいちそんなことを気にしていたら流石に気が休まらない。侵入者を寄せ付けないためにあの重い門と教育された執事を置いているのだから、そんなことにまで煩わされたくない。

しかし、その日仕事から帰つたイルミはどうしてもある気配の正体を確かめたくなつた。というのも、その気配はここゾルディックにおいて”異質”の一言に尽きる。執事たちは同じ養成所で訓練されたため、皆多かれ少なかれ似たような気配の消し方をするのだが、たつた一つ、群を抜いて微かな気配があるのだ。

微かなものが逆に意識に引っかかる、というのはなんだか矛盾しているようだが、それはイルミが暗殺者だからこそ。大っぴらなものよりも、隠された方がかえつて気に障る。熟練した執事の上手さとはまた違つた気配の消し方は、どちらかというと野生動物のそれに近かつた。それゆえ、時折勝手に連れてこられる婚約者候補などの同業ではないのだろう。

イルミは何故か胸騒ぎを感じながら、神経を集中させ気配を辿つた。幾重にも守られた家の中だ、そう危険はあるまい。そうは思つても、何故だか嫌な予感がつきまとう。イルミは勘なんてものを頼りにするたちではなかつたが、どうにもこの気配の相手はゾルディックにとつて良くない相手だと思つた。

そして、その予想が外れていなかつたことはすぐに明らかになつた。

「まああ！ イルミ、ちょうど良かつたわあ!! 今あなたを呼びに行こうと思つてたの!!」

例の気配は母親——キヨウとともにあつた。場所は滅多に使われることのない客間だし、尚更イルミが警戒する必要があるとは思えない。それでも念のため扉をノックしようとすれば、それより先にキヨウが中から出てきた。

「誰が来てるの」

「ええ、紹介するわ!! 流星街時代に縁のあつた人でね！あ、ええと、今日訪ねて来てくださつたのはその方の娘さんなんだけれど!!」

元より騒々しい母親だが、機嫌がいいのかいつにもましてよく喋る。けれどもイルミはその半分も聞いておらず、意識は部屋の中の人間に向けたままだつた。「さあ、入つて!!」力強く腕を引かれなくとも、イルミは初めからそのつもりである。自分の目でこの“異物感の正体”を確認せずにいられなかつた。

「リリスさんよ!! こちらはうちの長男なの!!」

「初めてまして。お邪魔しています」

「……」

そう言つて、ぺこりと頭を下げた女はぐくぐく普通の人間のように思われた。一応ここまでやつてくるだけのことはあつて念能力者ではあるようだが、イルミが脅威を感じるほどではない。けれども顔をあげた女と目が合つて、イルミはやはり気に入らない、と思つた。何が、と言われば困るが、強いて言うなら目だ。人好きのしそうな柔らかい笑顔を浮かべているくせに、その瞳の奥はどこか虚ろに感じる。

「リリスさんはお母様生き写しなの、一目見てびっくりしちやつたわ!! まるで昔の友人が訪ねてきたみたいなんですもの！」

「母と過ごした時間は短かつたのですが、キヨウさんのお話はよく伺つてました。お会いできて光栄です」

「いいえ、こちらこそ会えて嬉しいわ！ 私が流星街を去つてからの話、聞かせてちようだい!!」

紹介するだけしてもうイルミのことなど忘れてしまつたのか、キヨウはリリスと話すのに夢中なようだつた。イルミは母親が流星街出身することを知つていたが、特に思い出話など聞いたことが無

い。そもそも、噂を聞く限りあまりいい思い出のあるところではないだろう。

けれども今、キキョウの喜びようを見ていると、リリスの母親とはかなり懇意にしていたらしい。注意深く観察していると、またリリスと目が合った。「お忙しいところ、すみませんでした」彼女はちよつと困ったように微笑んで、それからキキョウに勧められるままに席につく。今が退出するタイミングだ、と言われたように感じたのは単なるイルミの被害妄想だろうか。

しかし実際のところ、イルミがこのままここに残る理由は無い。母親の長い話に付き合うのはごめんだし、一応『異物感の正体』も確認した。未だにもやもやとはするものの、客人として歓迎されているリリスを勝手に追い出すことはできないし、これといって追い出す理由もない。

どうせそのうち帰るだろう。不快ならば視界に入れないようになるのが得策だ。

そう考えたイルミは、話し込む母親に声をかけず部屋を出た。今日は深夜にもう一件仕事があるので、今のうちに身体を休めておこう。

しかし気にしないように努めれば努めるほど、さつきの女が気にかかるつた。

漠然とした嫌な予感ほど、気持ちの悪いものは無いのだ。

02. 不都合はないの

「最近機嫌悪いねえ、何かあつたのかい？」

言葉だけを拾えば、あたかもこちらを気遣うような台詞。

しかしそれを発した隣の奇術師に本来の意味での気遣いなどないだろうし、そもそもイルミ自体気遣われるのを嬉しいとも思えない。どうせこの男は暇を持て余していて、なんでもいいから刺激が欲しいだけなのだ。

「別に」

強引に誘われ、仕事終わりに立ち寄った高級なバーは客もまばらで居心地がいい。あまり会話をする気にはなれずイルミはいつも以上に素っ気なく返事をしたが、かえってそれはヒソカの好奇心を煽っただけのようだった。

「何もないのに、そんなピリピリしてるのはかい？」

「ヒソカには関係ないでしょ」

「相談なら乗るよ？ボク達は友達じゃないか」「は？キモいヒソカ死んで」

最初から無いとはつきり言っているのに、しつこい男だ。だが、裏を返せばそれだけヒソカが確信をもつて“何かがあつた”と感じているということだろう。「また弟くんのことかい？」当たらずとも遠からず。観念したイルミは小さく息を吐いた。この調子だとこちらが何か言うまでヒソカは諦めないだろう。

「まあね、少し気になることがあつて」

「へえ、また訓練が嫌だつて逃げ出したりするのかい？」

「……なんで知ってるの？オレ、そんなにヒソカに弟の話したつけ？」「キミは仕事か弟の話しかしないだろ。会つたことはないけど、有望だつて聞いてるから楽しみにしてるよ」

「手を出したら殺すから」

言われてみれば、確かにこのやり取りも既視感がある。仕事以外でキルアが外出することは無いから大丈夫そうだが、ヒソカへの警戒は怠らないようにしようと思つた。

「ていうか話戻すけど、今はやる気がないわけじゃないんだよね。むしろ前よりあるよ」

「え？ ジヤあいいぢやないか、一体何が気に入らないんだい？」

「……うん、まあ、そうなんだけど」

ヒソカの言つたことは実に正しい。それがわかつているからこそイルミはもやもやしているのだ。「正確には、やる気を出すことになつた理由が気に入らない」握つたままのグラスの酒は、ちつとも減つていなかつた。

「うちにね、母さんの昔の知り合い——って言つても本人同士に面識はなくて、知り合いの娘つて立ち位置なんだけど、そういう女が訪ねて来てさ」

ゆつくりと話し始めながら、イルミは女に初めて会つた日のことを思い出す。あれは確か三か月くらい前のことだ。まだ二度ほど、それもどちらも一瞬しか会つたことはないが、記憶は褪せずあの女の顔が、特に瞳の印象が強く残つていて。

「最近オレは長期の仕事に出てて不在だつたから知らなかつたんだけど、結構頻繁にうちに来てたみたい。いい話し相手になるみたいで、母さんがすごく気に入つてるんだ」

「へえ」

「家に来るようになつてから、必然弟たちとも会つてるみたい」「で、キミの可愛い弟くんはやる気を出している、と。

別に悪い話だとは思えないけど……まさかキミは弟くんがその女を好きになつたら困るとか言い出すつもりかい？」

こちらがまだ何も言わない内から、ヒソカは大げさに呆れたような顔をした。「それもないわけではないけど、そうじやないよ」女とキルアとでは流石に歳が離れているし、仮にキルアが淡い想いを抱いたとしても所詮一時的なものだろう。イルミが気に入らないのはそういうことではないのだ。

「少し、気味の悪い女でね。何がとは言えないけど、穏やかぢやない雰囲氣があるんだよ。それがオレの知らないうちに、家に入り浸つてたことが既に気持ち悪い」

「なるほどねえ、お父さんは何も言つてないのかい？その、見ず知らずの女が家に来ることに対して」

「さあ、様子見つて感じじやない？女自体の実力は脅威になるほどじゃないんだ。いつだって殺せるし、今のところ居ても特に差しさわりが無いから放つてるように見える」

「お母さんの知り合いで、弟くんも気に入つてるし？」

「そう」

だからイルミも手が出せない。気に入らないが、今はまだ放つておくしかない。曲がりなりにも彼女は侵入者ではなく、ゾルディック家に招かれた客人だからだ。

「まあ、イルミがもやもやする気持ちはわからなくもないけどねえ」

ヒソカはそう言つて、頬杖をついた。どうやら話を聞き終わつて、あまり興味がなくなつたらしい。勝手な奴だ、とは思つたが、こちらも解決を求めてヒソカに相談したわけではないのでそれ以上話すことは何もなかつた。今更思い出したように、グラスの酒に口をつけた。

「でもさ、キミ、それつて単に気持ち悪いだけじゃなくて焼きもちなんじやないのかい？」

「は？ 焼きもち？」

アルコールの強い香りが鼻をついた。けれども流し込んだそれはイルミにとつて水と変わらない。予期せぬ言葉に思わず聞き返せば、ヒソカはにやにやと意地の悪い笑みを浮かべた。

「うん、つまりね、キミは突然やつてきたよそ者が家族に気に入られていることが面白くないんじゃないのかなつて」

「バカじやないの？」

「おやおや氣を悪くしたならごめんよ。でも実際、よく喋るお母さんの話し相手ができて、気にしていた弟くんも修行にやる気を出してるんなら好都合じやないか。だからお父さんも放つていて、そういうだろう？」

「……」

違う、と言うのは簡単だつたが、自分の抱いている不快感をきちんと

と説明できる自信が無かつた。「ヒソカはあの女のことを知らないからそう言えるんだよ」悔し紛れに言い返したが、實際イルミだつて詳しいわけではない。それどころか、ほとんど何も知らないと言つていだろう。

あの女についてわかっているのは、名前と顔と出身地。それから嫌に家族に入られているということだけだった。

03. 冷たい光

まだだ、今日も来ているのか。

帰宅するなり例の気配を感じて、イルミは内心で舌打ちをした。一体うちはどうなつているんだ、いくらなんでも管理が甘すぎる。あの女の実力が大したこと無いとはいえ、情報だつて守らなければならぬはずだ。それなのに、こうも簡単によそ者を家にあげて良いわけがない。

この数か月間、自分が仕事に出かけていたことが非常に悔やまる。父や祖父は仕事以外のこととなると基本的に母に任せてしまいがちだ。重要な決定はするけれど、細かいことは言わない。だからその分、イルミが家族のことには目を配つてきたりだつた。反抗期のキルアは母親のいうことなんか聞きやしないし、ミルキはとつこの昔に舐められている。なにかあれば長男として頼られるのは自分で、それが当然だと思っていた。

だからこそ――

今この無秩序な現状が許せない。ゾルディック家に客人など笑わせる。

イルミは苛立ちを滲ませながら、気配のする方へと足を進めた。さりに気に入らないことに、一緒にいるのはキルアとカルトだ。他人が物珍しいのはわかるが、警戒を怠り過ぎだろう。叱らなければならぬ。イルミはノックもせず、弟の部屋に足を踏み入れた。

「キル、」

「うわっ、イル兄」

名前を呼ぶとわかりやすく飛び上がったキルアは、すぐさま気まずげな表情になつてこちらを見た。隣には同じく驚いた表情のカルト、そして例の女。

「こんばんは」

「ごくごく当たり前みたいに挨拶をした女を無視して、イルミは弟たちを見据えた。

「なにやつてるの」

「なにって、別に……訓練はちゃんとやつたらしいだろ」

「そう。そのわりに酷く無防備だね。騎りはよくないよ、キル。今のが家じゃ必ずしも安全とは言い切れないからね」

そういうてちら、と女を一瞥する。視線の意味に気が付いたキルアは今度はわかりやすく眉をしかめた。その庇うような態度も気に入らない。

「リリスは母さんの知り合いじやん」

「正確には知り合いの娘で、母さんとは直接面識もなかつた」

「イル兄はいなかつたけど、もううちにくるようになつてから三ヶ月にもなるんだつて。大丈夫だよ、だいたいこいつ弱えし」

「……だからさ、キル、そういうのが驕りだつてわかんないの？」

求めているのは口答えではなく反省だ。

確かにキルアの言う通り、女は強くはないだろう。しかし、キルアが知らないだけでこの世界には念というものがある。そこには肉体の強さだけでは議論できない危険さがあつて、どんな相手でも油断は禁物なのだ。もし、女が操作系の念能力者だつたらどうする？いくらキルアが暗殺者として優れた身体能力を持つていたとしても、操られてしまえばそんなものは関係ない。念能力にはそういう怖さがある。しかし、念についてまだ教える氣のないイルミは、弟を威圧することしかできなかつた。いや、もしキルアが念を知つていたとしても、わざわざ危険性を説いて納得してもらう必要があるとは思つていなかつた。キルアは黙つて言うことを聞いていればいい。そうすれば間違いはない。少なくとも、暗殺者としては正しいことを教えているつもりだ。

「キルは人を信じすぎだよ。忘れてない？うちは命を狙う稼業であると同時に、狙われる稼業でもあるんだ。家族以外は疑うくせをつけないとね」

「イル兄、リリスの前でそんな……」

「何が問題なの？」

イルミの質問に、キルアは黙り込んだ。でもあの顔は納得したからじゃない。不満を溜め込んだ顔。文句を言いたいのだろうが、やはり

まだ真っ向から立ち向かってくる勇気はないらしい。「あの、」流れた沈黙を破つたのは、例の女だ。キルアに当然のように名前を呼ばれている、女――。

「おっしゃることはもつともだと思います。逆の立場だつたら、疑うのも無理ないなって。だから気にしないで」

「でも、」

「お兄さんはキルア達のことが心配なだけよ。

すみません、本当に居心地が良くて……家族らしい家族に憧れがあつただけで、害意はないんです。もう帰りますね、邪魔してごめんなさい」

ぺこり、と頭を下げる女。イルミは正しいことを言つただけなのに、まるで悪者扱いだ。弟たちの視線は女に同情的で、イルミに対してどこか非難を含んでいる。それも、キルアだけならともかくカルトまでだ。カルトは兄弟の中でも暗殺者らしい性格に育つていると思つていたのに。

すれ違うようにして、部屋を出て行く女。イルミは牽制の意味も込め、横目で睨みつけた。少し殺氣を飛ばしてやれば、恐ろしくなつて二度と訪ねては来ないだろう。

だが、女はもう一度イルミに会釈した。しつかりと視線が合つて、微笑まれる。

それは柔らかい笑みだったけれど、相変わらず瞳の奥は冷たい光をたたえていた。

04. 孤立無援

「あらあら、リリスさんはどうしたの？せつかくお食事にもお誘いしたのに」

今日は珍しく、家族全員がそろつて食事をすることができた。だからそんな場で、あの女の名前なんて聞きたくもない。ここへの“異物”が混じるなんてもつてのほかだ。「リリスなら追い出されたぜ」イルミが黙つていると、まるで告げ口するかのようにキルアが答えた。最近じや親のことを疎ましがつて、ろくに喋りもしなかつたくせに。

「追い出したですって？まあ、誰がそんな……イルミなの？」

今度はカルトだ。名指しこそしなかつたものの、視線で母親に伝えた。イルミはいい加減腹が立つて、「あのさ」と口を開いた。

「母さんの知り合いだつてのはわかつてること、いくらなんでもやりすぎだよ」

すっかり食事をする気分ではなくなつて、持つていたナイフとフォークを並べて皿の上に置く。父も祖父もいることだしい機会だ。イルミがあの女の訪問を快く思つていないと分かれば、皆もこの過ちに気が付いてくれるだろう。

「キル達にはさつき言つたんだけどね、あまりよそ者を信頼しすぎるのは正直感心しない。母さんには悪いけど、どうも嫌な感じがするんだよ、あの女」

「まあそれはどういう意味かしら？リリスさんはとてもいい方よ。キルやカルの面倒もよく見てくださるし」「だから、そういうのが、」

——気に入らないんだよ

喉元まで出かかった言葉を呑みこんで、イルミは別のことと言つた。

「よくないんだよ。発展途上のキル達に余計なことを吹き込まれても困る。あの女が万一何かしてかしても、キル達だけじゃ対処できないかもしだれないと」

なぜ本心を隠す必要があつたのかは、自分でもわからない。

「そうねえ、イルミの言いたいこともわかるけれど、彼女が来てからキルもやる気を出しているようだし……」

「……」

それは正直、言われると痛いところだつた。だが、そもそも他人の言葉でやる気を出している方がおかしい。その時点で、それこそ何か吹き込まれている可能性がある。

「もしリリスが悪い奴なら、イル兄がいない間にとつくにやつてるつて。疑いすぎ」

「甘いね、キル。そんなの油断させるためかもしれないだろ。だいたい本当に母さんの知り合いだつていう証拠があるの？」

「イル兄のほうがリリスのことなにも知らないくせに……」「知つたとしても同じことだよ」

前のキルアはここまで反抗的じやなかつた。それなのにこうも楯突いてくるのはやはりあの女の影響だろう。だから嫌だつたのだ、とイルミは忌々しく思う。

「ねえ、あなたどう思う？ 私はただ、知り合いが訪ねてきて嬉しかつただけなのよ」

ここでようやく、母は父に意見を求めた。この場の雰囲気的に母はキルア寄りの意見らしいが、父さえ反対してくれればあの女は二度とうちへは来られないだろう。イルミは父が自分と同意見であることを期待して視線を向けた。当然、そうであるものとして疑つてすらいなかつた。それなのに――

「キルア、最近の訓練はどうだ、辛いか」

「……そりやま、楽しんでやるもんではないけどさ。でも、リリスが来てからは息抜きができるし、前よりはずつとマシだよ」

「そうかそれならいい。ただ節度は守れ。キキョウもだ、いいな？」

「ええ、あなた」

父はそれ以上のことは、イルミが期待したようなことは何一つ言つてはくれなかつた。女の訪問に対しても反対したわけではない。むしろ、これでは容認したようなものだ。驚いたイルミが思わず責め

るような視線を向ければ、バツチリと目が合う。

「イルミ、お前が心配するのもわかるが、俺も彼女の母親とは知り合いでな。キヨウが流星街にいた頃、何度か会つたことがある」

だからそれがどうしたというのだ。あの女は母の知り合い本人ではないし、その娘である証拠もない。顔がいくら生き写しだろうが、顔なんていくらでも変えられる。こんな納得できない。だが、祖父も何も言わないし父がそう決めたのならイルミにはあの女を追い出すことはできない。

「……そう。わかつたよ、今のところはね」

ここは家族団らんの場で、守るべき家族はここにいる。でもその家族は誰一人イルミの味方をしてくれない。

結局皆キルアに甘すぎるのだ。

イルミは食事もそこそこに席を立つた。腹立たしいけれど皆がそのつもりなら、自分だけはあの女の行動に目を配つていなくてはいけない。何が目的かは知らないが、必ず化けの皮を剥いでやる。

たとえ家を継ぐのが自分じやないとしても、イルミはこの家を守らなければならないのだ。だから家の平穏を乱す者は誰であつても許せなかつた。

05. 裏切りは胸のうちに

料理がおいしかったのもあるが、ミルキには今日、自室に戻りたくない理由があった。

食事の席での兄の警告。そして、それに対する父の決定。あの場では大人しく引き下がつたが、あの兄のことだ。絶対にまだ納得していないし、かえつてあのリリスという女へのいらだちを募らせたことだろう。そしてそんな“家族想い”的なならば絶対にリリスを排除しにかかる。しかし実力行使に出られない今となつては、まず相手の情報を集めるところから始めるのが基本だろう。

「ミル、遅かつたね」

のろのろと重い足取りで部屋に戻れば、案の定そこにはイルミの姿があつた。用件は聞かなくてもわかる。協力を断れば、兄の近くにあるグツズ達が葬られるのだろう。

部屋の空気は早くも重苦しく、逃げ出したくなつたミルキだつたが、どこへ行こうとこの兄からは逃れられないのだとよく知つていた。

「イル兄が欲しいのはあの女の情報だろ」

「うん、話が早くて助かるね。ということはミルも反対なんでしょ?」「……俺はまあ、ほとんど部屋にいるからあんま関係ねーし。ま、でも一応既に調べてあるぜ」

リリスがうちに来るようになつたのは3か月前。正直、ミルキにとつてはどうでもいいことだつたが、それでも一応セキュリティ面で何かあれば叱られるのはミルキだ。だからいくら母親の客とはいえ調べさせてもらつた。「でもたいしたことはわからねーよ。何しろあの流星街出身だしな」どこへやつたかな、と山積みの漫画の中から資料を取り出して渡す。

「それはある程度仕方ないと思つてるよ。で、オレがいない間、もちろん代わりに監視してくれてたんでしょ」

「まあな。でもこつちも特に怪しいところは無し。大抵ママとお茶してるか、キル達の訓練見学したり、ゲームしたりしてると。一応動画も

録音もある」

この兄を満足させるにはそれなりにきつちり調べておかないと怖いので、ミルキはやれるだけのことはやつたつもりだ。が、怪しいところがないと言うとどうしてもリリスを擁護しているみたいになってしまう。「ま、パパもママもキルアには甘いからな」弁解するようにならう。「そういえば、無表情な兄の眉がわずかにしかめられた。

「そういうえばキルはどうしてあんな女でやる気を出してるわけ?」

「対等に口をきいてくれる他人が物珍しいんだろうな。あと、聞いてる限りだとあの女はキルをその気にさせるのが上手いよ」

「その気?」

「キルは褒められて伸びるタイプかもな。調子に乗り過ぎるとウザいけど」

「これ以上甘やかしていいことなんてないよ。キルのことはオレが一番わかってる。まずはあのやる気のむらを治さないとね……」

そこまで言つて話がそれたことに気が付いたのか、イルミは少し黙り込んだ。キルアのこととなると普段は冷静な兄もこれだ。皆キルアに甘いというが、実際の所キルアをいい意味でも悪い意味でも特別視しているのはこの兄なのだろう。

正直なところ、ミルキはリリスの件にも、弟の件にもあまり関わりたくなかつた。なので知つてることはすべて話して、さつきと一人にしてほしかつた。

「あとは、パパとママだな。これはたまたま聞いただけなんだけど、あの女がママの知り合いの娘だつていうかなりの確証があるみたいだぜ。なんでも念が母親と同じ物だとか」

「母親と同じ念? 何言つてるの? 念は固有のものでしょ、いくら親子でも同じ念なんてありえない」

「いや、俺もそう思うけどさ……とりあえず、さつき詳しく述べて説明しながらたのはキルに念のこと知られたくないからだと思うぜ」

「そう……」

ありえない、と言い切つたものの、兄は何か考えているようだつた。確かに世の中には色んな念があるし、他人の念を盗んだり、コピーリ

たりする能力があるかもしない。しかしそれならなおのこと警戒する必要があると思うのだが……。

「とりあえず、この資料はもらつていくよ。また何かわかつたら教えて」

「おう」

「……ミルだけはまともそうでよかつたよ」

小さく溜息をついた兄は最後にそう呟いた。だが、生憎ミルキはイルミほどリリスに敵意があるわけではない。さつきはあえて言わなかつたが、キルアを介してリリスと一緒にゲームをしたこともある。実際に会話をした感想としては、別に不快なところなんてなかつた。けれど――

この裏切りを今の兄に告げるのはあまりにも酷だろう。ミルキはようやく一人きりになつた部屋で、これから我が家に波乱が起ころのだろうなと憂鬱な気分になつた。

06. 挑発と本性

その後、イルミはミルキから渡された資料やデータを全て自分の目で確認した。

が、弟の言う通り、特に不審な言動は無い。それどころか録画された映像はゾルディック家流とはいえ普段の日常そのもので、これまるでただのホームビデオだ。

女は育つた環境のせいいか多少の毒ならば平気なようで、食事も普通にしている。つまり、毒殺を狙うには確実性が低いということだ。イルミはそこまで考えて、いや、なるべくなら殺さないようにしなければいけないと考え直した。それは別に無駄な殺しをしたくないとか、ましてや女が可哀想というわけではない。もし今、家族に好かれている状態の女を殺せば、自分が非難されるのが目に見えているからだ。

それはイルミの望まないところだつた。結果的に家族の為になるなら多少嫌われたところで気にしないイルミだが、果たして今回はそこまでの危険を冒す必要があるだろうか。得体のしれない氣味悪さはあるものの、ナニカほどの脅威ではない。所詮ただの女だ。そんな下らない女の為に家族から非難を浴びるのはどうも割に合わない気がする。

というわけで、できることなら女には自分から出て行つてもらうよう仕向けたかった。幸い、イルミは操作系であるため、針を使つて女を操れる。父や祖父がいればわずかな念の針にも気づくだろうが、それなら不在の時を狙つて刺せばいいだけのこと。

(なんだ……思つてたより簡単じゃないか)

自分は何をそんな苛立つていたのだろう。ひとたび解決策が見つかると、今まで悩んでいたことが馬鹿らしくなるくらい些末な問題だつた。

イルミはにわかに機嫌を回復させると、早速計画を立てることにした。まずはあの女が次にいつうちへ来るのか知らなければならぬし、イルミ自身のスケジュール調整も必要になる。女の予定に関して

はそれとなく母や弟たちから聞き出せばいいだろう。そしてその日に父や祖父がいなければ決行だ。

イルミは何種類がある針を取り出すと、中でもひときわ禍々しいオーラを放つものを手にした。

（気分的には、これを刺してやりたいところだけど、即死されたら面倒だしな……）

録画された映像を見ていると、だんだん憎しみすら募っていく。部外者のくせに、うちの家族と仲が良さそうにしているのは許せない。本来ああしてキルア達と過ごすべきは兄であるイルミの方なのに、当たり前のように馴染んでいる女を容認できない。

結局、最大限の譲歩として、イルミは二番目にオーラの込められた針を使うことにした。即死されるのは困るけれど、さっさと死ねばいいのに、という気持ちは変わらない。いつもは殺しをしても特別な感情はわかなかつたが、きつとこの針をあの女に突き立てる瞬間はざぞ楽しいことだろう。その時が来るのが待ち遠しくて待ち遠しくて仕方がなかつた。



「あ、ここにちは。珍しいですね、これからお仕事ですか？」

女の訪問は、イルミが食事の席で苦言を呈してからちょうど2週間後のことだった。今までのもつと頻繁に訪ねて來ていたようなので、前回イルミが牽制したのが効いたか、それとも母の方が節度を守るようになしたのかわからないが、どちらにせよ久しぶりの訪問であることには変わりない。

そして都合がいいことに、この時間は父も祖父も仕事に出かけていた。本来ならイルミも仕事のはずだったが、今日はわざと入れていなさい。

「仕事だつたら良かつたんだけどね」

一対一でまともに会話をしたのはこれが初めてかもしない。今日は女を一步も敷地に入れるつもりは無く、イルミは試しの門の前で待ち構えていた。

相変わらず物怖じするということを知らない女はごく普通の世間話のように話しかけてきたが、そのこと自体も正直面白くなかった。

「あれだけ言われて、まだそれでも来るつて相当な神経の太さだね」

「お招き頂いたから来た、それだけですよ。扉だつてちゃんと開けて入つてますし問題ないはずですよね」

「はは、入るのはさほど難しくないよ。ただ入つて出てきた者が少ないって話。この意味わかる？」

「あなたが排除している、つてことですか？」

「オレが直々に手を下すことは基本的にならね。大抵執事で十分。だから誇りに思つていいよ」

もし女がここで逃げたなら、イルミは追わなかつた。憎しみはあるものの、結果的に二度と我が家に介入してこないならそれはそれでいいからだ。

だが、女は一步も動かずこちらをまっすぐに見つめ返す。その表情から察するに、怖くて身動きが取れないというわけでもなさそうだ。

「でも、いいんですか？ 私を殺して」

「……仕事以外での殺しはやらないとでも？ 何事にも例外はあるよ」「いえ、私が心配してるのは『この家の貴方』についてですよ」

「それ……どういう意味？」

女は食事の席でのイルミの孤立など知らないはずだ。それなのになにもかも見透かしたかのような物言いに、思わず声のトーンが下がる。

まさか女は全てわかつたうえで、こちらを挑発しているのだろうか。大々的にイルミが女を殺せないのがわかつていて、冷めた笑みを浮かべているのだろうか。

そうだとしたら、舐められているにも程がある。

「あのさ、どれだけお前が家族に取り入ろうとオレだけは騙せないよ。この場で殺す以外にもいくらでも方法はある。オレを誰だと思つてるの？」

「ではさつさとその方法とやらを試せばいいでしょう。それとも殺しの前に会話を楽しむ趣味もあるんですか？」

「……本性はそれだね、よくわかつたよ」

なにがリリスさんはいい人よ、だ。聞いて呆れる。こいつはやはりイルミが睨んだ通りとんでもない女だ。

そうとわかれば早く騙されている皆の目を覚まさないと。

イルミは女に近づくと、おもむろに首を掴んで片手で持ち上げる。普通なら暴れるところだが、針を取り出してもなお、女は締めあげられた状態のままろくに抵抗もしなかつた。

「無いとは思うけど、簡単に抜かれちゃ困るからね」

側頭骨と頭頂骨の間辺りを狙つて、容赦なく針を突き立てた。念で覆つた針なら、骨も肉も変わらず簡単に貫ける、本当はまっすぐ刺し込んで埋めるだけでよかつたのだが、イルミはわざとぐりぐりと中身を抉つてから全て埋め込んだ。

「……うん。やつといい表情になつたね」

気に入らなかつた女のあの目は、今やもう何もない虚空を見つめている。機能的には死んでいないものの、もはやこれはあの女の形をした人形に過ぎない。イルミが手を離すと、女はぐらつきながらも地に足をつけて立つた。そうして律儀にイルミの命令を待つてゐる。

「二度とゾルディック家に関わるな」

そう言うと、女はゆつくりと頷き向きを変えた。元来た道をふらふらな足取りで引き返すさまは無様で胸のすく思いがする。

イルミは女の後姿が見えなくなると、自分も門の内側へ——大事な家へと戻ろうとした。そして門を軽々と開けたところで、ふと思い出す。

「ゼブロ、お前は何も見ていないし聞かなかつた。いいね？」

「……はい」

ゾルディック家の使用人は、門番に至るまで優秀だ。もし優秀でないのなら、ここまで生きてはいられなかつただろう。

聞こえてきた返事に満足したイルミは今度こそ門をくぐつた。こんなに気分がいいのは久しぶりだつた。

07. 黄泉間違い

「一体どうしたのかしら……」

キキヨウの心配そうな咳きを横で聞きながら、イルミは上機嫌で針の手入れをしていた。普段は母親のとめどない長話を避けるため、仕事終わりはさつさと自室に戻るのだが、たまにはこうして愚痴を聞いてやるものも長男の務めだろう。

——ちょうど“聞き役”もいなくなってしまったことだし。
イルミはそう考えて僅かに口角をあげたが、幸いにもキキヨウは気づかなかつたようでしゃべり続けていた。

「連絡がつかないのよ。この前約束した日もいくら待つてもいらっしゃらなかつたし、私心配だわ。何かあつたのかしら？」

「さあ、忙しいんじゃない？」

「でも、それならそようとお断りの連絡でもいれるでしょう？リリスさんはそんな約束をすっぽかすような方じやないもの」

「へえ、そうなんだ」

「……何かあつたんじゃないかしら！？だつて最後にお会いしてからもう一か月にもなるのよ？きっとそうだわ！どうしましよう！！」

自分で自分の疑問に答えを出して大騒ぎするのは、キキヨウの悪い癖だった。もつとも、今回その予想は当たつているのだが、イルミとしてはあまり大事にしてほしくない。「きっとリリスだつて色々あるんだよ」たつた今オーラを込めたばかりの針の出来を確認しながら、イルミは宥めるようにそう言つた。

「確かにリリスも一応裏稼業なんですよ？誰とも連絡を取らず潜伏しているとがなんじやない？」

「あら、あなたたち仲良くなつたの？」

「別に。皆があれこれ言うから少し話しただけだよ」

「そう！それは良いことだわ！彼女、いい人でしょう？」

「そうだね」

これで使つた分の針の補充は完璧だ。

イルミは全く心のこもらない相槌を打つと、ようやくキキヨウへと

視線を向けた。

「それより、キルの訓練のことだけど、そろそろ少しレベルを上げようと思うんだ」

認めたくはないが、あの女のお蔭でやる気を出していた分、最近のキルアの成長は素晴らしいかった。あの女が訪ねてこなくなつてからやや熱意が薄れかけているようだが、できればここで負荷をかけ、今の状態を維持したい。

「ええ、イルに任せるわ。ほんとリリスさんのお蔭ね！」

「……そうだね」

忙しい合間を縫つて、実際に訓練をつけているのはイルミだ。それもキルアが産まれてからずっと。年齢差があるせいで、それこそもう一人の父親だと言つてもいい。

それなのに急に現れたあの女のせいでの、イルミのこれまでの努力を踏みにじられたような気がした。

何もしていないくせに。

ただ言葉で甘やかしただけのくせに。

嫌われても、生かすための術を教えなかつたくせに。

再び、あの女に対する憎しみがふつふつと湧いてきて、イルミは小さく息をはいた。

が、こんな感情は馬鹿馬鹿しい。あの女はもういないのだ。自分が殺した。そう考えると凝り固まつたはずの表情が緩みそうになる。

「キルはきっといい暗殺者になるよ」

だつてオレがそう作るから。

そのためなら、どんな些細な障害でも排除してみせる。

「早速、キルの様子を見て来るね」

立ち上がったイルミに、嬉しそうに頷くキキヨウ。ついさっきまでリリスのことで大騒ぎしていたのに簡単なものだ。

所詮、キルに比べたらその程度のことなんだよ。

呑みこんだ言葉は、すとんと胸の深いところに落ちた。



今日の訓練はいつも以上に厳しい。

(俺、何か気に障るようなことしたか……?)

キルアは思わず自分の行いを省みたが、これと言つて特に思い当たることは無かつた。

少し前までなら——リリスがよく家に遊びに来ていた頃ならわからなくもなかつたのだが、彼女の姿はここしばらく見かけていない。

しかもよくよく見れば、兄は不機嫌どころか機嫌が良さそうである。表情からは窺えないでの、あくまでこれは家族の勘だけれども。

「キル、ちゃんと集中しろ」

「つ、わかってるよ」

注意とともに、電圧が上げられる。身体を流れる痛みに、嫌でも思考は霧散した。まさか殺されるということは無いだろうが、やはり今日は意図的に負荷をかけられている。

「ぐつ、う……」

耐え難い苦痛に思わず声が漏れ、キルアの奥歯は噛み締めすぎて嫌な音を立てる。一瞬でも気を抜けば意識が飛ぶだろう。そうやつて今すぐ楽になりたい気持ちと、後でさらに増やされる訓練を天秤にかけ、ギリギリのラインで踏みとどまつていた。

「その調子だよ、キル。これくらい耐えられなきゃ、立派な暗殺者にはなれないからね」

「……」

暗殺者になんか別になりたいとも思っていない。ただこの家に生まれて、祖父も父も続いている家業だから、漠然と自分もそうなるのかと思つていたにすぎない。キルアにとつては他にやりたいことがないからそうしているだけで、要は選択肢がなかつただけなのだ。

だから今の苦痛をまるでキルアの願いを叶えるための試練であるかのように言われたら、キルアだつて少しは反発したくなる。食いしばつた歯の間から息を漏らして、涼しい顔でリモコンを操作する兄を睨みつけた。

「……つ、立派な暗殺……者なんて、どうでも、いい……ッ!」

「よくないよ。お前はこの家を継ぐんだからね」

「な、んで、俺が……！」

うちは男ばかりの四人兄弟。ただでさえ後継ぎには事欠かないだろう。引きこもりのミルキだつて自分なりの方法で殺しはやるし、まだ小さいカルトだつてもういくつも仕事をこなしている。目の前のイルミなんて、それこそ暗殺者が天職みたいな男だ。それなのにどうして三男の、それもあまり乗り気ではない自分が後を継がねばならないのか。

——ハンター試験？なんだよそれ？

そのとき脳裏に浮かんだのはリリスの顔。最近見かけなくなつたあいつは、面白いことを言つていた。

——毎年数万人の受験者が応募するけど倍率数十万分の一という超難関の資格試験だよ。

徹底的な実力試験で、あまりの過酷さから死者も出るんだつて。

——へえ。で、その資格取つてどうすんの？

——さあ、詳しくは私も知らない。でもプロハンターはライセンスの持つ絶対的特権もあって莫大な富と名声を得られるんだよ。

なんてつたつて長者番付上位十名のうち、六名がプロハンターなんだから。

——富ねえ……その番付、裏稼業含めたらたぶんウチも入るぜ？

——ああやだやだこれだから金持ちは。住む世界が違うのはわかつてますよう。

リリスは呆れたような表情になつたが、その態度には今まで腐るほど見てきた拒絕が感じられなかつた。住む世界が違うからと線引きをして、キルアを遠ざけようとする様子は少しもない。

——でも、キルアならほんとに楽勝かもね。身体能力高いだけじゃなくつて機転も利くしさ。

——リリスは持つてんの？その資格。

——ううん、ライセンスがなくたつて仕事はできるしね。変にしがらみできるより自由なほうがやりやすいでしょ。

——ふーん、自由ねえ……。

今のキルアには程遠い言葉だ。でも自由になつたとして、自分にはやりたいこともない。考えたつて、思いつくのはやりたくないことばかり。

そう。やりたくないことなら、決まっていたのだ。

「俺は……暗殺者なんか、いやだッ……！」

口に出した瞬間、胸のつかえがとれたような気がした。口に出したことで、自分の本当の気持ちがわかつたような気がした。けれども同時に、身のすくむような威圧感がキルアを襲う。

「キル」

ぐい、と強い力で顎をすくわれ、至近距離で視線が合う。食いしばつていたはずの歯の根が合わず、がちがちと無様な音を立てた。「自分が何を言つてるか、わかってるの？」

「つ、」

「お前は熱を持たない闇人形だ、暗殺者になるために生まれてきた。誰に何を吹き込まれたか知らないけどね」

イルミは『誰に』という部分をやたら強調すると、珍しくその口角をあげた。めつたに見ることのない満足そうな笑みに、キルアは魅入られたように視線をそらせない。

「でももう、惑わされる心配はない。全部オレがうまくやつてあげたから」

「どういう……？」

「いいんだよ、キルは余計なこと——」

そこまで言つて、イルミは不意にぴたりと動きを止める。動きだけではなく、目に見えない威圧感までも嘘みたいになりを潜めていた。

「イル……兄？」

まるでゼンマイが切れたみたいに全てを止めた兄に、キルアは恐る恐る声をかける。それを合図に、ぱつと兄の手がキルアから離れた。

「嘘でしょ、あの女は確かにオレが……」

兄の視線は宙をさまよう。眩きもキルアに向けられたものではない。「でも、この気配は……」イルミは少し考え込むと、リモコンのスイッチをOFFにした。突然、電気から解放され、何が何やらわからぬキルアは戸惑うしかない。イルミが訓練をこんな途中でやめるなんて初めてだ。しかも、つい今しがたあれほどの殺氣を向けていたというのに。

「キル、悪いけど今日はここまで。続きはまた明日ね」

「ちょ、待てよ！なんだよ、いきなり！」

「少し確認したいことができた。キルは自分の部屋に戻ること、いいね？」

「おい、イル兄！」

拘束が解かれても、身体が痺れてすぐには動けない。

結局キルアは立ち去つていく兄の後ろ姿を、大人しく見送ることしかできなかつた。

08. 違和の足音

ありえない。そんなはずない。

頭の中で繰り返し呟くが、近づけば近づくほどあの女の気配であると確信する。

地下の訓練室から、母親のお茶部屋に向かつて一直線に歩を進めたイルミは、柄にもなく動搖していた。先ほどキルアに、暗殺者なんていやだと言われたのも地味に効いているのかもしれない。これまで地道に築き上げてきたものが崩れつつあるような錯覚に陥り、自然と早足になる。

「まあ!! イルミつたらどうしたの!?」

いくら家族とはいえ、いつもならノックもするし、これほど乱暴にも扉は開けない。 気配を隠しているつもりは一切なかつたが、突然現れ、無言のまま立ち尽くす息子に、さすがのキキョウも驚いたようであつた。

「なあに? どうしたの?? キルは……ええと、あら、まだ地下にいるじやないの」

キュイン、と目元を覆うスコープが音を立て、キキョウはまずキルアの様子を確認する。 そうだ。 本来ならまだイルミはキルアの訓練中であり、この場に現れるのはおかしい。 イルミが大事な弟の訓練をするつぽかすなんてあるはずないのだから。

しかし、イルミにしてみれば、それ以上にありえないことが目の前に起っていた。

確かに殺したはずの女。 それもひと月も前の話だ。 リリスの力量から考えてあの強さの念で死なないわけがないし、針を刺すときにはとんど脳も破壊した。 万一、生きていたとしても、ゾルディック家に関わるな” という操作もあるはず。

イルミはただ言葉もなく、警戒の姿勢をとつた。 隠していた針を指の間に握り、いつでも投擲できる状態になる。「イル!!」しかし驚いた声をあげたのはキキョウだけで、リリスは目を見開きこそれ、椅子

から立ち上がりもしない。

「イルつたらいきなりなんのつもりなの!?」

「母さん、退いて」

「ダメよ!!!せつかく久しぶりにリリスさんが訪ねて来てくださったのよ!!あなたの殺氣は素晴らしいけれど、お客様に向けるのは失礼だわ!!やめなさい!!」

「……っ！」

面と向かって母親に否定をされ、思わず心臓が跳ねる。これまでイルミは“褒められる”か“わざわざ褒められはしない”かの二通りしか知らなかつた。それはイルミがいつも家のために正しくあろうとして、正しいことを行つてきたからだ。

母は大げさに褒めたりもするが、父や祖父は当然のものとしてあって口に出して褒めるようなことはしない。そもそもうちは家族間で方針が違えばインナーミッショング行われる。イルミはとつくに成人しているのだし、いつまでも親の言うことを聞かなければならぬといふのはナンセンスだ。

——それなのに、

「……」

どうしても身体が動かなかつた。

何もキキヨウが身を挺してリリスを庇つているわけではない。驚いて立ち上がつてはいるものの、イルミとリリスの間に障害はなく、針を投げることは可能である。しかし、イルミが動き出そうとするよりも先に、ぱちぱちぱち、と場違いな拍手が部屋に響いた。
「イルミさん、ありがとう。すごかつたです。自分で頼んでいたくせに、すっかり忘れて本気でびっくりしてしまいました」

それまで黙つていたリリスの、突然の行動。

発言自体の意味も分からず、イルミは眉を顰める。しかし、理解できなかつたのはイルミだけではないようで、キキヨウも不思議そうに首を傾げた。

「どうしたことなのかしら……??」

「すみません。次来るときは侵入者として扱つてほしいと、私がお願

いしたのを忘れていたんです。最近、潜入系のお仕事が多いのでプロに練習相手になつてもらおうと思つて。それなのに私が忘れてすっかり普通に「馳走になつてたから、キキョウさんまで驚かせてしましたね」

「まあ、そうだったの!!! そういえば、イルミもリリスさんと仲良くなつたつて言つてたわね!! お仕事のほうで話が合うのかしら?!」

そんなことは言つていない。少し話した（それも実際には脅しだ）と言つただけだし、リリスの仕事が裏家業だというのはミルキの調べによる単なる知識だ。そもそも戸籍もなく、図々しく暗殺一家を訪ねてくるような女が、真つ当な仕事をしているわけもないのだから。

しかし、キキョウの誤解は気に入らないものの、リリスの話は好都合だつた。さつきはつい頭に血が上つてしまつたが、そもそもイルミは表立つての衝突を望んでいない。針をしまうと、感情のこもらない声で「ひどいなー」と言つた。

「リリスがやれつていうから、やつたのに。そつちは忘れてのんきにお茶か」

「ごめんなさいね」

「いいよ別に。ていうか久しぶりだね。今までどうしてたの?」

「少し、トラブルに巻き込まれまして」

我ながら白々しい会話だ。しかしキキョウは氣づく様子もなく、嬉しそうにスコープを点滅させている。「トラブルなんて大変そうだね。手伝つてあげようか?」料金はお前の命だけど、と心の中で付け加え、イルミは自然に席に着く。

「母さん、少しリリスを借りてもいい? 仕事の話をしたいんだ」

「ええ!! いいわ! 私もリリスさんに見てもらいたいお洋服があるし、向こうの部屋で準備して待つてるわね!!!」

おほほほほ! と高らかな笑いを残し、キキョウは部屋を出ていく。二人きりになつた瞬間、しん、とやけに部屋が静まり返つたような気がした。

「……で、一体どんな手を使つたわけ?」

わざわざイルミの行いを告発せず、余計な嘘までついたくらいだ。てつきりリリスのほうから何か言つてくるのかと思いつかや、彼女は横顔のまま、目すら合わせない。

「（）自分で考えられては？」

そう素っ気なく一言だけ返すと、毒入りの紅茶に涼しい顔で口づける。

別に、イルミだって素直に答えてもらえるとは思つていなかつたが、あからさまな彼女の態度にはイラついた。

「敵意は相変わらずみたいだね。オレに殺された、つて母さんに泣きつかなくてよかつたの？」

「言つてもいいんですか？お宅の息子さんは私を殺り損ねましたよつて」

「いいよ、別に」

悔しさを押し殺し、平氣な顔をする。「その時はお前の化けの皮もはがれるだけさ」リリスの目的が何にしろ、彼女がバラさなかつたということは今がその時ではないということなのだろう。

ならばまだ、チャンスはある。実際、これは仕事ではないのだから、何度も殺し損ねようと最終的に殺せればそれでいい。

頭ではそう考えたが、実のところリリスの告発を恐れてもいた。失敗そのものよりも、失敗したことを家族に知られるほうが嫌だつた。だから殺すならなるべく早いほうがいい。さつさとこの女を殺して、何もかもなかつたことにしたい。

けれどもそんなイルミの内心を見透かしたように、リリスは鼻で笑つた。

「言つておきますけど、何回殺つても無駄ですよ」

「……試してみる価値はあるよ」

何度もやっても無駄だなんて、そんなわけない。いくら優れた念の遣い手だろうと死なないことはないし、彼女の蘇生が念によるものなら尚更だ。不死ほどの強力な念になれば発動条件が厳しいはずだし、それ相応の高いリスクも伴うはずである。

「では今、試してみます？」

そんな安い挑発に乗るわけにはいかない。この場でこの女を殺すメリットはゼロだ。せいぜい、イルミの気が少し晴れるくらいのものだろう。苛立ちは確かにイルミを内側から苛んでいたが、それを誤魔化すようにこちらも鼻で笑い返す。

「先に母さんが楽しみに待ってるみたいだからね。オレはその後でいいよ」

実際、キキョウの気配はこちらに近づいてきていた。おおかた、待ちきれなくなつて呼びに来たのだろう。執事でも寄越せばいいものを、キキョウのリリスに対する執着は異常なほどである。

「イル！・リリスさん!! そろそろいかしら？」

「ああ、こつちは終わつたよ」

立ち上がり扉を開けてやれば、入口のイルミはそつちのけでキキョウはリリスに向かつて手招きする。もともとテンションは高いほうだけれど、リリスの前ではまるで友人とはしゃぐ若い娘のようだ。

「昔、私達が憧れていた隣町のドレス店、覚えてるかしら?? 今日はそこから特別に取り寄せたものがあるのよ!! シヨーウインドウに飾つてあつたものと少しデザインは違うけれど、同じデザイナーの物なの!!」

「まあ、それは素敵！」

リリスも先ほどまでのイルミとのやりとりが嘘だつたみたいに、ぱつと顔を輝かせた。そこにイルミなんていないみたいに、女二人で楽しげに言葉を交わしている。リリスのあまりの変わりようとその勢いに一瞬呆気にとられたイルミだつたが、ふと何か引っかかるのを感じ、母親を止めようとした。

「じゃあイル、あなたはキルをよろしくね!! 今日から厳しくするんでしょう?? 賴りにしているわ!!」

「ああ……うん。任せてよ」

キル、という単語に反射的に頷く。そうだ、忘れてなんかいない。イルミはこの家のために可愛い弟を立派な暗殺者にしなければならないのだ。そしてそれと同じくらい、家自体も守らねばならないと

思っている。

「ねえ、母さん、」

「行きましょ、リリスさん!!うふふ、まさか二人で思い出のドレスを着れる日が来るとは思わなかつたわ!!楽しみねえ!!」

「母さん……？」

嫌な予感がする。すうっと胃の腑のあたりに冷たいものが落ちていくのが感じられた。

キキヨウの名前に対する執着は、異常な“ほど”なんかじやない。“異常”だ。二人は友人の娘と母親の友人という関係のはず。歳も離れているし、直接の面識などなかつたはずだ。

それなのに思い出のドレスとはどういうことだ?

仲よさそうに談笑しながら衣装部屋に向かう二人からは、流石に足音一つしない。

けれどもイルミは忍び寄る違和の足音を、この時確かに聞いた気がした。

09. 憶測は役立たず

滅多に鳴らない携帯電話が、ご機嫌なメロディーを奏でる。

そもそもヒソカの連絡先を知る人間はごく限られているし、いたとしても好んでかけてくる者は少ないのだが、それぞれに設定した着信音のおかげで誰からの電話かはすぐわかった。

「ハァイ、イルミ。どうしたんだい？」

彼がかけてくるということはおそらく仕事だろう。プライベートなお誘いでもこちらは全然構わないのだが、残念ながら今のところそういうお誘いは極めて稀である。

せいぜい運が良ければ、仕事終わりの飲みに承諾してもらえるくらい。

だからヒソカはどうしたんだい、と言いつつ、イルミが仕事の内容を切り出すのを待っていた。

「今あの女がうちに来てる」

「……え？」

しかし、いきなり予想と全く違う言葉を言われ、さすがのヒソカも一瞬呆気にとられる。「あの女？」仕方なく聞き返せば、イルミはどうしてわからないのかと言わんばかりに、少し早口になつた。

「前に話しただろ、母さんの知り合いだつていう女」

「ああ……そういえばそんなのあつたね」

ヒソカにしてみれば、言われてようやく思い出す程度だ。むしろ思い出しただけでも褒めて欲しい。何しろその女とは直接の面識はなく、イルミから数回愚痴を聞いた程度なのだ。「あれ？でもキミ、前に殺したつていつてなかつたかい？」しかもちようどひと月ほど前、イルミ本人から手を下したと聞いていたので、とうに終わつた話だとも思つていた。

「そうだよ、でも生きてるんだ。生きてまたうちに来てる」

「……殺り損なつたつてこと？」

「は？オレを誰だと思つてるわけ？」

かすかにそうとわかるくらいに語氣を荒げたイルミだが、普段の彼

を鑑みると相当イラついているというサインだ。

だがヒソカだつて、暗殺におけるイルミの腕を疑つたわけではない。ただ殺したはずの人間が目の前にいるというのだから、この疑問は当然のものではないか。

「……めんつてば、一応聞いてみただけだよ」

「ちよつと理不尽だな、と思いながらも、口論になれば話が進まないので適当に謝つておく。正直イルミの言つてることは意味不明で、満足な説明ももらえないなら八つ当たりに等しかつた。

「ええと、キミが確かに殺したはずの女が今またキミの家に来ている。これでいいかい？ 何か思い当たることは？ 彼女の様子は？」

「おそらくあの女の念なんだと思う。少し話したけど、オレに殺されたという記憶もちやんとあつたし、それどころか何度も殺つても無駄だとさえ言われたね」

「それはまた……」

道理でイルミが荒れているわけだ。

今まで彼女がゾルディック家の面々に気に入られていることと、だからイルミが気に食わないという情報しか知らなかつたが、なかなかどうして本人の性格もきついらしい。

タネはさておき死なない自信があるからかもしれないが、あのイルミを挑発するなんて命知らずもいいところだ。

「だけど、そうあからさまに挑発してくるつてことは殺されるのが狙いかもしねないね」

「迎撃型つてことだろ。それも考えたから、前回即死させるようなことはしなかつたんだ」

「じゃあほんとに『死に至らなかつた』んじやない？」

「それはない。持つてる中で二番目に強い針を使つたから」

普段イルミが使つてゐる針がどのランクのものかはわからなかつたが、二番目と言うからには仕事で見かけるものの数倍の威力はあるのだろう。イルミの断言つぱりに、いよいよヒソカは返す言葉を見つけられず、だんだん投げやりな気持ちになつてきた。

「じゃあ、お父さんに一度殺したことと言つてみれば？ そうすればキ

ミの当初の思惑通り、お父さんもその女のことを警戒してくれるだろうね」

「……」

しかしお父さん、という単語出した瞬間、先ほどまでの勢いが嘘みたいにイルミは黙り込んだ。おそらく、両親に自分の行動を知られるのが嫌なのだろう。イルミは必要があれば仕事でない殺しもするが、基本的にゾルディック家の殺しは『仕事でのみ』となつてゐるらしい。しかも相手が家族に気に入られている女とくれば、イルミが独断で起こした行動はあまり褒められたものではない。

だが、そもそもこの件はゾルディック家の問題だ。ヒソカはその女と面識もなく、イルミから伝え聞いた偏った情報しか知らない。愚痴くらいなら聞くことはできても、本気で解決したいなら頼るべきは家長である父親。それなのに、

「……父さんもあの女のことになるとやけに寛容だ。操作されていいとは限らない」

イルミは珍しく歯切れの悪い口調でそう言つた。

「操作? またえらく空拍子もない話だね。そもそも君はお父さんがそんな簡単にやられると思つていてるのかい?」

「……可能性はゼロじゃないから」

明らかに苦し紛れの返事をされて、聞いているこちらが気まずくなるほどだ。いくらなんでもイルミだつてそんなことはないとわかっているだろうに。「……でもまあ、君が振り回されてるなんて面白そうだねその子」沈黙を回避するためのヒソカのフォローは、もはやただの相槌となんら変わらなかつた。

「あのさ、オレだつてなんの理由もなく疑つてるわけじやないよ。あの女、最初は母さんの知り合いの娘としてここにやつてきたんだ。それなのに母さんは今、あの女を友人そのもののように扱つてる。おかしいだろ?」

イルミが言うには、まるで二人が一緒に過ごした過去があるかのような発言が見受けられるらしい。記憶の混同は操作された人間によくある傾向なので、それが本当なら確かに怪しい。

「だけど操作系じや蘇つたことの説明がつかないんだ」

「じゃあ操作よりの特質系つてのはどうだい？能力は『蘇生』で予め自分の脳や心臓をオートで動かしていれば復活可能とか」「脳は針を刺した時にほとんど破壊してるよ」

そのあたりは一通り考えた、と言わんばかりに吐き捨てられて、ヒソカはどうとう閉口した。ただでさえ他人の念を推測するなんてことは至難の業なのに、『何度も言うが』会ったこともない女の能力なんて考えるだけ無駄である。ついついバトルマニアとしての癖で考えてしまつたが、イルミを苛立たせるだけならもう何も言うまい。

「あともうひとつ、これは母さん達が操られてるかもしれないから正しい情報とは限らないけどね、あの女の念は母親の念と同じだそうだ」

「母親って、君のお母さんの知り合いだつていう？」

「そう。でも普通、そんなことはありえない。あり得るとしたら、他人の念をコピーするか、奪うか」

「まるでボクの片想いの相手みたいだねえ……」

ヒソカは長年恋焦がれている蜘蛛の団長を思い浮かべ、無意識のうちにうつとりとした。電話だから悟られなかつたものの、これが対面であればちょっと聞いてるの？とイルミに睨まれたことだろう。

「でももし、そういう特質系能力なら、複数の系統を示す能力を持つても不思議じやないだろ」

「……えーと、じゃあ君の家に近づいたのは能力を盗むためなのかな？」

「それはまだわからないけど……命が目的にしろ正攻法で来るような武闘派じやない。条件が揃うのを待つてあるみたいだ」

「やつぱりさあ、キミ、お父さんに相談した方がいいんじゃないかなあ」

「……」

どう聞いても一筋縄でいかなそうな相手だ。しかも一度殺されたのにまた家を訪ねてくるなんてまともじやない。イルミの言うように何か目的があると考えるのが妥当だし、きちんと説明すればイルミ

の家族だつて真剣に取り合つてくれるだろう。

「今、家族は誰も信用出来ないからね」

しかし、しばしの沈黙の後イルミから返ってきた言葉はそんなどうしようもないものだつた。信用出来ないと云いつつ、彼自身が信用されないことを恐れているように感じる。もしかすると殺し損ねたことを両親に知られたくないのかもしない。いつも目的の為なら手段を択ばない彼が躊躇するくらいだから、単なるプライドや見栄というよりもつと根深い問題なのだろう。

ヒソカは反論も忠告も無駄だと判断して、ただイルミの気が済むのを待つていた。

「そこでさ、ヒソカにひとつ、協力してほしいことがあるんだけど」「なんだい？ キミが殺しても無駄だつたんだろう？ だつたらボクに出来ることはないと思うけど」

相手の手のがわからぬ以上、こちらから下手に仕掛けるわけにもいかない。

話を聞いていて謎が多く興味深い能力だとは思えども、武闘派でないのならヒソカにとつては所詮クロロの下位互換だ。関わるリスクの方が大きいので、もし殺れという依頼なら断ろうと決めていた。「手は出さなくていいよ。オレがあの女を捕らえるから、ヒソカには見張りをしてほしい」

「見張り？」

「そう。オレはもう一度あの女に針を刺す。まずは自白ね」

イルミは念のことや目的を喋らせるつもりだと言う。仮に効かなくとも、この時点で彼女は自身を操作している操作系であると判断することができる。

「念のことが分かつたら、針の副作用じゃなく今度こそ確実に目の前で殺す」

「つまり、ボクは彼女が起き上がるかどうかの見張りつてわけ？」

「そう。執事じや家族の誰かに情報が漏れる可能性があるし、執事自体、既に操られていないとも限らない。ほんとはオレが見張りたけど他の仕事もあるし、アリバイの都合上、あの女が訪ねてこない間に

家を空けるのは極力減らしたい」

「ふうん……」

内容的にはアリとまではいかないものの、ナシではない。いつもの
ように暴れられる仕事でないのは不満だが、同時にリスクも少なく、
恩を売るにはちょうどいいといったところか。

「ま、起き上がる瞬間が見れるのは面白そうではあるね」

そうでなくともイルミを手こずらせている女だ。戦闘相手として
はいまいちだが、顔を揉むくらいは悪くない。

「いいよ、引き受けよう」

「じゃあよろしく」

ヒソカが了承の旨を伝えると、その一言だけでその通話は切られ
る。

あれだけ長々と話していたくせに、最後は実に素つ気ないものだつ
た。

10. 稚拙な動機

ククルーマウンテンのあるデントラ地区はパドキアの中でも栄えているほうだが、それでも少し都心部から離れただけで寂れた場所なんていぐらもある。

イルミはとある廃ビルの一室で、先ほど攫つてきたばかりのリリスを見下ろした。それから彼女の頬を、ためらいなく平手で強く打つ。正直、こんな程度は挨拶にもならなかつた。痛めつけることが目的の平手ではなく、気つけの意味でしかないからだ。

リリスの頬は目に見えて赤く色づいたが、そのおかげで彼女は意識をはつきりさせたようだつた。

「気分はどう? これから何をされるかわかる?」

リリスを攫うのはこつちが拍子抜けするくらい簡単だつた。イルミはただ、ゾルディック家から彼女が出てくるところを待ち伏せしていればよかつたのだ。

「はあ……監禁でもするつもりですか?」

場所を悟らせないために一度氣絶させたのだが、リリスは平手一発ですぐにいつものふてぶてしさを取り戻した。攫われた時も特に驚いた様子はなく、それどころかまたあなたですか、と呆れた顔をしていたくらいなので、これくらいは彼女にとつても想定内だつたのかもしない。

後ろ手に拘束された状態で心底迷惑そうにあたりを見回したりリスは、律儀にもイルミの質問に答えて見せた。

「うん、いいセンいつてるよ」

確かに家族に近づけさせないことが目的なら、このまま監禁してしまうのもありだつた。けれどもここまで虚偽にされて生かしておくだなんて、残念ながらそんな甘い選択肢はイルミにはない。

イルミは床に転がる彼女を起き上がらせると、乱暴に顎を掴み、無理やり視線を合わせた。

「お前は何度殺されても平気だと言つたね? でも暗殺者は殺すだけが仕事じゃないんだよ。場合によつてはいつも殺して欲しいと思うよ

うな目に遭わせることだつてできる」

そう言われても、リリスは少しもひるまなかつた。せつかく合わせた視線をイルミの後方へと反らし、挑発するように笑つて見せる。「へえ、それつてお友達の手を借りなきやできないようなことなんですか？」

彼女の視線の先の奴がどんな表情をしているかなんて振り返るまでもなかつた。「やあ、初めまして。キミのことは『親友の』イルミから聞いてるよ」隠しきれない笑みを含んだ声色に、どいつもこいつもふざけやがつてと腹が立つ。

リリスも、ヒソカもまるで立場をわかっていない。

「友達なんかじやない、あいつは金で雇つた知り合い。ヒソカも、見てるだけでいいって言つたろ」

「そう固いこと言うなよ。彼女、思つたより面白そうだね」背後の壁にもたれかかっていたヒソカは、ゆっくりとこちらに近づいてくる。そしてイルミとリリスの間に割り込むように、身を乗り出した。

「キミ、死なないつてホントなのかい？」

「そんなことあるわけないじやないです。そつちの腕の問題ですよ」

リリスはわざとらしくイルミを見ると、皮肉っぽく笑つた。

仕事のことを引き合いに出されるのは不快だし、本当ならとつとと針を使いたかつたが、リリスが操作系の能力を使つていれば針の自由でも聞き出せない可能性が高い。そういう意味で、ヒソカとリリスの会話は全く無駄というわけでもなかつた。

「そのわりに、随分と余裕そうだねえ」

「突然変な格好をした長身の男二人に拘束されて、怖くない女がいると思いませんか？」

「うーん、そうだねえ、たとえば迎撃型の念能力者とか」

「いいですね。それならそこの男も殺せたんですけど」

ぶれないリリスの態度に、ヒソカのにやにやが濃くなる。普通の人間なら腹を立てるところだが、どうやら変態のお気に召したらしい。

「キミ、すぐ嫌われるね。一体何をしたらここまで嫌われるんだい？」羨ましいなあ、と続けたヒソカに、イルミは嫌悪感でいっぱいの眼差しを向けた。

「何もしてないけど

イルミはあくまで家族のために心を碎いていただけで、わざわざこの女に嫌われるべく何かした覚えはない。だからこそそう言つたのだが、イルミの返事にはあ!?と初めてリリスが表情を変えた。

「どの口でそんなこと言うんです？私の頭に針刺したじゃないですか！」

「その前からお前はオレに敵意満々だつたろ」

「初対面から」こいつ気に入らない』って感じの顔してた人に言われたくありません！」

彼女がこうもはつきり怒りを露わにするのは初めてで、イルミは一瞬面食らつた。今までいくらこつちが敵意を向けても、涼しい顔で挑発するのがこの女の常だったからだ。

しかも初対面でなら絶対に見抜かれるはずのなかつた感情をはつきりと指摘され、驚くなというほうが無理である。「なにそれ、オレはいつもこの顔だけど」そうだ、こんな女に自分の感情が読み取られるはずがない。彼女の指摘を肯定しても何ら問題なかつたが、イルミは咄嗟に要らぬ言い訳をした。

「じゃあ性根が腐つてるのが、顔面ににじみ出てるんじゃないですか」

「お前みたいな猫かぶりよりずっとましだよ」

「猫をかぶつてるのはどつちなんでしょうな、出来のいい息子さん

“？”

「……ふうん、どうしても黙らせてほしいみたいだね」

にらみ合つて目を反らされないのはリリスが初めてだつたが、やはりこの女の目がどうしても気に入らない。色味の薄い瞳はガラス玉を思わせてどこか空虚だし、そのくせ宿る光は好戦的ときたものだからタチが悪い。

「まあまあ、一人ともそのへんにしておきなよ」

しかし再びヒソカが間に割り込んだおかげで、程度の低い口論は一

旦そこで停戦となつた。

「じゃあ、リリスはゾルディック家で初めてイルミに会つたんだね？」
「そうですよ」

「で、そこから二人は仲良くなつたのかい？」

「は？」

何言つてんだ、こいつ、と思ったが、どうやらそう思つたのはイルミだけではないらしい。あからさまに表情をゆがめたリリスは、不愉快さを少しも隠す気はないようだつた。

「私とこの男の仲が良いように見えるんですか？ 格好だけじゃなく頭までおかしいんですね」

「そう？ キミは、イルミのことが『嫌いなのかい？』

「ええ。嫌いですよ。あのうちはキキョウさんもシルバさんもゼノさんもみんな優しくて、ミルキもキルアもカルトくんもみんないい子なのに、この男だけが横暴で乱暴で頭おかしいんですよ」

「そんなに嫌いなら来るなよ」

「私はキキョウさんたちに会いに行つてるんです。そもそもほとんど仕事でいらないんだからあなたは関係ないでしょ。ちゃんとお呼ばれしてるので、なんであなたのために遠慮しなくちゃならないの」

「関係なくない。あそこはオレの家で、オレの家族のことだからね」「つ……」

そう返すとリリスは悔しそうな顔をしただけで何も言い返さなかつたが、イルミもだんだん疲れてきていたのでそれ以上畳みかけなかつた。そもそもこれは一体なんの話なのだ。相変わらずリリスの目的も能力も不明なままである。

「はあ、もういいよね、ヒソカ。こいつと話してもイライラするだけだから」

「うん、もともとボクは見守るだけの約束だし」

「……じゃ、そういうことだから。死にたくないかつたらまた『甦つて

みれば』？ ま、オレとしてはこのまま死んでほしいんだけどね」

イルミは服から針を一本抜きとると、リリスの頭を掴む。やはり動

揺や怯えの色はないのが腹立たしいが、その腹立たしさを力に変えて針を差し込んでいく。

もちろん、まだ殺す気はなかつた。

「お前の本当の目的、それから念能力について話せ」

手を離すと、針の重みカリリスはがつくりとうなだれた。針の副作用で顔がいびつに変形し、イルミの命令に応えるべく不自然に顎ががくがくと動く。

「モク、テキ……モクテキハ、」

「……なに、どういうこと?」

目の前のリリスを見て、いや、『リリスだったもの』を見てイルミは思わず呟く。おかしい。そんなはずはない。針のせいで顔が変形していることを差し引いても、この女は……。

「モクテキハ、ワカリマセン。ネンノウリヨク……ネンノウリヨク……」

女は知らない単語を必死で思い出そうとしているのか、何度も繰り返す。そしてそのうち頑張りすぎたのか、白目を向き、盛大に吐血して静かになつた。

「キミ、勢い余つてやりすぎたの?」

隣で見ていたヒソカが興味深そうに、女の死体をつつく。確かにイライラはしていたが、前回ほど強力な針は使っていない。念を知らない一般人ならまだしも、リリスがこんな簡単に壊れるならイルミも苦労しなかつた。

第一、ぐちやぐちやの女をよく見れば、髪色や体格が先ほどと違つている。

「こいつ、リリスじゃない……」

11. 疑わしきは罰せよ

「リリスじゃない？」

繰り返してヒソカはまじまじと女の死体を眺めた。「顔は……もうよくわからないけど、確かにリリスはこんなネイルしてなかつたね」女の指先はちょうど彼女が噴き出した血のように真っ赤に彩られている。イルミはリリスの爪など覚えていなかつたが、ヒソカが言うのならそうなのだろう。とにかく、この死体がリリスのものではないという共通認識ができればそれで十分だ。

「一体いつ入れ替わったんだろう」

「さあ、ボクは今回リリスに会うのが初めてだからなあ。そもそも“入れ替わった”のか“初めから別人だった”のか」

「攫い間違つてはないと、絶対に。うちから出てきてすぐに捕らえたから」

自分の行動を思い返してもミスはない。第一、ついさつきまでまともに話までしていた。あのふてぶてしさが他の人間に、しかも操作された傀儡に出せるとは思えないし、会話の内容からしてもリリス本人で間違いない。

「じゃあ針を刺されるギリギリに入れ替わったのかな？迎撃型でなくとも、殺されかけるのが入れ替わりのスイッチになつてるとか」

「ちなみに言つておくと、今回はあくまで自白が目的で、念能力者なら死ぬレベルの念じやない。もし程度によらず攻撃が入れ替わりの条件なら、自白させるどころか攻撃自体極めて困難だ」

「それはまた殺し屋泣かせだね……で、キミは一体どうするんだい？」

「他人事だと思つて面白がるヒソカはムカつくが、今は構つている場合ではない。

「でも、そんな便利な念が何回も簡単に使えると思う？前回あの女を殺つたとき、ひと月は姿を見せなかつた」

リリスの性格からして、死んでないなら翌日にでも訪ねてくるだろう。少なくとも、母さんとの約束を連絡も無しに反故にするわけがない。

「つまり、あの念の使用にはインターバルがあるんだよ。本体を殺るなら今がチャンスだ」

「なるほど、じゃあボクの仕事はこれで終わりだね。あとは頑張つて」

「え？」

「えっ？」

顔を見合わせ、互いに首を傾げる。ヒソカのことは馬鹿ではないと思つていたが、まさかこんなに話がかみ合わないとは思つていなかつた。

「……だつて、彼女の能力は『入れ替わり』であつて『甦り』じゃないんだろう？だつたらボクがここでこの死体を見張る必要はないよね？」

『『甦り』じゃないってのはあくまで仮説でしょ？その仮説を実証するため見張らなくてどうするの？』

可能性がたくさんあるときは、一つずつ潰していくしかない。一瞬の判断ミスが命取りとなる戦闘中ならば難しいが、余裕がある今のような状況では当たり前の作戦だ。

しかしヒソカは不服なのか、珍しく笑顔を見せなかつた。

「いや、さつきキミ、前回のインターバルはひと月だつたつて言つたじやないか。

つまり、ボクにそのくらい死体と過ごせつていうのかい？」

「そーだよ。ヒソカ暇でしょ？」

「……あのねえ、」

「はは、安心してよ、オレが本体を殺ればそこで仕事は終わり。絶対ひ

と月もかからないよ」

それなりに報酬も弾むのだし、何しろただ『見張つて』だけでいい楽な仕事だ。ヒソカは今から退屈を想像して嫌がつているようだが、あまりに辛抱が足りないと思う。「ていうかさあ、キミ、本当に彼女を殺すの？」拳句、仕事をやりたくないせいなのか、今更なことで言い出す始末だ。

「は？当たり前でしょ。目的こそ吐かせられなかつたけど、依然として怪しいのは変わりないしね。敵意も十分だし」

「彼女、キミん家に恨みがあるつてより、キミ個人が嫌いなだけだと思
うけど」

「それって何が違うの？」

イルミへの敵対行動は、それすなわちゾルディック家に対する敵対行動と捉えてもいい。人間はその憎しみを憎い相手本人にだけぶつけるとは限らないし、事実イルミは自身に何かされるよりも家族に手を出されるほうが嫌だ。そういう意味で、もしリリスがイルミのこと嫌いなのだとしたら、家族に何かされる可能性もある。

「……彼女はキミの家族に危害を加える気はないと思うけどねえ」

「それもあくまで仮説でしょ。オレは疑わしきも罰する派なんだよね」

ヒソカの推測なんてどうでもいい。だいたい、わからない物事はとりあえず悪いほうを想定しておくものだ。常に最悪を想定した対応をとつていれば、リスクを極限まで減らすことができる。

「そういうわけだからよろしくね、ヒソカ」

こつちは時間が惜しい。

いつまでも食い下がるヒソカにばかり構つていられないのだ。



衣裳部屋を片付けるように執事たちに指示をしたキヨウは、樂しかったひとときの余韻に浸りながら自室に戻る。

長らく連絡がとれずに心配していたけれど、今日会つた彼女が元気そうで安心した。気についていたイルミとの関係も知らぬ間に良好になつていたみたいだし、これからは気兼ねなく彼女を呼ぶことができるだろう。

「ああそうだわ、手紙をもらつたのだつたわね」

部屋に着いたキヨウは、自身の帽子の花飾りに手を伸ばす。そこに隠してあつた手紙は、リリスから後で読んでくれと言わされたものだつた。

キキヨウへ

今日は急に訪ねてごめんなさい。

音信不通になつたのに、変わらずに迎え入れてくれて嬉しかったわ。

でも私はまたひと月ほど用事があつて、そちらへ行けないとと思うの。

そしてもし次に会うことができたら、あなたに謝らなくてはならないことがあるの。

既に秘密を守ってくれているのに、自分勝手なお願いばかりでごめんなさい。

リリス

「まあ……これは一体どうしたことかしら」

彼女があえて手紙という方法をとつたからには理由があるのだろうが、これだけではいまいちよくわからない。面とむかつて言わなかつたということは、彼女もまだ説明するわけにいかないということなのだろう。

彼女の秘密を守ることなど、別に大したことではなかつた。彼女がキキヨウとシルバに守つてほしいと頼んだ秘密は、彼女自身の念能力のことなのだ。ここへやつてきた彼女が、キキヨウの知り合いの娘であることを証明するために示した『彼女の母親と同じ念』。そして、母親とキキヨウしか知るはずのない『約束』。

念能力は他人に知られれば弱点となる。特に武闘派でないリリスなら尚更だ。家に招く以上、マハやゼノには伝えることを了承してもらつたが、息子たちには教えていない。

本当なら長兄のイルミくらいには教えても良かつたのだが、どうもイルミはリリスを敵視しているように見えたし、そんな状態の息子にリリスの弱点を教えるわけにもいかなかつた。

今日の様子を見た限りでは、もう大丈夫かもしれないけれど……。キキヨウがそんなこと考えていると、突然、大きな音を立てて扉が開く。驚いて視線をやれば、なんと珍しいことに最愛の息子キルア

だつた。「リリスが来てるつて本当か!」イルミの訓練がよほど厳しかつたらしくその表情には疲労が浮かんでいたが、それでも接近を気づかせない息子の才能はやはり素晴らしい。

「さつき帰られたわよ。それよりもキル! そんな格好でうろうろしてはいけないわ。早くお風呂に入つて着替えなさい!」

「帰つた? ちくしょう、やつぱイル兄が邪魔してたんだな。誰に聞いても全然教えてくんねーし、拳句カルトのどこにいるつて……嘘じやんか」

てつくり地下の訓練室から直接来たのかと思つたが、キルアはしばらく屋敷中を駆け回つていたらしい。いつもならスコープで位置を把握していたキキョウだが、今日はついついリリスとの時間が楽しくてちつとも知らなかつた。

「でも、帰つたつてことはリリスは無事なんだな? イル兄に何もされてなかつたか?」

「三人はお仕事の話をしていたみたいだけれど……。

ねえ、キル、やつぱりイルミとリリスさんつて仲が悪いのかしら???

「は? 悪いっていうか、イル兄が一方的に嫌つてんだろ」

「そうなの……困つたわねえ」

やはり打ち解けるにはもう少し時間がいるのだろうか。イルミはキキョウに似て思い込みが強いようだし、仕事以外のこととなるとまだリリスに心を開いていないのかもしれない。「あー、まあ、俺のせいでもあるかもな」考え込んだキキョウがいつもと違つて静かだからか、キルアもあまり反抗的な態度はとらない。やわらかそうな銀髪をくしゃくしゃとかき乱しながら、ぽつぽつと話し出す。

「イル兄、俺がリリスと仲良くしてるとすつげえ機嫌わりーし。その女は信用ならないーとか言つてさあ」

「まあ……」

「こつちからしたらお前は暗殺者になるために生まれてきたつて決めつけてくるイル兄のほうが信用ならねーつての。ああいうの洗脳だぜ、まじで」

「あら? それは間違つてないでしよう?? キルは立派な暗殺者になるん

ですよ

可愛い息子との久々のまともな会話。だが、キキョウの一言にキルアは一瞬で半眼になる。

「……はあ～言う相手ミスつた」

リリスが来てから、キルアの反抗期が緩和されたようで喜んでいたが、油断をするとすぐこれだ。才能も容姿も愛する夫によく似た可愛い息子だが、手がかかればかかるほど余計にという部分もある。キルアの反抗スイッチが入ったと同時に、キキョウの教育スイッチも入った。

「イルから聞いてるわ!!! 最近のキルはよく頑張ってるつて!!」

「イル兄が?なるほどな、その結果が今日のアレつてわけね。……まあいいか、ついでだしお袋にも言つといてやるよ。俺、暗殺者なんかなる気ねーから」

「な、な、な!!! なんですつてええええ!!! ちょっと! キル! 待ちなさい!!」

「やーだね」

べーっと舌を出したキルアは、来た時と同じくらいの勢いで逃げ出す。「キル!!」もしかしてリリスが謝りたいことと言つていたのはこのことだつたのだろうか。確かにこれは困る。もしも会えたなら、ではなく絶対に来てキルアを説得してほしい。

キキョウはもう一度リリスからの手紙に視線を落とすと、はあああと大きなため息をついた。

12. 買収

暇だなあ。

ヒソカは一体何度も目になるかもわからない感想を抱いて、ところどころ赤茶色の染みが滲んだコンクリートの壁をぼんやり見つめる。

相変わらず、『リリス』だつた死体に動きはなかつた。吐血やイルミの針による変形はあるものの、ヒソカ的にはそう派手な死体でもないでの、眺めていて特に面白いものでもない。

結局、イルミからの依頼は報酬が十分の一になる代わり、三日間だけ見張ればよいことになつていた。これは料金は払つたら、いやでもこんなに長いとは聞いてない、の押し問答から粘つて粘つた結果である。ちなみに、その間にイルミが本体を殺せなかつたとしても三日でヒソカの仕事は終わりとなる。

正直ヒソカとしてはその三日でさえもきつかつたが、性格上イルミが譲らないことも、ここで禍根を残せば後々何かを頼むたびに割り増し料金にされることも理解していたので渋々それで手を打つた。

しかしそれにしてもやつぱり暇である。先ほどから一人でトランプタワーを作つては壊し、作つては壊し。飽きっぽいヒソカではあるが、この遊びだけは昔から長く続いていた。なので、初日はなんとかこれで潰したが、さてあと二日どうするか。

自分がここを動けない以上、誰かを呼びつける以外に暇の潰しようがない。しかしヒソカには、こんな死体が置いてある部屋に呼び出しても楽しくおしゃべりをしてくれるような親しい仲の人間は生憎いなかつた。

もつともお金を払えば別だろうが。

「あーあ。わざと怪我してマチでも呼ぼうかなあ。彼女の念糸縫合、いつ見てもうつとりしちゃうんだよねえ」

ヒソカは蜘蛛の団員の一人を思い出し、トランプをすつと自分の左腕に当てる。クロロに惹かれて二年前に入つた幻影旅団だが、クロロの次にヒソカが気に入つているのはマチだ。基本的に団員から遠巻きにされていて接点の少ないヒソカだが、念糸を使って治療ができる

彼女とは個人的な依頼で関わることも少なからずある。

「あ、でも、どうせならそこの死体を治してもらうのも面白いかもねえ」

変な方向にねじ曲がつたりとれてしまつた部分は彼女の糸で繋いで、ヒソカの『薄っぺらな嘘』で表面を再現すればそれなりの造形を再現できるだろう。それを写真にとるなりしてイルミに送つてやれば、本当に蘇つたとも思うだろうか。

「クク……いい暇つぶしになりそうだ」

そうと決まれば早速。

しかし携帯電話を取り出したところで、誰かが階段をのぼつてくる足音がする。廃ビルだから人が忍び込んでこないとは言い切れないが、オーラは感じられない。一般人特有の、垂れ流しのオーラすらもだ。

つまり今ここに向かつてきている相手は絶状態。それにも関わらず、足音がするということはわざと訪問を告げているのだと考えていいだろう。

足音はやがてヒソカのいる部屋の前で止まつた。相手を想像し、ヒソカは笑みを抑えきれなくなる。

「どうぞ。まさかキミから来てくれるとは思わなかつたよ」

声をかければ、ぼろぼろの扉が軋みながら開かれた。

「昨日ぶりだね、リリスチヤン。無事で何より」

「それはどうも。少しお話してもいいかしら？」

「うん、ボクちょうど暇してたんだ」

部屋の中に入つたリリスは、昨日まで自分だつたものの死体を一瞥し、それからヒソカに視線を戻す。絶状態は相変わらずなので、彼女の意思によるものではないらしい。おそらくイルミの仮説通り、インターバル期間。『入れ替わり』だけでなくあらゆる念が使えないのだろう。

「で、その状態でわざわざここまで来て、なんのお話をしてくれるんだい？」

「单刀直入に言います。あなたが欲しいの」

「クク……とつても情熱的だね」

ヒソカがそういうった途端、彼女は露骨に嫌そうな顔した。なるほどその言葉選びはヒソカの性格を見抜いたうえのもので、彼女の本意ではなかつたのだろう。しかし、そうした狡猾さは確かにヒソカを喜ばせた。見え見えの作戦だとしても、面白ければなんだつていい。

「あなた、あの男にお金で雇われてるんですね？ 私の見張りを」

「正確には、キミの『死体の』見張りだけね」

「期限は？」

「三日」

「その短期間に私を見つけて殺そうってわけね。それで私の能力が蘇りではないと証明するわけか……」

三日という期間が人を殺すのに充分な期間であるのか、はたまた短すぎるのかは、仕事として人殺しをしないヒソカにはよくわからない。だが、相手の素性が分かつてている依頼に比べて、何の手がかりもないリリスの居場所を割り出すのはなかなか大変そうだとは思う。

リリスは少し考え込むようなそぶりを見せると、やがてまっすぐにヒソカを見つめた。

「三日はあの男に雇われていて構いません。でもその後二十七日間、あなたを買いたい」

「その前にボクがイルミにキミのことを報告するとは思わなかつたのかい？ お金をもらっているのは事実だけれど、ボクとイルミが以前から知り合いだというのも本当だ」

「もちろん。だからここへ来たのは危険な賭けでした。でもこれが最善だとも思っています。今の私では一ヶ月もあの男から逃げられない。

どうせ死ぬなら賭けてみるのも面白いじゃないですか」

「そうだねえ」

ヒソカは頷いた。「じゃああと二日、ボクは『そこの死体が起き上がらないか』見張っているよ。それがもともとのイルミとの契約だからね」別にリリスを見つけたら殺せとも、連絡しろとも言われてい

ない。ヒソカの仕事はあくまで見張りだ。

「で、残りの一十七日間、キミはボクに何を望む？」

出す条件はよく考えたほうがいい。言外の意味をくみ取つてやるほどヒソカは親切ではないし、一十七日間という期間は長い。三日でこれなのだから、一十七日間の護衛なんて飽きてしまう可能性のほうが高かつた。ヒソカは別に信頼も信用も必要としていないので、これから先関わるかどうかわからぬリリスとの契約を何が何でも守る必要はないのだ。

「あなたを拘束するようなことやあの男と戦わせるようなことはしません。要求は三つです。私に危害を加えないこと。移動する際は行き先を偽りなく明かし、私が望めば同行に協力すること。それから直接、間接を問わずイルミに私の情報を与えないこと」

「……それだけでいいのかい？」

「ええ、あとはあなたのお心遣いに任せます。金額も最低いくらは欲しいとか、希望がありますか？三割は前払い、残りは後という形にしようと思っています」

護衛はする気は端からなかつたものの、拍子抜けするくらい楽な条件だ。少なくとも、ヒソカにデメリットがあるようには思えない。

「いや、特にないよ。それこそキミの心遣いで」

「では交渉成立ですね」

ヒソカが承諾すると、リリスはにつこりとほほ笑んだ。普通なら握手でもしそうな雰囲気だが、そこはお互い念能力者。相手の能力が分からないうちはむやみに触れたりはしない。

「ところで、契約前の二日間はどうするつもりだい？」

「……そうですね、あなたが嫌なら出ていきますし、いてもいいならここにいますよ」

彼女の希望は言わずもがな後者なのだろう。わざわざ契約に同行を組み込んだくらいだ。灯台下暗しでヒソカの傍にいるのが一番イルミを欺けると踏んでいるに違いない。

だから面白いことが好きなヒソカはこの二日彼女を突き放して、イルミが彼女の居場所を突き止められるか、彼女が逃げ切れるか、見物

を決め込むのも悪くはないだろう。しかしここで傍観するだけの状況には、ヒソカは昨日だけでとうに飽きていた。どっちの味方をするとかではなく、単に退屈が悪なのだ。

「そう。じゃあちよつとババ抜きでもしない？」

「いいですよ」

につこりを笑つて腰を下ろしたリリスに、ヒソカはなるほどね、と思う。

どうやら彼女は人の心情を汲んで誘導するのが上手く、そこがイルミとの違いらしかった。

13. 疑心暗鬼

気づけば搜索を初めて既に二週間が経っている。

それだけの時間がありながら、イルミはどうしてもリリスの行方を掴めないでいた。

ミルキを使つて調べさせているが、もともとあの女は流星街出身で手がかりも少ない。そもそもミルキによると前回音信不通になつた時点でキキヨウも彼女を探そうとしたが、結局徒労に終わつたらしい。

つまり、あれだけ親しくしている母ですらリリスの居場所を知らないのだ。

とりあえず頻繁にうちに来ていたことから考えて、パドキア周辺に居を構えていたのかとしらみつぶしに搜索しているが、表の物件から裏の物件まですべて当たり無し。もちろん、リリス探しだけでなくイルミには通常の暗殺の仕事もあるので、思うように空かない身体と進まない搜索に苛立ちは募るばかりだつた。

そして苛立ちが募れば募るほど、細かいことでも他人を責めたくなる。

たとえば母であるキキヨウ。

あれほどあの女の存在はキルアに害悪だと忠告したにも関わらず、無視をした上、今更になつてキルアが暗殺者にならないと言い出したことに泡を食つている。いや、それだけならまだいい。なにを血迷つたか、そのキルアの説得を元凶であるリリスにやらせようとしているのだ。キルアの矯正はイルミの仕事だし、少し時間をくれれば問題なくやつて見せる。あの女に近づけるのだけは悪手だといい加減に気づいてほしい。

たとえば、キルアとカルト。

まだ幼くあの女に惑わされる未熟さは仕方ないが、あの女よりもイルミとの付き合いの方がずっと長いはずだ。立場上、年の離れた弟達には訓練を課すことが多かつたが、それも家業のことを考えて二人が命を落とさないようにするためには当然だと思っている。そこを汲

まずに単に耳触りのよい甘言に絆されるのは、未熟さを差し引いたとしてもあんまりではないだろうか。

そして、ミルキ。

あいつだけは兄弟の中でもリリスに籠絡されていないと思つていたのに、捕らえたりリスの口からはいい子としてミルキの名前も上がつていた。しかしへミルキから回つてきた監視カメラ映像には二人が接触している姿はなく、意図的にミルキが伏せたとしか思えない。

また、キキョウがリリスを本格的に探していたという情報も、こちらに一言告げるべきだつたのでないだろうか。秘匿しようと命令されたのなら話は別だが、キキョウはイルミの前でもリリスの不在を心配する様子を見せていたのだから捜索していることを隠す可能性は低い。となれば、逐一あの女にまつわる情報を報告しろ、と言つていたのだから、ミルキはやはりイルミに教えるべきだつた。

そう考えると現状、ミルキから返つてくる「手がかりなし」という結果はどの程度信じていいものなのだろうか。

今回はゾルディック家の防衛にまつわる業務だとして、お互いゾルディック家の安全を共通理念に動いているつもりだ。しかし逆に言えばミルキと取引をしているわけではなく、ミルキが情報を意図的に隠す可能性がないとは言いきれない。通常、同じ家族で家族の不利益になるようなことをするわけがないけれども、もし互いの思惑が一致しなかつた場合、ゾルディック家ではインナーミッションが起こることもあつた。

そこまで考えたイルミは、居ても立つても居られずミルキに電話をかける。「もしもし、ミル」一度気になつたことはぐるぐる考えるより、今すぐ力づくでも解決したかった。

「今更だけど、やっぱり取引にしてはつきりさせたほうがいいと思うんだ」

「は？ 何の話だよ、イル兄」

イルミが今連絡するといえ、リリス関連のことには決まつてゐるだろう。もしどぼけているつもりなどしたら、我が弟ながら残念だとか言えない。

しかしイルミはその説教は後回しにすると決め、さつさと本題を切り出すことにした。

「リリスのことだよ。お前、オレに隠し事をしてないって誓えるかい？」

「はっ!? 疑つてんのかよ!」

「……」

微妙なところだ。今の反応はどちらだろうか。イルミは他人の感情を察することにあまり価値を感じなかつたが、会話の中の不審さを見つけることについては意義を感じている。

「言つとくが、こつちもそれなりにプライド持つてやつてるよ。でも現状手がかりはないんだからしょーがねーじやん。

だいたいママが騒いでないつてことは、しばらく来れないとか予め伝えてあるつてことだろ? イル兄こそ、あんなにリリスのこと嫌つてたくせにどうして探してるんだよ? ゾルディツク家のためだつて言うから付き合つてたけど、疑うならこつちもそれなりに聞かせてもらいうぜ?」

驚きから徐々に怒りへと移り変わるミルキの言葉は、限りなく本心のように聞こえた。次兄は兄弟の中でも喜怒哀楽が素直なほうなので、本当に見つけられないのかもしれない。しかしどうせ一度疑つたのだ。はつきりさせておいて損はなかつた。

「いいよ、じゃありリリスのことに関してはお互ひ隠し事なし。そういう取引をしよう」

「……どーしても取引にしたいんなら好きにしろよ」

「じゃあ成立だね。本当にリリスの手がかりはない?」

「ねーよ。取引で嘘つくほど俗ボケしちゃいねえ」

「そう。じゃあオレもリリスを探している理由を言うよ。目的はある女を殺すため」

「つ……! まじで殺る気なのか!」

今更そんな驚くことでもないと思うのだが、ミルキは大きく息をのむ。「そうだよ」どう考えたつてリリスは早めに始末しておいたほうがいいだろうに、ミルキもしばらく裏方ばかりで勘が鈍つたのか。

「仕事でもないのにここまで……」

「オレだつて不本意だよ、金にもならない殺しなんて。でもウチの邪魔になるものを排除するのも必要なことだからね」

こんな仕事をしていれば、恨みや賞金狙いで襲われることもある。だからといって、そのときに依頼ではないからと襲ってきた奴を見逃してやるわけにはいかない。降りかかる火の粉は払つて当然だ。もつと言えば、火の気になりそうなものを事前に潰すことができれば尚更いい。

「まあそれはさておき、何かわかつたらすぐに連絡してね」

「ああ」

イルミはその返事に満足すると、通話を終了する。とりあえず“取引に嘘はない”なのでミルキのことは信用することにした。

しかしそのまま携帯をしまおうとしたところ、僅かな振動がメールの受信を知らせる。通知に表示された相手の名はヒソカだった。依頼した三日はとうに過ぎて、もうあいつは関係なくなつたはずだが……。

件名に無意味な記号が羅列されているのはどうでもいいとスルーして、イルミはメールを開く。いつもなら電話をかけてくるところなのに珍しい、と思ったのもつかの間、添付されていた写真を見て驚愕した。

「あの死体、起き上がったの？」

正直言つて、リリスと入れ替わつた死体の容姿などあまり覚えていなかつた。しかし、背景はまぎれもなくあの廃ビルのコンクリートで、乾いた血で赤茶色く変色した服の女が一人、縛られて横たわっている。身体に欠損や不自然なねじれはないし、肌の色も生者のそれだ。

顔もよく見えないため写真だけでは判断しづらいが、健康とは言えずとも生きているように見える。

——まだ動きが鈍かつたから、とりあえず拘束して前の場所に置いておいたよ。

写真の下に添えられた一言に、イルミはすぐさま行動した。

どうして契約の三日を過ぎたヒソカがまだ死体を見張っていたのかなんて、そこまで頭が回つていなかつたのだ。



各地にあるヒソカの隠れ家的なマンションの一室で、リリスはあるで猫のように我が物顔でくつろいでいた。

一応契約を交わしていると言つても、強制的な絶状態に異性との共同生活なのだ。もう少しくらい警戒してもいいと思うのだが、彼女は鍵のかかる自分の個室さえあればまったく平氣なようである。

初めに決めたようにヒソカの行動にも特に制限がなく、生活の拠点や行き先を明らかにさえすれば、ヒソカがどこで何をしようと彼女はまったく関心がないようだつた。

しかし、だからこそだろうか。

ヒソカは今しがたイルミに送つたばかりのメールを、たまたまりビングを通りかかつた彼女に見せてみる。

イルミに情報を与えるな、というのも契約のうちだつたが、ヒソカは当然言い訳を用意していて、ただ彼女がどんな反応をするか見たいと思つたのだ。

「あら、今更随分と古い写真を送つたんですね」

だが、画面を見たリリスは思つていたよりすつと落ち着いた態度だつた。「契約違反だつたかい？」確かに彼女の言う通り、これは十日も前の写真だ。マチに依頼して“修理してもらつた”死体を、自分の念でそれらしく“おめかし”させて撮つたいわゆる悪戯写真である。

よくできますねえ、と呟いた彼女はまじまじと写真の死体を眺めていた。

「まあ、それは私の情報ではなく、『私だつたもの』の情報ですから構いませんよ」

「ククク……キミならそう言うと思つたよ」

「でもどうしてわざわざ攪乱してくれるんですか？」

「これはキミと契約する前から、もともとボクが考えていたことだからね。それに、これがキミへの協力になるかはわからないよ。怒ったイルミがボクのところに乗り込んでくるかもしれない」

ドッキリ、というのはやる側は面白くても、やられる側はそうはないんだろう。イルミは笑って許してくれるようなタイプでもないし、笑えるレベルのネタでもない。

しかしリリスは顎に手をやつてうーん、と考えると、大丈夫じゃないですか、とあつさり言つた。

「あの人にはそんな余裕はありませんよ」

写真を見たイルミはおそらくすぐにリリスの死体を確認しに行くだろう。そしてそこで、自分がヒソカに騙されたのだと知る。

そのとき彼はどうするか。

「わざわざ探し出して文句を言いに来るほど暇じゃないし、怒りをそこまで我慢できない人だと思いますよ。電話で連絡を取れるなら尚更」

「そうだといいねえ」

イルミはああ見えて短気なところがある。特に家のことが絡むと激情的ですらある。ヒソカはわざと不安を煽るような言い方をしたが、実際にはおおむねリリスと同意見だつた。しかし、リリスの予想はそこで終わらず、彼女はさらに言葉を続ける。

「それに自分が努力してるのにうまくいかないことが続くと、なんとか周りのすべてが敵に見えてくるんですね。で、そうなつたときには相手が敵か味方か判断できる材料があれば容赦なく試すし、できないうのならややこしい関係はひとまず遮断するしかない」

「イルミのこと、よくわかってるんだね」

「……あの人には私に似てますから。不本意ですけど」

そのとき、まるではかつたようにヒソカの携帯が着信を知らせた。とつさに彼女を見れば、どうぞ、とジェスチャーで促される。あまりにも彼女が落ちているので、ヒソカは少し面白くない気分になつて渋々電話に出た。

「もしも、」

「一体これはなんの真似?」

相手は当然イルミで、ヒソカの言葉を遮るほどの詰問口調だつた。どうやらこちらはリリスとは対照的に、怒り心頭というわけらしい。「何黙つてんの、これは何の真似だつて聞いてるんだけど」少しの沈黙も許されず、ヒソカは悟られないように笑みを漏らした。

「ちよつとした冗談だよお。キミがびっくりすると思つてさ」「は? 冗談にもほどがあるだろ」

「悪かつたよ。キミがそこまで怒ると思わなくて……でも、その感じだと、まだリリスは見つかってないようだね」

リリスは今ヒソカの隣にいるのだから、そんなことはわかりきつている。しかしあれだけすぐ見つけると豪語していただけに、イルミは余計イラついているのだろう。

普段、男にしてはやや高めだった声を低く落として、電話越しでもわかるほどの殺気をぶつけられた。

「……いいか、ヒソカ。今度この件でふざけたことをしたらお前を殺す。わかつたな?」

「はいはい、気を付けるよ」

電話を切つたイルミは、まさかヒソカが当のリリスと一緒にいるだなんて想像もしていないのだろう。契約があるのでもしもリリスのことを聞かれても嘘をつくしかなかつたが、ここまで冷静さを欠いている彼は珍しい。

「よかつたね、イルミは全く気付いていないみたいだよ」

リリスにそう声をかければ、彼女はヒソカの手から携帯を奪いリダイアルのボタンを押した。「えつ」一体何のつもりなのか。さすがにヒソカでも、今のイルミに掛けなおすのはまずいと思うのでびっくりする。

しかしリリスはそのままぐい、と身を乗り出し、携帯電話をヒソカの耳に当てた。

——おかげになつた電話番号は、お客様のご希望によりお繋ぎできません

「ほらね」

イルミは今、疑心暗鬼に陥っている。

なるほどな、と思う反面、リリスはイルミとヒソカの関係を良いよう捉えすぎであると思う。

下らぬ用事で電話をかけて着信拒否をされるのは、ヒソカにとつてそう珍しいことでもなかつた。

14. 斜め上

その日、イルミが仕事を終えて帰宅すると、間違えようのない異物感があった。

反射的に日付を脳内で確認すれば、リリスの偽物を殺してからちょうどひと月経つ計算だ。悔しいことに時間切れ。復活したのだと考えていいだろう。

「おかえりなさいませ、イルミ様」

「……」

出迎えに来た執事を一瞥すると、空間全体に緊張が走った。もともと好かれているとは思っていないし好かれたいとも思っていないが、今日の空気はいつも以上に固い。自分では抑えているつもりでも、苛立ちが透けてしまっているのだろうか。

イルミは別に他人にかしづかれて喜ぶ趣味を持ち合わせていないので、こんな心にもない歓迎をされるのは不愉快でしかなかつた。たとえ八つ当たりだと言われようと、もしも今誰かがひとつでもミスを犯したならばイルミは苛烈に責めたことだろう。

「シャワー浴びるから、あとで部屋に食事持ってきて」

「は、はいっ！」

リリスの気配が母親と共にあるのを感じながら、イルミは近くの執事にそう言いつけた。うちの執事にしては妙な間があつたのは、おそらくイルミの注文が意外だつたからなのだろう。執事たちの前では隠していなかつた分、リリスとイルミの不仲はあまりに有名で、てつきりこの足でリリスのところに乗り込むものと思われていたようだ。

しかし、今イルミが二人のところへ行つたところで前と同じ轍を踏むことになるのは明白だつた。それどころか「お久しぶりですね」と嫌味を言われて苛立ちが増すだけだ。現状、家族の前で手が出せないことには変わりないので、今回もまたリリスが帰宅するまで待つしかない。唯一の救いは本人が言つていた通り、懲りずに何度も我が家に来るということだつた。うちに来たのを殺してもまた“入れ替わ

られる”だけだが、逆に考えるといインターバルである殺しのチャンスは何回でも巡つてくるというわけである。

前回はどうやつたのかうまく逃げられ、焦つていたあまりにヒソカの馬鹿馬鹿しい悪戯にまで引っかかつたが、そう何度も逃げ切れるものではない。イルミはそう無理矢理自分を納得させると、足早に自室に向かおうとした。

「あ、あのつ！ イルミ様、」
「……」

けれども進みかけた足は、後ろから呼び止められたことでぴたりと止まる。正直言つて、今のイルミに声をかけるなんて命知らずもいいところだつた。振り返つて見た執事の顔は青を通り越して白に近かつたが、イルミは視線だけで続きを促す。怯えようからしてよほどの用事なのだろうが、それを伝える役になつたことについては”運が悪い”としか言いようがなかつた。

「お、お食事の件なのですが、お部屋ではなく食堂で召し上がつていただくようシルバ様から言付かつております……」

「……父さんが？」

「はい」

「そう」

イルミが黙ると、再び場に沈黙が流れる。本音を言えば一人になりたい気分だつたが、この一ヶ月間仕事の合間にぬつてリリス探しをしていたため、ほとんど家に寄り付かなかつたのも事実だ。久しぶりに顔を見せろということなのだろう。「わかつたよ」イルミが頷くと、あからさまに執事はほつとした表情になつた。勝手に大役を終えたつもりになつてているのが滑稽で仕方がなく、イルミはゆつくりと腕をくむ。

「食事の件はわかつたけどさ、だつたらなんでさつきオレの命令にはい”つて返事したの？」

「え……？」

「オレは、食事を持つてきて”つて言つたよね？”で、お前はそれに”

はい”と答えた。

それってさー、おかしくない？初めから食堂に用意することが決まっていたのに、お前は適当に返事をしたつてこと？

「あ……いや、その……!! 申し訳ございません！」

「オレは別に謝ってほしいわけじゃないんだけど。どういうつもりつて聞いてるの」

「え……あ……」

今やみつともないまでにがたがたと震える執事を見ても、イルミの溜飲はちつとも下がらなかつた。なぜならイルミには他人をいたぶつて悦に入るという趣味はないからだ。これはただの発散なので、終わつたあとにすつきりこそれ、その過程 자체に楽しみはない。「イルミ様、部下の教育が行き届いていないのは私の責任です。どうかお咎めは私に」

「ああ、ゴトーカ。心がけは立派だけどね、なんでも上が責任とつてたらキリがないでしょ。ゴトーガ庇うほど、そいつに価値つてある？」

「いいえ。ですが、」

「イルミ坊ちゃま」

震える執事を庇うように立つていたゴトーオの視線が、イルミを通り越した後ろに注がれる。わざわざ振り返るまでもなく、そんなふざけた呼び方がまかり通る人間はこのゾルディック家広しといえ一人しかいない。

イルミは苛立ちごと吐き出すみたいに、大げさなため息をついた。

「なに、ツボネ。随分と懐かしい呼び方だね」

「ええ、そうでござりますねえ。今のイルミ様を見て、ついつい昔のお小さかつた頃を思い出してしまいました。申し訳ございません」

「……」

自分の幼い頃を知られているというのはなんとなく居心地の悪いものだ。加えてツボネはシルバの直属。いくら執事とはいえ、イルミ個人の判断で手を下せるほど端役ではない。

ツボネはゴトーガと哀れな執事を睨みつけると、せかすように数度手を打つた。

「さあさあお前たち、イルミ様のお手を煩わすんじゃないよ。お前たちのせいでイルミ様のご入浴の時間がなくなつたら、それこそ申し訳がたたないだろう」

「はい、申し訳ございませんでした」

「ご入浴の準備はできているんだろうねえ。抜かりがないかもう一度確認しておいで」

「は、はい！ただいま！」

震えていた若い執事は、ようやくそこで我に返つたのか、弾かれたよう駆け出す。ツボネはそれを一瞥すると、再び“食えない”笑顔をイルミに向けた。

「本当に申し訳ございませんねえイルミ様。わたくしがきつちりと叱つておきますのでどうかこの件はご容赦を」

「……別にいい。シャワーもやつぱり後にする」

「そうですか。それでは十分後に食堂にお越しいただけますでしょか。旦那様方にもそのようにお声がけいたしますので」

「好きにして」

家族で集まつて食事をとるのは、あるようでそんなにはない機会だ。

先ほどまでは苛々して一人になりたい気分だつたが、ツボネの登場で氣勢を殺がれた感もある。イルミはとりあえず着替えることにし、今度こそ自室に向かうこととした。

「どうもこんばんは。お邪魔します」

十分後、という時間設定から、リリスが同席している可能性が少しも頭をよぎらなかつたと言えば嘘になる。

しかし実際に食堂に入るなり“客人”的な顔をして挨拶をされると、落ち着いていたはずの怒りが腹の底でぐつり、と甦つた。

「まあイルミ！お帰りなさい！このところお仕事忙しかつたみたいね！」

「うん」

相変わらず姦しい母親に適当に相槌を打つたイルミは、牽制するようリリスを睨みつけて席に着く。もちろん家族の前ではそうおつぱりにやる訳にもいかないため実際に目が合ったのはほんの一瞬だが、負の感情を互いの瞳の中に見つけるには十分な時間であった。

「でもよかつたわ、今日は早くにイルミが帰つてきてくれて。リリスさんも夕食に一緒に締めてくださることになつたの！」

「そうだね、早く帰つてよかつたよ」

まだ訓練の割合が多く、家にいることの多い弟たちはともかく、父や祖父までそろつてているというのは滅多にない。高祖父については見かけるほうが珍しいので、イルミ的にはこれで久しぶりの家族団らんといった感じである。一方で、もしも自分が今日遅く帰つていたならば、自分の代わりにリリスが我が物顔でこの一家に収まつていただろうことを思うと吐き気がしそうだつた。

しかしいつも以上に嬉しそうな様子のキキョウに対し、リリスはどことなく浮かない表情だつた。彼女のそんな顔を見るのは初めてのことでの、なんだか逆に警戒してしまう。イルミの前では悪感情を隠さない彼女だったが、他の家族の前ではいつもにこやかすぎるほどにこやかだつたからだ。

「おほほほほ！ ちょっといいかしら？？ 実は食事の前にみんなに聞いてほしいことがあるのよ！」

さあ食事にしようという段になつて突然そんなことを言い出したキキョウであるが、母親が自由すぎるのはこの家族にとつてごく普通の事である。「この前、キルが暗殺者にならないなんてことを言ひだして、私本当に心臓が止まるかと思つたんだけれど！！」しかも内容が内容だけに父も祖父も話を遮ることはしなかつた。母親相手だからこそ大口を叩いたであろうキルアも、こんな場所で暴露されてしまふがに苦い顔になる。

「本当なのか、キル」

確認するようにシルバから鋭い視線を向けられ、生意気さがごつそりと削げおちたキルアは俯きながらも渋々口を開いた。

「……うん」

「なぜだ。殺しが嫌いか？」

「別に、そういうわけじゃねーよ……だけど、訓練ばつかじや飽きるつていうか……」

歯切れの悪い口調でぼそぼそと答えるキルアに、イルミは内心で苛立ちを覚える。まだそんな寝言を言っているのか。いくら幼い幼いと思っていてもキルアはもう十二歳。本当ならとつくに一人で仕事をいくつも請け負っておかしくないし、実際イルミだつてその道を通ってきた。だがキルアはゾルデイツク家の長い歴史の中でも抜きんでた才能を持つとされながら、いつまでも精神が暗殺者として未完成だ。だから保護せざる得ない。

しかしさはつきりとそう言つてやればいいのに、父シルバはキルアの返事に黙り込んで何かを考えているようだつた。

「そう！ そうよね！ キルはきっとリリスさんともつと遊びたいんでしょう??」

「えっ」

そしてそこで勢いよく話を攫つていったのがキキョウである。もともと彼女から発せられた話題ではあつたが、不意に重い空氣を打ち破られたキルアは驚きに目を見開く。けれどもそんなくらいで止まる母親ではなく、嬉々として食卓に大きな爆弾を投下した。

「わかるわ！ リリスさんつてすつぐく楽しい方だから!! でも、キルを外に出すのはまだ心配だし、そこでわたくし良いことを思いついたのよ!!

リリスさんをキルの婚約者にすれば、キルも出ていくなんて言わないとんじやないかしら??」

「な、何言つてんだよ、いきなり！」

驚きのあまりキルアがテーブルにぶつかつてがちやりと派手な音がたつたが、これはキキョウ特有の斜め上発想だ。この場にいる誰もが、うんざりするくらい経験したことがある。しかし今回ばかりはイルミはその内容をいつものことだと流すわけにはいかなかつた。

「オレは反対だよ。その女のせいで、キルが余計なことに興味を持つ

たのに、元凶に近づけてどうするのさ」

今まででは我慢して沈黙を貫いていたが、リリスをキルアに近づけるなど絶対に許可できない。これ以上リリスに好き勝手されるくらいなら、ここで自分のやつた全てをバラしてもいいとさえ思った。

「リリスさんもその点は反省させていたわ、だから責任を持つとおっしゃつてくださいましたのよ」

「いや、私が責任と言ったのは、説得と言う意味で……」

だが意外なことに、リリスもこの婚約には乗り気でないようだつた。つきりこの女のことだから、キルアやキヨウをそそのかして取り入つたのかと思っていたが、ずっと複雑そうな表情を浮かべている。

「あら？ リリスさんはお嫌かしら？」

「嫌と言うか……その、年が離れすぎていますし……キルアくんも困るでしょう」

「あら、今の六歳差は大きくても、大人になれば気にならない程度よ!!!

念能力者はいつまでも若々しいし!!」

「いや、でも、キルアくんにも選ぶ権利が……」

なおも固辞し続けるリリスに、キヨウはどうしても駄目かしら？ と心底不思議そうに首を傾げる。初めにみんなに聞いてほしいことがある、と言っていたことを鑑みるに、本当にこれは母が勝手に暴走しているだけなのだろう。それならばただキヨウ一人を説得すればよく、イルミはやや冷静さを取り戻した。「本人たちが乗り気じやないんだから外野がとやかく言つても無駄でしょ」イルミの中ではリリスは殺す予定の女だ。義妹になるかもしれないなんてとんでもない。

だが次の瞬間、イルミは再び全身の血が逆流するような感覚に襲われた。

「いいぜ、リリスなら。リリスが婚約者になれば、もっと気兼ねなくうちに来れんだろう」

そう言つたキルアはにやりと笑つてこちらを見る。それは明らかにイルミに対する反抗だった。

「何言つてんの、キル」

「いいじやん別に。リリスのことは嫌いじやねーしさ。リリスが俺を説得できなかつたら婚約解消。それなら文句ねーだろ?」

「あるよ。説得関係なくお前は暗殺者になるんだから、そんな約束に意味はない。だいたいそんな得体のしれない女をうちにいれるなんてリスクが高すぎる」

「まあまあ!! 得体が知れないなんて!!」

「本当のことだろ!」

イルミが語気を荒げるのは、それこそ家族ですらも滅多に見ない光景だ。一瞬、静まり返つた食卓に、今更のように精いっぱい感情を抑えたイルミの声だけが落ちる。ここまで来ると家族が揃っているのは好都合だった。この際何もかも暴露して、みんなの目を覚まさせる。

「いいよ。ちようど親父もいることだし、この際だから言つてあげる。この女は絶対ろくな女じやない。殺しても殺しても涼しい顔でうちに遊びに来るなんて、何か目的があるとしか思えないんだ」

「殺したですって??」

「そうだよ」

「はつ? ジやあここにいるリリスはなんなんだよ」

もちろん念のことを説明をするわけにはいかないので、キルアのことは無視してイルミは父親に訴えかける。

「父さん、これは嘘じやない。明らかにリリスはまともじやない。そんな奴をキルの婚約者にするなんて反対だ」

ここまで言つて駄目なら、この場でリリスを殺すのもやぶさかではない。そのまま殺せたなら万々歳だし、前のように逃げられたとしてもイルミが嘘を言つていないと証明できる。

「……わかつた。少し話をしよう」

シルバは重々しく頷くと、イルミとそれからリリスに視線を向けた。

「食事の後で私の部屋に来なさい。リリスさんも来てくれるな?」

「……はい」

「おい、俺の婚約って話だろ、なんでイル兄が！」

「キル、お前もくだらない反抗にリリスさんを巻き込むな。キキョウもそうだ、少し落ち着け」

あからさまな指摘を受け、図星のキルアは返す言葉が見つからないようだつた。母も注意されたのが効いたのか、しょんぼりと肩を落とし静かになる。

こうなつてしまつてはもはや、和やかな家族団らんというものからは程遠い空気になつていた。

「……いい加減、食つていいか？」

「そうね、まずはお食事にしましよう

しかし気まずい沈黙もつかの間、ミルキの言葉でみなが動き出す。ようやく良い方向に物事が進んだ気がして、イルミは少しほつとした。

けれどもリリスのほうを見ると、彼女もまたほつとした表情をしていて、なんだかそれは少し面白くなかった。

15. 魂の器

両親の部屋に足を踏み入れるのは、随分と久しぶりのことだつた。幼い頃はそれこそ訓練室で顔を合わせることのほうが多かつたし、自分もそうだが父は常に忙しい。そんな父の僅かな余暇をわざわざ邪魔するほどの用事を、これまで模範生として生きてきたイルミは持つことがなかつたのだ。

「ほら、早く入りなよ」

食事の後からずつと握りっぱなしになってしまったリリスの手首を乱暴に引き、イルミは入室を促す。初めのうちは逃げたりしませんから、と抵抗していた彼女も、青く痣になり始めたころには諦めたのか大人しくなつた。

「イル、放してやれ。俺は話をしようと言つたはずだ」

部屋には既にキキョウも揃つていて、玉座のように大きな椅子に腰かけるシルバの後ろで、母は不安そうにスコープの光を揺らめかせていた。

「話の前に逃げられるとまずいと思つてさ」

「……」

「わかつたよ。こゝまでくれば十分だ」

父親からの無言の抗議に手を離せば、すぐさまリリスはイルミから距離をとる。必然、シルバとキキョウを一つの頂点とする三角形が室内に形成された。

「まず、イルミがリリスさんを“殺した”という件だが、それは本当か？」

「正確にはこいつの“身代わり”をね。一度目は針で操作し、確かに脳も破壊した。二度目は殺さない程度の操作を行おうとしたけど、気づいたときには別の死体が転がつてたよ」

「リリスさん、」

「ええ、彼の言う通りです」

普通で言うなら、“殺した側”がこれほど堂々と“被害者”を糾弾

するなんておかしな話だろう。しかしシルバは事実の確認をしただけ、イルミの行いを咎めるようなことはなかつた。

それもそのはず、ここは暗殺一家ゾルディック家。人を殺して褒められこそすれ、咎められるいわれはない。ましてや、その動機が家の安全の為なら尚更だ。

「さつきも言つたけど、何度も殺されて歓迎されてないつてわかりきつてるのに、それでも訪ねてくるなんて何か目的があるとしか思えない。この女が“身代わり”に入れ替わられるのなら、いつ外部の敵と入れ替わってもおかしくないでしょ？」

「それからもう一つ、引つかかっていることがある。母さんとリリスの関係だよ。直接面識がないと言つてた割に、まるで知己のような口ぶりだ。軽い暗示のような操作を受けている可能性がある」

「キルの件もそうだよ。リリスの言葉でやる気を出したり反抗したり。こつちは操作までしてないのかもしぬいけど、うちにとつて害なのは確かだ」

自分は間違つていない。この家のために正しいことをしている。そう思えばそう思うほど抑揚を殺すのは難しかつた。横目でリリスを盗み見、その涼しい表情が崩れざる瞬間を今か今かと心待ちにする。

「……リリスさん、」

ひとかけらの遠慮もないイルミの糾弾に、さすがのキキョウも弁護する言葉を持たなかつたのか、普段の甲高い声が嘘のように静かだつた。

今や全員の視線がリリス一人に向かう。そこで初めて、彼女は困ったように眉を寄せた。

「大丈夫です、気を遣つていただかなくて。元はと言えば騙していた私のほうが悪いんですから」

そう言つて話し始めた彼女の表情には追い詰められた者の絶望も、いつものふてぶてしさもない。かといって開き直りともまた違つた、諦めに似た何かが確かに浮かんでいた。

「まず、私の念についてお話をしたほうが早いでしょう。私の系統は元

は操作系、後天的に特質になつたタイプです。能力は、血をもらつた相手に“憑依”すること

“憑依”という言葉に、イルミはそうと悟られないくらいに眉を寄せた。つまり、彼女は入れ替わつていたわけではなく、もともと偽物の身体だつたというわけだ。それならばイルミが“殺した”という事実にも矛盾しない。

そしてイルミが覗んだ通り、彼女には操作系の適性がある。操作系が後天的に特質になる可能性があるのは知識としては知つていたが、転向する条件は不明だし実際にお目にかかつたのも初めてだつた。そもそも特質系自体が特殊な家系に産まれたり、特別な環境の下で育つたものが多いと聞くが、流星街での生き立ちが関係しているのだろうか。

リリスがちらりとシルバとキキョウのほうを見ると、二人は黙つて頷いた。

「この“憑依”的能力は放出系能力者だつた私の母の念です。母は自身の魂をオーラとして飛ばし、他人の身体に憑依することができます。このことは同じ流星街出身であるキキョウさん、そして仕事で流星街に訪れたシルバさんもご存じだと思います」

どうやら彼女の母親がキキョウの知り合いであつたというのは本当らしい。しかしそれならばなぜ、“騙していた”と言つたのか不明だし、なにより後天的に特質になつたとはいえ、操作系のリリスが“なぜ母親と同じ念なのか”という謎は残つたままだ。

念能力というのは血縁で受け継がれるものではなく、本人の才と努力による一代限りの能力である。家族間でなりやすい系統が大雑把な傾向としてあつたとしても、極端な話家族全員の系統がばらばらだということだつて大いにあり得る。

系統が同じであれば似た念を“模倣”することは可能かもしれないが、やはりイメージや過去の経験が色濃く反映される念が、全く誰かと同じということは起こりえなかつた。

「母は昔から足が悪く、身体も丈夫なほうではありませんでした。だから自由に動く他人の身体をのつとる、というような発想が生まれた

のでしよう。しかしこの念の発動中、本体である身体はただの抜け殻。彼女が自由を求めて自分の身体を留守にすればするほど、どんどんと身体が弱っていくのは明白でした」

「しかも念の発動には相手の血液を必要とし、長時間“憑依”を続けるには魂と肉体の相性も関係してきます。つまり、一般人よりも念能力者が、他系統よりも同系統が、赤の他人よりも血縁者が、器として好ましい」

そこまで話すと、彼女は一度区切りをおいた。周りの理解を待つというよりも、彼女自身、何かと葛藤しているように見える。

自白をする一步手前の者もこうした雰囲気を纏うので、イルミは急かすまでもないと黙つて続きを待つた。

そうしてすっかり色味の失せた、彼女の唇が震える。

「私は母の器となるべく、この世に生を受けました」

彼女が努めて無感動でいようとしているのは、誰の目にも明らかだつた。声こそ静かで落ち着いていたが、それが逆に不気味ですらある。

リリスの母はこのままでは自分が永くないことをわかつていて、次の肉体とするためリリスを生み育てた。そしてよりよい器とするために、精孔を開き、四大行を叩きこんだのだと言う。この計画についてはキヨウにも話しており、いつか“生まれ変わつて”会いに行くわと約束していたらしい。

「しかし母の念は失敗しました。正確に言うと、私が抵抗したのです。まだ発の形成にまで至つていなかつたものの、操作系だつた私は“憑依”してきた母の魂を支配した。母は器であるはずの私に、逆に吸収されたのです」

「始めに騙していた、といったのはそのことです。私は母の記憶も念も得たのをいいことに、自分が母だと偽つて、キヨウさんに会いに来ました」

そこから先のことは、説明してもらうまでもなく知っていた。計画を知っていたキヨウはリリスを旧友として受け入れ、肉体の年の差の説明を省くため、そのまま“友人の娘”として紹介した。もちろん

ん、当主であるシルバや義父のゼノには彼女の正体や念について教えたが、そもそも念を他人に知られるのは念能力者にとつて致命的。

彼女のように戦闘向きではなく、使用時、使用後に本体が無防備になるような場合は尚更であり、そのためあからさまに敵意を表明していたイルミには教えられなかつたのだろう。

種明かしされてしまえば、実にくだらないことに数か月も費やしたものだ。とはいへ、やはりリリスが嘘をついていたことには変わりない。

彼女の母の所業には驚いたものの、こんな仕事をしていれば骨肉の争いなど珍しくもないし、家族間でも憎しみあうことがあるのはよく知つていた。肝心なのは過去の確執ではなく、リリスが何を目的にここまで来たのかだ。

「母を吸収した私は、後天的に特質系となり、母の能力も使用できるようになりました。さらにただ『憑依』するだけだつた母に対して、操作系の系統を持つ私は『憑依先』の容姿を自分と同じものに変えることができます。

私は自分が母であると偽つたばかりか、ゾルディック家を恐れて生身でここを訪れたことはありません。これがもう一つ、私が謝らなければならぬと思つていたことです」

まるですべての告白が終わつたみたいに、リリスは深々と頭を下げる。イルミはまたお得意のパフォーマンスかと呆れたが、心のどこかでこの謝罪は本心なのではないか、と思う自分もいた。上手くは説明できないし、自身にこのような感傷が残つていたことにも驚きだが、無理に冷静さを取り繕おうとしているリリスの姿には真実味があつたのだ。

「リリスさん、それはお食事前も聞いたけれど、私は別に怒つてはいな
いわ。思い出話に花を咲かせられたのも貴方のお陰だし、本人でなく
ても、その娘さんに会えたのも嬉しいことよ。むしろ私はあなたが娘
さんのほうだと知つて、ぜひお嫁に来てほしいと思ったわ！」

「たとえ肉体が違つていても、キキヨウの相手をし、息子たちの面倒を
見てくれたのはリリスさん自身だ。俺が言うのもなんだが、生身で暗

殺一家を訪ねてこなかつたのは判断としては間違っていない」

しかし、ここで空気が和やかなほうにもつていかれそうになつて、イルミはハツと我に返つた。「待つてよ、まだ肝心の話を聞いてないけど」世の中には不幸話なんて腐るほど転がっているのだから、いちいち絆されてなんていられない。

イルミは久しぶりに口を開くと、顔をあげたリリスを真っすぐに睨みつけた。

「お前の念のことはよくわかつたよ。で、なんでわざわざ母親を騙つてうちに来たわけ？復讐でもしようと思つたの？」

「復讐？」

「お前は母親を恨んでる。だとしたらその友人で、計画を知つていた母さんを恨んでもおかしくないだろ」

言つてしまえば逆恨みだ。リリスの場合は特に、恨みをぶつけるべき相手がもう存在しないので、その矛先がゾルデイツク家に向いたとしても納得できる。

けれども彼女はゆっくりと首をふると、自嘲めいた笑みを浮かべた。

「いいえ違います。でも、皆さんを騙していたことには変わりないし、私にはもう、この家を訪ねる資格はありません。もともと今日で最後にするつもりでした」

「……」

「今までお世話になりました。そして不快にさせてごめんなさい。ほんとはこんなに長く関わるつもりじやなかつた。私はただ、母の友人がどんな人で今どうしているのか、知りたかっただけだつたの」

「……オレにそれを信じろって？」

「信じてもらえないっても構いません。どのみち、もうここへはお邪魔しませんから」

彼女の言葉は本心だろうか。そんな非合理的な理由で危険を冒してまで暗殺一家を訪ねてきたというのか。それは復讐よりもあまりに筋が通らないし、はつきり言つてイルミには理解できない。

だが実際に、彼女がうちで具体的に何かをしたかと言われると答え

に窮した。強いて言うならキルアの反抗のきつかけになつたくらいだが、母を操作していた件についてはシロ。念が分かつた今、家の脅威にはなりえないことが確定したし、両親に至つては初めから知っていたのだ。

加えて、もう二度と来ないというのなら、この場でイルミがこれ以上彼女を糾弾するのは難しい。

リリスは最後にもう一度頭を下げて、さよならの挨拶を口にした。イルミはそれに何も言えなかつた。出ていく彼女を見て溜飲が下がることも、ざまあみろと思うこともなかつた。悪意の有無は別にしてやつとこの家から異物がいなくなつて嬉しいはずなのに、まだ胸の奥に何かがつつかえている。

——だつたら、なんで、オレにだけ敵意を向けてたの。

確かにイルミ自身、彼女に好かれるようなことをしていないのはわかつてゐる。弟から遠ざけようともしていたし、この家に近づくなという警告も、偽物とはいえ実際に殺害まで行つた。けれどもそれは家を守るという観点から言えば当然の反応だろう。イルミだつて異物感こそ感じていたものの、初めから殺してやりたいほど憎んでいたわけでもなかつた。

現に、初めてキキョウから紹介された時には何もせず引き下がつている。

だが、リリスはファーストコンタクトから、イルミに対してだけ妙な感情のこもつた瞳を向けていた。イルミが気に入らない、と印象を抱いて、記憶に残つていたのはそのせいだ。

あれは確かに負の感情だつた。だからイルミは警戒を強めたのだ。

——母の友人がどんな人か知りたかつただけなのはずつと疑つていた彼女の目的が、あれで本当なら拍子抜けするくらいだらぬ。しかし監視カメラで見た彼女のこれまでの振る舞いは、確かにどれをとっても憎しみなどないように見えた。キキョウに對しても、キルア達に對しても、きわめて普通すぎる態度だ。むしろ

家族の一人とでもいうような親密さで、慈愛のこもった眼差しを向けている。

だからこそ、イルミにだけ敵意を向けたのが、どうしても解せなかつた。

復讐が目的でないのなら、ゾルディック家の誰かと敵対するメリツトなどない。部外者の出入りを快く思わないのは同じだが、最初のあの瞳や挑発するような態度がなければ、イルミだつてここまで強硬手段に訴え出なかつただろう。

しかしその疑問はあまりに個人的すぎて、言葉にするのは憚られた。彼女はゾルディック家を出て行つてしまい、最後まで引き留めようとしていたキキョウをシルバが制したくらいだ。

そうなるとイルミにはもう何もできない。そもそも彼女を一番追い出したがっていたのはイルミなのだから。

「意味わかんない……」

意図せず漏れた呟きは、理由のわからぬ敵意を向けてきていたリリスに対してか、それとも目的を達成したのに消化不良の感情を燻ぶらせている自分に対してか。

その日のゾルディック家は、いつもよりひどく静かだつた。

16. 利用価値

あの日以来リリスが来なくなつて、ゾルディック家はようやく本来の落ち着きを取り戻した。

相変わらず父や祖父は仕事に明け暮れているし、イルミ自身も仕事や弟たちの訓練につき合うだけで日々が過ぎてゆく。仕事以外の用事で外出することもなければ、家庭内で誰かに苛立たされることもない。

実際に穏やかで、これまでとなんら変わらない日常だつた。たまに身の程知らずの賞金首狙いが訪れたりはしていたようだが、正式に本邸を訪れるような客人はいないし、この家にいるのは家族と雇っている執事だけ。

しかし表面上は変わらなくても、皆の記憶からあの女が消えたわけではない。特に、彼女と別れの挨拶を交わしたわけでもなく、経緯を知らないキルアからしてみれば、単にリリスが追い出されて来なくなつたという結果だけが残るのだろう。

イルミが食事の席で派手に糾弾したこともあり、今更彼女が自分の意思で出て行つたのだと言つても信じるわけがなかつたのだ。

「キル、またゲームかい？」

イルミがふと思い立つてキルアの部屋を訪ねれば、振り返つた弟は露骨に顔をしかめた。「……ノックくらいしろよ」訓練はもう終わつたので別にゲームをしていること自体を咎めるつもりはないのだが、最近のキルアは何かと自室に引きこもりがちだ。家族の誰ともコミュニケーションをとろうとしないし、なにせうちには次兄という前例がいるので少し心配もある。

イルミはキルアの言葉を聞き流すと、そのまま部屋に足を踏み入れる。テレビ画面に映し出されたものを覗き込んで見ても、さっぱり何がなにやらわからなかつた。

「なに、なんか用？今日の訓練は終わりだろ」

「別に用つてほどじゃないよ。ただ、久々に兄弟で過ごすのも悪くないと思つてさ」

「はあ？」

そう言つて隣に腰を下ろすと、キルアは信じられないものでも見たかのような表情になる。確かに忙しさに加えて年齢差もあることから、一緒に遊ぶということはなかつた。もちろんキルアが小さい頃は遊んでやつたりもしたが、所詮それも子供の相手をするという意味でしかない。イルミが近くに置かれていたコントローラーを握ると、ますますキルアは怪訝な顔をした。

「マジで言つてんの？」

「うん。ミルとはよくやつてるよね？」

「……イル兄、ゲームなんてできんのかよ」

「教えてくれればできるよ」

——たぶん。

正直、イルミはゲームなんてろくにやつたことがなかつた。最初の子ということで両親も教育に力を入れていたし、イルミ自身、そしたら娯楽には大した興味をそそられなかつた。今だつて別にゲーム自体がやりたいわけではなく、この場に留まる口実が欲しかつただけ。もつと言うなら、監視カメラの映像でリリスとキルアがゲームをしていたのを思い出しても、なんとなく張り合いたくなつただけだ。

余所者のあの女がキルアとゲームをするのなら、兄である自分がしてはいけないはずがない。

キルアはイルミに諦める気配がないのを悟つたのか、渋々といつた感じで二台目のコントローラーをゲーム機に接続する。キルアは積極的にリリスをゲームに誘つていたので、本心では一緒に遊べる相手が見つかって嬉しいはずだ。どこか態度がぎこちないのは、きっと照れ臭いのだろう。

「……とりあえず、好きなキャラクター選んで。Aで決定」

「うん」

「これ対戦格闘ゲームだから。上の緑のゲージがライフで、敵のライフをゼロにした方が勝ち。十字キーで移動で、Xでパンチ、Aでキック

ク。ガードは後退させるとできる」

「わかった」

何やら他にも色々なボタンがついているが、ひとまず基本操作だけわかればいい。イルミが適当にキャラクターを選択すると、カウントダウンの後にすぐに戦闘が開始された。

キルアのキャラクターは、ホウキを逆さにしたような髪型の軍人の男だった。ボクシングのような構えをとっているし、おそらく近接戦闘タイプだろう。相手の手の内がわからないうえに、こちらは初心者。まずは相手の出方を見ようと少し下がったときだつた。

「え、待つて、今の衝撃波みたいなやつなに」

「ソニックムーブ」

「……格闘ゲームなんだよね？」

「あー。電気纏つたり、超能力使つたりもするから」

説明しながらも遠距離から次々と衝撃波を飛ばしてくるので、イルミはとりあえずタイミングを合わせてガードをする。格闘ゲームというから、てつきり純粋な肉体による戦いを想像していたが、念能力でのバトルのように実際はなんでもありらしい。

「ガードしたつて、必殺技はノーダメじゃないぜ」

「みたいだね」

とりあえず、近づかないことには始まらない。衝撃波の間を縫つてジャンプをし、キルアの操作キャラとの距離を一息に詰める。しかし放つたキックはあつさりとガードされ、代わりに連撃を食らつた。どうにかして逃れようとするのだが壁際へと追い詰められ、一度、ダウンしてしまうとそこからは殴られ放題だ。

「はい、俺の勝ち」

結局、あつという間にライフを減らされ、イルミのキャラクターは敗北する。圧倒的な経験と実力の差だ。こればかりはどうしようもない。

「もういいだろ」

キルアは肩をすくめると、視線を画面からこちらの方に向かた。「もう一回」

「無理だつて。イル兄と俺とじや勝負になんねーよ。やつても面白くないだろ」

「今のは初めてだつたから。何回かやればコツが掴めるよ」「……いつもは勝ち目のない敵とは戦うなつて言うくせに」

「はは、キルも言うようになつたね」

これは一本取られたな、とイルミは少し愉快な気持ちになつたが、キルアのほうはにこりともしない。相変わらず、戸惑いと不機嫌が一緒くたになつたような表情をしていたが、やあつてゆつくりと目を伏せた。

「……あのさ、もしリリスの真似をしようとしてんなら、そういうの気持ちわりいからやめろよ」

「真似？」

「だつておかしいだろ、兄貴が俺とゲームなんて。柄じやねーし」「そうかな？他人とゲームするより、兄弟でやるほうが自然だと思うけど」

「やつぱ、イル兄がリリスのこと追い出したんだ」

キルアが呟いた言葉が、やけに反響して聞こえた。ゲームは未だついたままで賑やかなBGMが流れているにも関わらず、妙な静けさが二人の間に落ちる。

イルミはなんとなく最後の日のリリスの、諦観が滲んだ瞳を思い出してしまうつていた。

「……もともとあの女がいるほうがおかしかつたんだよ」「俺の婚約者になるなら、來たつておかしくなかつただろ」

「キルにあの女は相応しくない」

「なんでだよ、お袋だつて賛成してたのに」

キルアがリリスのことをそういう意味で好きではないのは、誰の目にも明らかだつた。口だけはませていても所詮は子供。リリスを婚約者に望むのはイルミへのあてつけ半分、もう半分は慕つているリリスを縛りたいからだろう。

ゾルディック家の教育上、友達をつくる機会も必要もないし、執事は立場をわきまえているため、決してキルアの望むような関係を与え

ない。そういう状況下で初めて対等に接してくれた他人として、キルアがリリスに固執するのも無理はなかつた。友達とまではいかないが、男ばかりの兄弟で姉という存在に憧れもあつたのだろう。

「母さんとキルがよくても、リリスはどうだらうね」

「それは……」

「リリスは婚約の話が出ても喜んでなかつたよね。リリスが特殊な性癖でもない限り、キルなんて子供にしか見えないだらうし」

それにはさすがに自覚があつたのか、キルアは悔しそうな顔になる。悔し気に唇をゆがめて、それから皮肉っぽく笑つた。

「だつたらさ、なんでお袋はイル兄に勧めなかつたんだろうな」

イルミが去年あたりから、良い人はいないの？お見合いなんてどうかしら？と母にせつつかれていることは家族の中ではよく知られている事実だった。キキヨウがリリスを嫁に、と言い出したのはキルアとくつつけたいという思いよりも、どちらかと言えば彼女を『義理の娘』にしたいという感情からだらうし、その目的ならイルミかミルキ、順番で言えば長兄で未だ独身のイルミを勧めるのが妥当だらう。「ま、もし相手がイル兄だつたら、リリスのやつ、喜ばないどころか絶対嫌がるだらうしな」

「オレだつてお断りだよ」

家族の前では警告までにどどめていたとはいえ、イルミとリリスが他の兄弟ほど仲良くしていなることはキキヨウだつて知つていただろう。実際二人は敵対していたも同然だし、いくら結婚相手に理想がないとはいえ、年齢だけであてがわれてはたまたものではない。しかしキルアの口から改めて自分が嫌われていたことを突き付けられると、なぜだか面白くない気持ちになつた。

胸の中でもやもやと燻ぶるもののが存在に戸惑い、いつもほどキルアに対して強く出る余裕がない。その異変は明らかにキルアを調子づかせたようだつた。

「ていうか、前に言つてたりリスを殺したつてどういうことだよ？まさか兄貴がしくじつたのか？」

しかし、調子に乗ると言つても触れた話題が悪かつた。キルアには

まだ念のことを教えるつもりはないし、依頼ではなかつたにしろ、暗殺失敗なんてイルミのプライド的に許せない。暗殺家業は機を見る商売であるから一度で殺せなくとも気にはしないが、生かしたままにしておくというのもどうなのだろう。タネがわかつた今となつては、リリスを殺すのは容易い。前回こそうまく逃げられたが、ゾルディック家から一生逃げ回るなんて不可能だ。

「殺したって言つたのは言葉の綾だよ。でも、そうか。キルはオレにリリスを殺してほしいんだ？」

「は!? そんなわけねえだろ！」

途端に顔色を変えたキルアは手に持つていたコントローラを強く握りしめる。その様子を見て、イルミは少し落ち着きを取り戻した。そうだ、それでいい。

「やめろよ、仕事でもないのに殺す必要ないだろ」

「そうかな、あの女はキルの反抗の責任を取るつて言つてたよね」「……リリスを殺したら、俺は兄貴を絶対許さないぜ」

向けられた瞳はぞつとするほど暗殺者らしいほの暗さを湛えていて、イルミが見たかつたのはそういう顔だと思った。たとえ自分に向けられた殺氣でも、弟の成長は喜ばしい。

もつともイルミは母と違つて、反抗という形での成長まで喜んでやる気はこれっぽちもなかつたが。

「脅しのつもりかい? 逆だよ、キル。リリスを殺されたくなかつたらオレの言うことを聞いておいたほうがいい。わかるね?」

威圧するように言えば、キルアは今度こそ黙り込む。思いがけないリリスの利用法に気付いてしまったイルミは、すうっと目を細めた。本当ならこのままリリスは捨て置いてもよかつた。自分に向かっていた謎の敵意も気になるし、唯一殺し損ねたという点において引っかかりは残るもの、いつまでも仕事と家族以外にかまけているほどイルミは暇ではない。

しかし、キルアを懐柔するにあたつて人質として使えるなら、リリスの価値はまだ失われていないと言えた。念も弱点もわかつた今となつてはうちに呼んでも大した脅威ではないし、これまで通りキキヨ

ウの相手を——こちらは最近、リリスの件で気味が悪いくらいに落ち込んでいるのだが——してくれるのなら、イルミも面倒な愚痴や長話から解放されるので非常に助かる。

「ははは、なにもオレは意地悪で言つてるんじゃないよ。キルがい子にしてたらリリスに会わせてあげる」

「……どういう意味だよ」

「どういう意味も何も、キルもオレ相手のほうが妥当だと思つてたんだろ?」

まさか、という顔をするキルアにそのまさかだよ、と内心で笑う。リリスが嫌がったところで関係ない。むしろ理由はわからないがあれだけ嫌っていた男と結婚させられるとなつたら、今度こそあのすました顔を絶望でゆがめてやれるかもしれない。

悔しいが今回の件ではリリスにやられっぱなしだった。あてつけ、という意味ではイルミの動機もキルアのそれと大差がないだろう。

それでも——

「リリスを連れてきてあげるよ、オレの婚約者として」

キルアの行動を縛れて、さらにあの女の嫌がる顔が見れるなら、なかなかどうして悪くない案だと思った。

17. 婚前契約

「おはよう、随分とよく眠つてたね」

もぞり、とベッドの中の彼女が身じろぎをしたので、イルミは当たり前のように声をかける。勝手に拝借したカップで珈琲を嗜みつつ、壁掛けの時計に目をやれば時刻は朝の6時だ。世間一般で言えばむしろ早起きの部類だが、深夜の仕事終わりにリリスの家を訪れたイルミからするとかなり長く待たされたようを感じる。別に起こしても良かつたのだが、あれだけ上手くイルミの捜索をかわした彼女が無防備に寝こけているのを見て、すっかり拍子抜けしてしまったのだ。

確かに窓やドアには神経質なほどに鍵がかけられていたものの、イルミからすればこんなものはなんの防犯にもなりはしない。どういうつもりか内側からドアノブにぐるぐると鎖が巻き付けられていたが、これもどちらかと言えばリリスが不便なのではないかと思つたらいいだ。

結果、そんなこんなで簡単にリリスの部屋に侵入を果たしたが、今回の目的は彼女を殺すことではない。イルミとしてはリリスが起きた前に色々やつてしまいたいこともあつたし、せめてもの優しさで彼女が目覚めるまで待つていたという次第である。

「……は？」

しかし半身を起こした彼女はまだうまく状況を理解できないのか、その一言を発したつきり、イルミのほうを見て固まってしまう。そうやって間抜けな顔をしていると、女というよりまだ少女と表現したほうが似合つて見えた。

「……は？ なんで……え？」

たっぷり一分以上はそうしていただろうか。彼女はようやく起動すると、今更のように飛び上がりつてベッドの上に立ち上がる。すぐに動けるような姿勢をとっているのは褒めてもいいが、裸足で丸腰とう、相手がイルミでなくともなんとも心もとない状況だ。

「……私を殺しに来たんですか？」

リリスは目の前にいる男が誰かを理解すると、ほとんど断定的な口

調で物騒なことを言つた。

「ううん、今のところそのつもりはないから安心して」

「じゃあ今更何の用ですか？私はもうあの家に関わるつもりは、」

「そのことなんだけどさ」

イルミは涼しい顔で、珈琲を最後まで飲み切る。いつもと違つてソーサーがないせいか、カップを置くとコトン、と木の音が響いた。それをなんだか長閑だな、と思つてしまふくらいには、イルミはとても機嫌がよかつた。

「リリスにはオレの婚約者になつてもらうから」

さて、一体彼女がどんな顔をするのか、これが楽しみで朝まで待つていた。動搖、驚愕、拒絶、そのあたりの反応は想定内だからこそ、こちらも既に手を打つてある。

肝心なのはその後だ。どうあがいても逃げられないとなつたときの彼女の絶望や屈辱の表情を想像すると、腹の奥底から薄暗い喜悦が込み上げた。

同時に、自分はこんなに根に持つタイプだったのか、と自身で一番驚いてもいる。

「……はい？」

イルミの発言に、彼女は起きたときとほぼ全く同じトーンと表情で固まつた。「意味がわからないんですけど……なにこれ、夢？」本当に頬をつねつて確認する馬鹿を、イルミは初めて見た。得体のしれない不気味な女という印象は、残念ながらもはや見る影もない。

「夢つて、深層心理の現れらしいよ」

「……じゃあこれ現実？頭でも打ちましたか？」

「現実だし、頭なんか打つてないし、オレは眞面目に話してゐる。いいから左手、見てみなつて」

混乱の最中にあるためか、彼女は言われた通り素直に視線をやる。そうして自分の薬指に光るリングを発見し、声にならない悲鳴を上げた。

「なつ！なにこれ！？は、外れない！？」

銀色の輝きを放つそれは、邪魔にならない程度のダイヤがついた、

ごくごくシンプルなエンゲージメントリングだ。しかしそのリングの裏側には互いの名前ではなく、神字がびつしりと彫り込まれている。

「それはオレじゃないと外せないし、無理に外そうとするのもやめておいたほうがいいよ」

「どういうつもり!? つつ!!」

「あと、垂れ流す分にはともかく、念も使わないほうがいいよ。一定量のオーラを纏えば激痛が走るし、さらに発ほど高密度までオーラを高めればその指輪は爆発する。もちろん、指を切り落としたりしても同じね」

痛みに思わず膝をついた彼女の額には、じわりと脂汗が浮かんでいた。

神字の製作者はイルミだつたが実際に試したわけではなかつたので、結構効果あるんだなと他人事のように考える。神字のことについては一通り学んでいたものの、あくまで補助的な要素が強く、手間もかかるし、操作系で刺せば終わりのイルミが使つたのは初めてだつた。しかしリリスが屈辱を味わう姿が見たかったイルミとしては、精神ごと操作してしまう針よりも、多少手間はかかるが肉体のみの支配である神字のほうが都合がよかつたのだ。

「大事にしてね、それ作るの一ヶ月くらいかかるんだからさ」「つ、誰がこんな!! そもそもどうして婚約なんて！ あんなに私のこと

嫌つてたじやないですか!!」

嫌つていたのはそつちだろ、という言葉が喉元まで出かかつたが、イルミは代わりに別のことと言つた。「別に悪い話じやないだろ、リリスだつてあんなにうちに来たがつてたんだし。婚約者になればさすがにオレも文句言わないよ」リリスはまだ痛むのか薬指を握りしめ、今度こそはつきりとした敵意をもつてこちらを睨みつけてきた。「キキヨウさんにでも、泣きつかれたんですか」

「惜しいね。でも母さんに頼まれただけで婚約するほど誰でもいいわけじやないよ。お前には責任を取つてもらおうと思つてね」

「……まさか、キルアのことですか？」

「そう。お前のせいでキルが反抗的になつてこつちは困つてるんだよ。リリスがいればキルも大人しくせざるをえないでしょ？」

要は婚約者とは名ばかりの、ていのいい人質だ。リリスもそれがわかつたのか、苦々し氣に眉をしかめる。しかし彼女にはどうしようもないはずだ。念を発動して身体を使い捨てにしないところみるに、今現在の彼女は『本体』であるようだし、ただでさえ力の差があるので念無しでは逃げることもままならないだろう。

イルミはさらに追い打ちをかけるよう、自身の左手も掲げて見せる。そこにはリリスの物とは違ひ、石のついていないシンプルなリングが光っていた。

「そうだ、そのリングは対になつていてね。オレの意思でリリスに罰を与えることもできるんだ」

デモンストレーションとばかりにイルミが指輪にオーラを込めれば、彼女は声こそ出さなかつたものの苦痛にもだえる。それでも、こんな圧倒的不利な状況でも、その瞳に浮かぶのが恐怖でなく怒りであるのがとてもリリスらしいと感じた。

「ま、そういうわけだからリリスにはオレと一緒に来てもらうよ。

あ、そうそう、このことは一人だけの秘密だから母さんたちの前では話を合わせてね。

もしどうしても演技なんかできないっていうなら、針でサポートしてあげるけど」

「……キルアに家を継ぐつて言わせたら私は解放されるんですか」

「そうだね。でも、もちろんキルが本心から言うようじやなくちゃいけないよ。リリスが解放される条件はひとつ、キルを立派な暗殺者にすること。もしくは、」

——死が二人を別つまで

「オレかおまえか、どつちかが死ねば解除される。

攻守交替といこうじやないか、ね、リリス」

そうだ、その顔が見たかつた。

今回向けられる敵意は理由が明確すぎるほど明確で、逆に清々しいぐらいである。

イルミは久しぶりに心から愉快な気分になつたが、残念ながら家族ではないリリスにその機嫌が伝わることはないのだった。

18. 罪悪の枷

宣言、というのは、それなりに自信がある者がすることだ。

その自信が何の根拠もない全能感ゆえなのか、それとも、あと数手で王手をかけられるところまで詰めた結果なのかは個人の性格によるが、少なくとも兄イルミは勝ち目のない勝負事はしないはずである。

つまり、彼が“リリスを婚約者として連れてくる”とキルアに向かって宣言した時点で、きっともう彼の頭の中にはどのようにしてリリスを捕らえるのか、ある程度計画がなされていたのだろう。

キルアはここ最近ずっと、酷く恐ろしかった。

あの兄がまともにリリスに謝つて、ごく普通の恋人として交際を申し込む姿など想像もできなかつたからだ。

しかし恐れていた日は、とうとうやつてきてしまつたようだつた。

「失礼します、キルア様。お休みのところ申し訳ないのですが、キキヨウ様から大至急リビングに来られるように言い使つております」
「……わかつた」

今日も一日長い訓練が終わつて、ようやくほつと一息ついたところだ。いつもならうぜえなあ、と思うだけのキルアであつたが、嫌な予感に一段と足取りは重くなる。

たいてい過保護な母は、何かあれば呼んでもないので向こうから飛んでくるのだ。だからこうしてキルアのほうが呼び出されるのは珍しいし、リビングに向かう途中で、執事がミルキの部屋にも声をかけているのを見た。何かと監視されている自分ならともかくも、普段放任されて好き勝手やつているミルキまでもが呼ばれるなんてやつぱり妙でしかない。

そしてその予感を裏付けるように、向かつたリビングには家族の物でない気配が一つあつた。

「あらあ！キル、遅かつたわねえ！でもまあいいわ！きつとあなたも

思つてもみなかつたでしようし!!」

「……」

「久しぶり、キルア」

おほほほ、と上機嫌に笑うキキョウとカルトの前にいるのは、ずっと会いたいと思っていたリリスだつた。まるで何事もなかつたみたいに、今まで通りの笑顔と挨拶を向けてくる。しかし今までと決定的に違うのは、そのリリスの隣に、当然の顔をして兄イルミが立つてゐるということだつた。

「どうしたんだい、キル。挨拶もしないで」

「……別に、もう来ねえのかと思つてたから」

前に尋ねたとき、母は確かにそう言つていたし、実際目に見えて落ち込んでいた。現にリリスがここを訪れたのも三か月ぶりで、キルアの感想に偽りはない。

「ごめんね」

リリスは困つたように眉を下げたが、特にそれ以上の説明も弁解もしなかつた。どうして何も言わずに去つたのか、あの日両親とイルミとの間でどんなやり取りがあつたのか、何一つ説明しようとはしなかつた。

「ええ、私もそう思つていたのだけれど、イルミが説得してくれたみたいなのよ!!しかも、聞いて頂戴!!リリスさんはただ遊びに来てくださいたんじやなくつて、」

「オレたち、婚約したんだ。だから今日はその報告」

キキョウの言葉を引き継いだイルミは、いつも通りの淡々とした調子で告げる。「えつ!?」その流れを想像していたキルアは何も言わなかつたが、ちょうど遅れてやつてきたミルキが後ろで驚愕の声を上げた。

「やあ、ミル。いいタイミングだね」

「……い、今的话、マジかよ?」

「ただけど、なにをそんなに驚くことがあるの?オレとリリスが結婚するのはおかしい?」

こてん、と首を傾げる兄だが、はつきり言つておかしい以外の何物

でもない。リリスもイルミも、お互いのことを良く思っていなかつたはずだ。「い、いや……そういうわけじやねえけど、兄貴は結婚とかまだ興味なさそうちだつたからさあ……はは」引きつり笑いを浮かべたミルキは、ちらりとキルアに視線を向ける。

——どうしたことだよ。

その視線ははつきりとそう問い合わせていたが、キルアは説明する術を持たなかつた。少なくともこの場で兄に脅されたことを告発するわけにはいかない。リリスを殺されたくなかつたら大人しくしていろ、というのがイルミの言葉だつたのだから。

「そうだね。オレもまだ結婚は早いと思つてたよ。そもそも初めは、リリスがオレ達を狙つている刺客かもしれないって思つてたし」「そうねえ、イルつたらリリスさんのことを見ついていたものねえ」「うん。でも、誤解が解けてよく話すようになつたら、皆がリリスのことを気に入つてた理由がよくわかつたよ」

それはあまりにも白々しい嘘だつたが、キキョウは少しも気づかないでリリスが戻つてきてくれたこと、しかもイルミの婚約者としてやつてきたことに大喜びしている。肝心のリリスを気に入つた“理由”には触れていないのに、いきなり婚約だなんて妙だとは思わないのか。しかし何も知らないカルトもまた、嬉しそうに顔を綻ばせていた。

「リリスが姉さまになるの？」

「いざれね」

まだ幼い弟に向かつて平然と嘘をつく兄の姿に虫唾が走る。ミルキも同じように思つてゐるのか、横目で見た彼は複雑な表情を浮かべていた。

「おほほ!!でもよかつたわあ!!予想外の形だつたけれどリリスさんが我が家に来てくださるのは嬉しいことですもの!お義父様やパパが帰つてきたらお祝いしましようね!」

「リリスを盗つちゃうみたいでごめんね、キル。でもリリスが義姉になるなら、キルも嬉しいだろ?」

不意に、黙つていたキルアに水が向けられてハツとする。「ああ

……」元の二人を知っているだけにおかしいとは思いつつも、正直、自分との婚約話が出た時と違つて明るい表情のリリスに内心傷ついてもいた。脅されているのかもしれないが、それにしてはざぐく自然に見える。揃いのリングまでして、女性である彼女のほうはともかく、イルミまで装飾品をつけるとは意外だつた。

もしかして、兄貴はリリスを脅したのではなく、騙したのか？

どうせ元から母に結婚をせつつかれていたし、この兄ならこのまま人質兼、妻として一石二鳥だと考えるかもしれない。それならばこの先の関係を考えて脅すよりも騙したほうが楽だし、この婚約はリリス視点では幸せなものである可能性が高い。

外面の良い兄が上手いこと言いくるめて彼女をモノにした。そう考えたほうがリリスの笑顔にも納得がいく。

しかしそれはそれでやつぱりリリスが心配だつた。

前の食事の席でキルアの反抗の責任をとるといった彼女だが、現状、責任を感じているのはキルアのほうである。リリスと出会わなくとも、キルアの中には暗殺家業に対する不満が確かにあつたし、それだつて突き詰めると家業の内容ではなくレールの敷かれた人生に対する不満だ。遅かれ早かれ、この不満は爆発していただろうし、となるとキルアがリリスを“巻き込んでしまつた”と表現するほうが正しい。

自分のせいでリリスが兄に目をつけられたのだとしたら、彼女が偽りの愛の言葉に騙されて人生を棒に振ろうとしているのなら、キルアはいくら謝つても足りないくらいである。

しかしながらこうした责任感や罪悪感も、キルアをゾルディック家に縛るには効果的だった。自分のせいで愛のない結婚をするかもしれないリリスを置いて家を出ていけるほど、キルアは自分勝手でもなければ冷血でもない。イルミの策はまさしく、キルアの性格を知り尽くしたうえでのものだつた。

「いつ式をあげるとかは考へてゐるのかしら??」

「うーん、オレも今仕事が立て込んでるからね。落ち着くまで、リリスには待つてもらわないといけないかな」

「まあそうなの!!じゃあその間たっぷりドレスを選びましよう?せつかくの晴れ舞台ですもの!!ああ、そうだわ!リリスさんのお部屋も用意しなくっちゃ!!」

母の主導であれよあれよという間に事が進んでいく。確かに元々うちの家族はリリスを気に入っていたし、唯一難色を示していたイルミが受け入れたのなら、誰も文句はないだろう。

キルアだって、もしリリスが自分の婚約者として家族に受け入れられたなら素直に嬉しかった。もし、イルミの宣言を聞いていなかつたら、思わぬ展開に驚きつつも祝福したかもしれない。

「……待てよ、本当にこれでいいのかよ、リリス」

耐えきれずに漏れた自分の言葉に、これではまるで祝いの席に水を差す邪魔者みたいだと思った。実際、何も知らないカルトはびっくりしたようにこちらを見ているし、キキョウは今更キルアの存在を思い出したようにまああと口に手を当てる。確かに簡潔に状況を表すなら、キルアは兄に婚約者を奪われた形になる。たとえ恋愛感情ではなかつたとしてもリリスと仲が良かつたことはみんなに知られてくるし、キルアが反対したところで他愛ない嫉妬と思われ、せいぜい慰められて終わりだろう。

リリスはキルアの問いに困ったように眉尻を下げてほほ笑んだ。「むしろ、私なんかが姉になつて『ごめんね』答えになつていよいよな気がしたが、彼女の笑顔はやつぱり自然だつた。キルアとの婚約話が持ち上がつた時は、ひたすら浮かない表情で固辞していたというのに。

「……そうかよ」

リリスはきっと騙されてるんだ。

冷静な自分がそう囁いたが、もつと冷静な自分がみつともないぞとあざ笑う。たとえ騙されているのだとしても、リリスはイルミを選んだということだ。キルアとの婚約は嫌がつたくせに、あれだけ敵視されていたくせに、イルミならいいと言うのだ。

そう考えると、キルアはそれ以上何も言えなかつた。本当なら二人きりの時にでも、もう一度リリスの気持ちを確認したほうがいいのか

もしれない。あんな男やめておけ、とイルミの本心を告げてやつたほうがいいのかもしれない。

だが、もしもう一度二人きりの時に問い合わせて、本気で好きなのだと言われたらと思うと気が進まなかつた。真実を告げることは悪戯に彼女を傷つけるだけだろうし、最悪キルアが余計なことをしたと彼女に危害が及ぶかもしれない。仮に彼女が無事だつたとしても、イルミはもうリリスを手放さないだろう。そうなれば仮面夫婦決定だ。知らないほうがいいこともある。

しかし、これだけ心の中で様々な言い訳をしながらも、キルアは自分が行動を起こしたがらない一番の理由をわかつていた。

リリスに心を開いていたからこそ、あっさりと兄貴とくつついたのが衝撃だつたのだ。たとえ自分が彼女に恋愛対象として見られていなかつたとしても、キルアがイルミを苦手としていたことくらいは知つていたはずだ。それなのに、出ていくときも戻つてくるときもりスは何の相談もない。

友達だと思つていたのはキルアのほうだけだつたのか。

「……おめでと」

肉体の痛みにはいくらでも耐えられるのに、心の痛みがこんなにづらいなんて知らなかつた。

19. 潜在的感情

一瞬、どこかのホテルかと見紛うような内装の部屋は、ゾルディック家私用船の一室だった。そこでもうすぐ目的地だからと針の最終チェックに勤しんでいるイルミを見ながら、ヒソカもまたそのうちトランプを補充しないとなあと俗っぽい思考を働かせる。

ヒソカが今ここにいるのは、いつものように突然電話がかかってきて、暇でしょと決めつけられたからだつた。実際、天空闘技場で青い果実探しをしていたくらいで特に忙しくなかつたため、そのままパドキアからベゲロセ連合国へと向かうイルミの船に拾われた形となつてゐる。

もし、実家と仕事先の直線上にヒソカがいなければ、彼がヒソカを誘つたかどうかも怪しい。が、少なくとも着信拒否を解除するくらいには機嫌も直つたのだろうと思われた。

「そういえばさあ、」

リリスの件はどうなつたのか。

世間話ついでに聞き出そうとしたヒソカは、ふと彼の左手に見慣れないリングが嵌められているのを発見する。

「なに？」

「……」

「話しかけておいて、黙るのやめてくれる？」

ヒソカの声掛けに手を止めたイルミは顔を上げ、僅かに眉を寄せる。聞こうと思っていたことよりさらに気になる事柄を見つけてフリーズしたヒソカだが、すぐに衝撃から復帰して質問内容を変えることにした。

「キミ、しばらく会わないうちに結婚したのかい？」

ヒソカは自分で、身だしなみやお洒落に頓着があるほうだと思つてゐる。だからもつと早くに気が付いても良かつたのだが、イルミと結婚という単語が結びつかなかつたのだ。しかも彼のことだからおそらく政略結婚。まさか律儀に指輪をするなんて、思いもよらなかつ

た。

「ああこれ？違うよ、まだ婚約の段階」

イルミはヒソカの視線の先を追うと、なぜか呆れたように息を吐く。どうでもいい話だと言わんばかりに、再び針のチェックを始めた。

「わざわざ婚約指輪までするんだ」

もしかしたらヒソカが知らないだけで、良家では男側も嵌めるのだろうか。そもそも結婚に対する一般的な常識を持ち合わせていてかどうか自信がないヒソカには判断しかねる。しかし、「相手は暗殺一家のお嬢さん？」そう尋ねた瞬間、イルミは面白いことを聞いたみたいに数度瞬きをした。

「ああ、そうだね。ヒソカにはまだ言つてなかつたか」

「うん」

「相手はリリスだよ」

「は……？ リリスって、あのリリスかい？」

「そう」

「……キミ、殺そうとしてたよね？」

記憶の限りでは、リリスのほうもイルミを嫌っていたはずだ。まあこちらは命を狙われていたので無理もないが、そこから二人が婚約というのは飛躍も飛躍。一瞬、全部イルミの妄想なんじゃないかとそら恐ろしくなったくらいだ。

「そーだよ。それが何か？」

そして、ヒソカの疑惑を強めるようにあつさりと肯定してみせたイルミは、馬鹿にしたように鼻を鳴らす。「別に好きじやないと結婚できないってわけでもないだろ」それはまるで夢見る乙女に現実を突きつけてやらんとするような物言いだつた。

「でもあれだけ警戒してたじやないか」

「それはもう解決したんだ。あの女は確かに母さんの知人の娘だったし、能力も危険がないと判断できた。今はキルアのやる気を出させるのに、一役買つてもらつてるよ」

どうやらイルミの中でリリスの問題は終わつたようで、それどころ

かむしろ、今は彼女に利用価値を見出しているらしかった。好きじゃなくとも結婚できる、という意見に対しても反論する気はないものの、果たしてリリスのほうもそう思っているかどうかは怪しい。

確かにゾルディック家の富や遺伝子は魅力的だろうが、彼女と会つた印象ではそういうものに対する野望は一切感じられなかつた。彼女のイルミに対する敵意はあからさまだつたので、今更玉の輿に乗れるからと言つて結婚を了承するようには思えない。「さてはキミ、脅したんだろう？」他の人間に言えばとんでもなく失礼な台詞だつたが、イルミならば問題ない。その証拠に彼は少しも悪びれることなく「あーバレた？」と肩を竦めた。

「流石に命が惜しいみたいで、よく言うこと聞いてくれるよ。お陰で母さんも、オレ達が相思相愛だつてすっかり信じてる。キルはリリスが本気かどうか疑つてるみたいだけど、リリスが”人質”になり得ることは理解してるみたいだしね」

「結局”入れ替わり”なんだつけ？彼女の念。よくそんな念能力者を手元に繋いでおけるね。もしかして、その指輪に秘密があつたりするのかい？」

「ま、タネがわかれば、こつちも色々やりようはあるから」

そう言つたつきり、イルミは黙つて針を片付け始めた。話は終わつたとばかりの雰囲気だが、こつちは肝心なところがわからぬまま消化不良だ。

「……教えてくれないのかい？」

「何を？」

「リリスの念とか、その指輪のこととか。ボクだつて少しは協力しただろう？」

そもそも最初に協力要請してきたのはイルミの方で、その頃は推測混じりとはいえリリスの念についても情報共有されていた。現にヒソカは3日だけでも死体を見張つて彼女の念が”蘇生”でないことまで確かめている。

しかしイルミは金さえ払えば後腐れないと思つていてるのか、ヒソカの言葉をまた鼻で笑つた。

「他人にそう易々と手札を晒すわけないでしょ。リリスは今後うちの人間になる可能性が高いんだし」

「……」

可能性が高い、とは言つたものの、イルミのそれはもはや確定事項のような口ぶりだった。彼のことだから利害関係ありきの割り切った政略結婚くらいはしそうだと思つていたが、まさか嫌われている相手を脅しつけてまで結婚しようとするとは。

いくら母親が歓迎し、弟に対する人質として使えるとしても、自分のことを恨み、隙あらば害をなすか逃げ出すかもしれない人間を生涯の伴侶にするのは厳しい。他人に殺気を向けられて喜ぶようなヒソカでさえも、毎日となるとそんな気の休まらない家には帰りたくないと思つた。

「脅さずに普通に口説けばよかつたのに」

彼女は別にゾルディック家自体に恨みがあるわけでは無いのだ。イルミとは敵対していたが、それはイルミが命を狙つたり、今みたいに脅しつけて言うことを聞かせようとするからだろう。人質としての利用は何も本人に知らせる必要はない。仕事でならハニー・トラップもやつてのけるのだし、今回もそうやつてリリスを籠絡すればよかつた。

けれどもイルミは首を振り、さらさらと長い髪を靡かせる。

「無理だよ、リリスはオレのことがものすごく嫌いみたいだからね」

「だからって脅したりなんかしたら余計だろう？ 実情は人質とはいえ、ほんと家族にする氣があるなら、一旦謝つて関係を築きなおしたほうが楽だとと思うけど」

「だから無理だつて。オレの行動に関係なく、リリスはオレが嫌いなんだよ」

「どうして？」

「さあね。オレにわかるわけないだろ。確かなのは初対面の、まだ何もしないうちから敵意を向けられてたつてことだけ」

「そんなことつてあるのかなあ……」

自らゾルディック家を訪れる人間が人殺しに対する偏見なんてあ

るはずもないし、それを言うならイルミ以外の家族も全員嫌悪するはずだろう。女性特有の“生理的に受け付けない”という線も、イルミの容姿でそこまで毛嫌いされるかというと微妙である。

良くも悪くも、イルミの第一印象は淡白で無味乾燥な男だ。なんの味もしない水を大好物として挙げる人間はいないだろうが、同じく大嫌いなものとしても挙げないだろう。深く付き合つていけば無味だなんて思つた自分がどうかしていたと思うくらい、あくが強くていつもでも喉に残るような男だが、少なくとも第一印象は問題ないはずである。

「そう言われてもね。あるものはあるんだから仕方ないでしょ」

イルミはうんざりしたようにそう吐き捨てたが、仕方ないと言う割にはいつもほどあつけらかんとした雰囲気ではない。

「そんなお先真っ暗な結婚するの、やめといたほうがいいんじゃないかい？」

「いいんだよ、別に好かれたいとも思つてないし。べたべたされるよりよっぽどマシだ」

その様子は、ヒソカから見ると意地になつてるようになしか見えなかつた。だから、もしかして、と思つた疑問をストレートにぶつけてみる。

「逆にキミはリリスのことどう思つてるんだい？」

「嫌いだよ」

即答だった。

まるで彼女に嫌われているのだから、自分もそうでなくてはいけないと思つてゐるかのようないい否定だ。「だから、オレに従わざるを得ないリリスを見ると気分がいいね」イルミは彼女の屈辱の表情でも思い浮かべたのか、薄く笑う。

「へえ……災難だねえ、リリスも」

——キミも。

万感の思いを込めてヒソカは大きく頷く。好きだろうが嫌いだろうが、家族以外に感情を搖さぶられている時点でいつものイルミらしくないのに、彼は自分でそのことに気が付いていないのだ。

しかし、親切にもそのことを指摘してやる義理はヒソカにはない。相手がこの期に及んで情報を出し惜しみするような男なので尚更だ。そうして二人の話が途切れたころ、ちょうど飛行船は着陸態勢に入つたようだつた。

20. 嫌よ嫌よも嫌がらせ

仕事が立て込んでいる、というのは何も結婚を先送りにするためだけの嘘ではなかつた。

リリスが家に来るようになつてからは対策と搜索に時間を割いていたし、いざ婚約者として迎える準備にもそれなりに手間と時間が掛かっている。いい加減、仕事が溜まりに溜まつているということだ。そのためリリスを家族の前で紹介してから、イルミはほとんど家を留守にしていた。もつともその間、世話好きな母親がはりきつてリリスの生活を整えていたので、彼女の部屋は問題なくイルミの隣に用意されている。

留守中の彼女の様子は、ミルキに命じて全て連絡させていた。お陰でイルミの知らないことは何もないし、彼女の考えもおおよそだが読めている。

私用船を降り、久しぶりに我が家に帰ってきたイルミは、この際だから少し忠告しておくかと考へた。そしてそのままリリスの部屋ではなく、屋敷の北側にある図書室へと足を進める。

ミルキの話では、ここ最近リリスは一人の時間を持つと決まって必ず図書室に向かうらしい。花嫁修業と称してキキヨウにあちこち連れまわされるのでそう多くはない時間だが、なにやら熱心に調べ物をしているようなのだ。

音もなく扉を開けたイルミは埃っぽい図書室の空気を吸い込む代わりに、そこにいた彼女の名前を呼んだ。

「やあ、リリス。随分と勉強熱心なんだね」

声をかけられてびくりと肩を跳ねさせた彼女は、ゆっくりとこちらを振り返る。その表情から突然の声掛けに驚いただけではなく、何か疚しいことがあるのは明白だつた。

「……ええ、まあ。私には学がありませんから。花嫁修業の一環ですよ」

「へえ、意外だな。リリスがオレとの結婚に、そんなに乗り気だつたな

「んてね」

「……」

「どう？ それで、神字については何かわかつた？」

腕を組み、後ろの扉にもたれかかるようにして尋ねれば、リリスは悔しそうな表情になる。それがものすごく気持ちよかつた。攻守交代とは言つたものの、リリスがイルミに勝てるわけがない。解放されなければ自分を殺してみろと焚きつけたが、そんなことが無理なのは初めからわかつたうえで言つていた。リリスの嫌がる顔を見るのが、楽しくて仕方がなかつたのだ。

「相変わらず、どうしようもないほど性格が悪いですね」

「どうだろう。お互い様じやないかな。リリスだつて、オレを出し抜こうとしてたんでしょ？」

そもそもその実力差があるうえに念も使えないとなつては、彼女が指輪の解除を優先するのも無理からぬ話だ。しかし、付け焼刃の知識でどうにかできるほど、神字というのは簡単なものではない。

イルミも実際に作つてみて、できればもう一度とやりたくないと思つていた。オーラをスイッチに効果を起動、というだけなら簡単だが、そこへ細かな設定を追加すると途端に組み込む文字とデザインが複雑化する。効果の加減も難しいし、さくつと殺して次々行きたいイルミとしては、今後仕事に取り入れるメリットもないだろう。

イルミの指摘にリリスは返事をしなかつたが、どうやら開き直つたらしい。こちらの存在を無視して、元のように本へ視線を落とした。「ところで、前から気になつてたんだけど、いい加減その敬語もやめない？ 名前も呼び捨てでいい。婚約者なのに不自然だよ」

「……婚約者でも、ご両親の前でのさん付けはむしろ普通だと思いますが」

「キル達には砕けた口調なんだから、今更それは道理が通らないね」

「……」

リリスは相変わらず都合が悪くなると返事をしない。だが、別にそれはどうでもよかつた。そうやつて彼女を黙らせてやりこめているだけでも、婚約以前は考えられなかつたことだ。言い返したいだろう

「それでも、婚約者でも、ご両親の前でのさん付けはむしろ普通だと思いますが」

に言い返せない、という状況は彼女にとつてかなりのストレスだろう。

「そうだ、これから簡単に食事をとろうと思つてゐるんだけど、リリスも来なよ」

イルミは更に自分勝手に話を進めると、近づいて彼女の読んでいた本を無理矢理閉じた。

「……私は遠慮させていただきます」

敬語を使うなという話は、早速無かつたことにされているらしい。他の家族の前では仲良く振舞わなければならぬので、リリスは特にイルミが含まれた家族団らんの場を嫌がつた。

しかし嫌がるからこそその提案である。本を取り戻そうした彼女の手を掴み、イルミはこれ見よがしに指輪を撫でて見せた。

「言い方が悪かつたのかな、これはお誘いじゃないよ」

命令だ、と圧をかければ、彼女の身体に緊張が走るのが手に取るようになる。デモンストレーションのときに味わつた苦痛を、彼女はまだちゃんと覚えているらしい。

「……わかった

しかし、頷いて席を立つた彼女はその態度ほど素直な瞳をしていかつた。恐怖と嫌悪を色濃く宿しながら、それでもやつぱりイルミに対する憎しみが失われてはいない。それを見ていると愉快な気持ちになつてしまふのは、我ながらどうかしているとしか思えなかつた。



正直な話、リリスの本心を確認するチャンスは今まで腐るほどあつた。

一番の障壁である兄はずつと仕事で各地を飛び回つていたし、親父にも認められたりリリスは、もう正式な婚約者としてゾルディック家に部屋を与えられている。これまでのようにつ来るかわからない彼女の訪問を待つて、数時間で帰つてしまふ彼女に時間を合わせる必要は全くなかったのだ。

しかし、キルアはそうした状況下にあっても、結局リリスの気持ちを確かめられずに入った。それどころかむしろ、前のように彼女にべつたりくつついで時を過ごすこともなく、距離を置いて生活しているくらいだ。

それを勝手な執事たちは、イルミ様にリリス様を取られて拗ねてらつしやるのだと、逆に義姉として認めたからこそ、節度を持った対応をされているのだと好き勝手に言っている。誰もキルアの本当の気持ちをわからうとはしないし、キキョウやカルトが兄の祝い事にはしゃげばはしゃぐほど、それに馴染めないキルアは孤立を深めていた。

「おい、キル。ちょうどいいところに。お前もちよつとつき合えよ」「は？なんだよ、豚くんが部屋から出てるなんて珍しいじやん」

自主訓練を終えて部屋に戻る途中の廊下で、ミルキが巨体を揺らしながら近づいてくる。ほんのちょっと走つただけなのに次兄は荒い息を吐いていて、なんでこいつの体型が許されてるんだろう、と今更な疑問をぼんやり抱いた。

「イル兄が帰ってきたんだよ。で、ご飯食べるから付き合えって」「それを聞いて誰が行くかよ。だいたい帰つてきたばつかのイル兄はともかく、俺たちはさつき飯食つただろ」

「夕食はな、夜食はまだだろ！俺だつていつもは部屋で食つてるよ。でもイル兄が呼んでんだ。俺だけ呼ばれてキルが呼ばれないなんておかしいだろ！」

「意味わかんねえ、どういう理論だよ」「とにかくいいからお前も来いって！」

「離せよ、俺は行かねーって」

純粹な戦闘では負ける気などしないが、こうした下らないやり取りだと、体格差のあるミルキを振り払うのは難しい。強引に引っ張られてよろけたキルアがそろそろ本気で抵抗するかと足に力を入れたところで、ミルキは思いもよらないことを口にした。

「お前だつて、ホントはリリスのこと心配なんだろ！」

「……は？」

思わず驚きに目を見開けば、ミルキの引つ張る力が弱まる。「……なんでそこでリリスが出てくんなど」キルアも抵抗するのをやめ、兄のほうへと向き直った。

「久々のイル兄の帰宅なんだ。俺が呼ばれて、婚約者のリリスが同席しないわけないだろ」

「……あつそ、そりやお熱いことで」

「キル、お前それ、本気で言つてんのか？」

だとしたら、女心をなに一つわかつてねえぞ」

コンピュータとしか恋愛したことなさそうな兄に、女心について偉そうに語られるのは心外だ。しかし反論できるほどキルアだつて女心に詳しいわけではない。そもそも恋愛なんてする余裕は、この家の子供にはないのだから。

「あの一人、皆の前ではそこと仲良く振舞つてるけど、二人のときでも嫌味なくらい敬語だし結構ピリピリしてんぞ。イル兄からも留守中リリスの監視を頼まれてたし、相思相愛なんて笑えない冗談にもほどがあるぜ」

「……どういうことだよ。じゃあなんでリリスは、「わかるだろ！あの兄貴のやりそなことくらい」

「……」

相手を意のままに動かすために、騙すよりも簡単な方法はいくらでもある。実際、キルアは兄にそれをやられた。

——リリスを殺されたくなかったら、オレの言うことを聞いておいたほうがいい

「……」

リリスが何を理由に脅されているのかはわからない。しかし脅す兄のほうは容易に想像がついたため、冷たいものが背筋を走る。

もしも、彼女が騙されているだけなら、キルアの暴露はリリスを傷つけるだけだが、脅されているのなら話は別だ。どうにかして彼女を助けなければいけない。キルアが巻き込んでしまつたリリスを、このままになんかしておけない。

「ま、もうリリスがどうなろうが知つたこつちやねーって言うんなら無理に誘わねえよ。でもうざいからいつまでも俺は不幸ですぐみたいな顔してんな

「はあっ!?誰がそんな……！」

反論しかけて、キルアはしていたかもしないとぐっと押し黙った。少なくとも、自分が傷ついているということだけに目を向けて、リリスの様子に気を配る余裕がなかつたのは確かだ。

「……わかつた、俺も行くよ」

行つて今度こそ、リリスにちゃんと向き合おう。

キルアはそう決心すると、見た目ほど足音のしない兄の後ろへ続くこととした。

21. 遠回りな感情

「さつきの話、冗談よね？」

食堂を出て一人きりになつた瞬間、珍しいことにリリスのほうが先に口を開く。扉一枚隔てた向こうに家族がいる状況で話をする気がないイルミは、彼女の問いを無視して自室のほうへ歩き始めた。

「ねえ、」

「少しくらい待ちなよ」

「……」

リリスは不服そうな顔をしたが、同時に不安そうである。

イルミは渋々といった様子で隣を歩く彼女を一瞥すると、先ほどの食事の席での会話を思い出していた。

「おほほほ!! イルがいな間、リリスさんつたらすぐ頑張つてらつしやつたのよ!! 自らハンデを課してうちの訓練に挑戦するだなんて、やつぱり愛の力かしら??」
「そなんだ。オレも早くリリスに会いたかつたよ」
「あらあら!! まあまあ!!」

リリスに演技を強いるために、あえて食事についてはミルキにも声をかけた。キキョウのほうはおそらく呼ばなくとも来るだろうとは思つていたが、一つ、キルアが参加したのだけは意外だつた。別に、参加してもろくに喋ることもなくちよつとしたつまみを口にしているくらいだが、先ほどからリリスのほうをちらちらと窺つている。

そして予想外にもキルアがいたせいで、キキョウはリリスが念を遣わないことについて簡単に『ハンデ』と表現した。もちろん本気はイルミの指輪で使用を制限されているのだが、そうは言えないリリスがこれも修行の一環だと嘘をついたらしい。それに乗つかる形でイルミが心にもない台詞を言つてのけると、母はそれはそれは嬉しそうにはしゃいだ。

「まさかイルとリリスさんがこんなにも上手くいってくれるなんて！」

私とつても幸せだわ！イルつたらどんなにお見合いを勧めても全然見向きもしてくれないし、もしかして女性に興味がないのかしらつてちよつと疑つていたくらいなのよ!!」

「……別に、忙しかつただけだよ」

思いがけず知りたくなかった母親の勘ぐりを聞かされて動搖したイルミだつたが、すぐさま気を取り直してこれを利用することにする。「でも、お見合いなんてしなくてよかつたよ。そのお陰でリリスとこうして一緒にいられるんだからね」こうした言動も、彼女にとつてはストレスでしかないだろう。よくもそんな嘘を！と発狂しないのは流石だが、確実にリリスは苛立つている。

「やめてよ、恥ずかしい」

無理してそうやって照れた仕草なんてしているのが、酷く滑稽だつた。思わず緩みそうになる口元を意識してきゅっと引き締める。実際、この茶番に喜んでいるのはキキヨウくらいのもので、弟たちは二人して遠い目になつていた。

「いいわねえ、私もパパと出会つた頃を思い出すわ！！あ、そういうえばあなた達はいつ籍を入れるの？式のほうの準備は完璧なんだけれど、記念日は一人で決めたいでしょう？もちろん、リリスさんの戸籍はこつちでうまく作つておくわ」

「そうだね。そろそろ仕事も片付いてきたし……いつがいい？リリス」

意地悪な感情を押し殺して「ぐぐぐく自然な流れで話を振つてやれば、リリスは珍しく顔を引きつらせる。これまでムカつくくらいに役者だつた彼女だが、こればっかりはどうにも取り繕えなかつたらしい。指輪を見せつけるように顔の前で指を組めば、ようやく「そうだね……」と震えた声を返してきた。

「まだ花嫁修業が終わつてないから、それが終わつたらにしようかな」「それつてさあ、いつ終わるの？」

「……どうだろう。ゾルディック家の嫁としてどこへ出ても恥ずかしくないようになつたから」

「別にどこへ出る機会もないと思うけど」

「あはは、いまどき専業主婦希望なんて流行らないよ」

リリスは苦笑いをして誤魔化そうとしているようだつたが、そのくせ瞳はイルミをしつかりと睨みつけていた。彼女が怒つているのは明らかで、イルミはそれを綺麗に無視した。

「そうかな、オレはリリスに家を守つてほしいと思つてるけど」

「まあまあ！イルミが焦る気持ちもわかるけれど、リリスさんの心意気も素敵だわ！男なら妻の可愛い我儘くらい聞いてあげるものよ!!」

「まあ母さんがそう言うなら仕方ないね」

正直な話、イルミとしては結婚の時期がいつになろうとどうでもよかつた。これはあくまで嫌がらせのパフォーマンスなので、リリスに苦痛を与えるればそれでいい。

だから最後にはあつさりと引き下がつて見せたのだったが、それでもリリスは随分と危機感を抱いたらしかつた。

「……今までくればもういいでしよう」

いつもは絶対に来ないイルミの部屋までついてきて、許可も得ずに入つてくる。扉が閉まつたことを確認した彼女は、さつそく話の続きをとばかりに詰め寄つてきた。

「結婚つて、まさか本気じやないでしようね」

声量こそ抑えているものの、リリスの語氣は普段に比べ荒い。敬語をやめろと言つたのはイルミだつたが、そうでなくとも今の彼女は“素”的態度だろう。「婚約しておいて、今更何言つてるのさ」イルミにはそれが愉快でたまらなかつた。彼女のペースを乱せたことが、彼女が自分のせいで苛立つているのがたまらなくおかしかつた。

「だつて、これはキルアに後を継がせるためのお芝居で……！」

「それは言うけどさ、じゃアリリスはキルのために何か努力したの？お前がやつていたことといえば、その指輪の解除法を探していた、それくらいだろう？」

そつちが逃げるつもりなら、こつちも手綱を締めざるを得ないよね」

気まずいからか何なのか、リリスがキルアとの接触を避けているの

は知っている。キルアの方も何かを感じ取っているのか、前のようにリリスにべつたりつきまとうようなことはなかつた。

つまり、彼女は結局ここへ来てからろくに仕事をしていないことになる。イルミに凶星を突かれたりリリスはさつと頬を引きつらせた。「じやあキルアのために、好きでもない私と結婚する気? ちよつと自己犠牲が過ぎるんじゃないの?」

「どのみちオレは家の為になる相手と結婚するつもりだつたからね」考えてみれば下手に後ろ盾のある暗殺一家の女をもらうより、身寄りもなく生かすも殺すもイルミ次第のリリスのほうが都合がいい。家同士の結婚というのは、結ぶのは簡単でも邪魔になつた時が厄介だからだ。

「あなた……やつぱり頭おかしい」

イルミの発言を聞いたリリスはようやく本気だとわかつたらしく、先ほどまでの勢いが嘘のように後ずさりを始める。しかし、今度は逆にイルミが距離を詰め、彼女の背は扉に打ち付けられた。

「ああそう。じやあその頭のおかしい奴と結婚したくなかったせいぜい頑張るんだね」

「……」

「それともほんとは乗り気だつたりするの? こうやつて、のこのこ男の部屋にやつて来るくらいなんだしさ」

煽るようにぐいと顔を近づけて耳元で囁いてやると、間髪入れずリリスの平手が飛んでくる。それを難なく受け止めたイルミは薄く笑つた。

「へえ、案外ウブなんだ」

「最っ低!」

「なんとでもいいなよ」

「元から嫌われているのは百も承知だ。これ以上嫌われたところで痛くもかゆくもない。」

リリスはイルミに掴まれた腕を振り払うと、逃げるよう部屋を飛び出していく。ちょっとからかつたくらいで大げさな。殺されかけても逃げなかつたくせに変な女だ。

「さて、どうなるかな」



長い廊下を歩きながら、キルアは先程の出来事を思い返していた。

いつも通りテンションの高い母親が話題に出した入籍の話。それ自体は兄とリリスが婚約している現状から考えて、別におかしなことではない。

けれどもやはり、あの時のリリスの表情が引っかかる。今回初めて声も僅かながらに震えていたし、ミルキの言つた通りイルミに脅されているのではないだろうか。

キルアは今更ながらに深く後悔していた。別にイルミの本心を暴露せども、リリスの気持ちを確かめるくらいならばもつと早くにできたことだ。それなのに勝手に一人で傷ついて、彼女のことを避けていた自分が情けない。

もしもこれまでリリスが不本意な状況にあつたのだとしたら、それをずっと無視し続けていたキルアの方がよほど友達甲斐のない人間かもしぬれなかつた。

——殺し屋に友達なんていらない。邪魔なだけだから。

何度も聞かされた兄の言葉が、嫌でも脳裏をよぎる。それを聞くたびに反発心こそ抱いたが、本当は大切な物の存在が判断を鈍らせるという主張の正しさも理解はしているのだ。だが、キルアが耐え難いと思うのは、大切な誰かのせいで自分の足が引っ張られることではない。それは自分が強くなれば、おのずと解決する問題だろう。

それよりも本当に恐ろしいのは、

——お前に友達をつくる資格はない。必要もない。

自分が窮地に陥った時、その大切な誰かを見捨ててしまうことだ。誰かと仲良くなる資格もないほど、残酷で無機質な人間であると突き付けられることだ。

結局キルアは自分が一番信用できなかつた。圧倒的に不利な状況で、助けを求める大事な人の手を取れるかというと正直自信がない。

それは常に勝算のある戦いを求められる暗殺者ならではの癖と言え
ばそうだが、キルアはそれを否定したい。

自分はそんな人間じやないと、誰かに向かつて証明したかった。
お前は殺しのための機械でないと、誰かに認めてほしかった。

そしてそうやって暗殺以外でキルアを認めてくれたのは、リリスが初めてだつたのだ。この家の人間はキルアの能力や才能を、ゾルディック始まつて以来の逸材だと誉めそやす。けれどもキルアが欲しいのは暗殺一家の後継者としての承認ではない。ただのキルアとして、暗殺のための機械ではないただの一人の少年として、ごくごく普通に認めてほしかつた。

それはもしかすると贅沢な願いだつたのかもしれないが、同時に根源的な願いでもあつた。

だからこそ――

キルアは自分がここまでリリスを放つていた事実が許せなかつた。今更もう謝つても遅いのかもしれない。話を聞いたところで自分にできることなどたかが知れているかもしれない。

それでも今日こそはちゃんと向き合おうと思つて、キルアはリリスの部屋を目指した。

「最っ低！」

しかしキルアが彼女の部屋をノックをしようとした瞬間、突然隣の部屋の扉が開いてリリスが廊下へ飛び出してくる。彼女の隣は兄イルミの部屋だ。驚いてキルアが固まつていると、こちらの存在に気付いたリリスもハツとした表情になる。

「キルア……」

リリスは何か言い訳をしたそうにぱくぱくと口を動かしたが、結局キルアの名を呼んだつきり黙り込んでしまつた。キルアもキルアで、思いがけない展開に思考停止してしまつた。リリスのただならぬ様子に圧倒され、咄嗟に言葉が出てこなかつた。

「……イル兄となにかあつたのか」

そしてしばらく見つめあつたのち、ようやく絞り出した質問はこの

場では答えづらい内容だった。

「……悪い、場所を移そう」

「うん……」

と言つても、行き先はキルアの部屋くらいしかない。正直キルアの部屋だからといってどのくらい安全かはわからないが、イルミと物理的に距離をとれるだけで気分的にも楽だろう。

キルアはリリスが頷いてくれたことに内心ほつとしていた。まだ氣まずい雰囲気ながらも、今は黙つて足を進める。

自室に到着して扉を閉めると、キルアはどつかりとクツショーンの上に腰を下ろした。

「で、何があつたんだよ」

当初聞こうと思っていた内容は別だが、あの様子を見るにリリスが兄に惚れているという線は薄い。それならばせめて話しやすいところから、と思つて話題を切りだしたが、彼女は二人きりになつても黙り込んだままだつた。

「なんで黙つてんだよ」

「……ごめん、なんでもないの」

「あんなの見せられて、なんでもないが通用するわけないだろ」

「……」

「リリス、ほんとにイル兄と結婚するのか」

「……」

「ほんとは嫌なんだろ。リリス、脅されてるんじゃねーの」

「私は……」

畳みかけるように言葉を重ねれば、初めてリリスが口を開きかかる。しかし結局話そうとしては口を閉ざしてしまい、キルアは苛立ちに唇をゆがめた。

「ハ、俺じや頼りにならないつてわけね」

確かにキルアは無力かもしれない。でも、相談くらいはしてくれてもいいのではないか。この家を訪ねてこないと決めた時もそうだ。リリスはいつも何も言つてくれない。「俺は、リリスが俺のせいでもこんな目にあつてんのかもつて、それで、「怒りか悲しみか、区別のつか

ない感情がキルアを支配する。必死で冷静になろうとしたが、残念ながら兄やリリスほどキルアはポーカーフェイスが得意ではなかつた。

「キルア……」

「クソ、なんなんだよ。リリスも兄貴も、俺のことガキ扱いしてさ。それでなんでもかんでも勝手に決めて……俺だつて、」

「キルア、」

目の前のリリスがどんどん困ったような表情になる。そうだ、こんなことくらいで取り乱すから、リリスはキルアを頼ろうとしないのだ。頭ではそれがわかっているのに、どうしても感情が高ぶる。

悔しい。頼つてほしい。認めてほしい。

それが突き詰めれば自分本位な思いだとしても、キルアはリリスに頼つてほしかつた。

「ごめん……」

不意に柔らかな手が、固く握りしめたキルアの拳へ添えられる。向かい合つたりリリスは相変わらず困つたように眉を寄せていたが、キルアは彼女の瞳の中に自分と同じ後悔の色を見つけた。「ほんとにごめん。キルアに何も話さなくつてごめん……」彼女はいつもそうやって謝つてばかりだ。けれども今回は謝るだけではなくて、ようやく話してくれる気になつたようだつた。

「ほんとはキルアの言う通りなの……この結婚は私の望みじゃない」

「じゃあやつぱり、俺のせいなのか？」

「口実はね。でもきつとここれは私への嫌がらせだよ。キルアのせいじやない」

「いや、イル兄が家族のこと以外でこんな手間をかけるはずないんだ。絶対俺のせいだ……リリス、俺の方こそすつとリリスを放つておいて悪かつた」

リリスは氣を遣つてそう言つてくれたが、あの兄の家に対する執着はキルアが一番よくわかっている。キルアさえ関わらなければ、リリスがこれほどまでに害を被ることはなかつただろう。

イルミはリリスを死なせたくなかったら大人しくしていろと言つ

たが、実際今ではキキョウの目もある。殺すとなると色々面倒だろうし、とにかくキルアの方に兄の意識を向けなければならぬ。リリスがキルアの足枷には使えないと思わせて、興味を失わさせるのだ。

キルアはそこまで考えると、決意を固めるようくつくりと息を吐いた。

「リリス、俺、家を出るよ」

「えっ？」

「前から考えてたことなんだ、こんな家いつか出てつてやるつて。リリスが人質にならぬってわかれれば、兄貴だつて流石に諦めるだろ」「でも、家出なんて……」

「別に六歳のときには天空闘技場で一人で過ごしてたし、今更どうつてことねーよ」

それよりも問題は出るときの方だ。父や祖父、長兄が留守というのは最低ライン。あとは母親と次男くらいだが、この二人程度なら一時的に動きを止められる自信がある。家族を抑え込むことができれば、基本的に執事は何も手出しができないはずだ。

しかし脳内で計画を立て始めたキルアに対しても、ストップをかけたのは他ならぬリリスだつた。

「でもそんなことしたら、キキョウさんが悲しむよ。家族を悲しませるのはよくない」

「はあ!? そんなのどうだつていいだろ」

「よくない。だつて、キルアのことだから説得じやなくて力づくでつてことでしよう」

「お前さ、うちの家族見て説得でなんとかなるつて思うか?」「それは……」

既に脅されているくせに、随分と甘いことを言う。とはいへ流石に説得できる図が思い浮かばなかつたのか、リリスはあからさまに話題を変えた。

「キルアは、暗殺家業が嫌なの?」

「……なんだよその質問。別に好んでやるもんでもねーだろ」

「それはそうだけど、代々続いてきたお仕事だしさ。こないだはシル

バさんの前で嫌いやないって言つてたじやん」

「……」

確かに本音を言えば、殺し自体が嫌なわけではない。キルアは父親のことも尊敬している。しかし尊敬しているからといって、全て盲目的に従うというのはおかしいと思うのだ。

「……俺は、ただレールを敷かれた人生が嫌なんだ。あれするなこれするなって口うるせーし」

「それは家族だからだよ。キルアの為を思つて、」

「あーもう！なんなんだよ、家族家族つて！リリスまでイル兄みたいなこと言うのかよ！」

家族だつたら何をしてもいいのか。恩着せがましく束縛して、思い通りに動かそうとするなら人形遊びの延長だ。「リリスにはわからんねーんだよ！家族なんて鬱陶しいだけだ！」期待が重いとかそういう次元の話じゃない。家族を大切にしきだなんてありきたりな説教は、リリスの口から聞きたくなかった。

「そう、だね……私にはわからないや」

「とにかく俺はこの家を出る。止めても無駄だぜ」

「……わかつた」

キルアの意思是固かつた。元から家出については考えていたことだし、何よりリリスを兄の手から救うために自分ができる方法はこれしかないと信じていたからだ。頭の中は既に計画のことでいっぱいである、それ以外のこと気に配る余裕もない。そもそもいくら気まずい沈黙が降りようと、これはリリスを救う為の計画でもある。少なくともキルアはそう思っている。

だからこそ、目の前のリリスが傷ついた表情をしていることには、少しも気が付けなかつたのだつた。

22. 保険

リリスがイルミの部屋に来るのは正真正銘これが二回目であったが、今回ばかりは彼女の意思ではなかつた。その証拠に部屋には重苦しい雰囲気が立ち込め、先ほどからリリスの警戒が痛いほどに伝わつてくる。

イルミはこつこつ、とあえて足音を鳴らすと、だだつ広い部屋の中をぐるりと一周してみせた。

「キルはどうやらハンター試験を受けに行つたらしくてね」

まるで世間話でもするような調子で紡がれた言葉に、リリスは何の反応も示さない。

驚かないというのはつまりそういうことだ。もう少しげざとらしい演技でもするかと思ったが、さすがに無駄だとわかっているらしい。

リリスの正面で足を止めたイルミは、少し身をかがめて彼女と視線を合わせた。

「そそのかしたのはお前かい？それとも、オレに脅されてるんだつてとうとう泣きついたの？」

リリスの性格上、キルアどころか誰にも頼らないであろうことはわかりきつている。だからおそらくこれはキルアの独断。

「……そうだとしたらなに？人質として役立たずの私を殺す？」

だが、健気にもリリスはキルアを庇う気でいるのか、まっすぐにこちらを睨み返してきた。彼女の瞳に自分が映つていてるのがわかり、思わず口角が上がりそうになる。

「ううん、チャンスをあげる」

「は？」

「実はオレも偶然、仕事の関係上ライセンスが必要でき、ハンター試験を受けに行くんだよね」

実際、仕事で資格がいるのは嘘ではなかつた。だが、本当の本当に偶然かというとそうでもない。

入籍の話が出てリリスが取り乱したあの日、イルミはキルアがこち

らに向かってきていたことに気が付いていた。その後二人がどこかに行つたのもわかつたし、リリスのあの様子からしてキルアに現状を話したであろうことも予想がつく。

ではリリスが脅されているとわかつたら、キルアならどうするか。責任を感じて大人しく訓練に集中するような性格なら、家族の誰もここまで手を焼かなかつただろう。

キルアならば必ず行動する。おそらく、凶を買って出る。正面から立ち向かつてリリスを庇うことができないのなら、家を出るなりなんなりしてイルミの注意を自らに引き付けることくらいしかできないはずだ。

そしてここで、ミルキが記録として残しておいたリリスの映像や音声が生きてくる。イルミが異変に気付き、本格的に対処を始めるまでの数か月間、その間に距離を縮めたらしいキルアとリリスの会話に出てきた場所など限られていた。特に、キルアが興味を持ちそうな場所、自活するにあたつて必要な物が手に入る場所、そして最も有益な情報だつたのが家出をした時期。

ここまで揃えば、わざわざ答え合わせはするまでもなかつた。

——ザバン市。

確かな筋の情報では、そこが今年のハンター試験の会場となるらしい。

全てのスケジュールが完璧に管理されているゾルデイツク家において、偶然資格を持つていなかつたイルミに要資格の仕事が回つてくるはずもない。このタイミングで資格を取るつもりで、イルミ自らミルキに調整するように言つたのだ。

全てはキルアのハンター試験とぶつけるために。

いつか絶対に逃げ出すだろうと思つていた弟の心を、徹底的に折るために。

そしてイルミはついでにキルアとリリスの仲も割くことができればよい、と考えていた。何も訓練に集中させることだけがリリスの役割ではないのだ。キルアの友情への希望をぶち壊せるだけで、実に十

分な働きと言える。

だからこそ失敗を取り戻すチャンスとして、こんな提案をした。

「リリスには一緒に試験を受けに来てもらうよ。それがお前にできる責任の取り方だ」

キキョウからはキルアの様子をそれとなく見てくるようにと頼まれたが、実質それは連れ戻せということだろう。

相手が来る場所がわかっている以上、この捕獲は実に簡単なミッショーンだつた。しかし一方で、万一、試験中にイルミの存在がバレた場合、キルアが試験を棄権して逃亡を図る可能性がある。また、ハンター試験の内容は試験官に大きく左右されるので、まだ発展途上のキルアが途中で落ちてしまう可能性だつてないとは言えなかつた。

「私が行つてどうするの。説得なんて聞かないよ、あの子」

「ただの監視さ。さつきも言つたけど、オレは仕事の都合上、試験を最後まで受けたい。お前はキルアが棄権したり脱落したりしたとき用の保険だよ。だからもちろん、オレが参加していることをキルに伝えてはいけない。わかつたね？」

「……キルアを裏切つて、スペイになれつてこと？」

「へえ、随分と物わかりが良くなつたじゃないか。

そうだよ。試験中、オレがいつもキルの側にいられるとは限らない。お前なら警戒されずに近づけるし、最悪キルが試験を降りたらお前も降りて監視を続けろ」

たとえ試験会場でリリスに会つても、脅されているリリスの立場を考えるキルアは邪魔にはしない。それどころかせつかく家から出られたのだからと、リリスと逃げることを選ぶだろう。

リリスにはライセンスが逃亡に役立つと吹き込ませ、キルアに試験を続けさせる。仮にキルアが脱落した場合、リリスも共に脱落させ、キルアの監視に当たらせる。あとはイルミの合格が確定した時点できルアを連れて帰ればよかつた。我ながらなかなかいい計画を立てたものだと思う。

イルミの話を珍しくじつと聞いていたリリスは、ややあつて仄暗い瞳でこちらを見上げた。

「……嫌だつて言つたら殺してくれるの？」

「その気になれば念を遣つて自殺もできるでしょ。死ぬまでかなりの苦痛に耐える必要はあるけどね」

「……」

「それにしても、リリスがキルのことをそこまで想ってくれるなんて意外だな。自己犠牲が過ぎるのはそつちなんじやないの？ 家族でもないのにさー」

初めは死ぬのが怖いから言うことを聞いているのだとばかり思つていたが、どうやら理由はそれだけではないらしい。この家にやつてきたときから、リリスはずつとイルミ以外の家族のことを愛している。それがなぜなのかはわからなかつたが、イルミにとつて都合がいいことに変わりはなかつた。

「でもリリスが自殺なんてしたら、キルはそれこそ責任を感じるだろうね。あれは纖細などころがあるから心を壊してしまふかもしけないよ。

ま、どのみちお前がキルを裏切る形になるから、オレはどつちだつていいんだけどね」

「……」

イルミがそうやつて煽つても、リリスは何も返事をしなかつた。けれどもイルミには、彼女が自殺なんてしないだらうという自信があつた。

リリスは短絡的に命を捨てる女ではない。メリットや目的があれば話は別だらうが、今みたいに損でしかない状況なら苦い肝を嘗めてでも好機を待つはずだ。

「それじゃあ出発は2週間後だよ。せいぜい頑張つてね」

「……わかつた」

やはり彼女と自分はよく似ていると思う。

イルミはリリスの返事に満足すると、いつものように仕事へ向かつた。



ここはザバン市ツバシ町2—5—10。厳密言えばその地下なのだが、少なくとも定食屋“めしどころゴハン”の住所はそうである。

今年のハンター試験会場がザバン市であるというのは、そこの頭を持つ者なら誰でも手に入れられる情報であった。これは家出後に知ったことだが、二丁寧にハンター試験応募カードというものがもらえるらしい。しかもキルアのような年齢の子供が受ける為には誰から大人の同意印が必要であり、これを用意するには少しばかり手間もかかった。

しかし応募カードと大まかな場所の情報を手にしても、実際の会場にたどり着くのは容易ではない。ここへ来るまでの道のりにも既にいくつか試されるような機会があり、受験者の動機や知性、判断力によつて事前にある程度ふるいにかけているようである。

キルアも先ほど、ひつたくりに遭つた老婆から一枚のメモを受け取つたばかりだつた。彼女の身のこなしは明らかに普通の老婆のそれではなかつたので、正直キルアが助ける必要はないようと思われた。

が、これも試験の一環かもしれない。そう思つて犯人の男を捉えたところ、見事ビンゴだつたというわけである。その後、足を痛めたといふ老婆を背負つてなんだかんだと良いように使われたり、素性を探られたりもしたが、キルアはどうとう試験会場の正確な場所とそこへ入るための“合言葉”を手に入れたのだつた。

「ハンター試験会場へようこそ。こちらが受験番号の札になります」
豆のような姿かたちの男から99番のプレートを受け取つたキルアは、それをわかりやすく左胸につけた。それから期待込めて周囲にいる男たちを見回したが、すぐになんだか聞いていたよりもくだらなそうだ、と拍子抜けする。

リリスがあれだけ難関だと言つていた試験なので、てつきりもつとレベルの高い受験者ばかりなのかと思つていたのだ。唯一、44番のピエロのような恰好をした男からは嫌なものを感じたが、後は時折家にやつてくる賞金狙いの奴らと同じレベルかそれ以下だ。楽な分に

はいいはずなのだが、どうしてもがつかりした気持ちは隠せない。

リリスとは半ば喧嘩別れのような形で家を出てしまったキルアだつたが、ハンター試験を受けに来たのには二つほど理由があつただ。

一つはこれから自活するにあたつて必要な金と身分。金に関しては、過去過ごした天空闘技場でも良かつたのだが、あそこは一般客向けにも試合が公開されているし下手に有名になれば簡単に足がついてしまう。かといって暗殺家業が嫌で家出した以上殺しで金を稼ぐのも本末転倒だし、世間的にはただの12歳の子供でしかないキルアが普通に働くのは難しい。そういうわけでハンターライセンスはキルアにとつて好都合だつた。

そしてもう一つは、リリスに認めてほしかつたからだ。彼女が難関だと言つていた資格をとれば、彼女も少しさキルアを頼る気になるだろう。未だ具体的な案は浮かんでいなかつたものの、キルアはリリスをあの兄から助けたかつた。

だからこの試験に合格することは、あの家から自分とリリスを解放するための第一歩なのである。

「やあ、見ない顔だね。ハンター試験は初めてかい？」

キルアが辺りを見回していると、先ほどからずっとこちらを見ていた男が話しかけてくる。今のところ子供の受験者はキルア一人だったが、どうやら男が話しかけてきたのは物珍しさからだけではないらしい。「……なんだよ、おつさん」殺氣も込めずに軽く睨んでやれば、缶ジュースを片手に持つていた男はぐつ、と詰まつた。

「お、おつ！……コホン、まあいい。オレはトンパ。もう35回も試験を受けてる、いわばベテラン受験者つてやつさ。わからないことがあれば何でも聞いてくれ」

「へえ、じゃあ聞くけど、なんで35回もやつてて受からないワケ？」
「つ、そ、それはほら、それだけ試験が難関だつてことだよ。合格率は数10万分の1。君みたいなルーキーは3年に1人受かればいいほう

うさ」

「ふうん」

「ま、命さえあれば俺にみたいに何度も受けられる。これはお近づきのしるしさ、互いの健闘を祈つてカンパイしよう」

「さんきゅー」

こいつの目的は結局のところこれを飲ませることだろう。そこのらの毒なら効かない自信のあるキルアはありがたくジュースで喉を潤したが、同時にあまりのレベルの低さに辟易する一方だつた。

その後まだ色々とこちらを探ろうとしてくるトンパをかわして、キルアはひと眠りしようとする。そんなとき、エレベーターが降りてきてまた受験者がやつてきた。

「この気配……」

驚いて入口の方を見れば、紛れもなくリリスである。不安そうにきよろきよろと周りを見回しており、早速あのトンパとかいう男が話しかけに行くのが見えた。「やあ、見ない顔だね。ハンター試験は初めてかい?」下手なナンパでももう少しひねりを加えるだろうに、定期文を口にしたトンパを押しのけるようにしてキルアは素早く前に進み出た。

「あー、こいつ俺の知り合いだから。そのジュース渡しどくし、あつち行つててくんない? おっさん」

「な!俺はおっさんじゃなくてトンパだつて」「わかつたわかつた、ほら寄越せつて」

強引にトンパの手からジュースをもぎ取り、ついでに睨みをきかせれば憤つていたトンパもそそくさと逃げ出す。ほんとにくだらない。35回も受けて落ちるのも納得の情けなさだ。

リリスはキルアを見て表情を明るくしたのも束の間、急に神妙そうな表情になつた。

「あの……キルア、」

「いいつて、なんでリリスがここにいるかはだいたい想像がつくからな。どうせイル兄の命令なんだろ」

「うん」

手にしたジユースはまたもやキルアの腹の中に納まつた。もしか

するトリリスもゾルディック家の食事を平気で食べていたし、大きなお世話だつたかもしれない。しかし喉が渴いていたのも本当だつた。

「キルアが試験受けてること、残念ながら家には簡抜けだよ。それで責任とつて連れ戻して来いって言われたの」

「あーまあ、そうだろうな。でもリリスが来たのは好都合だぜ」「どうして？」

リリスはキルアの反応に、意外だと言わんばかりに目を丸くする。「私、キルアを連れ戻しに来たんだよ？ キルアが嫌がつてゐるわかつて、それなのに自分可愛さにここへ来たんだよ？ 怒らないの？」彼女が複雑そうな顔をしていたのは、罪悪感に苛まれていたかららしかつた。

「仕方ねーだろ、脅されてんだから。だいたいリリスが俺を力づくで連れて帰れると思つてんのか？」

「それは……」

正直言つて無理だ。悪いがキルアから見て、リリスはそれほど強くない。さすがにここにいる男達よりは優れているだろうが、幼い頃から訓練を受けてきたキルアとは比べるもの酷だろう。イルミがリリスを寄こしたのは、おそらくキルアとリリスの両方に対する嫌がらせだ。自分が何か他の仕事で手が離せないとか理由があつて、とりあえずの監視としてつけたのだろう。ついでにリリスの説得でキルアが帰宅すれば万々歳といつたところか。

「報告の手段は？」

「定期的にメールを送る。それから証拠にキルアの写真も……」

「わかつた、それは協力してやるよ。だけど俺は家になんて帰らねーからな」

「じゃあなんで協力なんて、」

「リリスも一緒に逃げようぜ。家出の時は俺一人で出るだけで精一杯だつたけど、リリスにしたつて外に出られたのはチャンスじゃん。

俺、リリスがうちに住むようになつてから外出してんの見たことねーし、どうせそれもイル兄のせいなんだろ？」

迷う様子を見せながらもリリスははつきりと頷いた。それを見て

じゃあ決まりな、と手を打つたキルアも内心でなかなかに悪くない状況だとほくそ笑む。

リリスの報告を逆に利用すればイルミを攪乱できるし、この先のハンター試験がどこで行われるのかはわからないが、受験者以外が簡単に横槍を入れられるような環境ではないだろう。いくらあの兄でも、弟の家出くらいでハンター協会と揉めるような真似はしないはずだ。

「あ、でもリリス、途中で試験落ちんなよ。そうなつたらこの計画はパーだぜ」

「頑張つてはみる」

「なんだそれ、頼りねー」

口ではそう言つたものの、キルアはいつもの調子でリリスと話せるのが嬉しかった。ライセンスをとつた後は、彼女と二人で気ままに旅するのもいいかもしない。もしも家族が追いかけてきたら、その時は逆に捕まえてやろう。きつといい値段で売れるに違いない。

「あー、早く始まつて早く終わんねーかな、この試験」

キルアは12歳らしい楽観的思考で、退屈そうに呟いた。

23. 事故死の想定

薄暗い地下トンネルの中を、試験官に追走する形で始まつた第一次試験。

今年はまず純粹な体力から問うつもりのようだが、本当にただ直線を走つているだけなので周りの受験者にちょっとかいをかけるにもなんだか面白味に欠ける。

ヒソカはとりあえずの暇つぶしのつもりで、集団の中でもひとりわざと格好をしていて、イルミ扮するギタラクルの傍へ近寄つて行った。

「キミの婚約者、すっかり弟くんを懐柔してゐみたいだねえ」

「……」

ほんのちよつとした世間話のつもりだったが、イルミからの返事はない。別に変装中は喋れないというわけでもないだろうに、彼はただ真つすぐ前を向いたまま、黙つてペースを早める。もちろん、ヒソカはそんなくらいで諦める男ではないので、まるで無視された事実などなかつたかのように悠々とイルミの横に並び続けた。

「でも今年はラツキーだなあ。キミが受験するつてだけでも面白いのに、キミの愛する二人も一緒にね」

「……目立つから話しかけないでくれない？」

「ボクが話しかけなくとも充分目立つてるよ、キミ」

もつと他にもあつたと思うのだが、いかんせんイルミのセンスは理解しがたい。あちこちで新人に怪しげなジュースを配り歩いていた男から声をかけられていながらのが何よりの証拠だろう。かくいうヒソカも、初参加となる去年の試験でジュースをもらえたかったくなつたが。

「ていうか、オレはリリスが嫌いだつて言つてるだろ」

しつこいヒソカに根負けしたのか、はたまた周りから遠巻きにされているせいで喋つても大丈夫だと思つたのか、イルミはその姿に似つかわしくない声で話し出す。彼から今年の試験を受けると連絡をも

らつたときは、へえ、としか思わなかつたヒソカだが、続けて一緒に受ける弟に手を出すな、リリスにも構うな、と言われて随分と驚いたものだ。

そして相変わらずイルミはなかなか詳しいことを教えてくれなかつたものの、それでもなんとか『弟が家出した』ことと『リリスは弟の監視であること』、それから『イルミがさらにその二人を監視している』という面倒臭い状況を聞き出すことには成功していた。「嫌いなら結婚しなきやいいのに。結局弟くんも家出したつてことは、やる気が出たのも一時的なものだつてことだろう?』

「リリスのことは母さんも気に入つてる。試験が終わつたら籍を作つて入れる予定だし、今更簡単にはやめられないよ」

「へえ、じゃあ試験中にボクが殺そうか? 每年死者が出るハンター試験だし、事故なら、」

「お前も事故死したいの?』

せつかく親切心で言つたのに、というのはまるきり嘘だが、ヒソカの出した提案にイルミの殺氣がぶわりと滲む。比較的近くを走つていた受験者たちが顔を青くして膝をついてしまつたのを尻目に、ヒソカはやれやれと肩をすくめた。

「どうせ彼女の念がある限り、そう簡単には殺されないだろう? ボクも少しくらい遊んだつていいじゃないか』

「キルの監視の邪魔になる』

「そうやつて大事に隠されると、余計に興味湧いちゃうんだけどなあ」手伝うだけ手伝わされて、前回の件がどうなつたのか結局ヒソカは知らないままなのだ。リリスの念がどのようなものなのかもはつきりわかつていないし、もつと言ふならあれほど手こづつていた彼女をどうやつて支配下に置いているのかも謎である。彼女の念がもし“入れ替わり”なのだとしたら、殺すよりも拘束するほうが難しいはずだ。あれだけイルミのことを嫌つていた彼女が、大人しく結婚を受け入れるはずがないのだから。

「お前にリリスたちのことを伝えたのは、余計な詮索をさせるためじやないんだけど』

「そうなのかい？でもキミが教えてくれないから、自分で調べるしかないみたいだね」

「ヒソカ、」

「悪いけど、キミといふと目立つから先に行くよ」

仕返しとばかりにそう言つてヒソカはイルミを置き去りにしたが、ヒソカと違つてイルミがしつこく後を追いかけてくるようなことはなかつた。が、明らかに、今の会話を不満に思つてゐることだろう。

今年は楽しい試験になりそうだ、とヒソカは早くもにやにやを抑えきれなかつた。



この世で最も気高い仕事——それが、クラピカがハンターという職業に対して抱いていいるイメージである。

そのため、今は同胞の仇を討つために賞金首ハンターを志望してこそいるが、そうでなくともいづれは目指した道だつたのかもしれない。

クラピカは走りながら、周りの受験生の様子を観察する。既に走り始めて4、5時間は経過しただろうか。後続の方のことはわからないうが、少なくとも周囲では誰一人として脱落していない。

ここまで、嵐の中の船旅からゴンとレオリオと協力してやつてきたが、改めて世間は広いのだと思ひ知らされる。「おいゴン、見ろよ、階段だぜ」特に、先ほど知り合つたばかりのキルアという少年は、明らかに表の人間ではない独特な雰囲気を纏つっていた。

「ほんとだ！全く上が見えないや！」

二人の少年はそう言いつつも、全くそのペースを落とさない。ゴンをあえて告げないことで精神力をも試す試験だとは予想していたが、この階段には流石のクラピカも少しは気が滅入るというものだ。隣のレオリオはなりふり構わず何としても、という気概を見せてゐるが、自分も見習つたほうが良いのかもしれない。気づけば、ゴンとキルアとはかなり差が広がつてしまつていた。

「いいのか？キルアとはぐれてしまつて」

クラピカはクルタの伝統衣装を一枚脱ぐと、肩からかけていた鞄にしまつて汗を拭う。それから、元はキルアと一緒に走っていたらしいリリスという女性に向かつて話しかけることにした。

「え、ああ、うん。前にいてくれる分にはね。あの子、これくらいじや落ちないだろうし」

正直、年の若いゴンとキルアが仲良くなつただけで、彼女と並走しているのは成り行きでしかなかつた。しかし、一応の自己紹介を済ませた仲なのに、二人がいなくなつたからと言つていきなり無視をするのも礼儀に反する行いだろう。見たところ、彼女はまだ余裕がありそうなのでキルアについていくこともできただろうに、特にスピードを上げるような気配は見られなかつた。

「ちくしょー、若いやつらは元気が有り余つてて羨ましいぜ!!」「年齢だけの問題ではないと思うが……」

ゴンも並外れた体力を持つてゐるが、キルアはそれ以上に軽い身のこなしをしている。何より先ほどまで一緒に走つていて、キルアからは当然するべき足音がしなかつた。あの年齢で一体どういう鍛え方をしたのか、とりあえず普通ではないということだけは理解できる。

そして、リリスとキルアの関係も謎だつた。二人の雰囲気はかなり親密そうであつたが、友人というには年齢差がある。何より受験番号が99番と107番で開きがあることから、一緒に受験しに来たというわけでもなさそうなのだ。

「そういうやよお、二人はどういう関係なんだ?姉弟にしちゃ似てねーし」

しかし、クラピカが最終的に詮索はよくないだろう、と自己完結をした傍で、レオリオはストレートに質問をぶつけた。相変わらずこの男は!と咄嗟に非難の視線を向けたクラピカだつたが、レオリオはなんだよ、と睨まれた意味すらわかつていいない。一方、当のリリスはとういうところちらのやり取りを見て苦笑していた。

「あー、うん。確かに血は繋がつてないよ。一応義理の姉弟になる、のかな……」

ほらみろ、言わんことではない!

再び非難めいた視線を向けたクラピカに、さすがのレオリオもたじろく。「……わ、悪い。まあ人には色々な事情があるよな」自分なんて船で志望動機を聞かれただけであれほど過剰反応していたくせに、よく知り合つたばかりの他人の事情に首を突っ込めたものだ。

しかし、うなだれるレオリオの様子に、今度はリリスのほうが慌てだした。

「えっと違う！連れ子同士とか、孤児同士とか、そういうんじやなくて。私がキルアの兄の婚約者なの」

「なるほど、それで義理の姉弟か」

確かによく見れば、彼女の左手の薬指には銀色の指輪が光つている。義理の姉として交流があるのなら、キルアとの親密さも納得だつた。というかむしろ『義理』という言葉だけでこちらが深読みしきたのである。自分が暗い過去と強い意志を持つてハンター試験に臨んでいたからこそ、彼女にも何か深い事情があるのでという先入観が働いてしまつたようだ。

「てか、よく許したなその男。こんなむさい男ばつかのとこに、婚約者を行かせるなんてよ！」

「自分がそのむさい男という自覚はないのか」

「ああ？こんな爽やかな男前ほかにいねえだろ！見ろよこの流れる汗！」

「どうも貴様とは爽やかの定義が異なるらしい……」

クラピカが軽く頭痛を覚え始めたところで、リリスがとうとう我慢できなくなつたのか噴き出す。あはは、と声をあげて笑う彼女は、初めに受けた印象よりもずっと幼さが増して見えた。

「その婚約者に受けて来いつて言われたのよ。キルアの付き添いも兼ねてね」

「それはまた無茶苦茶な。死人も出るつつう噂もあんのによ」

「まあ向こうは親のために結婚するようなものだし、私が試験中に死んでくれたらラッキーケーくらいに思つてるんじゃない？」

「な、なんて男だ！おい、リリス、悪いことは言わねえからそんな男やめとけ！」

「やめたいのはやまやまなんだけどねー」

それこそ色んな事情があるというものだろう。リリスの表情からすっと笑顔が消えたので、それ以上深く聞くことは躊躇われた。やはり、誰でも何かしらの事情は抱えているようである。彼女は一瞬訪れた沈黙にハツとすると、すぐに元のようににつこり笑って見せた。「なんかごめん。でも私、婚約者のことは嫌いだけど、キルアの義姉つてのは悪くないって思ってるんだ。お義父さんやお義母さんも優しいしね」

「確かに、キルアはとてもリリスに懐いているようだ」

本人の性格もあるだろうが、少し話した印象だけでキルアが生意気盛りであることはよくわかる。あのくらいの年齢で、しかも年の離れた異性とくれば少しきこちなくもなりそうだが、リリスに対するキルアの態度は実姉といつても不思議でないくらいだった。

「懐いてくれてるのかな……。まあでも、あの子もゴンみたいな同い年くらいの子と会えてよかつたなーって思つて見てたんだ」

「そうだな、きっとゴンも友達ができて喜んでいる」

付き添いと言つたリリスがキルアを追いかけなかつたのは、きっと二人の邪魔をしたくなかったからなのだろう。そう思うと今まで成り行きで共に走つていた彼女にも、いくらか親しみが湧く。彼女のキルアと思う気持ちは本物だと感じたからだ。

「友達か……うん、 そうだね」

しかし、友達と喰いたリリスの表情は、僅かながらに陰つているようにも見えたのだつた。

24. 價値と借り

走った距離は、スタート地点のザバン市からおよそ100kmほどだろうか。出口の明かりを見たヒソカはようやくつまらない試験から解放されると喜んだが、いざ外に出ても霧深い湿地が広がっているだけで特に目立つようなものもない。

結局、受験者の4分の3くらいが辿りついたところで背後のシャツターが無慈悲に閉まつて、試験官のサトツがゆっくりとこちらに振り返つた。

「ここはヌメーレ湿原、通称『詐欺師の壠』。

二次試験会場にはここを通つていかなければなりません」

彼の説明では、ここには標的を騙して捕食する生き物が多く生息しているらしい。そして騙されないようにという注意喚起がなされた後、早速「ウソだ！」と大声で騒ぐ一人の男が乱入してきた。

「そいつはニセ者だ！試験官じゃない！オレが本当の試験官だ！」

男は人の顔をした猿の死体を引きずり、受験生を惑わす言葉を叫び続ける。中には何人か信じかけている者もいるようで、ヒソカとしては白けるばかりだ。これ以上、こんなところで道草は食いたくない。どちらが本物の試験官なのか、一気に全員に理解させる方法として、ヒソカは実に簡単な方法を取つた。

それが、男と試験官の両方に投げたトランプだつたのである。

「これで決定。そつちが本物だね」

ヒソカはそう言つて笑つてみせたが、内心ではもう別のこと気が掛かっている。実は、このタイミングでリリスにもトランプを投げてみたのだが、それはリリスに当たることなく、彼女の背後、霧の中へと消えていったのだ。しかし別に彼女の身体が透けているとか、そういうオカルトちつな話ではない。単純に彼女の腕を引いて、転ばせた者がいるのだ。それがあまりの速さだったので、周りには單にリリスがよろけたように見えたのだが、ヒソカはしつかりと『ギタラクル

“と目が合っていたのだった。

「おいおいリリス大丈夫かあ？ まだまだ先はあるみてえだぞ」

「う、うん。ちょっとぐらつと来ただけ」

リリス本人も驚いたらしくしばらくぽかん、としていたが、やがて隣のサングラスの男の手を借りて立ち上がる。ちょっと、と言うがイルミはかなり思い切り引つ張つたみたいで、彼女は左足を挫いたようだつた。

「確かに、試験官に抜擢されるほどのハンターがあの程度の猿に騙されるはずがないだろうな」

「その通りです。しかし、44番の方。次からはいかなる理由でも、私の攻撃は試験官に対する反逆行為とみなして即失格とします。よろしいですね？」

「はいはい」

死んだ男の身体は、すぐさま鳥たちの餌となる。これから先起るのが命がけの騙し合いであることを身をもつて証明した男の姿に、受験生たちは再度気を引き締めなおしたようだ。

そしてサトツが走り出したことで改めてスタートする一次試験。ヒソカは最後尾から、ゆっくりと受験者たちを追いかけることにした。霧が深いのはこここの生物にとつて暮らしやすい環境なのかもしれないが、どさくさに紛れて血を見たいヒソカにとつても好都合である。

さてと、と舌なめずりをしたところで、

「おい、リリス、」

「……わかってる。キルアは先行つて」

そんな切羽詰まつたやり取りが、すぐ近くから聞こえてきた。

「先つて、お前はどうすんだよ！」

「私のことはいいって！」

どうやらリリスは先ほど挫いた足が痛むらしく、こんな集団の後方、声の聞こえる範囲にいるらしい。沼地で足場が悪いというのも、余計に効いているのだろう。

ちょうどいい。このままいけば集団から遅れたりリスと直接話せ

るかもしれない。

それにこれだけの霧と、湿原に住む生物の凶暴さを考えると、事故が起こつてもやむを得ないといえるのではないだろうか。

「な、なんだあ、キルアもリリスもいきなり？」

おぼろげなシエルエットが、困惑した声を発している。ヒソカは獲物をいたぶるように、殺氣を濃くしたりまた薄めてみたりを繰り返した。そうしていると他の受験者の何人かも気が付いたようで、走れる体力の残っている者はスピードをあげていく。

「この殺気がわからないのかレオリオ、これは、」

「ヒソカ、だね。さつき、試験官の人トランプを投げた」
ご名答。ご丁寧に名前まで憶えてもらつていて、嬉しさもひとしおだ。子供の受験者は確かイルミの弟ともう一人、405番の少年だつたか。彼らはヒソカの殺気に早くから気づいていたが、リリスの足を気にして先に進めないようだつた。

「みんな気にせず走つて！今すぐ！」

「そ、そういうわれてもよお、これでも精一杯走つてんだぜ」

「キルア！わかるでしょ！行きなさい！」

「……つ、ゴン、」

「嫌だ。俺は行かない。みんなを残してはいけないよ」

リリスは必死でキルアを逃がそうとしているようだが、当のキルアは迷つているらしい。イルミの教育を考えると、ここはリリスを見捨てて逃げるのが賢い選択だ。だが、迷つてしまふようなキルアだからこそ、イルミは余計に過保護になるのだろう。

リリスは焦れたように、再びキルアの名を強めに呼んだ。

「ここでキルアが残つても何の意味もない！ヒソカに勝てるわけもないし、万一逃げ切れたとしても全員道を見失つて終わりだよ。それなら今走れる人は走つて道しるべを残して。それが今できる最善！」
「……くそつ、わかつた。ゴン、」

「ううん。キルア一人で行つて。リリスの言うことはわかるけど、俺は行かない。その代わりキルアはこれを持つて行つて！」

こんな霧の濃い沼地で、一体何を道しるべにしようというのか。生

憎ヒソカが確認することはできなかつたけれど、キルアはどうやら何かを受け取つて走つていつたらしい。

だんだんと彼の気配が遠ざかつていくのを確認したヒソカは、さて、と足に力を籠める。それから一足飛びに跳躍して、後方集団の道を妨げるよう立ちふさがつた。

「なんだ、一体なんのつもりだ!?」

「試験官ごっこ……あまりに試験が退屈だから、少し選考作業を手伝つてあげようと思つてさ」

「はつ、何言つてんだてめえ！この霧じや、試験官とはぐれたら最後！てめえもここで脱落だ！」

「ククク……キミたちと一緒にしないでくれるかなア？」

ヒソカは好物を一番最後までとつておくタイプだ。前菜である、雑魚たちはトランプ一枚でさくつと片付けて、いよいよお楽しみの時間である。「うわあああ!!逃げろ!!」散り散りになる受験者たちだが、円を遣えるヒソカにとつてはあまり意味がない。

ちよつかいをかけるという意味での本命はリリスだったので、ヒソカはまっすぐに彼女の方に向かつたが、そのお陰で他にも骨がありそうな受験者を発見することができたのだった。

「くそつ、ただ逃げるなんて性に合わねえぜ！」

「……ああ。無謀かもしれないが、同感だ」

リリスを庇うようにして前に進み出たのは、先ほど彼女を助け起こしていたサングラスの男と、彼と一緒に走つていた金髪の青年である。彼らのグループにはもうひとり405番の少年がいるはずだが、なぜか姿が見えない。念も覚えていないようなのに、これほどまでに気配を絶てるのなら実に素晴らしい逸材だ。

「ん、キミいい顔してるねえ」

サングラスの男は覚悟の決まつた面持ちで、木の棒片手に殴りかかるてくる。ヒソカはそれをあっさりとかわすと、反対に男の首を掴もうとした。

その時だった。

ひゅつ、と素早く空を切る音がして、丸い何かがこちらへ向かつて

飛んでくる。もしもヒソカが先に少年の存在を念頭に置いていなければ、きっとそれはヒソカのこめかみに直撃していたことだろう。

「ゴン！」

ゴンと呼ばれた少年が手を持っていたのは釣り竿。やはり彼は逃げたわけではなく、隠れて攻撃のチャンスを窺っていたのだ。

「キミなら逃げられただろうに、仲間を助けるなんていい子だね」

「うおおおお!! めえの相手はここにもいるぜ！」

そんな威勢のいいことを言いながら攻撃してくる男の頬に一発入るて、ヒソカはゴンの方に向き直る。金髪の青年も両手に木刀を構えてじり、と動いたが、ヒソカが素早くゴンの首を掴んだのを見て、再びその身を固くした。

「うん、合格。いいハンターになりなよ」

「え……」

かがみこんで視線を合わせ、につこりと笑つて判定を告げる。手を離せば、彼は何かに魅入られたようにじつとこちらを見つめてきたが、そもそもヒソカのこれは初めに言つたように『試験官』。期待できると判断した人材はここで殺す必要がない。ゴンから離れたヒソカは、改めて用事を思い出して、リリスに狙いを定めた。

「来るな。それ以上近づけばこちらも反撃は厭わない」

「ククク……ボクはそれでも別に構わないよ」

「クラピカ、やめて」

「キミたちは今日知り合つたばかりだろう？ 別に庇う必要もないと思ふケド」

「確かにその通りだが、私は人としての誇りを大事にしている。自分の良心に恥じるような行いはしたくない」

なるほど、こつちの青年——クラピカもなかなか肝が据わっているらしい。ヒソカは思わず豊作ぶりに嬉しくなつてついつい笑いだしてしまつた。

「そうかい、わかつたよ。キミも合格だ」

「……」

「だけど、ボクはリリスに用があるんだよねえ。取引としてキミたち

は見逃してあげるから、彼女と少し話をさせてくれないかい？」

「彼女を貴様に差し出せというのか！」

「別に殺すつもりはないよ。彼女とはちょっとした知り合いでね。そうだろう、リリス？」

クラピカはヒソカの提案に憤ったが、ヒソカがリリスの知り合いだというと驚いたように彼女を見た。リリスは素直に頷く。それでもうやく彼もヒソカの言葉を信じたようだつた。

「私のことは大丈夫。ヒソカには一度仕事を頼んだことがあるの」「見たところ彼女は足を痛めているみたいだし、ちゃんと次の試験会場までボクが責任もつて届けるよ」

「本当?」

「うん、もちろんさ。ボクは嘘なんかついたりしないよ」

ゴンの問いに笑顔を浮かべて見せれば、すぐに怪訝そうな視線がクラピカから飛んでくる。リリスもヒソカのことを信用してはいないみたいだが、それよりも彼らを逃がしたくてたまらないようだつた。「あの男もああ言つてるし、皆は気にしないで先に行つて。できれば関わりたくないのが本音だつたけど、試験会場にまで運んでもらえるなら私にとつても悪い話じやないし」

「しかし……」

「ここで押し問答しても時間の無駄だよ。ヒソカが信じられないのなら、私を信じて」

「わかつた……君の言う通りにしよう」

クラピカは刀をおさめ、気絶しているサングラスの男を助け起こす。彼とゴンが男を運ぶ後ろ姿が霧の向こうに消えるのを見送つたヒソカは、ようやくだ、とリリスを見下ろした。

「……で、話つてなんですか?」

「まあ色々聞きたいことはあるけど、まずその足はボクのせいだからね。ほんのお詫びのつもりさ」

「お詫びをするくらいなら、初めから投げないで欲しかつたんですけど」

「ボクだつて驚いたんだよ。キミがかわすか受け止めるかまでは考え

ていたけど、まさかイルミがキミを庇うなんてね」

「……」

イルミの名前を出すと、彼女の表情はわかりやすいくらいに歪んだ。どうやらイルミはまだ相当に嫌われているらしい。「そういうや結婚するんだって？おめでとう」追い打ちをかけるようにヒソカが言葉を重ねれば、リリスの眉はますますしかめられた。

「私が喜んでいるように見えますか？」

「嫌なら前みたいに逃げればいいじゃないか。キミは『入れ替わる』ことができるんだし」

——誘導尋問。

直接聞いたところで、はぐらかされるのがオチだろう。リリスは頭の回るほうではあるが、誰だつて怒れば多少口が軽くなる。「素敵な婚約指輪だね」目についたそれを褒めると、リリスはピクリと頬を引きつらせた。

「……なぜ、婚約や結婚の指輪を左手の薬指に嵌めるか知っていますか？」

「さあ、ボクは生憎そういうことには興味がなくてね」

「左手の薬指には、心臓に繋がる太い血管がある——古代の人々は心のありかとして心臓を縛ろうとしたみたいですが、私はそのまま、これに命を握られています」

見た目はごく普通のエンゲージメントリングに見えたが、彼女が言うには内側にびつしりと神字が彫られているらしい。イルミがひと月かけた手製の品で、突然家に侵入され寝ているうちに嵌められたというのだ。

「念を遣うと激しい苦痛の警告。それを無視すれば死に至る爆発。あの男が解除するか、私とあの男のどちらかが死なない限り、指輪を外すことはできません」

「なるほどねえ」

「これがはある限り私は逃げられないんですよ。いつそ死んでやろうかとも思いましたが、それもまたあの男の狙い通りなのかと思うと悔しくて」

イルミが対となるように指輪をしていたのも、何かルールに基づくものなのかもしない。しかし話を聞いた感想では、現状リリスに勝ち目はなく、いたぶられているも同然だ。

ヒソカの知る限り、イルミが仕事と家族以外のものにここまで執着するのは初めてのことだったので、なんだか面白いような空恐ろしいような複雑な気持ちで、彼の手製だという指輪を眺めた。

「指を落とすってわけにはいかないんだよね？」

「そうしたら、きっと次は首輪になるんじゃないですかね」

「あー愛されてるね」

「……」

リリスは心底嫌そうな顔をしたが、ヒソカはからかいではなく本気で言っていた。リリスも、いや、イルミ本人ですらもこの感情には憎悪や嫌悪しかないと思つてゐるようだが、外野から見れば一目瞭然だ。この場合可哀想なのは、暴力的な愛に晒されているリリスなんか、まともな愛情を抱けないイルミなのかはさておき、これならばヒソカの取引も上手くいくことだろう。高いとは予想していたものの、リリスの価値は思つた以上に絶大なようである。

「で、話はそれだけですか？早く次の試験会場まで連れて行つて欲しいんですけど。ちゃんと当てがあつて言つたんですね？」

「うん。キミのお陰でばつちりさ」

「は？」

そう言つて携帯を取り出したヒソカは、迷うことなくイルミの番号を選んだ。イルミもヒソカがうずうずしていたこと、それからリリスが後方集団にいたことは知つてゐるはずなので、きっと内心やきもきしていたことだろう。予想通り、ワンコールも鳴り終えないうちに繋がつた電話に、思わず吹き出してしまいそうになつた。

「なにしてるの。もう大半が二次試験会場についてるけど」「ちょっと試験官ごっこをしていたら、皆を見失つちゃつてね。悪いけど、道を教えてくれないかい？」

「なんでオレが。自業自得でしょ」

「そう言わずにさあ。キミならわかってくれるだろ？」

「……リリスに手は出してないだろうね」

「むしろ手を貸すところさ。彼女、足を痛めているみたいでね。ボクが連れて行かないと、このままじゃ試験に落ちちゃうね」

リリスは弟の監視のために連れてきた、とイルミは言っていたが、正直弟の監視くらいなら彼一人でも十分だろう。彼曰く、弟のみが脱落した場合に足取りを見失わないための『保険』でもあるらしいが、イルミが見失いたくないのはキルアだけではないはずだ。ここでリリスが落ちて、試験を続けなければならぬイルミの監視下から外れるのも、絶対に不本意に違ひなかつた。

「はあ、わかつたよ。リリスが落ちたとなると、キルアが棄権するかもしないからね」

「大丈夫。場所さえ教えてくれれば、責任もつて連れていくよ」

「ほんと、リリスが一緒に良かつたね」

イルミはため息をつくと、方角と距離を伝えてきた。それが期待していた以上に詳細だつたので、おそらく彼女の指輪はGPSのような役割も果たしているのだろう。つくづく都合がいいとほくそ笑んだヒソカは、濃霧の中で鈍い光を放つ太陽の位置を確認する。それから身をかがめると、何の断りもなくリリスを抱え上げた。

「それじゃあ行こうか」

「……お詫びつて言つたくせに。私をダンシに使いましたね」「ククク、じゃあこれはキミへの借りということにしようか」

二次試験会場は、ヒソカの足であればすぐに辿りつける距離だ。問題は先に進んだゴンたちが果たしてたどり着けるのか。せいぜい青い果実に期待することにしよう。

腕の中のリリスはひどく機嫌が悪そだつたが、特に暴れるようなこともなく大人しく現状に耐えていた。

25. 柄にもなく

試験官いわく、二次試験は12時にならないと始まらないらしい。ここまでたどり着けた受験者はだいだい3分の1というところか。走るだけならともかくも、湿原の生物たちは実戦経験が少ないとにはかなりの障害になつたと考えられる。ヒソカが妨害したせいもあるだろうが、あれほどわかりやすい殺氣を察知できずもたもたとしているような奴は、どのみちこの先の試験で落ちることになつただろう。しかしそんな冷めた結論を下した理性とは裏腹に、キルアは残してきたゴンたちが気がかりで仕方なかつた。

自分でもおかしいと思う。リリスのことはともかく、ゴンたちはほんのついさつき知り合つたばかりでどうなるうと知つたことではない。他に同い年くらいの子供がおらず物珍しかつたから声をかけただけで、それ以上でもそれ以下でもないのだ。

ゴンの身体能力はなかなか見どころがあつたが、残ると言つて聞かなかつた状況判断の甘さには正直がつかりせざるをえない。あの場は逃げるのが正解だつた。自分は間違つてない。頭ではわかっているのに、どうしても胸の奥がもやもやとする。

「ていうか、こんなもんでもほんとに来れるのかよ……」

あの火急の場でゴンに渡されたのは、レオリオの鞄に入つていたオーデコロンのボトルだつた。身だしなみかなんだか知らないが、わざわざ試験にこんなものを持つてくるレオリオもレオリオだし、匂いを追うから道しるべとして垂らしてくれと頼むゴンもゴンだ。とりあえず、約束通りキルアは定期的にコロンを撒いて走つたが、この広大な湿原においては数滴の香りがきほど役に立つとも思えなかつた。

やがて、落ち着かない気分で霧の向こうを見つめていると、背の高い男のシエルットが浮かび上がる。ヒソカだ。奴が来ること自体にはさほど驚きはなかつたが、その腕に抱えられたりリスの姿にさすがのキルアも度肝を抜かれる。他の受験者たちもざわめき、遠巻きにつつも二人の関係を訝しんでいるようだつた。

キルアも本当ならすぐにでも駆け寄りたかったが、結局リリスをおろしたヒソカが離れていくまで近づけなつた。

「リリス！」

「キルア！ よかつた、たどり着けてたんだね」

リリスもこちらに気付くと、あからさまに安堵した表情を浮かべる。捻つたらしい彼女の足首は青く腫れあがっていたが、それ以外で目立つた怪我はなさそうだつた。

「それはこつちの台詞だつつうの！ どういうことなんだよ、なんでヒソカがリリスを運んでくるんだよ」

「実は私とヒソカはちょっとした知り合いでね。前に仕事を依頼したことがあるの。

「で、私が足を痛めているのを知った彼が助けてくれたってわけ」「……あいつがそんな親切な奴には見えないけどな」

「まあ、他人を蹴落としてなんぼの試験では、合理的な行動ではないね。でも、それはキルアもでしょ？」

「……」

リリスの視線が中身の減つた香水の瓶を捉えていることに気付いたキルアは、なんとなく氣まずい思いを味わう。しかし別にリリスが責めているわけではないということくらい、ちゃんと理解はしていた。

「大丈夫。ヒソカはゴンたちを殺さなかつたよ」

「……まあでも、この分じゃあいつらは脱落だろうな」

建物にかけられた時計を見る限り、時間はもうほとんどなかつた。リリスが残つただけでもましだろう。

そう無理矢理思おうとしたとき、うおおおおお！ やつたらああああ！ という男の奇声が遠くの方から聞こえてきた。

「この声……」

思わずリリスと顔を見合わせ、すぐさま目を凝らす。霧の中に浮かぶ3つのシエルエットがだんだんと濃くなり、その姿がはつきり見える頃にはキルアの胸は喜びに高鳴つていた。「ゴン！」自分でも無意識のうちに、彼の名を叫ぶ。

「キルア！」

「よつしや！やつと着いたのか!!」

「まさか本当に辿り着いてしまうとは……」

驚いているのはなにもキルアだけではなかったが、駆け寄つてゴンを捕まえ、その特徴的なつんつん頭を拳でぐりぐりといじめる。会場に着いたとわかつたレオリオは、途端に地面に足を投げ出して座り込んだ。

「はあ～!! 流石にもう駄目かと思つたぜ！」

「お前マジかよ、ほんとに人間か？信じらんねー！」

「レオリオのコロンが特徴的だつたからだよ」

「いやいや普通無理だつつうの……」

「私もゴンの鼻は野生並みだと思うぞ」

ゴン以外の全員が呆れていたが、同時に興奮もしている。最初は落ち着いている印象を受けたクラピカでさえ、今は年相応に声が明るく弾んでいた。

「でもキルアが残してくれなかつたらたどり着けなかつた！ほんとにありがとう」

「いや、俺は別に……」

しかし気分が高揚していたのも束の間、ゴンにお札を言われ、複雑な気持ちになる。ゴンは素直に感謝してくれているが、たとえそういう役割でなかつたとしてもおそらく彼らを残して先に行つていたと思うからだ。キルアが一人で進んだのは自分の為であつて、彼らの為ではない。仲間のために、脱落するどころか落命するリスクまで背負つて、あの場に残つたゴンと自分は違うのだ。

「ところでリリスは？ヒソカと一緒に行くからつて、オレたち別れちゃつたんだ」

「え、あいつならさつきまでここに、」

しかし、沈みかけたキルアの思考は、ゴンの一言によつて引き戻された。振り返ればいると思つていたリリスの姿が見えない。どこへ行つたんだ？ときよろきよろと辺りを見回したところで、突然地鳴りのような音が辺り一帯に響き渡つた。

「な、なんだア？」

時計を見ればちょうど12時。二次試験開始ということだろう。一斉に身構えた受験者たちの前に姿を現したのは、気のきつそなうな若い女と山みたひな巨体を持つ男だった。どうやら今の音は男の腹の音だつたらしく、説明によると彼らが次の試験官だそうだ。

「二次試験は料理よ！」

最初からなんでもありの試験だと聞いていたが、まさかの内容に受験者がざわつく。しかし初めのオーダーは豚の丸焼きというもので、さほど料理の腕自体は関係なさそうなのが救いだつた。

「じゃあ豚を得るのが難しいってことなんだろうね」

「おまつ、一体どこから……」

試験官の話に気をとられていると、リリスがひよっこり現れて会話に参加してくる。キルアは思わず半眼になつたが、元気そうなリリスの姿を見てゴンたちも安心したらしかつた。

「よかつた、リリスも無事だつたんだね！」

「うんありがとう。心配かけてごめん」

「つーかお前、どこ行つてたんだよ」

「ちよつとそこの川で手を洗つてきたの。ヒソカに触っちゃつたし」

リリスは後方の森を指さすと、小さく肩を竦めた。仕事の依頼をしたことがあると言つたわりには随分と酷い扱いである。しかし、手を洗いたくなる気持ちはよくわかつたので、キルアは「そういうときはなんか言つてから行けよ」と言うにとどめた。

「なんだあ？ 姉離れできねえつてわけか？」

「そんなんじやねえよ。リリスは弱いから、いざつてとき俺が守んないやなんねーだろ」

「はいはい、生意気なガキだと思つたが案外可愛いとこあんなあ

「だからそういうんじやねえつて！」

にやにやしながら、ここぞとばかりにからかつてくるレオリオが鬱陶しい。なんにも知らないくせに、と思う。リリスは確かにここにいる受験者の大半より高い身体能力を持ってているだろうが、彼女を巻き込んでしまつたキルアには彼女を守る責任があるので。だからさつ

きみたいにリリスを置いて逃げるということは二度としたくなかつたし、あの時説得されて置いて行つてしまつた自分にも正直腹が立つていた。

「私はちゃんとわかつてるよ。キルアは心配してくれたんだよね」「心配つて言うか……」

「それより、なんだか変な音がするよ」

ゴンの耳が、獣のそれのようにぴくぴくと動く。確かにごく僅かだが、不規則に地面を踏み鳴らす音と身体に伝わる揺れが感じられた。

これは、この数は――

「ああ、私も気になつていた。だんだんこちらに近づいてくるな」「お、おい！あれつて！」

レオリオが指さした先には、こちらに突つ込んでくる豚の大群が見えた。その数と勢いに気圧されて、何名かは悲鳴をあげて逃げ出す。しかしここにいる面子はみな、食材が向こうからやつてきたことに喜色を浮かべたのだった。

「えつと、一人一頭やればそれでいいんだよね？」

「よし！ やるか！」

「……リリス、その足でいけるか？」

「うん、とりあえずやってみる」

ちらりと窺つた彼女もまた、その表情に怯えなど一切見られなかつた。確かに兄貴に脅されていたことに比べたら、今更あんな豚くらいどうつてことないのかもしれない。

「無理そうちだつたらすぐ言えよ」

それでも、ちょっとくらいは頼つてほしい。

そんなふうに思つてしまふのは、幼い我儘なのかもしれなかつた。



試験終了の10分ほど前にやつてきたヒソカとリリスは、その組み合わせと格好のせいで馬鹿みたいに目立つていた。
いや、ヒソカが目立つているのは元からなので、どちらかと言えばそのヒソカに姫抱きにされていたリリスのほうに注目が集まつてい

る。当然、あちらこちらで二人の関係を訝しむ声が聞こえてきて、イルミは“ギタラクル”の仮面の下で眉をひそめた。

うまくヒソカに利用されたことも癪だし、あの分ではヒソカはこれからもリリスにちよつかいをかけ続けるだろう。ひとまず彼女がちゃんと二次試験会場までたどり着いたことには安堵したが……。

そこまで考えたイルミは、安堵？と首を捻った。確かにほつとはしたが、それは正確な表現ではないだろう。自分の計画に綻びが出るのが嫌だつただけだ。

もしもここであっさりリリスがヒソカに殺されたりしたら、今までのイルミの努力や労力が水の泡である。仮に殺されなかつたとしても、脱落されるようなことがあればせつかくかけた保険の意味がない。

イルミはその場にとどまつて、リリスに駆け寄るキルアを観察していた。そう、結局のところリリスは保険でしかなく、あくまでイルミの本命はこちらである。流石にただ走るだけの試験はゾルディック家の教育を受けた者にとつては簡単すぎたようだが、どうやら一緒に走っていた奴らのことも気になるらしく、キルアは未だにどこかそわそわしている。

イルミは弟のそういうところが“異質”だと思つていた。あれほどのがんばりながら、暗殺者として恵まれた環境にいながら、どうして未だに甘さが捨てきれないのだろう。どうして他者を気に掛けるという発想が生まれるのだろう。イルミは自分がそう育てられたように、キルアに対してもしつかり“闇人形”的教育を施した。他に影響を受ける隙などなかつたはずなのに、あれは生まれ持つての性格なのだろうか。

試験終了間際に滑り込んだ彼らに見せたキルアの笑顔は、ごくごく普通の子供のように見える。イルミはそれが気に入らなかつた。あれは“普通の子供”なんかじやない。ゾルディック家の後継ぎとなる、“選ばれた子”なのだから。

ざわめく心を抑え込むようにして、イルミはキルアの意識がそれた隙に自身の指輪へ念を込める。そして痛みに反応したりリリスがこつ

ちを振り向いたことを確認すると、そのまま森の奥のほうへと進んだ。

「なんなの？ヒソカに関わったのは不可抗力なんだけど」

死角になりそうな木の陰で立ち止まれば、察したりリリスが不満げな顔を隠しもせつづいてくる。すぐ傍には小川が流れ、先ほどの湿原とは正反対の麗らかさの中、二人は向き合つた。

「それはもういい。それよりキルアの様子は？」

「ずっと見てたでしょ」

「怪しまれてないかつて聞いてるんだよ。あと、あの周りの奴らは何？」

キルアに余計な交流は不要だ。そんなイルミの想いが伝わつたのか、リリスはますますうんざりしたような表情になる。彼女は生意気に腕を組むと、睨みつけるようにしてイルミを見上げた。

「怪しまれたくないなら、こんな風に呼び出さないでくれる？キルアには私が監視役として使われてるとは伝えただけど、あなたがいることは言つてないの。

それからあの周りの子たちはたまたま知り合つただけ。キルアもちゃんと見捨てて先に到着してたでしょ」

それは投げかけた質問に対する簡潔な答えだったが、腹立たしく感じるのになぜなのだろう。イルミが黙つていると、リリスは満足したか、とても言わんばかりに小さく鼻を鳴らす。

実際、イルミにはもう他に聞きたいことはなかつたのだが、そこでふと、彼女が不自然に重心をずらしていることに気がついた。

「足は？」

「え？」

その質問は、ほとんど無意識のうちに口から出たものだつた。だから、目を丸くしたリリスに見つめられて、そこでようやくイルミはハツとする。しかし今更口に出した言葉は取り消せないので、きまりの悪さを押し殺しながら彼女が答えるのを待つた。

「……少し痛むけど、一次試験みたいに走りっぱなしとかじやない限

り大丈夫だと思う」

彼女の方も不意打ちの質問だったからか、戸惑いつつも素直な返事をよこす。心なしか先ほどの険しさも薄れ、キルアといふときのような素の表情だ。

「そう」

まさか、彼女はイルミが心配したとでも思つたのだろうか。そうだとしたら勘違いも甚だしい。リリスのことなんか、心配するはずがない。足の状態を聞いたことには他意などなく、ただ目についたから口にしただけだ。

イルミは自分でもよくわからないまま無性に腹が立つて、声色に棘を含ませる。いつもみたいにただ淡々としていればよかつたのに、なぜだか攻撃的にならざるを得なかつた。

「これ以上足手まといになられたら困るからね。ライセンスもあれば便利だし、わざと落ちたりしたら……わかってるだろうね？」

キルアにライセンスはまだ早いと思うが、できればリリスには今回で取らせたいと思っている。流星街出身の彼女には戸籍や身分証明がないので、結婚するのにもいちいち手間がかかるのだ。いくら金さえだせば身分なんて偽装できるとはいえ、ハンターライセンスほど保証されたものではないし、取れるものは取るに越したことがない。

しかしイルミの言葉を聞くなり、リリスはまたあの仏頂面に戻つた。「ああ、そうだね」一応従うつもりはあるようだが、投げやりな口調は相変わらず反抗的だ。

「私もバレないようにするから、そつとも今後接触は控えて。ヒソカだけでも嫌なのに、あなたみたいな不気味な男と関わりがあるって絶対思われたくない」

リリスは吐き捨てるようにそう言うと、踵を返して去つていった。おそらく、不気味と称されたのはこの変装のことなのだろうが……。

「そんな言うほど変じやなくない？」

ちょうど近くを流れていた川に自身の変装である“ギタラクル”を映したイルミは、腑に落ちない、と一人で首を捻つた。

26. 遊行

「次の目的地へは明日の朝到着予定です。こちらから連絡するまでは、各自自由に時間をお使いください」

協会側からのそんなアナウンスを受け、まるで針鼠のようにピリピリしていた受験者たちの空気も少しあは和らぎを見せる。乗り込んだ飛行船の行き先は次の第三次試験会場らしいが、到着が明日ならばビスカ森林公園からはかなり離れたところにあるのだろう。試験ごとに会場の位置が大きく変わるのは、失格者の介入を防ぐという目的もあるのかもしない。

「ゴン！ 飛行船の中探検しようぜ！」

「うん！」

「元気な奴ら……俺はとにかくぐっすり寝てーぜ」

「私もだ、おそらく長い一日だった」

一度は合格者0で終了し、どうなることかと思つた二次試験だったが、会長による再試験のお陰でゴンやレオリオ、キルアもリリスも皆揃つて先に進めることになったのだ。それでも、あたりを見回してみれば今や残っている者は初めの10分の1ほどしかおらず、改めてハンター試験の厳しさを痛感させられる。

よつこいしょ、と年寄り臭い掛け声を発したレオリオが廊下の端にどつかり腰を下ろし、探検に加わらなかつたクラピカとリリスも一緒になつて休憩することにした。

「あつ、そうだ。リリス、足見せてみろよ」

「えつ」

「これでも俺は医者を目指してるのでな。こいつん中には湿布とか包帯とか、色々入つてんだよ」

レオリオはそう言つて、アーフィル柄の派手なスーツケースを叩く。ちなみに、ヌメーレ湿原で道標としたオーデコロンはここから出てきた代物だ。正直なところ試験を受けに来たにしては荷物が多いと思っていたが、なるほどそういう事情があつたのなら領ける。

リリスの足首を固定するその手際の良さからも、普段から彼がこう

して人助けをしていることが容易に想像でき、クラピカは思わず微笑を浮かべた。

「やはり、金がハンターになる志望動機だなんて信じられないな」

「……いいや、オレの目的は金さ。物はもちろん、夢も心も、人の命だつて金次第だからな」

「命だと？ 医者になりたいと言つておきながら何を！ 撤回しろ」

クラピカの志望動機は、船上でレオリオも聞いているはずだ。詳しいことまでは述べていないが、幻影旅団に同胞を皆殺しにされたという話はした。それなのに、命を金で買えると言われては流石に黙つてはいられない。まるで嵐の夜の決闘を再現するかのようにクラピカは憤つたが、対するレオリオはあの時と違つて苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「事実だ！ 金がありや、オレの友達は死ななかつた！」

「……病氣か何かだつたの？」

「そうだ。だけど、決して治らない病氣なんかじやなかつた！ 問題は法外な手術代さ！」

吐き捨てるようなレオリオの口調に、クラピカの怒りは潮が引くよう冷めていく。馬鹿げた発想だが、もしもその友人の病が治療法のない難病だつたなら、ここまで無力感に苛まれることもなかつただろう。痛ましそうな表情になつたりリストを見て、クラピカは自身もきっとたような顔をしているに違ないとつた。

「オレは医者になつて、ダチと同じ病氣の子供を治して、『金なんていらねエ』って言つてやるのが夢だつた。だがよ、そんな医者になるためには、さらに見たこともねエ大金がいるそつだ」

「……」

「わかつたか？ この世は金！ 金！ 金だ！ オレは金が欲しいんだよ」

レオリオはそう言つて、乱暴にスーツケースを閉めた。それでもやはり、他人を蹴落とすことが想定される試験において、救急道具を持つてくるのがこの男の性質なのだろう。

「やはり貴様は嘘つきだ」

「……」

「が、なれるといいな、医者に」

「手当してくれてありがとう、レオリオ」

「……おうよ」

礼を言われて照れくさいのだろう。「そ、そういうやひとつ氣になるんだけどよお、試験つてのは何次まであるもんなんだ?」レオリオがあからさまに話題を変えたのはわかつたが、その疑問はクラピカも抱いていたもの。やや声が大きすぎたせいで周りの注目を集めてしまつたが、今回ばかりは咎めることはしなかつた。

「どうなのだろうな、リリスは何か知っているか?」

「ううん、私も今回の受験が初めてだし、そもそも受験自体も二週間前に決まつたばかりなんだ」

「そうか。私も詳しいことは知らないな」

一次試験が終わりの告げられないマラソンだつたことから、試験の数が明言されていないことにもそうした意図があるのかもしない。そもそも段階ごとに定員があるわけではなく、合格者数が変動するので、協会側も臨機応変に対応するしかない。「フフン、お困りの用だな?」声をかけてきたのは、会場に来た途端に怪しげなジュースを飲ませようとして来たトンパという男だつた。確か彼は35回の受験経験があると言つていたが、正直信用に足る人間とは思えない。しかしトンパは三人のうろんげな視線をものともせず、饒舌に説明し始めた。

「試験はその年によつて違うが、だいたい平均して5つか6つだ。審査委員会が試験官と内容を考慮して加減する」

「それが本当ならあと3つか4つはあるんだな。こりやなおさら寝ておかねーと」

「だが気をつけたほうがいい。さつきの進行係は“次の目的地”と言つただけ。もしかするとここが三次試験の会場かもしれないし、連絡があるのも“朝8時”とは限らないってわけだ。

寝てる間に試験が終わつちまつたつてことになりたくなきや、ここでも気を抜かないほうがいいってことさ」

そう言つて意味深な笑顔で去つて行くトンパに、なるほどやはり親

切心で教えてくれたのではないようだと納得する。狙いはきっと試験が不意打ちで行われる可能性を示唆して、受験者の精神を削ることだろう。これは流石のレオリオでもわかつたらしく、目を合わせると今のはなどなかつたかのように、協会側から用意されていたブランケットを取りに行つた。

「ほらよ。あんなやつの言うことなんて無視して寝ようぜ」「……」

「どうした、リリス。何か気になることでもあるのか？」

見ればリリスはブランケットを受け取り、そしたもの、何やら考え込んでいるようである。それがただぼうっとしているだけならよかつたのだが、彼女の表情はもつと深刻なように見えた。

「あー……私は起きていようかな」

「へ？ なんでだよ、トンパが言つたこと気にしてんのか」

「そういうわけじゃないけど、眠くないというか寝たくないというか」「はあ？ あんだけ動いたらフツー眠いだろうが」

確かに女性の彼女からしてみれば、雑魚寝というのはあまり歓迎できる事態ではないだろう。しかし数は少ないと云はえ他にも女性の参加者はいるし、一応ここまで試験は共に潜り抜けてきた間柄だ。今更そういう意味で警戒されているとも思えなかつた。

「心配すんなつて。万が一、三次試験が寝てる間に始まるようなことがあれば起こしてやるし」

「一番寝こけていそうなレオリオが言つてもだな……」

まあ、私も休めるときには休んだほうがいいとは思う。たとえ眠れなくとも、目を閉じてじつとしているだけでも随分と違うものだよ」「……わかつた」

リリスはまだ不服そうだつたが、最後には諦めたのか同じように壁に寄りかかってブランケットにくるまる。しきりに唇に触れている仕草から彼女の不安や恐怖心が窺え、もしかしたら“眠る”こと自体に抵抗を感じているのかもしれないと思つた。そう思つたのは、自分も以前に悪夢にうなされて、眠るのが辛かつた経験があるからだ。

「少しだけ、話してもいい?」

「なんだ?」

「……あのさ、二人はヒソカと私の関係、どうして聞かないの?」

話をすると言つたわりに先にリリスが質問してきたので、クラピカもレオリオも一瞬虚を突かれる。確かに気にはなつていていたが、あの時のリリスはクラピカ達を逃がすために必死になつてくれていたし、怪しむことで彼女の気持ちを踏みにじりたくない。「聞いてもいいのか?」躊躇いがちにそう聞き返せば、彼女は静かにこくんと頷いた。

「……彼に頼んだ仕事はボディーガードだつたの。あれでも強さだけは信用できるし。

私が家の為に結婚させられそうだつて話はしたよね?ヒソカとは、今のが婚約者から逃げるために約1ヶ月契約したんだ

「だけどよ、結局婚約してんだろ?ヒソカは失敗したのか?」

「ううん。私が婚約者に捕まつたのは、契約が切れた後なの。それから私はずっと彼の家に軟禁されて、後継者のキルアも似たようなものだつた。

私たちにとつて、今回試験を受けることを許されたのは千載一遇のチャンスなの

「……なるほど。それがリリスの志望動機というわけか」

自由恋愛が盛んになつた現代でも、名のある家では未だに政略結婚が行われるとは聞いたことがある。しかし、それでも軟禁までするなんてよっぽどだろう。ヒソカと繋がりがあることからも、リリスはおそらく裏の世界の人間なのではないだろうか。「でも、どうしてわざわざ自分からそんな話を?」家庭内の事情というのは軽々しく人に話せるものではないし、それほどの家柄ならリリスやキルアを狙う奴が出たつておかしくはない。たとえ殺すつもりがなくても、金と取引できる材料に十分なりえるからだ。

「そうだね。私も誰にもこんなこと話すつもりなんてなかつた。でもキルアを見てて少し羨ましくなつたの。私も友達なんてろくにいなかつたし」

友達などというものは、クラピカにももはやいなかつた。5年前の

惨劇で、友も家族も故郷すらも失つてしまつたのだ。それからはずつと緋の目のためにあまり人と関わらないようにしていったし、復讐の想いだけに突き動かされて生きてきた。

けれども、友達が羨ましいと言つたりリリスの気持ちはよくわかる。たかだか1日しか共に過ごしておらず、これから先試験の内容によつてはいつ敵になつてもおかしくない状況で、手の内を明かすのは愚かな行為でしかないだろう。

だが、それでも――

「……そうか。それでは、私の話も聞いてもらえるだろうか」

他人と心を通わせることの喜びを知つてゐるから、たとえ束の間でもそこに浸りたいと思つてしまつ。レオリオが、リリスが、その過去を語つて、自分だけ何も話さないで済ますほどクラピカは“ざるい”人間ではない。

そしてこうして誰かに語ることによつて、この胸の怒りや憎しみが風化してしまわないのでくれればいいと思つたのも事実だつた。



就寝後、2時間ほどたつた頃だろうか。

隣りで人が動く気配がして、クラピカはそろりと薄目を開けた。特に敵意や殺氣などは感じられなかつたのでこのまま睡魔に身を委ねても良かつたが、なんとなく気になるものは気になるのである。隣のレオリオは相変わらず爆睡していたため、起きていたのはやはりリリスのほう。彼女は何を考えているのか、毛布から出たままぼんやりそこに立つていた。

「眠れないのか？」

あの後、クラピカの語つた志望動機に二人は暗い表情になつたものの、お定まりの“復讐なんてやめろ”という説教はしてこなかつた。もちろん、やめろと言わたところで大人しくやめるつもりも毛頭ないし、復讐が褒められたものではないことくらいクラピカにだつてわかっている。しかし、それでも頭ごなしに否定されなかつただけで

も、彼らに話してみて良かつたと思えたし、互いの事情を話したこと
で心の距離が近づいたのは確かだ。

最初は眠るのを拒否していたリリスも会話をしているうちに不安が
紛れたようで、結局三人そろつてゆるりと眠りについた。誰かと話し
ながら、そのうちに眠つてしまふのはクラピカにとつても久しぶりの
経験で、あの妙なけだるさが心地よかつたのだ。

「リリス……？」

しかし、リリスはやつぱり眠れないようである。

しばらく見守つていもそのままの状態でピクリとも動かないの
で、いい加減クラピカは不審に思つて声をかけた。同じ眠れないにし
ても、そうしてそこで突つ立っているのはおかしな話だ。これから試
験のことを考えるなら、たとえ眠れなくても座つたり寝転んだりして
身体を休めたほうがいい。

しかしリリスはクラピカが声をかけたのにもかかわらず、何の反応
も示さない。周りに気を遣つて声を落としたとはいえ、聞こえない距
離ではないはずだった。

「……リリス？」

もう一度声をかけるがなんだか様子がおかしい。そこでクラピカ
も立ち上がつたが、リリスはまだぼんやりと何もしない虚空を見つめて
いる。「どうしたんだ」まさか寝ぼけているというのだろうか。彼女の
肩を叩いたが、これまた無反応。いよいよ心配になつて強めに肩をか
ゆすれば、リリスはようやく緩慢な動作でクラピカを振り返つた。
「おかあ、さん」

「は……？」

とつさのことで理解できず、クラピカは間抜けな声を漏らしてしま
う。常々、女顔であることを気にしているクラピカ的には、違う意味
でダメージも負つた。しかし、单なる寝言と切り捨てるには、やはり
リリスの様子は異常だ。「リリス、しつかりしろ」普通ここまで声をか
けたり揺すつたりすれば起きると思う。第一、リリスの目はしつかり
と開いている。

「待つて」

クラピカが対処に困っていると、リリスは不意に何かを見つけたようには廊下の先のほうへ視線をやつた。つられてクラピカもそちらを見るが、もちろんそこには誰もいない。

けれどもリリスはまるでそこに誰かがいるみたいに、ゆらゆらとおぼつかない足取りで歩き始めた。

「おい、一体どこへ、」

「待つて……行かないで」

「リリス、」

状況だけ見れば、恐怖を煽られてもおかしくない。

しかしクラピカは膨大な知識の中から、彼女の状態に当てはまる答えにたどり着いていた。おそらく、リリスのこれは夢遊病なのではないだろうか。よく本人にはその間の記憶がないと言われているが、彼女ほど活発に移動するタイプならば翌朝全く違う場所で目覚めると言うこともあり得る。寝ている間に自分が知らず知らずに行動しているとなれば、彼女が眠るのをあれだけ渋っていたことも理解できた。

だが、夢遊病かもしけないとわかつたところでクラピカにはどうしてやることもできなかつた。夢遊病は基本的に4～8歳ころの小児に多い病気であるし、通常青年期以降に自然消失するものだ。原因は身体的、精神的ストレスが関係していると考えられているが、今のところこれといった心理療法や薬物療法が確立されているわけでもない。患者を無理に覚醒させたり制止すると錯乱して攻撃的になる可能性もあるし、逆にあれだけ活動的であればうろついた先で怪我をする場合もあつた。夢遊病の最中は痛みを危険に対する状況判断が鈍り、痛みも感じにくくなっているのだ。

とにかく放つておけないクラピカは、黙つてリリスの後を追うこととした。手荒な真似をすれば止めることも可能だろうが、リリスの実力も不明である今、あまり得策とは思えない。通常、睡眠時遊行は長くとも1時間程度のものなので、その間彼女が危ない目に遭わないか見張つていればいいだけだ。

リリスは相変わらずゆつくりとした動作で、廊下の先を目指して歩

いていた。そしてその後しばらく立ち止まつたり、また歩いたりを繰り返す。言葉を発したのはクラピカが話しかけたあの時だけで、あとは本当にただゆっくりと徘徊しているだけだ。

夢遊病は夢の中の行動通りに動いているのだと思われがちだが、実際遊行が起ころるのは深い眠りのノンレム睡眠中で、患者はその間何の夢も見ていないという。

最近は落ち着いているが、事件直後は緋の目のことによく悪夢になっていたクラピカからすると、彼女が悪夢をみていないのはせめてもの救いのように思えた。先ほどのリリスの言葉から考えて、おそらく彼女の家庭にまつわる心理的ストレスが原因なのだろう。彼女を軟禁していたのはキルアの兄らしいが、実質彼女は家族から身売りされるような形で嫁ぐことになつてているのだろう。

やがて、15分ほどあちこちを歩き回つたあと、不意にリリスの身体は糸が切れたように脱力した。慌ててクラピカが支えたおかげで床に打ち付けられるようなことはなかつたが、腕の中の彼女は今度こそ“眠つて”いる。

その寝顔は思つていた以上に安らかなもので、クラピカはほつと息をついた。哀れなものだと思えども、彼女とはまだ知り合つて1日しか経つていない。さすがにこれ以上は深く事情に立ち入ることもできないし、そもそも今は試験中だ。クラピカにできるのはせいぜい彼女が危ない目に遭わないよう見守るくらいのことだろう。

リリスを抱き上げたクラピカは、静かに元来た道を戻る。相変わらずレオリオはぐつすり眠りこけていて、いびきまでかいているくらいだ。

「何も心配せず、眠るといい」

彼女を壁に寄りかかるせ、元のようにブランケットをかけたクラピカは小さくそう呟く。それから自身も明日の試験に備えて、再び目を瞑つたのだった。

27. 心当たり

「おはよう、キルア」

「ああ。つと！」

時刻は朝の7時半。リリスに声をかけられ振り返ったキルアは、ぱしゃり、という音と共に写真を撮られ、思わず眉をしかめる。告知では朝の8時に連絡があるとあつたため、既に起きていた受験者たちの視線を一身に浴びることになつたキルアは、恥ずかしさと呆れからリスをぎろりと睨みつけた。

「おまつ、そういうのはひと声かけてからやるもんどうが」

「えー、今かけたじゃん」

「写真を撮つていいかってことだ！」

彼女のこの行動はイルミへの定期報告のためだ。写真を撮ることに協力するとは言つたものの、普通ならゾルディック家の間には顔写真だけでもいい値がつく。けれどもリリスは悪びれた様子もなく、につこりと笑つて見せた。

「だつて、撮るよつて言つたつて、別に笑顔くれるわけでもなんでもないでしょ」

「あたりめーだろ」

写真の行きつく先はあるの兄貴なのだから、考えただけでも気持ちが悪い。キルアが想像で身を震わせていると、飛行船の窓から外を眺めていたレオリオが呆れた顔で振り返つた。

「なんだオメーら、観光気分かア？のんきに写真なんて取りやがつて。こつちは昨日これから試験のことを考えてろくに眠れなかつたつうのによお」

「眠れなかつただと？だつたらあの獸のようないびきはなんだつたんだ」

「誰が獸だ！誰が！なあ、リリスも昨日近くで寝てただろ？俺、いびきなんかかいてたか？」

「うーん、私もぐつすりだつたからわかんないな」

そう言つてリリスが困つたように笑うと、クラピカの表情がわずか

に陰った。リリスの同意を得られなかつたからかもしれないが、レオリオがいびきをかくさまはいくらでも想像できるのでクラピカの証言が正しいのだろう。「ほらみろ、やつぱてめーが神経質すぎるんじやねーか?」リリスの言葉を聞いたレオリオはますます勢いづき、代わりにクラピカはうんざりした表情になつた。

「そうだな、貴様より纖細であることは認めよう」

「ちつ、口のへらねえ野郎だぜ。

と、それより、ゴンの姿が見えねーが、キルア一緒じやなかつたのか?」

「ああ、あいつはたぶん、どつかその辺で寝こけてると思うぜ。昨日は一晩中、会長相手に動き回つてたみたいだからな」

昨晚、ゴンと共に会長のゲームに参加したことを思い出して、キルアはもやもやとした気持ちを抱えた。初めこそボールを取るだけで合格という破格の条件に目を輝かせたものの、今では明らかに遊ばれていたとわかる。格が違すぎる、そもそもゲームとして成り立っていないのだ。そういうわけで不毛だと見切りをつけたキルアはしばらくしてゲームから降りたが、ゴンは結局あの後も長く続けていたようである。キルアが離脱する頃には、会長に右手を使わせるというふうに主旨は大きく変わつていたようだが。

「なんじやそりや。じゃあ早いとこ見つけて起こしてやつたほうがいいんじやねーのか?もう次の試験まで30分もねーぜ」

「だな。俺とリリスで探してくるよ」

おそらく、ゴンはあるゲームの部屋にまだいるはずだ。ちょうどリリスと二人きりで打ち合わせがしたかったので、これ幸いとキルアはリリスの腕を引く。

「出た、シスコン野郎」

「うつせ!そんなんじやねえ!」

しかしそのせいで要らぬ誤解を受けたキルアは、朝一番から大声をだす羽目になり、肩を怒らせて廊下を歩くこととなつた。リリスもキルアの意図がわかっているため誤魔化すための苦笑しか浮かべないし、やれやれとしか言いようがない。ほとんど八つ当たりに近かつた

が、からかわれた氣恥ずかしさのせいできルアは自然とぶつきらぼうな口調になつた。

「で、兄貴はなんて？」

「試験でキルアと合流したことを伝えたラ、そのまま協力するふりして監視しろつて。どうやら大事な仕事中でしばらく手が離せないみたい。

それに、ハンター協会と揉める気もないみたいだよ」

「じゃ、何か仕掛けてくるにしても試験後つてわけか」

「たぶんね。とりあえず次は三次試験だつて伝えるけど？」

「オッケー」

予想通り、試験中は手を出してこないらしい。それはこちらにとても非常に助かる話だつた。あとは最終試験の前にリリスに嘘の場所を伝えてもらつて、ライセンスをゲット次第即逃亡というのが一番いいだろう。キルアはリリスの裏切りがバレないよう、定期的に写真に協力してやれば完璧だ。

「じゃあ、あとは試験に受かるだけだな」

「二次試験、正直やばいって焦つたけどね」

「まあな。なんでもアリだつてのはわかつたよ。正直、三次も何が来るか……ま、こいつはほんとに気楽そうだけど」

会長とゲームをしていた部屋の扉を開いたキルアは、中で気持ちよさそうに眠つているゴンを見てため息をつく。靴も上着も脱ぎっぱなし、タンクトップ姿で大口を開けて眠るゴンには、今が試験中だなんていう緊張感が欠片もないのだろう。キルアの家族のことを伝えた時ですら特に驚いた様子はなかつたし、大物なのか何も考えていない馬鹿なのがいまだによくわからない。

ただ、正直面白い奴だと好ましくは思つている。

「うわ、爆睡してるね。とりあえず見つけたし、着いたら起こすつて感じでいいかな」

「そうだな。こんだけ気持ちよさそーに寝られたら、起こすのなんかちょっと気が引けるし」

リリスと顔を見合わせて苦笑したが、実際、二人の判断は正しかつ

た。

会長の計らいか、単に運航に遅れが出たのか、三次試験会場に到着したとアナウンスが流れたのは告知よりも一時間半も遅い、9時半だつたのだ。



三次試験の会場はトリックタワーという名の、ただひたすらにつるりとした塔のてっぺんから始まつた。来るときには飛行船から見た限りではタワーに窓のようなものは一切なく、タワーというより巨大なコンクリートの柱だと言われたほうがしつくりくる。

飛行船から降り立つた受験者たちはみな辺りを見回し、何が行われるのか推測しようとしていた。クラピカも同様に何か手がかりがないかと注意深く観察していたが、いつそ拍子抜けしてしまうくらい何もないでのある。

タワーは結構な高さであり、遮るものがない分、吹きつけてくる風は強かつた。

「これ、受験者同士で落としあいとかだつたらどうしよう」「三次試験まで来て、そんな単純な方法で数を減らすとは思いたくないが……」

恐る恐る下を覗き込んだリリスの咳きに、クラピカはやんわりとした否定を返す。二次試験のことがあるから、ハンター試験は単純に強さだけを試されるものではないのだろう。

やがて、受験者全員が降り立つたところで、試験内容が告げられる。未だに試験官の姿はなく、豆のような姿かたちの進行役が口を開いた。

「さて、試験内容ですが試験官の伝言です。

“生きて下まで降りてくること。制限時間は72時間”

内容はいたつてシンプルだ。その意味を理解しようとした受験者たちの間には一瞬の沈黙が生まれたが、進行役はそれ以上詳しい説明をすることもなく開始を告げる。

ほどなくして、外壁を伝つて降りようとする猛者が現れたが、残念なことに彼は怪鳥の餌となつてしまつただけだつた。

「きつとどこかに下へと通じる扉があるはずだ」

今回設けられた制限時間は3日間。

これまでの試験に比べると随分と長い設定だが、それだけこのタワーを降りるのにいくつかの仕掛けを突破しなければならないということだろう。

朝9時半に開始して3日ということは、当たり前だが3度の夜を迎えることになる。クラピカは隠し扉を探しつつ、ちらりとリリスのほうに視線をやつた。

あの後、夜明け過ぎに目覚めたらしいリリスはやはり自分の行動を覚えていないようだつた。ただ、起きるなり辺りを見回して場所を確認しているようだつたので、自分の症状は自覚しているようである。異変がないとわかつたリリスは明らかに安堵の表情を浮かべていて、クラピカは昨日のことを言えなかつた。言つたところで本人にもクラピカにもどうしようもないことだし、寝る前に症状を相談してこなかつたリリスはきつとこの話題に触れられたくないだらうと思つたからだ。

「キルア、ちょっといいか？」

しかし、この先試験が進めば進むほど、おそらく夜を越す機会は多くなる。手分けして扉を探す中、クラピカはさりげなくキルアの近く寄ると小声で話しかけた。もしキルアがリリスの症状を知つているなら昨夜に別行動をするはずがないので、リリスが嫌がろうがキルアだけには言つておかなければならぬ。

「見つけたのか？」

「いや、そうではない。リリスのことだ」

「は？・リリス？」

キルアは怪訝そうな顔になると、離れたところで床を叩いてまわっているリリスに視線を向ける。あえて彼女が離れているときに話を持ち掛けたということで、キルアも自然と声を落とした。

「なんだよ」

「单刀直入に聞く。彼女が夢遊病かも知れない、ということは知つて
いるか？」

「夢遊病？」

案の定、キルアは何も知らなかつたようで、目を見開いてクラピカの言葉を繰り返す。彼女の名譽のために彼女の発した言葉は伏せたが、クラピカはいかにリリスの様子がおかしかつたかを説明した。

「……ちょっとすぐには信じられないな。あいつ、ここしばらくずっとウチに泊まつてたけど、夜中に徘徊してゐつて噂は聞かなかつたぜ」

「キルアの兄なら知つていたのだろうか」

「いや……婚約者つて言つても兄貴とリリスの部屋は別だつたし、知らない可能性が高い」

「そうか。彼女自身、自覚はあるようだつたから、家ではなにか対策をしていたのかもしれないな」

たとえば物理的な方法だが、自分とベッドを何かで繋いだり、ドアに複雑な施錠を施せば、出歩いてしまう確率はずつと低くなるだろう。人によつてどこまでの行動ができるかは様々だが、あくまで睡眠のさなかにある状態では、起きているときほど複雑な動作はできない。彼女の振る舞いからして初めてのことではなく何度も経験があるようだし、キルアの家ではそうした対策を自主的に行つていたと考えるのが妥当だろう。

「くそつ、なんでそんな大事なこと言わねーんだよあいつ」

「そう言うな、誰しも人に言えない悩みがあるものなのだよ。とりあえず、我々は彼女が危険な目に遭わないように気を配る必要があるということだ」

「ゴンやレオリオには？」

「今のところキルアにしか伝えていない。レオリオは医者志望だから彼になら伝えてもいいかも知れないが、こういったものはすぐに治るものでもないしな。判断はキルアに任せる」

「……わかつた。教えてくれてサンキューな」

キルアは礼を言うと、しばし黙り込んだ。彼自身が結婚相手ではな

いとはいえ、リリスの精神に負担を強いていることについてはやはり心当たりがあるようである。

クラピカも一応伝えるべきことは伝えたので、再び隠し扉探しへと戻ることにした。「あつ！」しかし視線を床に落とした瞬間、キルアが珍しく大きな声をあげた。

「どうした、キルア」

「今、リリスが……」

「え？」

「リリスが落ちてつた。いきなり床が開いて」

「なに!?」

慌てて彼女がいたほうを見れば、確かに先ほどまであつた姿が忽然と消えている。「確かにここなんだ。くそつ、開かねー！」開いたと思われる床を調べたキルアは悔しそうに言う。どうやら隠し扉の使用は一度きりらしく、受験者一人一人がそれぞれの扉を見つけなければならぬらしい。未だ扉の形状などのヒントを掴めていなかつたこちらにしてはありがたい情報だったが、まさかリリスが落ちてしまうとは。

意図せず落ちたものならさぞ驚いたことだろうし、足を痛めている彼女に着地は厳しい。無事だと良いのだが。

「いきなり別行動か」

呟いて床を見つめるキルアの表情は、予想以上に強張っていた。どういう事情があるのかはわからないが、キルアはリリスのことに関してものすごく気負っているように感じられる。最初の説明では彼女のほうがキルアのお目付け役という話だったが、キルアはそうは思っていないようだ。兄の婚約者ということを差し引いても、確實に守るべき対象として彼女のことを見ている。レオリオはシスコンだとからかっているが、それとはまた少し異なる必死さがキルアにあるように思われた。

「仮に近くに扉を見つけたとしても、そこがリリスのルートと繋がっている保証はないだろう」

「……」

「キルア、幸いにもリリスには症状の自覚がある。危険な状況下であれば眠らないという選択肢もあるし、眠るにしても何らかの対策をとるに違いない」

もう少し早く伝えるべきだつたか、と責任を感じながら、クラピカは慰めの言葉を口にした。正直、これが試験である以上、わかつていたとしても共に行動できるかどうかは別の話なのだが、こうもあからさまに落ち込まれては罪悪感も湧く。

「ああ、そうだよな……。俺たちも早く扉を見つけねえと」「キルアー！ クラピカー！」

ようやくキルアが頭を切り替えたところで、ゴンの明るい声が響く。「ちょっとこっち来て！」見ればレオリオも合流しているらしく、早く来いと手招きされる。もしかすると扉が見つかったのかもしれない。

「行こう、キルア」

「ああ」

キルアはもう一度だけリリスの消えた扉を振り返り、それからゴンのほうへと走り出した。その後に続いたクラピカはふうと息を吐く。リリスのことは心配だが、クラピカだつてそうそう他人ばかり心配していられない。とにかく今は試験に集中だと、力強く仲間のもとへ駆け寄つた。

28. 安らぎの道

——きっとどこかに下へと通じる扉があるはずだ

そう言われても、上は快晴、左右は絶壁、とくれば残るはコンクリートの床を地道に探していくしかない。

そうして、リリスは今まさに、『下へと通じる扉』に落ちてしまつた。手分けして探したほうが効率がいいだろうと思つての別行動だつたが、結局彼らに何のヒントも伝えられないままはぐれたというわけである。「いてて……」せつかく昨日、湿布を貫つて痛みが和らいでいた足も、着地のダメージにズキンと痛む。最悪なスタートだ。というか、ここはどこなのだろう。中は塔の外観と同じコンクリートブロックでできた小部屋になつていて、特に出口らしきものは見当たらぬ。

あるのは一台の監視カメラとそれから、何やら壁に額装された文字が掲げられているだけだった。

「安らぎの道……？」

タイトルよろしくでかでかと書かれた名前の下に、説明文がついている。

【君たち2人にはここからゴールまでの道のりを協力して目指してもらう。その間、襲い来る100人の敵に眠りと安らぎを与えること】リリスは何度もそれを読み返してみたが、さっぱり意味がわからなかつた。ルールはこんな抽象的な形ではなく、もつとはつきりと書くべきだろう。

そもそも、『君たち2人』と言わたつて、ここにはリリスしかない。まさかもうひとり誰かがここへ落ちてくるまで、大人しく待たなければならぬのだろうか。

「はは、都合がいいね」

しかしそんなことを考えていると、不意に後ろから声がかけられる。リリスが飛び上がるようにして振り返れば、そこには『ギタラクル』ではなく『イルミ』が立つていた。

「な……」

「いつの間に、つて顔してるね。でも先に待たされてたのはオレの方なんだよ。どんな奴が来るかわからないから気配を消してたけど、リリスなら変装もしなくていいしラツキーだな」

イルミはそう言つて、こきり、と首を鳴らした。

部屋に落ちた時点でリリスも一応周囲を確認したつもりだつたのだが、さすがはプロの暗殺者ということだろうか。ここが“協力する”道でなければ、何もわからないまま殺されていたかもしれない。便宜上、キルアの監視役として放り込まれてはいるものの、何度も殺されかけた過去を踏まえ、リリスはちつともイルミのことを信用してはいなかつた。

「カメラあるけど、いいの？」

「協会の人間は問題ない。そもそもライセンスは本名で発行してもらうし、うちのじーちゃんだつてあの会長と知り合いなんだよ」

「そう。ハンターつて仕事も随分適当なものなんだね。あなたとか、ヒソカみたいな奴にも受験資格があるんだから」

「戸籍のない、『存在しないはずの』リリスにもね」

「……」

嫌味を言えば嫌味で返され、リリスは早速氣分が滅入る。昨晩、クラピカやレオリオと屈託のない時間を過ごしただけに、余計にこの男の“毒”が強調されるのだ。

しかし、試験を突破するという意味ではイルミと一緒にラツキーだつたのはリリスも同じ。聞かなかつたふりをして、「で、どうしたらいいの？」と話を変えた。

「その額の裏側に、右手の手形が2つある。2人そろつた証拠としてそこに手を重ねれば、どこかしら道が開いて敵が出てくるつて感じじゃない？」

「じゃあ眠りと安らぎを与えるつていうのは？」

「普通に考えて死。もしくは気絶つてどこ。こればっかりは協会側が用意した人材によるね」

死を与えるというのは全然普通の考え方ではないが、イルミにとつ

てはそうなのだろう。とはいって、リリスも他の解釈が思いつかなかつたので、ひとまず言われた通りに額の裏を確かめてみる。そこには確かにイルミが言つた通り、人間の手の形の窪みが2人分あつた。

「……じゃあ、置いてみる?」

リリスが恐る恐る手を伸ばせば、それより先にイルミが何の躊躇いもなく手形に重ねる。一瞬、罵だつたらどうするのか?という思いがよぎつたが、彼ならば罵だとしてもどうということもないのだろう。窪みに2人の手がはめられると、壁の一部が音を立てて開き、新しい道が開放された。

「何ぼうつとしてるの?行くよ」

「う、うん」

イルミに促され、リリスは素直に領いてしまう。試験とはいって、イルミと協力するなんて不本意でしかなかつたが、見ず知らずの人間よりは得体が知れているだけ思考も行動も読みやすかつた。

この男は自分の家族にさえ手を出されなければ、そろそろ感情的になるタイプでもない。いつも冷静で自分に自信があつて、息子として、兄として完璧な役割をこなしている。自分の居場所を確立して、手の届く範囲は全部自分の物だと思つてゐる。

リリスは目の前のすつと伸びた背中を見ながら、そういうところが嫌いだ、と心の中で呟いた。



100人の敵、と称されたのは、正式なハンターでも協会側が雇つた力自慢でもなく、囚人服を来た男達だつた。しかしまさか衣裳だけ揃えた一般人ということはないはずだから、本当に彼らは罪を犯した人間なのだろう。

最初にたどり着いた部屋にはまず10人が待ち構えていて、彼らはリリスとイルミを見るなり、下卑た歎声を上げた。

「ようこそ、安らぎの道へ、お二人さん。待ちくたびれたぜ」

「へへっ、女がいるなんて当たりだな」

男達はぐるりとこちらを囲むように立ちはだかる。リリスも今は念が遣えないのであまり人のことは言えないが、彼らはどうみても能力者ではない雑魚だ。イルミは黙つてリリスのほうをちらりと見ると「これなら、リリスにも少し働いてもらおうかな」と言つてのけた。「えつ!? 全部やつてくれるんじゃないの?」

「ほんとはそのほうが早いんだけどさ、リリスに楽させるのも癪だと思つて」

「私、あなたのせいで今ごく普通の人間なんだけど」

「多少はうちで修行してたんでしょ? うちの嫁としてどこへ出ても恥ずかしくないようについて言つてた成果を今こそ見せるときじやない?」

「そんな……」

冗談でしょ? と言いたいが、残念ながらイルミが冗談なんて言う男ではないことくらい、嫌というほど知つている。リリスは観念して深いため息をつくと、覚悟を決めた。

「ぎやははは、お嬢ちゃん可哀想になあ。まあ安心しろよ、そつちの男より俺たちのほうが優しくしてやれるぜ?」

そう言つて、無遠慮に後ろから伸びてきた男の手。リリスはそれが肩に触れるか触れないかのところで、逆に男の手を掴んで腕ごと引き寄せる。そして、男が前のめりになつたところで足を払い、そのまま一本背負いの要領で地面上に叩きつけた。「ぐはっ」ここがコンクリートでできた床だというのも効いたようだ。頭を打つた男は簡単に伸びてしまい、場は水を打つたような静けさに包まれた。

だがここにいる囚人たちは、もともと血氣盛んな者ばかりを集めている。すぐに「やつちまえ!」と誰かが叫ぶ声が聞こえた。

——ここから先は乱闘だ。

リリスが構えると、男達が束になつて掛かつてくる。もともと仲間意識なんて持つていらないだろうに、それでも同じ囚人が女にやられたとあつてはプライドを傷つけたのがもしいれない。「イルミ!」正直、この数は今のリリスが一人で相手取るには厳しい。そつちも働けとう意味を込めて名を呼べば、なぜかイルミは少し驚いたように眉を上

「言われなくてもわかつて
る」

しかし、イルミはすぐ元の無表情に戻ると、その手の中から幾本もの針を飛ばした。いつそ小気味よくくらいに男たちの眉間に刺し貫いたそれは、確実に命を奪っているだろう。リリスがようやくもう一人を手刀で沈めた頃には、もはやリリスとイルミ以外その場に立つている者はいなかつた。

「……やつぱりイルミがやつたほうが早くない？」

「初めて」

「え？」

「初めて、オレの名をちゃんと呼んだね」

何のこと、と思ったが、そう言われるとそうかもしない。リリスは基本二人のときには二人称で彼のことを呼んでいたし、いくら呼び捨てしろと言わっても彼の家族の前では頑なに“さん付け”していた。しかし先ほどのような場面で“あなた”と言うのは夫婦みたいで虫睡が走るし、かといって嫌味でもない場面で“さん付け”するのも腹立たしい。ただそれだけの理由でリリスはイルミ、と呼んだに過ぎなかつたが、呼ばれた側のイルミはかなり驚いたみたいだつた。まじまじとこちらを見てくるのがとても煩わしい。

「呼び方なんてどうでもいい。それより、ほんとにこの先、私も戦わなくちゃいけないの？」

「できないって言うんならいいよ。足手まといは休んでれば
「……できなくはない」

本当は挫いた足が痛むが、そんな言い方をされれば引き下がるわけにはいかない。正直なところ上手く乗せられている気がしないわけでもないものの、それでもこの男に弱みは見せたくなかつた。「そう、じやあ大丈夫だね」イルミはわざわざリリスが倒した男に近づいて、確認するためにかがみこんだ。

「で、殺さなかつたのはわざと？」

「さすがに素手では厳しいだけ」

「だつたら家に帰つたら、そつち方面の修行もしないとね」

「ゾルディック家の嫁だから？」

「そう」

「……ならないって言つてるでしょ」

いい加減にしつこい。本当に結婚で家に貢献したいなら、リリスなんかよりちゃんと暗殺一家の娘を貰つたほうがよほど即戦力になるだろう。嫌がらせもここまでくるとむしろ感心する域だ。

けれどもイルミはそんなリリスの抗議を無視して、あ、次の扉が開いた、と部屋の奥に視線を向ける。確かに彼の言う通り下へと降りる階段が続いていて、おそらくこの先もこの部屋みたいに囚人たちと戦わされるに違ひなかつた。

それでもまあ、初めに100人と言われているだけ気分的に随分楽だ。この調子ならば72時間なんてかからずに、三次試験もさくさくクリアしてしまえるだろう。

しかし、そんなりリスの想像は甘かつた。

100人を倒すこと——それ自体も確かにこの試験の課題であるが、ハンター試験は単純に戦闘力だけを問うものではない。

その証拠に、囚人を100人倒してもゴールに続く道は開かれなかつた。

代わりにたどり着いたのは、半分が簡素なベッドや生活用品が置かれたごくごく普通のスペースと、もう半分が様々な種類の武器が置かれた物騒なスペースに分かれている比較的広めの部屋。そしてその部屋の突き当りには、残り時間を表示するデジタル時計と、スタート地点のように額に入つた文章が掲げられていた。

「なにこ……」

「さあね。でもまだ試験は終わつてないみたいだよ」

今までとは明らかに様子の違う部屋に、二人は警戒しながら入つていく。新たな指示と思われる文章には、次のような内容が書かれていた。

【ここは『安らぎの道』の最終ステージだ。

最後にこれまで協力してきた君たちには選択をしてもらう。

1) パートナーに『安らぎ』を与える

2) 今まで殺した囚人の数×1時間、ここで2人で『安らぐ』

1) を選択した場合、片方は直ちにゴールに到達でき、試験は合格となるが、もう1人は生きていたとしても試験終了時刻までこの部屋から出ることはできない。

2) は2人で脱出が可能である。なお、殺していない囚人の数はボーナスとして、1人当たり30分の待機時間短縮が可能】

最後まで読んだリリスは、自分の全身が心臓にでもなつたような気分だった。嫌な汗がこめかみを伝い、自分の心音が爆音で聞こえるだけ。こんなのは、選択も何もない。そもそも与えられた制限時間は72時間だというのに、1時間のペナルティーとなる囚人を100人用意しているのが無茶な話だ。もはやリリスにはイルミがいつたい何人殺したのかわからぬ。わかるのはただ一つ、この男はハンターライセンスを必要としていて、そのためならば躊躇いなくリリスを殺せりだろうということだけだった。

「残り時間は69時間か……」

何気なく呟かれたイルミの言葉に、嫌でも緊張が走る。戦闘になれば勝ち目がないのはわかりきっていた。確かにリリスは育った環境のせいで人よりは死に対する恐怖が少ないが、ただ死ぬことと殺されることはまた別である。しかもイルミはリリスのことを嫌っている。殺すにしたつて、樂には死なせてくれないだろうということは容易に想像できた。

「うん、じゃあ仕方ないね」

やがてイルミは決断を下したのか、そう言ってこちらに向き直る。リリスはごくり、と息を呑んだが、今更どこにも逃げ場なんてないことをくらいわかっていた。とはいっても、無抵抗で殺されてやる気にもなれなくて、大量に置かれた武器の中から切れ味鋭そうな斧を取つて構える。それを見たイルミはまたもや眉を上げて、驚いたような表情になつた。

「え、」

「……無駄だつて言いたいんでしようけど、悪あがきくらいはするか

ら

「いや、なんで戦う気でいるの？」

「は？ だつて、仕方ないって言つたじゃない」

斧を握りしめたまま、リリスはイルミを睨みつける。正直、彼には念の指輪を爆発させるという奥の手があるので、リリスのこれは本当に悪あがきでしかない。しかし彼はリリスの言葉を聞くと合点がいつたとばかりに、大きなため息をついてみせた。

「ああ、勘違いしてるよ。仕方ないって言つたのは、足止めのこと」

「……じゃあ、2を選ぶの？ でも、それじゃ間に合わないかもしねい」

「間に合うから言つてる。計算したんだ。オレが殺したのは76人、だから残りはリリスが気絶させた24人。

$69 - 76 \times 1 + 24 \times 0 \cdot 5 = 5$ 時間。2を選んだとしても問題なくこの試験を突破できる」

イルミはまるで物わかりの悪い生徒に教えるように説明してみせたが、リリスとしては納得がいかない。今やもう恐怖心はすっかり搔き消えていたが、代わりによくわからない怒りが胸の内から沸々とわきだしていた。

「殺した人数を覚えてるつて言うの？」

「信じられないなら来た道を戻つて死体の数を確認してきなよ。オレはここで休んでるから」

「……」

確かにイルミの言う通りの数ならば試験終了に間に合う時間だが、このタイムが次の試験に影響しないとも限らない。リリスはイルミが自分を殺すものだと思い、覚悟を持つて刃を向けたので、あつさりと背中を向けられたことが許せなかつた。どうしようもなく馬鹿にされたような気分だ。

そもそもイルミはリリスのことが邪魔だつたんじゃないのか。仕事でもないのに表立つてリリスを殺せば、母親たちから非難されるというのはわかる。しかし試験中の事故を装えば、その死は仕方なかつたといくらでも取り繕えるではないか。

「なんで殺さないの？」

リリスは死体の数を確認しに行く代わりに、既にベッドの方へ向かつたイルミに向かつて疑問を投げかけた。

「殺さなくとも間に合うのに、殺す意味ある？」

「囚人たちは殺したじやない」

「いくらオレでも、さすがにリリスのことは囚人より上だと思つてゐるけど」

「そういうことじやない。大手をふつて私を殺せるせつかくのチャンスだつていうのに、なんで殺さないのって聞いてるの」

「だつて、オレにリリスを殺すメリットがないよね」

「あるよ！この残り時間だつて次の試験に影響してくるかも知れない！」

現に殺した人間の数まで、試験に影響してきている。早く通過した者がそれだけ次の試験で優遇されるというのは大いにあり得る話だつた。けれどもイルミはさつさとベッドに腰かけると、面倒そうに髪をかき上げる。

「うるさいな、そんなに殺されたかつたの？」

「違う。でもあなたとこの先64時間も一緒なら死んだほうがマシかもつて思つただけ」

「そう、だつたら死ねば？」

イルミはそう言うと、リリスが未だに武器を手にしているにも関わらずさつさと眠る体勢に入る。とことん人を舐め切つた態度だ。それを見て腹立たしさが頂点に達するが、結局ここでもリリスに選択権などない。イルミが寝っていても、リリスに武器があつても、やつぱり彼には勝ち目がないからだ。

リリスはしばらくその場で斧を握りしめていたが、やがてそつとそれを手放した。今はこれから先のことを考えたほうがいい。リリスは自分が寝た際に起ころる悪癖を自覚していたが、さすがにこのくたくたの状態で6・9時間もの間眠らずにいられる自信がない。かといつてここにあるのは武器かなんてことない生活用品ばかりで、リリスの身体を拘束できるようなものも特に見当たらなかつた。

「最悪……」

呟いた言葉は、きっとイルミにも聞こえていただろう。リリスはこれから最大限距離を取るようにして、壁際に腰を下ろすと静かに目を閉じる。実際、命の危険がなくなつたとわかると、脱力感と一緒に疲労感と睡魔が押し寄せてきた。

“アレ”は別に毎晩起ころるような代物ではない。昨日は“アレ”が起ころなかつたみたいだし、環境がいつもと違えば深い眠りに入らないだろう。大丈夫なはずだ。

そう自分に言い聞かせるようにして、リリスはゆっくりと意識を手放した。

29. 幼子

イルミがベッドに横になると、しばらくしてからリリスも諦めたのか壁際に移動した気配がした。別にベッドはちゃんと2台用意されていたのだが、彼女はイルミに近づくのも嫌らしい。まあ、それはともかく寝首をかこうとしなかつたのは賢明な判断だつた。彼女が眠りについたのを確認して、イルミは浅いまどろみに身を委ねる。

しかし、それから2時間もしないうちだ。

リリスの起き上がる気配に、嫌でもイルミは覚醒する。眠れないなら眠れないでじつとしていればいいものを、落ち着きのない奴だと忌々しく思つた。立ち上がって部屋の中を歩き始めた彼女の気配を感じつつ、イルミは布団をかぶつたまま無視をする。けれども次にすり泣きが聞こえてきたときは、さすがに無視をしきれなかつた。

「リリス……？」

ここには二人しかいないはずなのだから、この声の主はリリスでしかありえない。だが、今まで脅したり殺したり色々やつたが、イルミはリリスが泣くのなんて見たことがなかつた。

思わず身を起こしたイルミは、そこでようやくリリスの姿を視認する。彼女は指令が書かれた額の前で棒立ちになり、そこで迷子の子供のようすり泣いていた。

「……なにやつてんの？」

いくらイルミが不測の事態に動搖しないといつても、この状況は理解できない。戸惑いながらとりあえず声をかけてみるが、リリスは泣くだけで返事を寄越さなかつた。「ねえってば」ふてぶてしい態度には慣れているが、こういう場合はどうしたらいいのかわからない。そもそも彼女がなぜ突然泣き出したのかもわからないのだ。

イルミは仕方なくベッドを降りて近づいていき、リリスの顔を覗き込んだ。上を向かせても彼女は別に抵抗するわけでも恥ずかしがるわけでもなく、ただぽろぽろと涙をこぼし続けている。その瞳はどこか虚空に向けられていて、イルミの存在にまるで気づいていないよう

だつた。

そんなリリスを見てようやく、イルミはリリスが“普通でない”状態だと気付いた。誰かに操作でもされているのかと目を凝らして彼女を上から下まで眺めたが、オーラを強く感じる部分はイルミが渡した指輪くらいのものである。

「リリス、オレがわかる?」

肩を掴んで強めに揺すると、緩慢な動作でリリスはこちらを見る。そして何を思ったのか、いきなりイルミに抱き着いた。

「おかあさん」

「は?」

咄嗟のことで受け止めてしまったが、こいつは何を言っているのか。そこまで気になったことはないが自分が女顔だという自覚があるイルミとしては、笑えない冗談だ。少しも気にはしていないが、いくら寝ぼけていたつてその間違いはないだろうと思う。

けれども、内心イラつきながら、イルミはリリスを引きはがすようなことはしなかつた。なぜかは自分でもはつきりしないが、抱き着いてきたリリスが不思議なことに泣き止んだからかもしれない。まだ涙の跡の残る頬を晒しながらぎゅつとこちらにしがみつく彼女を見ていると、不本意ながらキルアの小さい頃を思い出した。今も昔も兄弟の中で一番手がかかる子供だったキルアには、ぐずつて夜泣きのようなことをする時期もあったのだ。

「……寝ぼけてるにしても酷すぎるよね」

キルアにやつていた癖でそつとリリスの頭を撫でてやると、彼女は満足したように目を閉じた。そしてそのまましばらくそうしていると、すやすやと穏やかな寝息が聞こえてくる。イルミの腰のあたりに抱き着いたまま、どうやらリリスは眠つてしまつたらしい。もたれかかるように不安定になるリリスの身体を支えたイルミは、仕方なくその場に座りこんだ。いくら彼女が掴んで離さないとはいえ、イルミがどうしようもないと諦めるほどではないのに、不思議としがみつかれて悪い気がしなかつたのだ。寝ている彼女にはいつものふてぶつしさも、敵意もなにもなかつた。

翌朝リリスが目覚めたときには、全てが元通りの、いやそれ以上の
険悪さだつたが。

「そろそろオレもプレート探さないと」

ゼビル島での四次試験が始まつて2日目。

初日は三次試験を残り5時間というタイムで突破したためかなりの後続スタートだつたが、同着だつたりリスは番号順でイルミよりも先に出発することになつた。昨日からずっと彼女の気配を探つているもの、今のところ特に問題はない。あの奇行を警戒してリリスは昨晩眠らなかつたみたいだが、トリックタワーでの彼女の反応を知るイルミは、そもそもどううな、と一人愉快な気持ちになつていた。

混乱、驚愕、羞恥。

目覚めたりリスが見せた感情は、どれも珍しいものばかりだつた。というか、普段はだいたい憎悪や嫌悪しか向けられていないので、真つ赤になつて震える彼女が酷く弱い生き物のように見えた。

——大丈夫だつたはずなのに

うわごとのように何度もそう繰り返した彼女は、きっと自分が眠つた際にどうなるか全く知らなかつたわけではなかつたのだろう。今更になつて、彼女の家に侵入した際、ドアの内側のノブにチエーンが巻かれていた理由がわかつた。きっとゾルディック家にいたときも、同じような手段をとつていたのだと思われる。

しかし睡眠中に移動する癖のある彼女も、まさかイルミの腕の中で目覚めるとは思わなかつたに違ひない。抱き着いてきたのはそちらだと言つても、起きている間はずつと近寄らないで！と言われ続けて、正直ものすごく面倒だつた。面倒だつたのに、なんだかんだでその後の夜もこつそり彼女を寝かしつけていた。流石に起きた彼女に言いがかりをつけられるのは嫌だつたので、明け方頃にはちゃんと引きはがして元の位置に寝かせておいたが。

そんなことを考えながら移動していると、ちょうど視界の先のほう

にイルミはターゲットの男を見つけた。371番——名前までは憶えていないが、イルミは全員分の受験番号と顔を一致させられる。男の進行方向からして、おそらくこの辺唯一の水場に向かうのだろう。四次試験は1週間もの間、島に身を潜める必要があるので、普通の人間は水場の近くで待つていればいつかは必ずやつてくる。

運がいいな、と考えてスピードを上げ、先回りをすることにした。そしてその結果が、思わぬ男の懇願である。

「……ブ、プレートは差し上げる。しかし、死にゆく俺の最期の願いを聞いて、ここは一度見逃してもらえないだろうか」

男は格上のイルミを見ても、逃げることなく真っすぐに立ち向かってきた。おそらく根っからの武闘派タイプなのだろう。お陰でイルミは簡単にプレートを奪うことができたが、どうせ命乞いをするなら初めにやれば助かつたのに、と呆れた気持ちで男を見下ろす。

「別にいいけど。でも、その傷じやどうせ長くはもたないんじやない？」

「が、構わないんだ、感謝する。私は武人として、どうしても死ぬ前に戦つてみたい男がいるのだ」

「そう」

男は“ギタラクル”が喋ったことに驚いたようではあつたが、血の滴る身体のまま、感謝してどこかへ去つて行つた。男がこんな状態になつてまで戦いたいという相手は何となく想像がついたが、今はそれより先に片付けるべき“敵”がいる。男の末路を見届けるのは、ここで銃を構えている奴を殺してからでいいだろう。

イルミはひらりと跳躍すると、こいつは殺しちゃつていいかな、と考えた。



「ボクさあ、死人に興味ないんだよね。

キミ、もう死んでるよ。目が」

バイバイ、と呟いて、戦意はないとばかりに切り株に腰をかけたヒ

ソカを見て、あれはダメだな、とイルミは行動を起こした。わざわざ男を追いかけてまで成り行きを見に来たのはほんの気まぐれだが、気まぐれの分はきつちり責任を取る必要があるだろう。

「ごめんごめん、油断してて逃がしちゃつたよ」

男の顔面に針を飛ばし、今度こそしつかり絶命させたイルミは、そんなんわざとらしい嘘をつきながらヒソカの前に姿を現した。ヒソカはというと特に驚いた様子もなく、小さく肩を竦める。そんな彼の周りにも多くの紅血蝶が飛び交っていて、三次試験のダメージはまだ残っているようだった。

「ウソばっかり。

どうせこいつに戦いたい相手がいるからって、命乞いでもされたんだろう？ どうでもいい敵にまで情けかけるのやめなよ」

「だつてさ、可哀想だつたから。どうせ本当にすぐ死ぬ人だし、ヒソカ相手なら多少は面白いかなと思つてね」

「面白い？ こんな奴相手にもならないよ」

「うん。だからだよ。ヒソカ嫌がるかと思つただけど、嫌がる以上に無視されちゃつたからな。残念だよ」

「そ……、キミもなかなかイイ性格してるねえ」

ヒソカはふああ、と大きなあくびをすると、で、プレートは？ と首を傾げる。戦つてくれと言つてきた男を無視したくせに、彼の胸にプレートがなかつたことはちやつかり確認しているらしい。つくづく調子のいい奴だと思つたが、まだヒソカの点数が集まつてないのなら、不要な分はくれてやつてもいい。

「あるよ。その男でのオレは6点になつたから、こつちのプレートはあげる」

「80番か……これ誰の？」

「オレを銃で狙つてた奴。そつちはむかついたから殺しちやつたけど

ど

「ふうん、どうせならリリスにあげればよかつたのに」

イルミとしてはもう自分のプレートを集め終わつたので、後のことはどうでもよかつた。この試験内容ならばキルアが落ちることはな

いだろうし、放つておいて構わない。期日まで寝ようと思つて針での
変装も解いたのだが、ヒソカの言葉にぴたりと動きを止めた。

「……どうせリリスはオレからの施しなんて受け取らないよ」

「相変わらずだねえ。少しほ仲良くなつたかと思つたのに。

三次試験、一緒だつたんだろ?」

「別に何も変わりないけど」

「そうかな、キミにしてはいやに時間がかかっていた。それに、ゴール
した時のリリスの様子もおかしかつたし」

「あの女がおかしいのはいつものことだよ」

本当にこいつは要らないところで察しが良くて困る。しかしイル
ミはリリスの“アレ”について話すつもりはないので、いつも通りに
白を切つた。前にも言つたが、家族になる者の情報を漏らす気は無い
し、リリスの“アレ”を知つているのは自分だけでいいとも思う。余
計な詮索はやめろと言つたはずなのに、どうしてこうもしつこいのだ
ろう。

イルミはヒソカの存在を無視して、ざくざくと土を掘つて眠る準備
を始める。なんとなくこいつにだけは、イルミが夜にリリスを監視し
ていることを知られたくない。

「じゃ、オレは期日まで寝るから頑張つてね」

それだけ言うと土の中にはつぽりと收まり、もう出てこないという
意思を表明する。ヒソカだつて流石に馬鹿ではないので、キルアやリ
リスのプレートを狙うようなことはしないだろう。

今日の夜も、大人しくしてればいいけど。

イルミは暗がりの中、静かに目を閉じる。

すっぽりと収まつた即席の個室の中は、泣きつかれた後のリリスの
頬のようにしつとりと湿つていた。

30. ストックホルムの夜明け前

四次試験会場として連れてこられたゼビル島は、山一帯を所有するゾルディックの敷地から比べれば随分と狭かつた。ヌメーレ湿原のように危険な生き物が生息しているわけでもなく、他の受験者も雑魚としかとらえていないキルアにとつては実に面白味に欠ける試験内容である。

しかし、三次試験を残り時間1分で通過したキルアの出発はほどんど最後で、おまけにターゲットが誰なのかもわかつていらない。あまり舐めてかかつて、足元をすくわれるようなことは避けるべきだ。

キルアは初日、自分から獲物を狩ることをせず、島の地理や他の受験者の動向を窺うことに徹した。そしてその傍ら、ずっとリリスのことを探していた。

「くそっ、なんで全然会わねーんだよ」

幼少期から命がけの鬼ごっこやかくれんぼを経験してきたキルアが、この狭い島内でリリスの気配を一度も確認できないのはどう考へてもおかしい。彼女だつてそう弱いわけではないことくらいわかっているが、キルアには一応プロの暗殺者としてのプライドがある。家業を継ぐのが嫌で、この家出だつてそのレールから逃げ出すために行つたのに、それでも自分がこれまで積み上げてきたものが通用しないというのはどうにも我慢ならなかつた。

だが、ここで一つ弁解をしておくと、キルアは何も自分のプライドの為だけにリリスを搜索しているわけではない。

トリックタワーの頂上で聞かされたリリスの夢遊病の話が気になつて、放つておけないと思つているのだ。正直、話だけではにわかには信じがたかったけれども、クラピカが嘘をつくとは思えない。囚人たちとの賭け事で彼の性格がいつそ面倒なほど生真面目だということはよくわかつたし、それ以前にクラピカにそんな妙な嘘をつく理由がないからだ。

そしてキルアの心配を増長させるように、三次試験以降、リリスの様子は明らかにおかしかつた。試験の内容を聞いてもはぐらかしてばかりで、単身だつたのか、誰かと一緒にだつたのかすら言葉を濁す。けれども言わないということは誰かと一緒にだつたと考えるのが妥当で、リリスは嘘をついても無駄だからうやむやに誤魔化したのだろう。

「あの針男も全然見つからねーし……」

四次試験をリリスの前後にスタートした人物。

それがリリスと一緒に三次試験を通過した者に違ひなかつた。もちろんキルア達の例があるから、いつたい何人組だつたのかまでは定かではない。しかし受験者の顔ぶれを見て、リリスが関わつたことを口にもしたくないレベルとなると、ヒソカを除けばもう他はあるの不気味な針男くらいしかいないような気がする。あの男は容姿も纏う雰囲気も異様の一言に尽きて、リリスのような若い女がほぼ3日も共に過ごすには大変つらい相手だろう。

夢遊病という持病を抱えて、得体のしれない男と一緒にという状況。それはおそらく激しくリリスの精神をすり減らしたことだろうし、キルアはこの四次試験こそ自分の手でリリスを守つてやりたいと思つて いる。夜の見張りをすることで、彼女を安心して眠らせてやりたい。

そう思つて、事前に彼女のターゲットの番号まで聞いたというのに……。

これだけ探しても出会えないのは、リリスのほうがわざとキルアを避けて いるとしか考えられなかつた。

「はあ～、俺、今すつづー機嫌悪いんだよね。ずっとつけまわされたつて隙なんか見せねーし、来ないならこっちから行くけど？」

キルアはそれまでの独り言から、完全に人に話しかける口調に変えて、誰もいない森に向かつて声をかける。狩人気取りの残念な獲物が、すぐそばの茂みで息を殺しているのが手に取るように分かつた。「ほんと嫌なんだよな～」

ターゲットが偶然お互いになる確率は高くないし、向こうが追つてくるということは仮に倒したとしても1点分の価値しかないだろう。ずっと無視を決め込み、来たら返り討ちにしてやるくらいに思つていたが、いい加減監視され続けるのもうんざりだ。

キルアは後方の茂みに向かって、早くしてくんないかな、と煽り始める。その時、隠れていた男が「兄ちゃん！」と声を上げて、キルアの前に3人の男が姿を現した。

「うーん。3人もいれば1点ずつだとしてもこれでクリアか」

ただただ鬱陶しいと思つていたが、プレートも集めとうつぶん晴らしが同時にできるとなればそう悪くないかもしない。

キルアは少しやる気になつて目の前の男達を見据える。それから頭の片隅で、こここの兄弟はよく似ているな、とどうでもいい感想を抱いた。



初日はみな様子を窺つているのか、島全体で特に目立つた動きはなかつた。こうした自然を利用した地形なら、戦闘力に自信がない者でも罠を張ることで優位に立てるだろう。そうした罠や待ちの姿勢に入る者がいれば、またそれも格好の標的となる。

リリスは今回の試験では、何よりもスピードを重視した。つまり、みなが互いの出方を窺い、準備をしている中で、機先を制すというわけである。

「1点でも、無いよりマシだよね」

リリスは手に入れた221番のプレートを、奪われないように服の内側へと隠した。このプレートの持ち主はカキンの辺境出身なのか独特の訛りを持つ男だつたが、彼もまた戦闘向きではないらしく、島の南東にある洞窟に引きこもつて獲物がかかるのを待つ予定だつたらしい。肝心のリリスのターゲットはとくに、80番の、確かスナイパーの女だつたはずだ。リリスが準備前の221番に遭遇できたのは、本当にただの偶然だつたのである。

今のリリスは指輪のせいで念が使えないが、逆に言えば精孔を閉じる“絶”ならば使えた。おまけにゾルディック家での“花嫁修業”はここで遺憾なく効果を發揮し、全く存在を気取られることなく221番を気絶させて、まんまとプレートを頂くことに成功したというわけである。

目が覚めた男はきっと自分の不覚を嘆くだろうが、この試験は別にプレートを奪われた時点で即終了というものではない。まだ挽回のチャンスはあると考えて、おそらく当初の計画通り洞窟で待ち伏せをするだろう。

さて、初日はそんな風に率先よく1点を手に入れたリリスだったが、その後の収穫はさっぱりと言つていいほどだつた。まず他のまともな受験者は全員様子見の姿勢で身を隠しているし、見つけたとしても既に罠を張られた後では迂闊に近づけない。また、リリス自身敵から身を隠すことや、これから1週間のサバイバルを見据えた行動をとつておかなければならなかつた。

まず確保すべきは、水と食料。それから安全な——敵に見つかりにくいか、近づく敵を発見しやすい場所である。

特にリリスの場合は、夜をどのように過ごすかが重要な問題だつた。

「はあ……」

最初の夜を眠らずにやり過ごしたリリスは、“安らぎの道”での出来事を思い出し、知らず知らずのうちにため息をついた。もうすぐ2日目の夜を迎えるが、プレート集めに進展は無し。水場は数か所チエック済みで、いくらか補給も済ませたが、やはり一番の問題は安心して眠れる場所だ。

眠つた自分がどのような行動をとつてているのかをはつきりとは知らなかつたが、起きたときに知らない場所にいるうえ、頬には涙の乾いた後がよく残つていた。

——まさかイルミに、あの姿を見られるとは。

暗い森の中を歩きながら、おそらく今の自分の顔面は、闇夜の中で

もそうとわかるくらい赤く染まっているだろうと思った。思い出しただけでもこうなのだから、イルミの腕の中で目覚めてしまつた朝はもつと耐え難かつた。リリスのあの悪癖は決して毎夜のことではなかつたのに、本当に間が悪いとしか言いようがない。

しかしリリスの心をかき乱したのは、何も羞恥心や屈辱感だけではなかつた。感情で言うならばおそらくそれは“怒り”に近い。限りなく怒りに近い、“当惑”であつた。

どうしてイルミは憎いはずの自分を殺さなかつたのか。どうしてあのような弱みを見せたりリリスに優しくしたのか。

それがどうしても理解できず、リリスはイルミへの今後の対応を決めかねている。あの男は恐ろしい男だ。自分の家族を守るために、リリスを何度も殺そうとした。冷酷で、自己中心的で、自分の“家族”以外はどうでもいいと思っている男。リリスは初対面でそれを見抜いたからこそ、ずっとイルミが嫌いだつた。この男はリリスを排斥して、絶対に受け入れない障害だと思つていた。

——それなのに、どうして今更……。

いつの間にか思考の海に沈んでいたリリスは、草木を踏みしめる音にハツと顔をあげた。もちろん自分ではない。いくらぼうつとしていたつて、さすがにそんなヘマをするようなリリスではないからだ。しかし、逆に言えばここまで残つた受験者でそれほど迂闊な者もないだらう。

つまり相手はわざと音を鳴らしたのだ。リリスを“獲物”とみなして追い立てるか、いたぶるか、その理由は定かではないものの、明らかにリリスは今狙われている。そして“狩人”はその気配を隠すこともなく、正面からゆつくりとリリスとの距離を縮めてきた。

「やあ、リリス。キミに会えるなんて嬉しいねえ」

「……ヒソカ」

月夜に照らされて浮かび上がつたのは、おそらく一番この試験のルールを楽しんでいそうなピエロだつた。一次試験で勝手に受験者狩りを行つていた彼が、合法的に他者を狩れる機会を逃すはずがな

い。

しかし警戒するリリスに対して、ピエロはいつものように厭らしい笑みを浮かべただけだつた。

「ククク……そんな怖い顔をしないでくれよ。我慢できなくなるじゃないか」

「私を狩りにきたんじゃないんですか」

「確かにそろそろ退屈していた頃だけど、キミに会ったのは本当に偶然さ。それに、今はまだイルミを怒らせたいわけじゃないしねえ」

ヒソカはよく嘘をつくから、そう言われてもすぐには信用できない。リリスはできるだけ平静を装うと、戦闘を避けるためにヒソカの喜びそうな展開を必死で考える。この男は少しでも弱者の姿勢を見せる退屈してしまう。こいつの好みは強者に“勝つ気”で立ち向かってくるような人間なのだ。勝てないかもしれないが思い出にとか、勝てないかもしぬないが、やけくそで、とかでは決して満足させられない。

リリスは深呼吸すると、半ば睨みつけるようにしてヒソカの瞳を正面から見据えた。

「偶然だつたのなら、私にも運が向いてきたということでしょうか？」

「おや、ボクを探していたのかい？」

「ええ。プレート持つてます？ 一次試験での借りをそろそろ返してほしいなつて」

それを聞いたヒソカの目は面白がるように細められる。「ふうん、ボクがターゲット？」仮にそうだつたとしても、それならリリスは別の受験者3人分で稼ぐ。ヒソカなら、そうした雑魚のプレートを既に何枚か持つてているのではないかと予想しただけだ。

「いえ、私のターゲットは80番です。80じゃなくても、ヒソカにとつて1点にしかならないプレートがあればほしい」

この試験において、自分自身のプレートは3点だ。いくら醉狂を好むヒソカとしても、ヒソカのプレートをくれと言えば断られる可能性が高い。しかし余りならば“借り”があるヒソカは渡してくれるかも知れないし、無ければそのまま交渉は不成立という体でこのまま

無事に逃げられるだろう。

ヒソカはリリスの要求を聞くと薄つすらと浮かべていた笑みを消して、それから次の瞬間、声を上げて笑い出した。

「キミは運がいい」

「……」

流石にここまで大きな反応を予想していなかつたりリスとしては、ヒソカの高笑いに肝を冷やしたくらいである。しかし彼の方はとうとやつぱり上機嫌で、懐から一枚のプレートを取り出しリリスに向かって差し出した。

「待つて、うそ、ほんとに80番？」

「これはね、イルミからもらつたやつなんだ」

渡された番号を見て、リリスの声は思わず上ずる。けれどもイルミの名前を聞いて、胸を満たした喜びはすぐに何とも言えない居心地の悪さに取つて代わられた。ヒソカが言つたように本当に運がいいとは思うのだが、イルミから流れてきたプレートだと思うとどうしても素直に喜べない。

そんなリリスの心境を見透かしたのか、ヒソカは腕を組んでこちらを見下ろしてきた。

「複雑そうだねえ」

「……まあ、でも、ありがたくもらつておきます」

「そういうえば三次試験、イルミと一緒にだつたんだろう？ 何かあつたのかい？」

「……」

リリス達より後にゴールにたどり着いたキルアは誤魔化したけれども、先に到着していたヒソカにはリリスとイルミが同じ道だつたことは知られている。普段の険悪さを鑑みれば3日も一緒に何もないかつたと言い張るのは無理があるし、どうせ隠せば隠すだけヒソカは興味持つて詮索してくるだろう。

リリスは小さくため息をつくと、観念して自分の失態に触れない部分だけを話すこととした。

「……途中までは協力する道だつたんですけどね。最後は相手を殺す

か、64時間その場で待機かを選ぶ道だつたんです

あの道の“安らぎ”の定義は、別に気絶でも良かった。だがそもそもイルミがリリスにそんな温情をかける理由はないし、実際彼はリリスを気絶させることすら選ばなかつた。リリスにしてみれば、そこも未だに引っかかっている点なのである。

「じゃあイルミはキミを殺さず、64時間待つたんだ？」

「ええ。らしくないですよね、あんなに殺そうとしてたくせに……。私にはある人が何を考えてるかわからぬ」

「イルミは家族しか大事にしないからね」

「だからですよ」

イルミは“リリスを殺すメリットがない”と言つたが、逆に言えば“生かすメリット”もさほどあるように思えない。キルアを家に縛る道具としてだつて役に立たなかつたし、試験中の監視もイルミだけで事足りるはずだ。脱落者が死んでいようが生きていようが合格者と顔を合わせることなどないのだから、イルミはリリスを殺してリリスの携帯からキルアにメールを送ればいい。

——私は落ちちやつたけど、キルアは残りの試験頑張つてね。試験後に合流しよう

そんな風にでも送つておけばキルアはそのまま試験を続行するだろうし、試験が終わつてリリスが死んだと判明する頃にはイルミもライセンスを手に入れている。そうなれば後はキルアを回収して終わりだ。リリスは試験中の事故死扱いで結婚話も立ち消え、自分の家出のせいでリリスが死ぬことになつたのかも知れないとキルアもこれから行動を自粛する。

こうやつて考えてみれば、むしろメリットの方が大きいかもしれなかつた。

「うーん、それはきっとイルミの中でキミはもう家族になりつつあるんじゃない？」

「それが人質としての結婚でも？」

「加害者が被害者に特別な感情を抱くのはそう珍しいことでもないよ」

ヒソカが言っているのはリマ症候群のことだろう。しかしあの男がリリスに同情したり、好ましい感情を向けたりするのはどうも想像ができない。これまでの殺されかけた経験を考えれば考えるほど、その感情はあまりに倒錯しているとしか言いようがなかつた。「もちろん、その逆もね」そう付け加えて意味ありげに笑つたヒソカに、リリスは瞬間的にかつとなる。

「ありえない！」

いくら指輪で支配下に置かれているとはいっても、リリスは心まで言いなりになつたつもりは無い。極限下に置かれた被害者が加害者に対して心理的な繋がりを築く事例は確かに存在するけれども、それは結局のところ生存戦略だ。生き残るために強者に迎合する道が最も賢く、脳が生きるために自分を騙しているに過ぎない。たとえ無意識下の戦略だったとしても、リリスは自分がイルミに心を許すなど考えたくもなかつた。

だが、リリスの強い否定はかえつてヒソカを楽しませたようだつた。これではまるでリリスがイルミのことを意識しているみたいだ。正直なところ、ヒソカの邪推には腹が立つて仕方がないが、今は何をどう弁解しても無駄だろう。リリスはそれ以上この話題に触れることはやめて、半ば押し付けるような形で221番のプレートをヒソカに渡した。

「じゃあもうこれはいらなくなつたのであげます」

「おや、いいのかい？ 今回は単なるプレート交換じゃなくて『借り』の返済だつたんだろう？」

「ええ。ですからそのプレートをあげる代わりに、残り期間私に関わらないでください。そつちはもともと私と戦う気なんてなかつたみたいだし、あなたにとつては80番のプレートも221番のプレートも同じ1点の価値なんでしょう？」

この試験で私を狩らないだけで借りの返済ができ、おまけに点数の損もない。あなたにとつてそういうのは、こちらにとつても実にありがたい話だ。ここまで残つた受験者は皆そこそこの手

練れだとはいって、やはり念を使えて人殺しも躊躇わないヒソカやイルミの存在は群を抜いて危険である。三次試験で不戦の姿勢を見せたイルミが今更リリスを狩りに来るとは思えないのに、ヒソカを封じることができればリリスの安全はかなり保証されるに違ひなかつた。「なるほどねえ……。うん、リリスが元気そうでよかつたよ」

「はい？」

「いや、なんでもないよ。じゃあこれは貰うから、その調子で頑張つて」

しかし、断られるとは思つていなかつたものの、ヒソカのこの反応は意外でしかなかつた。彼は困惑するリリスを置いて、じゃあ、とあつさりこの場から去つて行く。何をもつて元気と判断されたのかよくわからぬが、ひとまず危険は去つたらしかつた。点数もこれで揃つてしまつたし、上手くいきすぎて逆に不安になるくらいだ。

しかし、なにはともあれ一人になつたリリスは、いよいよ本格的に隠れる場所を探すことにした。

念が使えた頃はよく他人に憑依して、無防備になる本体を土に埋めて隠していくがそういうわけにもいかない。いや、案外いけるだろうか。魂を抜いた後の自分の身体については、仮死状態ではなく、ちゃんと心拍も呼吸もあることを確認している。リリスの精神が戻らなり限り外的な刺激で目覚めることはないが、状態としては眠っているのとそう大差ないだろう。

つまり、いつものように空氣穴さえしつかり確保すれば、土中を避難場所にするのも意外とありかもしない。今回は意識がある分、土の中に埋まるというのは怖いかもしれないが、狭い土の中は例の悪癖の対策にもなるのではないだろうか。

リリスは少し開けた場所に出ると、試しに足元の土を掘つてみるとした。木から離れているので根っこにぶつかるようなことはないものの、土が予想以上に固くて全然掘り進まない。せめてシャベルのようなものがあればよかつたのだが、さすがに素手だけで人が入れる深さと広さに掘るのはかなり大変だろうと思われた。

「周が遣えたらなあ……」

周でその辺の木の棒でも覆えば、これくらいの穴掘りは随分と楽になる。道具を使わずに硬でそのまま手を強化してもいいが、パンチで穴を開けるようなことをせず、なるべくなら静かに掘りたいものだ。

リリスは手近な長さの木の枝をぽきりと折ると、それを何本も一纏めにして握りやすい太さにする。それから大きめの葉っぱをその先端に結び付け、葉に折り目をつけて形を整えた。「一瞬……一瞬だけなら、大丈夫かな」イルミは確か、発ほど高密度までオーラを高めれば指輪が爆発すると言っていた。周は纏の応用技とはいえ、オーラの量は多少加減が効くし、爆発の前には痛みを与える警告段階もある。試すだけ試してみて、無理だと思えばやめればいいのではないか。自分の念を遣える限界を知ることも、この指輪を攻略するヒントになるかもしだれない。

リリスは来る苦痛を想像し、すうはあと大きく深呼吸する。それからまずはごくごく薄いオーラの層を自分の身体と即席のシャベルに纏わせてみた。途端に全身を押しつぶされるような痛みが襲ってくるが、ゾルディック家の修行のお陰か、この程度ならば耐えられないことはない。問題はシャベルのほうの強度で、土に突き刺すことは可能ながらも素晴らしい作業が樂になるわけではなかつた。葉っぱで固い土を掘るのはすごいことなのだが、せいぜいプラスチック製の手持ちスコップ程度しか役に立たない。それではあまり大変さは変わらないのだ。

「うーん、やっぱりもうちょっとよつと……」

恐る恐るオーラを濃くしてみるが、やはり一定のオーラ量を超えたあたりで、立つていられないほどの激痛が走る。団らすも地面に伏せる格好となつたりリスは、自分の惨めさとあまりの不自由さに段々腹が立つてくる始末であつた。

爆発つて、本当になんなんだ。いつそ指輪の効果が強制絶状態なら一思いに諦められたのに、痛みに耐えれば少しは遣えるというこの状況が返つてもどかしくて仕方がない。やはり術者の性格がとことん捻じ曲がっているのだろう。

イルミの、あの飄々とした表情を思い浮かべたりリスは苛々して、

伏せたままドンと強く地面を叩いた。それからハツとしたように、今叩きつけたばかりの自分の拳をしげしげと眺める。

「そつか、本当に掘る一瞬なら……」

オーラは術者の体内、体外をめぐるもの。

そのため、イメージとしては膜や湯気のように繋がった状態を想像するが、実際には応用技の硬で使う通り、部位ごとにオンオフの切り替えが可能な代物である。

今回リリスが行いたい周は纏の応用技であるため、道具を身体の一部としてその周囲を常にオーラで覆うようなイメージをしていたが、実際念による強化が必要なのはシャベルが土に触れる瞬間だけ。つまり今回の場合、要となるのは流の技術。纏うオーラは極最小でいいので、インパクトの瞬間だけすばやくオーラ量を変化させればいいのだ。幸いにも、先ほどの練習でオーラ量による痛みの上限下限は把握できた。瞬間的な痛みなら、耐えきつて見せる。

リリスはゆっくり立ち上がり、ごく薄いオーラの層を身にまとめる。それから足を肩幅に開くと、腰を落として「はつ！」という掛け声のもと、即席のシャベルを深く土に突き刺した。もちろん、シャベルが土に触れる瞬間、流れるオーラ量を増大させている。

「つ、やつた！ できた！」

襲い来る痛みにぐらり、とよろけそうになるが、前みたいに倒れ込むほどではない。肝心の地面の方は、歪ながらも巨獣が残した爪痕のように深く抉れていて、リリスは思わず歓喜の声を上げた。

「なにやつてんの」

「ひつ！」

喜びに打ち震えていたのも束の間、後ろからいきなり声をかけられリリスは息が止まりそうになる。確かに目の前のことに夢中になりすぎていた。慌てて振り返れば、この島におけるもう一人の死神。リリスは最悪の想像に身を強張らせた。「な、んで……まさか私がターゲット？」そういうことなら彼が三次試験でを見せた、謎の温情など関係ない。

けれどもイルミはリリスの質問に対し、自身の左手を掲げて見せた

だけだつた。

「違うよ。オレはとつぐに集め終わつて寝てたところ。でもリリスが念を使つてるつてわかつたから、自殺でもする気なのかと思つてさ」「どうやら彼はリリスの様子を見に来ただけらしい。対になつた指輪は、念の使用をリリスに警告する一方でイルミに通達する機能もあるのか。とことん念入りな設計に呆れるも、イルミのターゲットがリリスでないのならどうでもいい。今回リリスは別に、自殺をするつもりで念を使つたわけではないのだ。

「自殺なんてしない。私もプレートを集め終わつたから、隠れようと思つてたところ」

「土の中に？」

「そうだよ」

イルミの視線が無残に抉れた地面の方へ向いて、なんだかリリスはいたたまれなくなる。表情こそいつも通りの能面だが、いいとこ育ちのイルミはきっと内心でリリスのことを馬鹿にしだらう。

え、土の中で寝るの？流星街のやつってモグラみたいだね。あ、そうか、家がないから仕方ないのか。

そんな被害妄想を脳内で繰り広げたりリスは、ついつい目の前のイルミに敵意のこもつた眼差しを向けてしまう。もつともイルミは慣れっこになつているのか、リリスに睨まれても特に何も感じていないうであつた。

「本当なら“身体だけ”埋めて隠したいところだけど、生憎そこまでの念は今遣えないから。あなたがこれ外してくれるつていうなら話は別だけど」

「冗談」

「あ、そ。わかつたのならもういいでしょ。放つておいて」

リリスは自分で先に睨んでおきながら、ふい、とすぐに視線を反らした。やつぱりイルミの顔は見たくない。イルミの顔を見ていると、あの夜の失態を思い出してしまつて耐えられないのだ。「だいたい私が自殺したところでどうでもいいじやない」そのせいで普段の冷静さもどこへやら、言わなくていいことまで口走つてしまつた。

「なんでそんな怒つてるの？」

「別に怒つてなんかない」

「うそ、怒つてるよ。だつてリリスは普段嫌味っぽいけど、怒るとストレートな物言いになるから」

「……」

そんな自分の癖など知りたくもなかつた。しかもそれを指摘してきたのが自分を長らく目の敵かたきにし、何度も殺そうとした男だなんて何かが間違つてゐる。「なんなのよ……一体」リリスは一向に立ち去る気配のないイルミに、とうとう我慢ができなくつて感情をぶつけた。

「あなたのこと、ちつとも理解できない。一体何を考えてるの？」

「それはこつちの台詞もあるね。オレもリリスが何を考えてるのかさっぱりだよ」

向かい合つたイルミは、別にリリスをからかつてゐるわけではないようだつた。いつも通りの真顔で、心底不思議そうに首を傾げている。

そこには今まで何度も向けられていた敵意や嫌悪は一切なく、口論になるつもりで身構えていたリリスは肩透かしをくらつたような気分だつた。

「……もう一度だけ聞く。三次試験で、どうして私を殺すなかつたの？」

「何度も聞かれてても同じだよ。あの場でオレにお前を殺すメリットがない」

「じゃあ……メリットがあれば私を殺す？」

リリスの母親はメリットがあつたからリリスを産み、そして殺そうとした。血の繋がつた母親ですらそだつたのだから、他人で、ましてや敵対していたこの男がリリスを殺さないだなんてそんなことがあつていいはずがない。「うん」誤魔化しは無意味だとでも言うようにイルミを睨みつければ、彼はリリスの期待通りにあつさりと頷いた。

頷いて、それで終わればよかつたのに、イルミはその後も言葉を続けた。

「と、言いたいところだけど、家族は殺さないよ。家族はね」

「……つ、私はあなたの家族じゃない！」

「今は違つても、いずれそうなる」

自信たっぷりに告げられた言葉に、頭がくらくらした。もちろん、ときめきや羞恥なんてそんな可愛らしい理由ではない。リリスのこれまでを覆すようなことを、リリスがずっと心の底から望んで、それでも手に入らなかつたものをあつさりと差し出され、どう反応していいのかわからなかつたのだ。

家族だなんて、そんなものまやかしだ。そんな簡単に手に入るはずがない。

初めから全てを持つているこの男には、リリスの気持ちなどわかるわけがないのだ。

そう思うと、再び彼を憎いと思う感情がぶわりと湧き上がつた。初めてゾルディック家で会つたあの日、繩張りを守らんとするような彼の瞳が、排斥される立場のリリスにはものすごく憎かつたのだ。そして同時に、守るべき家族がある彼も、彼に守られる家族も、どちらも心底羨ましかつた。

「オレからも一つ質問いい？」

しかしイルミはそんなりリリスの内心の荒ぶりも知らず、いつものように飄々とした態度で会話を続けた。一応は確認の体ていこそとつているが、リリスが良いとも悪いとも言わないうちから好き勝手に喋りだす。

「もしかしてオレって、リリスの母親と似てたりする？」

「……は？」

「寝言がなんだか知らないけど、お前がそう言つたんだよ。

で、リリスが初めからオレのこと嫌つてたのつて、そういう理由かなつて」

「全然違う！」

イルミの質問は、今リリスが二重の意味で最も触れられたくない話題だった。あの夜の醜態を取り上げられるのも嫌だし、母親の話などもつてのほかだ。しかし頭に血が上れば上るほど、いつもは自分でも

小賢しいと思うほどよく回る口がちつとも動いてくれなかつた。

「そなんだ？じゃあどうしてそんなにオレを敵視してたわけ？」

「……質問は一つつて言つたじゃない」

「あ、それもそうか。うーん、まあいいよ」

そう言つて顎に手をやつて自己完結した彼は、それで、とリリスがぐちやぐちやに掘つてしまつた地面を見る。「そこで寝ることは確定？」抉れ具合は合格だが、今まであまり寝床としてふさわしくない。内心ではもう少し試行錯誤が必要だと思つていたが、リリスは意地になつて頷いた。

「そう言つたでしょ」

「ちゃんとしつかり埋まるんだよ。お前は寝相が悪いみたいだから」

「……ほんつと最悪。どつか行つて」

「はは、わかつたよ。じゃあこれはサービス」

そう言つて地面にかがみこんだイルミは、その手でざくざくといとも簡単に穴を掘る。リリスのとは違い、綺麗に一人分の空間を作つた彼は、満足したように「うん」と頷いて立ち去つた。

「ほんと、なんなのよ……一体」

その後ろ姿はすぐに闇に溶けて見えなくなつたが、その後もリリスは長いこと彼が去つた方向を睨みつけていたのだつた。

31. ゆりかごの腕

ゼビル島の夜は人工の光がなくても、星明りと月明かりで十分周りがよく見えた。

先ほどからイルミはちようどいい大きさの岩に腰を下ろして何をするわけでもなくぼんやりと過ごしていたが、もちろん見た目ほど油断しているわけではない。何でもない顔をしながら神経は刃のように研ぎ澄まされているので、もしも不用意に近づく者がいればすぐさま針の餌食となるだろう。そもそも、念能力者でなければイルミの存在に気付くことも難しいに違いなかつた。暗殺者として普段から気配を消すのは癖のようなものだし、そこへさらに絶を行えば、こうやつて堂々と姿を現していてもその存在は酷く希薄である。もしかすると四次試験はこれまでの試験の中でも一番つまらないかも知れないと、そんな柄にもないことまで考えてしまう。

(あ、変装解きっぱなしだった)

急に吹き付けた風が長い髪をそよがせ、それを手で押さえたイルミは、自分の顔面に針が刺さつていなことを今更のように思い出した。自分のプレートを揃えた後は完全に寝るつもりだつたので抜いてしまつていたのだ。それなのに、リリスが急に念を使つたせいで叩き起こされたにも等しい。今からもう一度変装しなおすか迷つたが、それもなんだか億劫だつた。正直キルアにさえ見られなければ問題ないし、イルミが弟の気配に気づけないはずもない。あの変装は大幅に骨格をえるので、やつているほうはなかなかにキツイのだ。

己の変装についてまあいか、と随分適当な判断を下したイルミは、それにしても、と掘り返されて少し色の変わつた地面を見る。この下にはリリスが埋まつているのだが、もちろんイルミが殺して埋めたとか、そういう話ではない。

まさか自分以外で、土の中に寝ようとすると人間がいるとは思わなかつた。野宿をするなら外敵に襲われにくく寒い気候でも保温性の高い土の中がよい、というのは知識として父親から習つたことだが、

イルミは実際にシルバがそうしているのを見たことがない。

基本的にゾルディック家に依頼が来るような人間は、莫大な依頼料に見合うほど恨まれている一方、表の世界、裏の世界問わず、成功者であることが多いのだ。そんな相手は核シェルターばかりの堅牢な建物に護衛をわんさか連れて引きこもることはあっても、野宿の必要な山中に身を隠すことなどほとんどない。だから、土中での睡眠方法は、本当にあれば便利くらいの知識でしかなかつた。

イルミも今回、滅多にない機会だと土の中を試してみたが、やはりあまり快適なものではなかつた。仕事の一環だから仕方がないとは思つているものの、正直に言えばシャワー付きの個室が欲しいところである。一方リリスは特に文句も言わずにこうした状況に適応しているように見えるが、やはり流星街出身というところが大きいのだろうか。ゾルディック家に来てもある程度の毒ならば平気な顔をしているし、そう言えば彼女の念だつて自らの体を危険に晒さず細かい操作が可能なので暗殺にうつてつけだ。

イルミは父親同様、血統や家柄には拘るつもりはないので、こうやつて条件を見るとリリスは妻としてはなかなかに優良物件かもしれない。それにしてもまさか自分がこんなにも早く自分が身を固めることになるとはと、イルミはどこか他人事のような気持ちで左手に視線を落とした。

さて、今までのイルミならばきつと、これ以上リリスについて考えることはしなかつただろう。重要なのは『今現在』でしかなく、過去などどうでもいい。他人の念能力について知りたいと思うことはあつても、それが形成されるに至つた過程や事情などにはまつたくもつて関心がないのだ。

しかしリリスに関しては、どういうふうに生き、どうして今のように育つたのか少し気になつた。それこそがずっとイルミが気になつてゐる、『なぜリリスはイルミを目の敵かたきにするのか』という疑問を紐解く鍵になるだろうと思つてゐる。だから先ほどは『母親と自分の顔が似ているのか』と聞いてみたのだが、残念ながら不発だつた。リ

リスはイルミが何を考えているのかわからない、と言うけれど、イルミから見たりリスのほうが随分と謎に包まれている。

(「これ、もし今あの夜泣きが始まつたらわざわざ土から出てくるのかな……」)

それは想像しただけでも、なかなか強烈な光景だった。何も知らない者が見れば、死者が起き上がったと誤解するかもしれない。

そもそも、土の中で泣きだしたら呼吸はうまくできるのだろうか。今は中が空洞になっている木を空気穴代わりに数本刺しているようだが、あの状態のリリスは何かと危険だ。自分のいる場所も目の前の相手もわかつていなかつたのだから、パニックを起こしてしまうかもしれない。

「はあ、世話が焼けるな」

思わずこぼれたイルミの咳きは、しんとした夜の闇の中へ吸い込まれていった。他にやることもないし、となんとなくリリスのことを見張っていたが、そろそろ彼女の呼吸が寝息に変わつてから2時間ほど経つ。もしもあれが起こらなければ朝方にでもまた埋め直せばいいかと考えて、結局イルミは彼女を掘り起こしにかかった。

そうして見つけた土の中で眠るリリスは、死体というより胎児のようだつた。土よけに被せてあつた大きな葉を退ければ、背中や手足を丸めた状態ですやすやと眠つている。これにはさすがのイルミも神経の太い女だなど呆れたが、呆れながらも衣服にかかつた土を払つてやつた。

「ん……」

背中と膝裏に手をまわして抱き起せば、リリスはむずかるように鼻を鳴らす。しかしそのまま子供を抱っこする要領で膝の上に乗せると、落ち着いたのか大人しくなつた。こうやつて静かに寝ていれば、可愛げがないこともないと思う。眠つた人間特有の温度と重みは、不思議とイルミ自身をも穏やかな気持ちにしてくれた。余計な邪魔さえ入らなければ、このまましばらくこうしていたことだろう。

「覗きなんて良い趣味だね。そこにいるんだろ?」

イルミが暗い森に向かつてそう声をかけると、闇の中に鮮やかな色彩の男がぬうつと浮かび上がる。「……おやおや、見つかってしまったみたいだね」おびただしい数の紅血蝶にまとわりつかながら、ヒソカはゆっくりとこちらに近づいてきた。

「そんなねつとりとしたオーラ出しておいてよく言うよ」

「ボク今すつごく機嫌がいいんだよねえ」

見ればヒソカの胸には、彼のものではない286番のプレートがつけられている。紅血蝶が過剰に反応しているのは、どうやら返り血のほうらしかった。

「ターゲット見つけたんだ」

「うん、でもそれはどうでもよくってさ。はあ……青い果実って本当にそそるよねえ」

てつきりターゲットが骨のある相手だつたのかと思つたが違うらしく、一人で悦に入つているヒソカはいつもの五割増しくらいに気味が悪い。「あんまり近寄らないでくれる?」無意識のうちにリリスの身体を庇うように引き寄せると、ただできえ上機嫌な様子のヒソカはさらに笑みを濃くした。

「まつたく。お楽しみの最中だつたのはわかるけど、そう邪険にしなくてたつていいじゃないか」

「お楽しみ? これはリリスが寝相悪いくせに土の中で寝るつて聞かないからだよ。

さすがに埋もれて死んだんじゃ可哀想だつたから」

「聞き苦しい言い訳はやめなよ。彼女が起きてる間もそうやつて優しくしてあげればいいのに」

「だからただの気まぐれだつてば。ヒソカだつてたまにやるだろ」

「ボクはちゃんと相手を選ぶよ。本命にはそこまで回りくどいことしないさ」

「……」

機嫌がいいのはわかるが、本当に煩わしいほどよく回る口だ。ため息をついたイルミは、リリスを少々乱暴に土の穴に横たえる。それを見たヒソカがあーあと呆れたような声を上げたが、聞こえなかつたふ

りをした。

「まったく素直じゃないんだから」

「もともと朝にはこうするつもりだつたし」

もしもリリスが目覚めるまでこうしていれば、彼女はまた盛大にイルミを糾弾するだろう。ちよつとした親切心だというのに、変態などと不名誉な誹りを受けるのは勘弁である。「やだ……」しかし彼女から離れようとしたイルミの服を、リリスはぎゅっと握つて離さなかつた。

「……」

一瞬、起きていたのかとどきりとするが、冷静に考えれば意識のあるリリスがこんな甘え方をするはずがない。嫌なタイミングで始まつてしまつたな、と思ったが、思つた時には後ろからヒソカに覗きこまれていた。

「へえ、本当はうまく行つてたのかい、キミたち」

「これは違う……。言つただろ、寝相が悪いって」

また泣き出しそうな気配を感じて、イルミは仕方なく彼女を再び膝の上に抱き上げる。途端にあやされた幼児のようにすり寄つてくるリリスを見て、さすがのヒソカもからかう気が失せるくらいに驚いたようだつた。

「一体どういうことなんだい？」

「オレに聞かれても知らないよ。ただ、夜はときどきこうして幼児退行して、朝になると本人は忘れてる」

「それはまた……難儀だね」

迷惑してる、と言おうとして、イルミは口を噤んだ。このくらいのことは、これまで手を焼かされたことに比べたら可愛らしいものだ。それにぐずる彼女を宥めるのもさほど難しいことではない。「わかつたらあつち行つて」リリスを庇うように再度警告すると、ヒソカは肩を竦めて数歩後ろに下がつた。

「まるで産後の猫だね。キミ、いい母親になるよ

「誰が母親だよ」

「はいはい、ごめんね。じゃあもうボクは行くからごゆっくり」

言われて一瞬むつとしたが、そういうえばリリスも自分のことを母だと呼んだ。顔は似ていないそうだが、こうやつてあやすとすぐ落ち着くところから考えて、深層心理では母親を求めているのかもしい。

初めから殺すために娘を産んだ非道な母親なのに、当の娘からすればそれでも母親だということだろうか。ずっとリリスは母親を憎んでいたと思っていたが、憎いだけではないのかもしれない。

イルミは今更になつて彼女がゾルディック家にやつてきた理由が理解できたような気がした。リリスの母親にとつてキキョウは、自分の娘を殺してでも会いたかった友人なのだ。興味が湧かないわけがない。そこで単純な憎しみに転ばなかつたのがなぜなのかはわからぬが、少なくとも彼女は実際に会つた“母親の友人”という存在に納得した。納得して、今度は自分の理想とする母親像をキキョウに重ねたのだろうか。そしてその延長で、理想の家族としてゾルディック家に執着を見せたのだろうか。

なるほど一つ謎は解けた、と思つた。

道理で、しつこいわりにはゾルディック家に対して害意のひとつも見せないわけだ。

いや、害意はないが敵意は確かにあつたか。

イルミは自分の服をしつかり握りしめるリリスを見ながら「一体、オレの何が気に入らないわけ?」と呟いた。

32. 酷い女

久しぶりにお湯でしつかりとシャワーを浴びることができて、生き返った心地がする。夜はすべて土の中で過ごしたが、汚れることを除けば寝心地は悪くなかった。むしろいつもよりよく眠れた気がするくらいだ。おぼろげながらも包み込まれるような不思議な感覚があつたので、土の温度が睡眠にちようどいいのかかもしれない。

無事に一週間プレートを守りきることができたリリスは、自分のプレート3点、ターゲットのプレート3点という模範的な結果で四次試験を通過した。

終了時刻に海岸に行けば、キルアはもちろんゴンやクラピカレオリオもみな揃つており、彼らも無事にターゲットのプレートを手に入れただようだ。そしてそのまま合格者は飛行船に乗り込み、次はいよいよ最終試験だという。

リリスは遠ざかるゼビル島を眼下に捉えながら、感慨に耽つていた。まさかこんな形で自分がハンター試験を受けることになるとは思つてもみなかつたし、次が最後ならばリリスは決断しなくてはならない。

最終試験がどのような方式かはわからなかつたが、おそらくイルミは受かるだろう。そしてその時リリスの裏切りがキルアに露呈する。彼を傷つけることになると思うと胸が痛んだが、だからといつてすべてが丸く收まるような上手い方法も思いつかなかつた。今更キルアにイルミのことを伝えて懺悔したところで、二人に逃げ場はない。ただ自分の罪悪感がほんの少し軽くなる程度で、それなら弁解せずにちゃんと憎まれたほうがいい。イルミはリリスとキルアの仲を裂いて友情への幻想を打ち壊したいようだつたが、キルアにはもう他に友人がいる。だから安心して憎されることを選べた。

「リリス、お前四次試験で俺を避けてただろ」

ふと、後ろから声をかけられて振り向くとキルアがそこに立つてい

た。この兄弟はとにかく他人の背後を取るのがお好きらしい。

キルアはかなり怒つているようだつたが、リリスだつてそれくらいは予想していた。自分の悪癖を見せたくなかつたので、あえて彼から逃げていたのだ。

「うん、避けてた」

「な……」

こうもあつさり認めるとは思わなかつたのか、しかめ面だつたキルアは面食らつたように瞬きをする。キルアの性格上、ストレートに謝つてしまえばしつこく追及しないのはわかっていた。「せつかくの試験だから自分の力を試してみたかつたの、ごめん」リリスが謝れば、キルアは自分の不満をどこへぶつけていいのかわからないようだ。くしやくしやと自分の髪をかき混ぜ、あつそ、と呟く。

「そういうことなら別に……いいけど。お前さ、写真送らなくていいのかよ」

「……あ。そうだね、忘れてたよ」

「いいのかよ、そんなんで」

「いいよ。どうせあの人、私に期待しないし」

言いながら携帯を取り出し、リリスはキルアを引き寄せて横に並んだ。「え、ツーショットで送んの？」動搖したような声を出すキルアが面白くて、同時に少し切なくもなる。これで終わりだ。きっとこうやって二人で仲良く写真を撮るなんてこと、この先一生ないだろう。ぱしやり、と撮つた写真の自分は、想像していたよりずっと上手く笑えていた。

「キルアと一緒になんて、きっとあの人へのいい嫌がらせになるよ」

「……」

「そうだ、次が四次試験だつて嘘伝えるけど、キルアは試験後どうするのか考へてる?」

「家には戻らない……ていうか、リリスこそどうすんの?」

そう言われても、今のリリスは明確な答えを持ち合わせていなかつた。キルアはただリリスが脅されているだけだと思っているが、今のリリスは文字通りイルミに命を握られている。たとえキルアが上手

くライセンスを手に入れてゾルディイツク家から逃げ続ける道を選んだとしても、リリスは一緒に行くことができないのだ。

「もし、もしもだけどさ、特に当たが無いなら一緒に旅とか、」

「私を誘わずにゴンを誘えれば？」

「え」

「年も近いし、ちようどいいじやない。友達になつたんでしょ？」

「ん、まあ……友達かどうかはわかんねーけど」

言葉を濁したキルアに、我ながら酷い提案をしたものだなと思った。イルミがここにいる以上、そんな冒険は夢物語だ。しかしリリスは別に意地悪でそんなことを言つたわけではなく、本心からこの夢が実現すればいいと思つていた。これはキルアにとつてだけでなく、リリスにとつても希望なのだ。この先に暗い現実が待ち受けているのを知つてゐるから、ついつい理想が口をついて出る。「なんでわからなーなんて言うの？二人はもう友達でしょ」重ねて問えば、キルアの表情はどんどんと沈んでいく。それでもじつと待つていれば、ややあつて懺悔でもするかのように重い口は開かれた。

「……一次試験のとき、俺はゴンやリリス達を置いていった。たまたまりリスがヒソカの知り合いで、ゴンの鼻が異常だったからたどり着けたようなもんだけさ、実際あそこで皆が死んでもおかしくなかつただろ？」

「それはそうだね」

「俺は皆を見捨てたんだ……だから友達だつて言う資格がない」

吐き出すようにそう言つたキルアの瞳は暗く沈み、その口元は自嘲に歪んでいる。ただ辛そうな顔をするだけならばともかく、そうやって笑つてしているところにこれまで塗り重ねられてきた諦観が窺える。そもそも“友達”という気さくな単語と“資格”という固い単語が結びつくこと自体、12歳になる前の子供の発想としては違和感しかなかつた。

「あのさ、キルア。ゴンはキルアに見捨てないでつて言つた？クラピカもレオリオも、置いていかないでくれつて言つた？」

「え……」

リリスの問いに、キルアは俯きがちだった顔を上げ、ちょっと驚いた表情になる。おそらく、彼はリリスからも“資格がない”と言われることを想定していたのだろう。普通で言えばそんなことはあり得ないのだが、これまで彼の近くにいた家族はみな口を揃えてキルアが友達を持つことを頭ごなしに否定した。だからきっと、彼にとつては問い合わせられたこと自体が新鮮だつた。弱々しいながらも「言つてない……」と小さく返事をしたキルアは、リリスの言葉を待つように真つすぐに見つめてくる。

「誰もキルアが皆を見捨てて逃げたなんて思つてない。友達ってのは対等で、どちらか一方が責任を負うようなこともない。

お互に助け合つて、そのときできる最善をすればそれでいいんだよ」

「……」

「あの場で残ることを選択したのはゴン。だからその選択にまでキルアが責任を感じる必要はない。だけど友達だから、キルアはゴンが合格できるように道標のコロンを撒いたんでしょ。友達は大事だけど、資格とか、責任とか、そんな重たいことまで考えなくていいと思う。

大事なのはキルアが皆といたいのかどうか。皆といて楽しいのかどうか」

人と人との関係なんて、リリスにだつて何が正しくて何が正しくないのかわからない。偉そうなことを言つたつてリリス自身、生きるのに必死で友達と楽しく遊んだ記憶もろくなかった。だが、今のキルアは“友達”について一通りの解釈しか持つていない。キルアの家族がキルアのために眺めたそれが間違つているとまでは言わないけれど、キルアには違う考え方だつて知る権利くらいあるはずだ。

リリスの言葉を聞いたキルアは黙つて考えこんでいるようだつた。確かにすぐにはそうなんだ、難しく考えなくていいんだ、と気持ちを切り替えることはできないと思う。キルアだつてずっとずっと、下手をすればゴンに出会う前から、“友達”というものについて悩んでいたのだろうから。

だが、人生というものはその多くが案ずるより産むが易しである。

これから時間はかかるでも、キルアは自分で『友達』のあり方について答えを見つけていけばいい。資格云々は置いておいて、まずはキルア自身が何を望んでいるかが大事だと思うのだ。

「キルアはゴンと一緒にいて楽しい？」

「……まあ、あいつ予想もつかねーことやつてくれるし」「たとえば？」

「そうだな……三次試験のこと、話したつけ？殺し合いして扉を開けなきや間に合わないってときにさ、あいつ壁を壊して新しい道を作ったんだ。面白いだろ」

「はは、gonらしいね」

少し水に向けてやれば、キルアは生き生きとゴンのことを話します。指摘をすれば彼は子供扱いするなど怒るかもしれないが、まさに年相応の純粋な笑顔だつた。やっぱり、キルアをこんな風に笑顔にできるのは『友達』しかいないので。

「あのねキルア、この話ついでに、ずっと言おうと思つてたことがあるんだけど」

これでいい、と思いながらリリスはゆっくり目を伏せる。ゴンはキルアの友達だ。でもここまでキルアを騙してきたりリスは違う。自分を慕ってくれる彼を突き放すのは胸が痛むが、これから起ることを考えるならここでリリスははつきりさせておかなければならなかつた。

「やっぱ、わたしとキルアの関係は友達じゃないと思うんだ」

「……どういうことだよ」

「キルアは私のことで責任を感じてるでしょ、だからだよ」

確かにイルミは家族——特にキルアのことになるとやたらと攻撃的だけれども、リリスが彼の支配下に置かれているのはほとんど自業自得だと言つてもいい。イルミは最初、リリスに警告だけで済ませようとしていたが、それを無視して深入りしたのはリリスだ。温かい家族像を見せられて、欲を出してしまつたのはリリスの落ち度だ。

だからキルアは何も責任を感じることはないのに、彼はずつとリリスの不遇を自分のせいだと思っている。その訂正は絶対にしておき

たかった。

「……でも、俺はたとえイル兄のことがなくても、リリスと一緒にいて楽しかった。それじゃダメなのかよ」

「私も、キルアとゲームしたりかくれんぼしたり、すつごく楽しかったよ」

「じゃあ、」

「でもやっぱり、友達っていうのはしつくりこない。キルアもゴンと会ってなんとなくわかつたでしょ」

友達の定義を未だ見つけられていない彼に、そんなことを問うのは酷だろう。しかし、こういう場合は理屈よりも感覚のほうが当てになる。キルアはリリスもゴンもひとくくりに友達として扱おうとしているが、それが無理なことぐらい薄々気が付いているだろう。「……だったら、俺とリリスつていつたい何なんだよ」傷ついた表情でそう言われて、リリスもとても苦しかった。リリスがキルアの友達であることを否定したように、リリスの答えもキルアに受け入れてもらえないかも知れない。

それでも、リリスがキルアを想つていた気持ちは嘘じやなかつた。
「私はね、キルアのこと、友達というより家族みたいに大事に思つてる」

「家族？」

「うん。家族つて言つたら、キルアにとつては重くて面倒なだけの存在かもしれないけどさ、私にとつて家族は友達よりも大事なものだから、キルアの位置づけは家族なの」

「……」

「もちろん、友達と家族のどっちが強い結びつきかなんて、状況や個人の価値観に依ると思う。だから、キルアがもし友達のほうを大事だと思うのなら、友達を優先していい。家族の立場を取つた私を、嫌いになつていい」

最終試験の形式がわからない以上、リリスはこんな逃げ方をするしかなかつた。これなら仮にリリスがイルミのスペイだつたと露呈しても、キルアの“友達像”には影響しない。リリスの行動はキルアの

“家族”として、他のゾルデイツク家の人々がやっていることと同じだ。初めから“家族”側のスタンスを表明してしまえば、失望されかかもしれないが、絶望を与えるはしないだろう。

キルアが二度とリリスに心を開かなくなつたとしても、彼にはもうゴンたちがいる。希望さえ失わなければ、家を出るチャンスはいつかきっと巡つてくると思うのだ。

「家族、ね……俺も、リリスみたいな姉貴だつたら欲しかつたかもな」リリスの言葉に耳を傾けていたキルアは、ぽつりとそう呟いた。彼にとつては家族なんて嫌な言葉だろうに、リリスの気持ちを受け止めてくれたことがたまらなく嬉しい。胸が詰まつて声が震えそうになつたが、リリスは努めて明るい笑顔を作つた。

「とりあえず、キルアは次の試験に集中すること。試験後、私はどさくさに紛れて流星街に帰るから心配いらない」

「でも、リリスはオレを連れ戻せつてイル兄に脅されてるんだろう？ イル兄から逃げられるのか？」

「それはこつちの台詞だよ。キルアと私が分かれて逃げれば、イルミは絶対にキルアを優先する」

「なるほど！……つて、なるほどじゃねーよ！ ジャあ俺とゴンで旅しろつて囮になれつてことじやねーか！」

「うーん、そこはお姉ちゃんを助けるためだと思つて」「何が姉だ！ どこの世界に弟を囮にするような姉がいんだよ！」

当たり前のように姉弟と言つてくれて、本当に嬉しい。キルアは呆れた、と言わんばかりに盛大にため息をついたが、リリスの身の振り方については一応これで納得してくれたようである。

拗ねたように口を尖らせた“弟”を見ながら微笑んでいると、彼はふとまたそこで眞面目な顔になる。

「そうだ、俺、リリスに聞きたいことがあつたんだ」「なに？」

この機会に改まつて聞かれるることはなんだろう。色々と後ろ暗いところのあるリリスは、内心ひやひやしながらも首を傾げて見せる。ヒソカとの繋がりのことだろうか。それとも前にはぐらかした

三次試験の内容？いや、もつと昔に遡つて、イルミの「リリスを殺した」発言の意味を聞かれる可能性だつてなくはない。

「実は俺もクラピカから聞いただけなんだけど……」

「クラピカ？」

「ああ。リリスがその……夢遊病かもしれないって」

「え……？」

キルアの口から出た単語に、リリスの思考は一瞬停止する。

安堵と動搖——相反する感情に、なぜか顔だけは笑つてしまつていた。「夢遊病？」わかっている。自分のことだ。だから家で眠るときは内側からドアにチエーンを巻き付けていたし、ゾルディック家でも自分の身体をベッドに繋いでいた。

けれどもこの話題は、下手をすると自分の裏切りがバレるよりもリリスにとって最悪なものだつた。

「俺はそういうの詳しくねーからあんまわかんないんだけどさ、もしイル兄のことで悩んでるならほんとに悪いって思うし、」

「違う」

「……なら、いいんだけど」

リリスの否定の声は、特に大きなものでも荒ぶつたものでもなかつた。しかしキルアはリリスのただならぬ様子を感じ取つたらしく、場に気まずい沈黙が落ちる。空白の時間はリリスの告白を待つているようだつた。けれどもリリスは絶対に口を開かなかつた。話してどうなるわけでもない。同情されたいわけでもない。一番いいのは気づかないふりをしてくれることだ。キルアもクラピカも善意から本当にリリスを心配してくれているのだとはわかつっていたが、それでもどうしてもこの件だけは触れられたくなかった。

「……悪い、変なこと聞いた」

「ううん、大丈夫。心配してくれてありがとう。あれはイルミのせいつて言うか、昔からのものなの。だから気にしないで」

「……わかつた」

「それより、次の試験に集中しよう。皆が言うにはペーパテストかもしないって」

我ながらこんなに下手な話題転換があるだろうかと思わず苦笑しそうになる。しかしそんなリリスを救うかのように、ちょうど飛行船内にアナウンスの音声が流れた。

——えー。これより会長が面談を行います。番号を呼ばれた方は2階の第1応接室までお越しください

「面談……まさかそれが最終試験だつてのか？」

予想外の“面談”という単語に、キルアの思考はそちらに引っ張られたようだった。きっと今頃他の受験生たちもざわついていることだろう。「さあ、どうだらうね」リリスはほとんど上の空で相槌を打つた。



面談の部屋は入り口こそドアだつたものの、中は他の船室と違つてジャポン風の部屋になつていた。リノリウムの床から一段高くなつたところに草を編んだような床材が敷かれており、会長はやたらと平べつたいクッショーンの上で胡坐をかいている。

畳、座布団、後ろにあるのは掛け軸か。

リリスはゾルディック家でゼノから教えてもらつた知識を思い出し、靴を脱いで畳の上へと上がる。会長はリリスのたどたどしい動きを見ると、ほつほつ、と楽しそうに笑つた。

「そう緊張しなくてよい。これは試験ではなく、ちよいと参考までに質問する程度のことじゃ

「そうなんですか？」

「ああ、全く試験に無関係とは言わんがね。

ええと、まず、なぜハンターになりたいのかな？」

なんだ。本当にただの面談ならそう言つてくれればよかつたのに。リリスは自分より先に面談を受けたキルアのことを思い、どうやら色々まとめて仕返しされたようだと内心で苦笑する。

それから気持ちを切り替えて、真剣な顔で会長に向き合つた。

「特にありません。私、無理やり参加させられているので」

「おやおや、随分と正直な娘さんじやのう」

「今さら嘘をついても仕方ありませんから。でも、せつかくここまで来たんだし、ライセンスが貰えるなら貰います」

「あいわかつた。では質問を続けるぞ。残った受験者の中で一番注目している受験者は？」

注目?

これはリリスの観察眼を測っているのだろうか。普通で言うなら、今の面子で注目すべきはヒソカとイルミだ。これはもちろん悪い意味で、二人が念能力者なうえに突出した強敵だから。

だが、本当に純粹な意味でリリスが合否を気にしているのはキルアのほうである。

「……99番ですね」

「理由を聞いても？」

「言うまでもなく、彼の才能はおわかりでしょう。それに血は繋がつていませんが、彼は私の弟のような存在だからです。彼には合格してほしい」

「そうか。では、今一番戦いたくないのは？」

ここへきて、戦闘関連の話題か。

この面談は最終試験の参考になるそうだし、もしかすると最後の試験はストレートに戦闘技術を問うものなのかもしれない。しかもこういう聞き方をされるということは、総当たりの可能性は低い。ただ、嫌な相手を言つておけば避けてもらえるのか、ここぞとばかりに戦わされるのかそれだけがわからない。普通で言うならヒソカを挙げるところだが、そのせいで戦わされる羽目になるのはごめんである。「私は戦闘向きではないので、本音を言えば誰とも戦いたくありませんね。でも、逆に言えば相手が誰でも結果は変わらない気がするので、誰でもいいです」

リリスはあえてぼやかした返答をすることで、特定の誰かの名前を挙げることは避けた。ふうむ……と会長は顎髭を撫で、何かを考えているようである。

「99番の彼に合格してほしい。でも、彼とも戦える、と」

やはり最終試験は対戦形式か。だつたら、最悪キルアとイルミが当

たつてしまふ可能性がある。特に勝ち進む氣のないリリスは誰と当たつてもいいが、その二人が当たるのはなるべく避けたい。いや、待て。キルアとリリスが当たつたとしても、イルミはキルアに搔きぶりをかけるだろう。もしかするとキルアを操って、試験中にリリスを殺させるかもしれない。我に返つたキルアはショックで試験どころではなくなるだろうし、それこそ責任を感じて心を閉ざす。あの男ならばありえる展開だ。それだけはまずい。

「あ、ちょっと待つてください」

「どうしたんじゃ？」

なんとか、キルアとイルミ、キルアとリリス、という対戦を避ける方法はないだろうか。ひねくれた発想をしてしまつたが今のこの会長の雰囲気だと、結構要望は聞いてもらえそうである。「そうか……」そしてリリスの頭がフル回転の末に導きだしたシナリオは、自分でも驚くくらい最高の出来だと思った。これならばリリスはイルミの支配下から抜け出せ、キルアをただ裏切つただけでは終わらず、イルミにも一矢報いることができる。

「すみません、戦う相手は誰でもよくないです。戦うのなら301番と」

リリスは覚悟を決めて、会長の目をまっすぐに見つめた。

が、会長のほうはどこか呆気にとられた表情で、ぱちぱちと瞬きをする。

「ええと、わしは戦いたくない相手を聞いたんじゃがのう」

「あ……」

「まあ、よい。おぬしが本当にそう思つているのなら参考にしよう。下がつてよいぞ」

「は、はい」

これしかない、と勢い込んで言つてしまつただけに、自分の勇み足が恥ずかしかつた。それでも参考にしようと言つてもらえただけありがたい。リリスは靴を履くと、一礼してそそくさと面談室から退出する。

リリスの描いたシナリオは、決して大団円のハッピーエンドではな

かつた。それでも、この先一生イルミに良いように使われることを考えたら、リリスにとっては十分ましな結末だ。結婚したら家族になるだなんて綺麗事を言つても、あの排他的な男が本当の意味でリリスを家族扱いするとは思えないし甚振られるだけだろう。そんな扱いを受けるくらいなら、姉扱いしてくれたキルアの為にも全力でイルミの邪魔をする。

ほんのついさつき決まつたばかりの作戦だったが、リリスの決意は固かつた。

そうして飛行船にのつてから三日がたつた頃、委員会が経営するホテルにて、とうとう最終試験の内容が発表される。

「最終試験は1対1のトーナメントで行う。その組み合わせはこうじや」

どよめきが室内を満たす中、希望が叶えられたことを知つたリリスは、わざわざ振り返つてイルミ扮するギタラクルを見る。そして挑発するようになりと笑つて、口の動きだけでメッセージを送つた。

——そろそろまた、攻守交代と行きましょうか。

33. きつかけの爆弾

最終試験の課題は負けあがり式のトーナメント戦。

ハンターとしての資質によつて挑戦できる回数にばらつきがあるようだが、詳細な判断基準は秘密らしい。キルアだけは不満そうな顔をしていたものの、他の受験生は1勝さえすればいいという条件に希望を見出したようだつた。レオリオなどはその最たる例だろう。

しかし実際にいざ試合が始まつてみると、話はそう単純なものではないとすぐに明らかになつた。

第一試合のゴン対ハンゾー戦。

勝利の基準は“相手に参つたと言わせること”だが、この最終試験で“殺し”は即失格である。ここまで残つたような人間は、良くも悪くも自分の負けをあつさり認めない頑固者ばかりなので、この第一試合はかなり時間がかかつていて、

会場が自然とゴンを応援する雰囲気になつても、イルミだけは相変わらず興味がなさそうに事の成り行きを見守つていて、試合前のリリスの挑発も、一体どういう風に受け取つたのかわからない。

最終的にゴン対ハンゾー戦はゴンの粘り勝ちとなつたが、ゴンは我儘を言いすぎたためそのまま医務室へ。続く第二試合もヒソカがクラピカに勝ちを譲り、死者を出さないルールを守つたうえで、交渉や脅しを駆使して次々と勝負が決まつていく。最初の一試合で負けあがつたハンゾーとヒソカは、第三、第四の試合で実力通りに合格を果たした。

そして、第五試合、ポツクル対キルア。

リリスはこのトーナメント表を見たとき、キルアの勝ちを確信して完全に安心しきつていた。まともにやれば、キルアが負けるはずのない相手だ。イルミはキルアにライセンスを取つてほしくないようだつたが、会長たちもいるこの衆人監視の状況ではさすがに手を出せまい。今回、イルミがキルアを家に連れ戻したとしても、今後キルアが自由を掴むうえでライセンスは必ず役に立つときが来るに違いな

かつた。

「参った」

だが、リングに上がったキルアは、試合開始の合図とともにあっさりとそう告げてポツクルに背を向ける。その行動は戦つても面白くなさそうだからという、随分とふざけた理由だった。対戦相手のポツクルも唖然としただろうが、リリスもそれを聞いて愕然としていた。もしもリリスの作戦が失敗した場合、リリスが負けてキルアと当たるのはまだいい。しかし今の状況では、イルミがキルアと当たつてしまふ可能性もゼロではないのだ。それだけは何としてでも阻止しなければならない。

リリスはイルミと向き合うと、審判が口を開くよりも先に彼に向かって小さく頭を下げた。

「お願ひがあります。どうか先ほどのキルアＶＳポツクル戦のようなことはしないでください」

「……」

「あいつそもそも喋れんのか？」

レオリオのツッコミはさておき、そのまま試合は開始される。

先に挑発をしていたお陰か、イルミはリリスの出方を窺っているようだつた。リリスが普通に攻撃を仕掛けても、防戦一方で全てかわすか受け止めるかしている。

しかしこれはリリスにとって好都合だつた。試合がちゃんと行われていたと周りに認識してもらうことが重要なのである。

リリスは戯れのよくな攻撃を繰り返しながら、徐々にオーラを練り始めた。当然、痛みが身体を苛み始め、額にはじんわり脂汗が浮く。「おい、なんかリリスの様子おかしくないか？」

これがもし単なる演技だつたら、医者志望のレオリオには見抜かれてしまつていたことだろう。けれどもリリスは本当に苦しんでいる。見かけ上イルミは何もしていないが、イルミとの試合中にリリスが苦しんでいる、という事実が必要なのだ。

「つ！私に……なにを、したの」

リリスはとうとう耐えきれなくなつて膝をついた。痛みで思考が飛びそうになるが、それでも言おうと思つていた台詞だけは言つた。これでリリスのこの症状が急に起つた体調不良なんかではなく、人為的なものであると印象付けられるはずだ。

後はこのままここでリリスが死ねば、皆イルミの仕業だと思うだろう。そうなればイルミは失格になる。

最期の最期で、リリスはどうしてもキルアを裏切りたくないと思ったのだ。キルアには嘘もたくさんついた。リリスが死ぬことでまた傷つけてしまうかもしれない。それでもこのままイルミの好きにさせて、キルアに幻滅されるくらいなら、少しでも彼がライセンスを取る手助けをしたい。今のキルアにはゴンという友達もいるし、飛行船の中でのキルアと会話して、もう自分という存在がいなくても大丈夫だと確信が持てた。それに試験中の死亡ならば、キルアが感じる責任も薄いかも知れない。憎む対象が分かつていれば、罪悪感も薄れるだろう。

実際、リリスの中にはキルアの憎しみをイルミに向けさせ、イルミがこれまで以上に手を焼けばいいという薄暗い感情もあつた。

つまりこの作戦でリリスは自分の名誉を守り、キルアの自由を後押しし、なおかつイルミを妨害できる。今後一生飼い殺されることを考えれば、ここで死ぬのもそう悪くないだろう。

「参つた」

こちらの意図に気づいたイルミが負け宣言を行うが、もう遅い。

リリスはそのまま試合の勝敗にかまわず爆死するつもりだつた。宣言後に死んだとしても、この試合が物議を醸すことは必然。念能者であればイルミが見たところ念を遣つていなることはわかるかもしれないが、この場にいる大半は素人だ。リリスの死はイルミのせいだと思つて、協会側に試験終了を求めるに違ひない。

そしてハンター協会が後々調べたとしても、やつぱりリリスの死は指輪の念——結局のところイルミの仕業なのである。上手くいけば、イルミの負け宣言こそがパフォーマンスであるとして、彼に疑惑の目が向くかもしれない。まさか、最終試験まで来てリリスが自殺を図る

とは誰も思わないだろう。もし単純にイルミを失格させたいという動機があつたとしても、来年になればイルミはまた試験を受けられる。常識的に考えて、一時の妨害に命を懸ける人間などいないと考えるはずだつた。

「おい、リリス！」

「つ、来ちゃ駄目！」

試合終了の判定が下り、レオリオが駆け寄つてこようとする。リリスはそれを気迫で制し、這いずつてイルミの足にしがみついた。きっと念でガードされるから爆発には巻き込めない。が、逆に言えばイルミがガードをすることで、周囲への被害を最小限に抑えられる。「よ……くも」最後の力を振り絞つて立ち上がり、しつかり彼に抱き着いたリリスは覚悟の上で目を閉じた。

——これで終わりだ。

そのとき包まれた温度に、なんだかどうしようもない懷かしさを覚えた。



試験内容は面談で予想がついたが、トーナメント表が公開されてすぐのリリスの挑発は謎だつた。あの様子からしてイルミとの試合はリリスが希望したことのようだが、今一つその目的がわからない。イルミとぶつかつたところでリリスに勝ち目はないし、そもそも論としてイルミはリリスにライセンスを取らせたい。負けあがり方式で自分にはチャンスが三回あるし、一回くらいリリスに譲つても全く問題はないのだ。

しかし試合が始まる前、彼女は殊勝なことに普通に戦つてほしいと頭まで下げて見せた。

どうやらイルミが試合放棄することにより、次の試合でキルアとイルミがぶつかるのを阻止したいようだが、別にイルミにリリスの願いを聞いてやる義理などない。

とはいって、リリスが何を考えてこの試合を望んだのかは正直気に

なっていた。とりあえず本気で攻撃をしてきてはいるが、様子見で軽くあしらつておく。

状況が変わったのは、リリスがオーラを練り始めたからだった。

そんなことをすれば激痛が走るはずで、案の定リリスの額には運動によるものとは明らかに違う汗が浮かび、顔面も蒼白になっている。様子がおかしいとギヤラリーがざわつき始めたところで、リリスは苦し気に言葉を絞り出した。

「つー！ 私に……なにを、したの？」

イルミはそこでようやく、これがリリスの身体を張ったパフォーマンスであると理解した。さては後程、リリスの裏切りが露見した時のために、真っ向からイルミに立ち向かつたという証拠作りのつもりか。もしくは盛大に被害者ぶつて、従わざるを得なかつたのだというアピールのつもりなのだろうか。

このときイルミはまさか、彼女が死のうとしているとは夢にも思つていなかつた。なぜならリリスが自殺すればキルアの精神に深く傷を残すだろうと試験前に脅したし、それを考えればたとえこの先イルミに飼い殺される現実があつたとしても、キルアのことを可愛がつているリリスは自殺を躊躇うはずだからだ。

第一、ここで死ぬことにさほどメリットがあるとは思えない。イルミの妨害にしては賭けるものが大きすぎるし、四次試験の時だつて自殺はしないと言つていた。

とりあえず、これ以上はリリスの身体に良くないと思つた。そろそろ潮時かと考え、イルミは躊躇いなく負けを宣言する。利用されたことは若干癪だが、まあこのくらいのパフォーマンスには付き合つてやつてもいい。試合が終われば、リリスもこの悪あがきをやめるだろう。

どうせ次はイルミとキルアが当たるのだ。そこでイルミは合格し、キルアの希望を碎いて終わり。

だが、イルミの予想とは裏腹に、リリスは試合が終わつてもオーラを練るのをやめようとはしなかつた。「来ちゃ駄目！」痛みで集中できいために時間がかかるつているようだが、流石にそろそろ指輪が爆

発する限界のはずだ。

どうしたのか。何がしたい？まさか死ぬつもりなのか？

——リリスが、死ぬ？

その考えに辿り着いたとき、イルミの胸を満たしたのは恐ろしいまでの焦燥だった。

リリスが死ねば色々と面倒ではあるが、正直そこまで困りはしない。

仕事でライセンスがいるのはそうだが、それだつて所詮あれば便利くらいのものだ。一時のことであれば偽造してしまう手もあるし、イルミならば針で操作して資格持ちであるように誤解させてもいい。母親への説明も、試験中の事故ならば諦めてくれるだろう。これまでずっと仲睦まじい演技をしてきたし、同情されこそすれ糾弾されるようなことはないはずだ。あれだけ不安を煽ったキルアの精神的ダメージについても、もしキルアが壊れるようなら針で忘れさせてしまえばいい。

それなのに、イルミはなぜカリリスを止めなくては、という思いに突き動かされた。

死なせたくない。死んでほしくない。

それはもはや理屈ではなかつた。イルミの中で彼女はもう、確かに自分の物であつた。彼女がゾルディック家人間を家族として慈しぐんだみたいに、イルミもリリスを知らず知らずのうちに家族の枠へと含めていたのだ。

——今更、手放してやるものか。

縋りつかれて、その思いは確かなものとなる。

瞬間、からん、と小気味よい金属の音が、緊迫する会場の空気を裂くように響いた。

「なんだ……？何が起こつたんだ？」

「あれは……」

ざわつくギヤラリーはそこで、イルミの足元に銀色の破片が落ちていることに気付く。それは真つ二つに割れていたが、元がリング状になつていたということは容易に推測できた。

「……試合は終わりでしょ。彼女、医務室に運んであげて」

「えつ、あ、はい！」

ぐつたりとしたリリスを抱きかかえたイルミは、まるで何事もなかったみたいにそう言つた。先ほど参つたと口にしたはずなのに、審判は初めてイルミが話すのを聞いたかのように飛び上がる。

そしてその時になつて周りの皆も気が付いた。全身に針を刺した強烈な印象のせいでそちらにばかり気を取られていたが、彼の左手の薬指にも光るものがある。たつた今落ちたりリスの物とよく似た銀色の指輪は引きちぎられて、破片が指の間にからうじて挟まつているという状態だつた。

「リリス！しつかりしろ！」

「気を失つてるだけだから。担架」

「ご用意しました！」

騒然とする会場を尻目に、イルミはリリスの身体をレオリオに託すと静かに壁際へと戻る。「お疲れサマ」腕を組んだヒソカが声をかけてきたが、イルミはろくな反応を返さなかつた。無視をしたわけではなくて、完全に上の空だつたのだ。

自分で自分の行動に一番驚いていた。行動だけでなく、そのとき抱いてしまつた感情にも。

運ばれていく彼女をぼんやり見ながら、イルミは酷く安堵してい
た。

34. 内なる望み

——資質で俺がゴンに劣っている……？

最終試験で発表されたトーナメント表には、これまでの試験の成績が反映されているという。純粹な個人としての身体能力値、精神能力値、それから最も重要な要因^{「ファクター」}である印象値は、ハンターとしての資質評価だそうだ。

キルアは別にハンターになりたくて試験を受けに来たわけではなかった。家業を継いで暗殺者になるのが嫌で、兄からリリスを救いたくて、難関だという試験に合格してリリスに認めてほしかつただけだ。そこにはライセンスがあれば、これから独り立ちするにあたつて便利だろうという打算もあつた。

だが、こうして改めて他者からの評価を突き付けられると、キルアは素直に現実を受け入れられなかつた。そもそもが医者志望のレオリオはともかく、ほとんど一緒に試験を受けたゴンは五回、クラピカですら四回の試合チャンスを貰つてゐる。能力だけで言えば幼少期から厳しい訓練を積んだキルアのほうが遥かに高いだろうに、そのキルアに与えられたのはたつた三回の試合回数なのである。明らかに、“ハンターとして”キルアのほうが劣っていると判断されたということだろう。

決して望んだわけでも、そこに胡坐をかいた覚えもなかつたが、ゾルディック家始まつて以来の天才だと期待をかけられるのが常だつたキルアにとって、この結果は衝撃的だつた。お前はハンターに向かないのだと、誰かに囁かれたような気がしてぞつとした。

「参つた。悪いけど、アンタとは戦う気がしないんでね」

だからポツクルとの試合を放棄したのは、慢心というよりも協会に対する反抗だつたのかもしれない。戦闘面ではどう考えてもキルアのほうが優位だつた。それなのに、ポツクルのほうがキルアよりもハンターとして評価されているのが面白くなかった。

チャンスなんて要らない。自分ならば一回もあれば十分だ。

合格することが目的だったのに、キルアはここへきて勝ち方に拘つてしまつた。早々にリングを降りて次の試合に出るリリスとすれば違つたとき、もし次でリリスが負けても俺が勝ちを譲つてやるから心配するなよ、なんて甘いことを考えていたのだ。

「おい、なんかリリスの様子おかしくないか？」

けれども現実はキルアの筋書き通りには進まなかつた。なぜかあの針男と真つ当な勝負を望んだリリスは、絶対に降参しないつもりのようである。それが彼女の矜持によるものなのか、次の試合のキルアのことを考えてなのかはわからない。

とにかく針男の方はひたすら防御に徹しているようにしか見えなかつたのだが、試合が進むにつれてどんどんリリスの苦しみ方が尋常ではなくなつていくのだ。

——もうやめろ、参つたつて言えよ！

とてもじやないが、見ていられない。ゴンの試合のときにもそう思つたが、ゴンにはハンターになつて父親を捜すという夢がある。だがリリスにはそこまでしてハンターになりたい理由があるわけではないはずだ。むしろ彼女はキルアに巻き込まれた形で、無理矢理この試験に参加させられたに過ぎない。

それなのに、戦い続けるリリスには何か鬼気迫るものがあつて、キルアは結局何も声をかけられないでいた。試合が早く終わつてくれることを祈りながら、彼女が苦痛に喘ぐさまを見守ることしかできなかつた。

「参つた」

そしてようやく告げられた降参の言葉は、意外にも無傷な針男から発せられたものだつた。レオリオがすぐさま介抱に向かおうとするが、リリスは大声でそれを制し、未だに針男のほうへと這いずつていく。

本来ならば、試合終了後の接触は審判が止めるべきだつた。息も絶え絶えな様子のリリスはそのまま針男に縋りつき、どこか満足したような表情で目を閉じる。

それは、死を覚悟した人間の顔だつた。

彼女が何を思い、何を考え、こんな無茶をしたのかはわからない。それでもキルアは直感的に彼女の死を悟つた。

状況は未だ何一つ理解できていなかつたが、すぐ先の未来の想像がキルアを打ちのめし、全身が凍り付く。懇願の言葉は声にならずに、ひゅつ、とただの空氣として喉を通り抜けていつた。

「なんだ……？ 何が起こつたんだ？」

その時――。

からん、と金属が床に落ちる音が、会場内にやけに大きく反響して聞こえた。

命の音というにもあまりにも軽いそれは、リリスの左手の指輪が真つ二つに割れて落ちた音。

「……試合は終わりでしょ。彼女、医務室に運んであげて」

キルアはその声を耳にして、初めてそこで何もかもを理解した。針男の正体も、リリスの異様なまでの覚悟も全て理解して、自分のあまりの愚かさに泣き出したいような気持ちになる。

キルアはずつと、イルミの手のひらの上で踊らされていたのだ。

だが、キルアが後悔に沈む間もなく、試合は無情にも進んでいく。リリスが医務室に運ばれると、次はキルア対ギタラクルなのだ。

もしもあるのときポツクル戦を棄権していなければ、また少し結末が変わっていたかもしだれない。もしかするとリリスもあそこまで無茶をしなかつたかもしだれない。

キルアは針男の正体を知つたことで、リリスがなぜ今更“キルアとは友達じゃない”と言い出したのかわかつたような気がした。彼女も彼女で、キルアに対して罪悪感を抱いていたのだろう。あの苦しみ方は演技なんてレベルじやなかつたし、明らかに死を覚悟していたものだ。キルアにとつて“家族”というのはこれまで煩わしいものでしかなかつたが、リリスは命を賭してイルミに立ち向かつてくれた。リリスは友達ではないかもしだれないが、代わりに家族的な愛情を示してくれたのだ。

試合開始が告げられると、キルアは目の前の男を見据えてゆつくりと口を開いた。

「……奇遇だな、兄貴」

「そうだね、これは全くの偶然だ」

「そう言いながら針を抜いていく」ギタラクル。

みるみるうちに顔かたちがめきめきと変形し、見慣れた長い髪がさらりと背中に流れ落ちた。「オレは仕事の関係上、資格が必要だつたんだけど、まさかキルがハンターになりたいと思つてたなんてね」あまりの白々しい嘘に聞いているだけで吐き気がする。

不気味な針男の正体がキルアの兄だという事実に周囲はどよめき、二人の会話を固唾をのんで見守っていた。

「……さつきのあれ、リリスに何したんだよ。ていうかこれまでも。何させてたんだよ」

リリスを助けるつもりでした家出が、まさか余計にリリスを苦しめることがあるとは思つてもみなかつた。

キルアは自分に対する怒りと情けなさと、目の前の兄への憎しみで溺れそうになつていたが、対するイルミの表情はいつもと変わらない。ただ、会話をする気はあるようで、底冷えのする黒い瞳でキルアを見下ろした。

「別に何もしてないよ。むしろオレはリリスの自殺をとめてやつたらいいだから、感謝してほしいね」

「自殺しようとするほど、追い詰めたのは兄貴じゃないのか」

「心外だなあ。あれは氣を病んで死のうとするほど、可愛い性格じやないだろ?」

だいたいキルがいけないんだよ。キルさえ大人しくしていれば、リリスは安全だつたのに

「……つ、俺のせいだつて言うのか?俺が、大人しく暗殺やつてればよかつたつて?」

「そうだよ。お前の天職は殺し屋なんだから」

決めつけるようなイルミの言葉と共に、兄を取り巻く空気の温度が

ぐつと下がる。圧迫感というのは比喩でも何でもなかつた。なげなしの酸素を求めるように、キルアの呼吸が早く短いものになる。

「お前は熱をもたない闇人形だ。自身は何も欲しがらず、何も望まない。陰を糧に動くお前が唯一喜びを抱くのは、人の死に触れたとき。お前はオレと親父にそうつくられた」

イルミはまるで経典でも暗唱するかのように、いつもの台詞を諳じた。その言葉の意味を考える必要はなく、絶対的に正しいのだと信じているといわんばかりの口ぶりだ。「そんなお前が、何を求めてハンターになると?」首を傾げたイルミには、キルアの行動は考えたことすらない選択だつたらしい。

キルアは何度も聞かされた『レール』に挫けそうになる心を叱咤して、自分の想いを伝えようと思った。

これまでには聞く耳すら持つてもらえないと諦めていたけれど、もしかすると今の兄なら――

「……別に、ハンターになりたいわけじゃない。でも、俺にだつて望むことくらいはある」

「ないね」

「あるよ! イル兄にだつてあるはずだ!」

「……オレに? 一体何を言い出すんだい、キル」

ここで起ころるのは、有る無しの平行線の議論。

そう思い切つていたのか、キルアの反撃にイルミは目を瞬かせる。お陰での不気味な圧力もやや弱まり、キルアはここぞとばかりに深く息を吸い込んだ。

「リリスはもう人質として使えない。さつきの話を聞いて、確信がもてた」

「ふうん、やっぱりリリスを見捨てるつてわけ?」

「違うよ。リリスは俺に言つてくれた。俺のこと家族みたいに大事に思つてるつて」

「……」

「でも、兄貴もそなんだろ? 兄貴はもう、リリスのことを家族のようと思つてはるはずだ。だからリリスの自殺を止めたんだろ」

「……別にただ、あれはオレのモノだつてだけだよ」

いつも淡々と話すイルミにしては、随分と歯切れが悪い。しかしだからこそ、この指摘が図星であるとよくわかる。

キルアはさらに畳みかけるように口を開いた。

「いいや、薄々おかしいと思つてたんだ。俺を脅すための人質にしては、やけにリリスに拘るんだなつて。家出した俺を追うだけなら、なにもリリスまで試験に連れてこなくていい」

「それは、万が一キルが脱落した時の保険だよ」

「監視は執事でもいいだろ？なのに、イル兄はリリスをわざわざ同伴させた。拘りすぎなんだよ、リリスに」

「……」

「でも仕方ないよな、イル兄、家と家族のこと大好きだもんな。……こつちがうんざりするくらい」

わざと吐き捨てるように言つてやれば、イルミは元から大きな瞳をさらに見開いた。手塩にかけた弟に腹の中で疎ましく思われていたこと、そして弟にあつさりと自分の感情を見透かされたこと。前者はともかく、強い否定を返してこないあたり、イルミ自身ももうリリスを家族だと認めているのだろう。これで彼女が殺されるようなことはなくなつたが、この兄の愛情は下手な殺意よりも対象を擦り減らす。それを知つているキルアとしては、素直に安心していいのかどうか複雑な気分だ。

一方、イルミは早々に衝撃から回復し、今度は顎に手をやって、どうキルアをやり込めるか考えているらしかった。

「……仮に、オレがリリスを家族みたいに思つてるとして、だつたらキルはどうなの？自分のことを大事にしてくれるリリスを置いて、キルは外の世界に行くつて言うのかい？」

「リリスは俺の望みを応援してくれた」

「望み？ふーん、では言つてござらんよ」

話題がリリスのことからキルアの話へと移った時点で、あの不思議な圧が再び強くなり始めた。それでもキルアは引き下がらない。あれだけのリリスの覚悟を見せられた後だ。自分だけ逃げだすなんて

みつともない真似はしたくない。ぐくり、と自分の喉が鳴るのを聞きながら、この試験を通してようやく形になり始めた心からの望みを口にすることにした。

「……俺は、ゴンと友達になりたい。友達と旅して、もつともつと色んな世界を見て回りたい」

元はといえば、ただあの環境から逃げ出したかった。リリスを救うこともそうだが、彼女がいなくてもキルアはいつか家出をするつもりだった。

だが、"家を出たい" や "暗殺者になりたくない" というのは後ろ向きな望みだ。家を出て、暗殺者以外の道を選んだ自分が、何をして生きるのか、したいことがあるのかと問われれば、たちまち答えに窮してしまう。けれども今のキルアには、僅かながらも前向きな望みがある。まだまだ具体性には欠けるけれど、心の底から想つた願いが。

「無理だね。お前に友達なんてできっこないよ」

イルミはあざ笑うわけでもなく、哀れむわけでもなく、ただ事実を述べるように淡々と否定した。

「お前は勘違いしてる。所詮、お前も人を"使える"か"使えないか" でしか判断しないんだ。リリスのときもそうだろう? お前はリリスに褒められることで、誰かに認められたいという感情を満たしていただけだ」

それについては思い当たらないわけでもない。家族がキルアを"一人の人間" として扱わないから、どうしてもリリスに求めた部分がある。

反論の言葉を持たなかつたキルアに、イルミは言い含めるようにゆっくりと話した。

「ゴンに關してもそうだよ。お前は家から出たい理由に、都合よくそいつを使つてるだけだ。友達になりたいわけじゃない」

「違う……! 俺は、」

「キル、お前は俺がリリスを殺さないだろう、と言つたね。確かにリリスがこのまま大人しく家族になるなら、オレはリリスを殺さないと思う。」

でもね、始まりはやつぱり利用価値だつた。リリスが“使え”なければ、オレはリリスに目をつけなかつたよ」

「……」

「キルもそうさ、今は家を出る口実にゴンに利用しようとしているだけだ。そんなものは友情じやない。

いつかゴンが“使えなくなつたら”、きつとお前はゴンを殺すよ。たとえ直接的でなくとも、邪魔になれば見殺しにする。なぜなら、お前は根つからの人殺しだから」

イルミの決めつけるような発言に、キルアの背筋がぞくりと粟立つた。いくら綺麗ごとを言おうとも、友達を見捨てないことにに関してキルアは正直なところ自信がない。特にゴンは格上相手でも平気で突っ込んでいくような奴だ。危ない橋は渡らずに逃げるという方針で育つたキルアとは真逆である。

もしも、もしも、ゴンと二人でいるときに窮地に陥つたら――。「キルア！ そいつがお前の兄貴だらうが何だらうが言わせてもらうぜ！ そんな人をモノとしか思つてないような奴の話に聞く耳持つことねえ！ いつもの調子でぶつとばしてやれ！」

キルアが嫌な想像に引きずられかけそうになつたところで、外野からレオリオの大聲が聞こえてくる。「ゴンと友達になりたいだ？ 馬鹿か！ お前らはとつくにダチ同士だらうが！」その激励に、はつとしたのはキルアだけではなかつた。

「え、 そうなの？」

これまでキルアだけを捉えていた暗い瞳が、ギヤラリーのほうへと向けられる。「あたりめーだろが、バーク！」すっかり頭に血が上つた様子のレオリオは臆することなく喚きたてた。

「ゴンとキルアは友達だ！ そんなもん、見りやわかるだらうが！ ゴンだつてもうそう思つてるぜ！」

「……へえ、あつちはもう友達のつもりなのか。

よかつたね、キル。ちようどいいじやないか」

本心から良かつたね、と言つてるわけではないことくらいわかるが、ちようどいいとはどういうことだろう。

困惑するキルアに、イルミはさも素晴らしい思い付きをしたかのように。ピンと指を立ててみせる。

「今からゴンを殺そう。それで、お前が友達を見捨てないかどうかはつきりする」

「つ……！」

瞬間、会場を包んだ緊張。

キルアだけじゃない、あれだけ怖い物知らずと思えたレオリオも、あまりの発言に息をのんで固まっている。

「彼は今、どこにいるの？」

「ちよつと待つてください。まだ試験は、「

「どこ」？」

イルミの行動に一拍遅れて試験官が止めに入ろうとしたが、言葉を最後まで言い切らないうちに針の餌食となる。キルアとの訓練ではただの凶器でしかなかつたはずだが、刺された試験官の顔はイルミが変装を解いた時のように歪に変形した。

「ト、隣リノ控工室……」

「どうも」

イルミはまつたく心のこもらない礼を述べると、そのままリングを降りようとする。

追いかけたい。追いかけて止めたい。なのに足が動かない。

自分も他の皆のように、扉の前に立つて兄の行く手を防げたらどれだけよかつたか。

「お前にゴンは殺させねえ！」

「…………うーん、ここで彼らを殺しちゃうとオレが失格になつて、自動的にキルが合格つてことになつちゃうね。ライセンスが要るのは本當だし、参つたな……」

「あ、いけない。それはゴン殺しても同じか？」

「うーん、それじゃあ、合格してからゴンを殺そう」

兄のわざとらしい独り言が、キルアの胸に突き刺さる。それでも耳はちゃんと聞こえているのに、身体が凍り付いたように動かなかつた。他の者からすれば、『殺す』なんてのは子供のような脅し文句か

もしれない。あまりにもあつさりと発せられたものだから、現実味に欠けている。

けれどもこれまで兄の行いを間近で見てきたキルアは、つまらない脅しだと笑い飛ばすことができなかつた。

「それならたとえここに居る全員を殺したとしても、オレの合格は取り消されたりしないよね」

「うむ。ルール上、問題ない」

「聞いたかい？ キル。オレと戦つて勝たないとゴンを助けられない。

友達のためにオレと戦えるかい？」

——できないね

苦しい。苦しい。

あの不思議な圧力とは関係なく、恐ろしい想像に胸が押しつぶされそうだ。自分が友達を——ゴンを見捨てるかもしれない。絶対大丈夫だとは、今のキルアには言えないのだ。自分の実力は正しく理解している。

イルミはキルアが返事をしないことで、キルアの出した答えを確信したみたいだつた。

「なぜならお前は友達なんかより、今この場でオレを倒せるか倒せないかの方が大事だから。そしてもうお前の内で答えは出ている『オレの力では兄貴を倒せない』。

『勝ち目のない敵とは戦うな』。オレが口をすっぱくしてそう教えたよね？」

イルミは不意に手の平をこちらに向けると、「動くな」と鋭く言い放つた。

「少しでも動いたら戦い開始の合図とみなす。同じくお前とオレの体が触れた瞬間から戦い開始とする。

止める方法は一つだけ。わかるな？ だが……忘れるな。

お前がオレと戦わなければ、大事なゴンが死ぬことになるよ」

そう宣言して、一步、一步と近寄つてくるイルミ。

キルアは限られた時間での選択を迫られた。ゴンを助けたい。で

も、兄貴には勝てない。勝ち目のない敵とは戦うなという、言葉の正しさはよくわかる。だが、このままでは今度こそ本当にゴンを見殺しにすることになるのではないか。

——友達ってのは対等。どちらか一方が責任を負うようなこともない。お互に助け合つて、そのときできる最善をすればいいんだよ。追い詰められたキルアの脳裏に浮かんだのは、最終試験前に聞いたリリスの言葉。

最善、この場合の最善とはなんだ？

キルアはゴンを助けたい。ならば、友達だから見殺しになんかしないで戦うか？

たとえ戦つたとしても、イルミはキルアを殺すようなことはしないだろう。試合中での殺害がルール違反であるというのもあるが、イルミは『家族であるキルア』を殺さない。実戦とは違うのだから守りに入る必要はないのだ。

しかし、実際のところキルアがイルミに立ち向かつたとして、イルミを行動不能にできるかと言わればやつぱり不可能だ。それどころか、キルアが反抗したことに対する見せしめとして、イルミは本当に試験後にゴンを殺すかもしれない。

だったら、この場合の最善は――

ゴンを見殺しにするのではなく、生かすための最善は――
「参った……俺の負けだよ、イル兄」

絞り出すように負けを認めれば、嘘のようにイルミの圧力は引いていった。俯いたキルアが腹の底でどのように思っているかなど、少しも気づいた様子はない。

「あーよかつた。これで戦闘解除だね。はつはつは、ウ、ソ、だ、よ、キル。

ゴンを殺すなんてウソさ。お前をちょっと試してみたのだよ」

ぽん、と頭に手を置かれ、キルアはびくりと肩をはねさせる。が、嘘をつくのは苦手ではない。このまま、『友達を見捨てた奴』の汚名を背負つても、キルアにできる最善を貫き通せばいい。

イルミはダメ押しとばかりに、キルアの心を碎くための言葉を続け

た。

「お前に友達をつくる資格はない。必要もない。お前は今まで通り親父やオレの言うことを聞いて、ただ仕事をこなしていればそれでいい。ハンター試験も必要な時期がくればオレが指示する。今は必要ない」

キルアはそれを最後まで聞くと、黙つてリングを降り、そのまま出口の方へ向かつた。「お、おい！」レオリオが声をかけてくれるが、今は聞こえないふりをする。レオリオからすれば、キルアは兄に脅されて友達を売った最低な奴だろう。

だけど、それでいい。キルアはキルアの最善を尽くした。ずっとイルミの言うことなんて聞きたくないと思っていたが、逆に言うことを聞いている間、イルミは目立つた行動を起こさない。このまま家に帰つて試験を棄権すれば不合格は確定だが、キルアの望みはライセンスを取ることではないのだ。

——ゴンと友達になりたい

会場を出れば、キルアは一人だ。またあの鬱屈とした家に帰ることになるのだろう。しかし今のキルアは、一次試験の後のような苦々しい気持ちにはならなかつた。ゴンはキルアが帰つたことで、もしかしたら怒るかもしれない。ゴンを人質にされたと聞いたら余計だろう。だが、これもまたキルアの決断だ。今回のキルアの不合格について、誰も責任を感じる必要はない。

「お前と一緒に試験受けられて楽しかつたぜ、ゴン」

キルアは最後にホテルを振り返つてそう言うと、パドキアに帰るために空港へと向かうことにした。

35. 埃を被つた愛情

父親の顔は知らない。今思えばあの母親のことだからただ子供を作るために男を必要としただけで、恋愛する気も夫婦になる気もなかつたに違いない。リリスの母はいつも友人の話ばかりしていた。彼女がいかに素晴らしい優秀で、うつとりするほど美しいかその話しかしなかった。

リリスが生まれた頃にはとっくにその友人はこの流星街を出てしまっていたらしいが、母の話から彼女がパートナーと結婚するためにしてここを出て行つたということはなんとなくわかつた。

「彼女はお姫様だつたから、王子様が迎えに来たのよ」

リリスの母は友人のことを語るとき、それはそれは幸せそうだった。逆に言えばそれ以外のときはいつも不幸そうだつた。だからリリスはよく自分から母の友人の話をねだつたし、不幸な母親を自分が幸せにしてあげようと思つていた。

「ママ、今日はこんなものを拾つたの！きつと隣町へ持つていけば高く売れるわ」

「……隣町ね、あそこには素敵なドレス店があつたわ。ショーウインドウに飾られていた青いドレスはきっとよく彼女に似合うと思うの」生活費を稼ぐのは、もちろんリリスの仕事だつた。リリスの日課は流星街に捨てられるごみの中から金目のものを探すことと、物心ついたときからやらされているよくわからない修行だ。

母親の関心がここには無いとわかつて、リリスはぎゅっと手の中の宝石の欠片を握りしめた。そして気を取り直すと何度も聞いた母の好きな話題を続けることにした。

「ねえ教えて、ママのお友達は今どこにいるんだつけ？」

「彼女はね、遠いパドキアの山のお城に住んでいるのよ」

「ママは会いに行かないの？」

「まだ駄目。だつて約束したんだもの。」生まれ変わつて『会いに行くわつて。今ままじゃ恥ずかしくつて彼女に会えないから、それま

でここには来ないでつて頼んだのよ」

母親はそこまで話すと、ようやく虚ろな瞳を向けてリリスを視界にとらえた。

「でも残念ね、あなたが男の子だつたらよかつたのに。せつかくあの男の容姿を上手く受け継いで、綺麗な顔をしているんですもの。彼女だつてきつと気に入つてくれたはずだわ」

「……？」

「ところで、今日の分の修行は終わつたの？」

「うん。今日はいつもより長く纏を維持できたよ」

「はあ、一体いつまでそんな基礎やつてるの？早くしてくれないと困るわ。壊したらまた一から作らなきやいけないから、精孔もゆつくりとしか開けられなかつたし」

「ごめんなさい……」

母親の「言う」とはときどきリリスには理解できなかつた。が、肝心なのは内容ではなくそこに込められた感情だ。リリスはたとえ他言語だつたとしても、母親の感情を声の温度で悟ることができるだろう。

母は怒つている。不幸だから怒つている。

それさえわかればもう十分だつた。

「もう行つて。それをお金に換えてきたら、もう一回修行しなさい」

「はい」

「怪我だけはしないようにね。特に、その顔に傷をつけてはだめよ」

「はい」

返事をしたリリスは、ぼろ屋を出る前にもう一度だけ振り返つて母親を見た。いつも厳しいけれど、リリスが怪我をしたりしないよう心配してくれる。「行つてきます」控えめな咳きは母の耳には届かなかつたのか、埃に混じつて部屋の隅に積もつただけだつた。



一通りの話が終わり、イルミは折れた腕をぶらりと下げたまま立ち

上がる。キルアが棄権したおかげで、すぐに最終試験は終わったが、初心者用の講習を受けなければライセンスを受け取れなかつたのだ。

基本的に真面目な性格のイルミは最前列に座つていたため、イルミが講義室を出る頃には既に半数以上が退出していた。にも関らず、「ギタラクル」と偽名のほうで声をかけてくる者がいる。

腕一本ではまだ足りないのか。
イルミは内心でうんざりしながら、待ち構えていたゴンを見下ろした。

「なに」

「キルアは帰つたんでしょ。場所を教えてよ」

「やめておいたほうがいいと思うよ」

「誰がやめるもんか」

一試合目で合格しながらその後気絶して会場にいなかつたゴンは、先ほど事の顛末を聞いて講習中にイルミに詰め寄つてきたばかりだ。キルアは明らかに自分の意思で棄権したし、イルミからすれば他人どうこう言われる筋合いはないのだが、それでもゴンは納得がいかないらしい。今回の試験の合否だけでなく、キルアに望まないことをやらせている教育方針自体が許せないのでそうだ。

公衆の面前で兄弟の資格が無いとまで言われたものの、そういう目の前のゴンは所詮“自称トモダチ”である。むしろ、他人の家庭に首を突つ込む資格があるのかを問いたい。

「リリスのことだつてそうだ。リリスが倒れたのもギタラクルが何かしたんだろ」

「それは既に会長たちの前で説明して納得してもらつてる。あれはリリスが自分でやつたことだよ」

合否についての異議申し立ては二件。ポツクルの不戦勝と、イルミとリリスの不自然な試合についてだ。後者についてはリリスの合格云々ではなく、主にイルミが不正を行つたのではないかという“クレーム”だった。

しかしその件については、講習が始まる前にイルミは別室に呼び出されて説明を済ませている。念にまつわることなので他の受験者の

耳に入れるようなことではないし、リリスの身柄を引き渡してもらう都合上、婚約している状況や神字の指輪についても簡単に話した。

指輪については二次試験を担当していた女の試験官からかなり派手な非難を浴びたものの、家の伝統だと言い張れば向こうは口を挟めない。念無しで試験に合格するためのいわゆるハンデであり、殺害の意図はなかった、むしろ指輪の自爆を逆手に取られてこちらが驚いていると淡々と述べた。

——でも、それって自殺しようとするくらい嫌われてるってことじゃないの！ やっぱりそんな男に彼女は渡せないわ。

——嫌われてるのは認めるよ。今回のことによくわかった。でも婚約を解消するにしても、一度うちに連れて帰つて話し合う必要がある。

——そんなの、彼女が目覚めてから自分の意思で向かえばいいことでしょう。

——リリスにはうちの情報も色々知られている。きちんと話し合い取り決めもせずに彼女が逃亡するようなことがあれば、オレはいよいよリリスを殺さなきやいけなくなるよ？ もし彼女が行方をくらませたら、ハンター協会に責任がとれるの？

——それは……

——そうだ。リリスが本当にオレと婚約しているかは、家に確認してくれてもいい。そこの会長はうちのじーちゃんとも知り合いでしょ？

イルミの言葉に、ネテロはうむ、と頷いて顎鬚を撫でつけた。暗殺者でも快楽殺人者でも、実力さえあれば取れてしまうのがハンターライセンスだ。一部にはハンターを誇り高い職業と見なす人間もいるが、実際のところ正義の味方でもなんでもない。結局ぎゃんぎゃんと騒いでいた女の試験官は、不服そうな顔をしながらもネテロの決断に委ねることにしたらしかった。

——まあ実のところ、ゼノから『今年はうちの孫二人と孫の嫁が試験を受けに行くからよろしく頼んだぞ』と先に連絡を貰つておる。だからまあ、おぬしの言い分も丸きり嘘というわけでもないのじやろ

う。

“嘘”の部分でちらりと証拠品の指輪の破片に視線をやつたネテロは、あれがゾルディック家の伝統でないとわかつてているようだつた。しかし指摘されない以上はこちらも涼しい顔で続きの言葉を待つ。伝統でなくとも、リリスとイルミの二人の問題であることに変わりはない。他人に嘴を挟まれる言われはなかつた。

——じゃが、これだけは聞いておかねばならん。なぜおぬしはその大事な伝統の指輪を壊してまで”リリスの自殺を止めたんじや？

——は？ そんなの死なせたくないからに決まつてる。

——なぜ死なせたくない？

——なにその質問……当たり前だろ、だつてリリスはオレの——
イルミはその時の自分の答えと、それを聞いたネテロの面白がるような瞳を思い出してため息をついた。結果的にその答えのお陰でリリスの身柄を引き渡してもらえることになつたのだが、なんだか釈然としない。これまでの自分だつたら、あそこで”リリスに死なれると不合格になるから”と、そういう考え方をするはずだつた。

「はあ……リリスのこと、どちらもキミには関係ないことだと思うけど」

ため息の理由は別にあつたのだが、イルミの態度にゴンはますますいきり立つ。強い光を目に宿し、イルミが答えるまでドアの前から動く気がないようだつた。

「キルアもリリスもオレの友達だ！ 絶対、このままさよならなんてごめんだ！」

「それは後ろの二人も同じかい？」

背後に立つ金髪と長身サングラスも、覚悟を決めた表情でこくりと頷いた。これ以上、ここで面倒な押し問答はしたくない。

「……いいだろう。教えたところでどうせたどり着けもしないし。

ククルーマウンテン——この頂上にオレたち一族の棲み家がある。キルはそこへ帰つているはずだし、リリスもそこに向かうよ」

別に隠してもいないし、それこそハンターを名乗るなら自分達で調べればいいと思う。「もういいでしょ」イルミがあつさりと答えたこ

とに驚いたのか、三人は少し顔を見合わせてそれから脇に退ける。

ようやく出られた。今のイルミはくだらないことに関わっている暇はないのだ。講習の部屋を出て足早に医務室に向かおうとすれば、また目の前に邪魔な人間が立ちはだかつた。

「リリスはまだ目覚めないのかい？」

それをこれから見に行くところだ、と思つたが、ヒソカはわざわざこの話をするためにイルミを待つていたらしい。折れた腕にちらりと視線が向けられるのを感じて、余計に忌々しさがこみ上げた。

「そうみたいだね。あの会長にも事情を聴かれたよ」「話したの？」

「簡単にだけね。リリスの身柄を引き渡してもらわないと困るし。それでもライセンスは本人じやないと渡せないって言われた。その時に講習もやるらしい」

「でももう指輪を外しちゃつたんだろう？ 彼女、また逃げるんじやないの？」

そういうえばヒソカはリリスの念が“入れ替わり”だと思つていたのだった。実際には“憑依”であるため、彼女が念を遣えるようになつたとしても本体はイルミの手元から逃げられない。

しかしそのことを説明する余裕も義理もないため、イルミはさっさと話を切り上げようとした。

「大丈夫、今更逃がさないよ。逃がさないし、死なせもしない」

「彼女、弟くんの足枷としてはさほど役に立たないんじゃないかな？」

「……」

そんなことは言われなくともわかっている。今回の試験でキルアの友達を自称する者はリリスだけではなくなつてしまつた。今回は圧力をかけて家へと帰らせることに成功したが、元々リリスを婚約者として家に連れて来てから、キルアは訓練に精を出したことがない。罪悪感で縛る計画も結局家出されて意味がなくなつたし、リリスを利用するにも効果はいまひとつと言つたところだ。

「そななんだよね。でも役に立たないけど邪魔でもない。むしろ邪魔なのは、」

「ゴンはボクの獲物だ。手出ししたらただじやおかないよ」

いつも飄々としているヒソカが怖い顔をするなんて珍しい。余程ゴンに期待しているようだ。「わかつてゐるよ」残念ながら彼は進んでゾルディック家に来たがる自殺志願者なのだが、そこで生死はイルミの関知するところではない。

「でも、ヒソカもわかつてゐるだらうね？」

「リリスとキルアに手を出すなつてことかい？」

「そう」

「キルアはともかく、リリスも？」

「そう」

イルミは念押しするように深く頷く。「あれはオレの……モノだから」ヒソカにまでからかわれるのはごめんだと思つて先ほどとは違う言い回しをすることになつたが、その努力はあまり意味をなさなかつたらしい。イルミの言葉を聞いたヒソカは、ふつと表情を緩めて、憐憫にも似た視線を寄越した。

「そいいえばリリスがキミのこと知りたがつてたよ」

「は？ オレの何を知りたいわけ？」

「さあね、でもキミが何を考えてゐるのかわからないつて言つてた」

「……それはこつちの台詞なんだけど」

どうして今更自殺なんて馬鹿な真似をしたのか。どうしてあんなにも辛そうに躊躇されているのか。

そしてどうして、イルミのことを最初つから嫌っていたのか。

ずっとずっとそれが知りたかったのに、彼女は決して教えてくれないのだ。リリスが何を望んでいるのかさえわかれば、もう少し交渉の余地はあつたかもしれない。ゾルディック家に関わることが望みなら、婚姻で達成されるはずだつた。

だが、彼女は自分の命を捨ててもそれを拒否したのだ。

「キミ達はホントに似たもの同士だよ。夫婦になる前から鏡みたいだ」

「鏡？」

「そう。夫婦は合わせ鏡つて言うだろ？ 眠つたときのリリスを見て、

ボクはそう思つたよ」

「……」

よりもよつてあの状態のリリスと似ていると言わわれるのは心外だ。イルミはあんな風に母親を求めたりはしない。そもそもリリスのことに関して、ヒソカにわかつたような口を利かれるのは癪だつた。「意味がわからないんだけど」あの悪癖以外だつたら、リリスと自分が似ているというのはなんとなくわかる。打算で動くところも、理屈っぽいところも、似ているからこそ利用しやすかつた。

あともう一つ、ゾルディイツク家の人間を愛しているところも。

イルミはヒソカと別れると、今度こそリリスの眠る医務室へと向かつた。キルアが棄権した時点で試験は終了したので、講習も含めてまだ二時間ほどしか経っていない。彼女の場合ただの気絶とは違つて色々と限界だつたはずだから、起きるのはもう少し先だろう。しあしななイルミの予想に反して、部屋もベッドもぬけの殻だつた。

——逃げられた？

確かに指輪のなくなつた今、彼女が逃げるには絶好のチャンスだ。咄嗟に触れてみたベッドはまだ温かく、そう遠くへ行つていないうことがわかる。イルミは一瞬、円を展開しようとしてそれをすんでのところであめた。ここには主にハンター協会の関係者として念能力者が何人かいる。その後に戦闘をするつもりならともかく、円で触れることは同時にこちらの力量も明かすことになるのでむやみに使うのはあまり賢い選択ではない。一度冷静になろう。逃げるにしたつてリリスは今無一文だし、ライセンスもまだ協会側が預かっているのだ。

医務室を飛び出したイルミは、誰か彼女の姿を見た者がいないか辺りに視線を走らせた。

部屋の窓も廊下の窓も全部閉まつていたので、ここから飛び降りた可能性は低い。指輪のダメージは相当なものだつたはずだし、弱つている彼女ならばすぐに追いつけるだろう。むしろここで追いつければ、また彼女を探すのは苦労するに違いない。

だがイルミの焦りとは裏腹に、リリスはごくあっさりと見つかって、医務室と同じ階にあるリネン室近くの廊下で、ぼうっと突つ立っていたのだ。「リリス、」大股で歩み寄つても、彼女には逃げだす気配もなければイルミの存在にさえ気付いていない。そこで初めてイルミは彼女が“逃げ出した”のではなく、“例のアレ”が起こつたのだと察した。

「……ほら、帰るよ」

リリスの腕を引けば、ぐらりと彼女は身体ごとこちらに倒れこんでくる。一応眠っている状態だから体温が高いのか、これが彼女の温度なのかは定かでないが、この試験中に何度も感じた重みとぬくもりだ。よかつた。彼女はここにいる。死んでもいいし、逃げ出してもいい。それがわかると焦燥感は嘘みたいに引いていった。

「これと似てるなんてね……」

かつてはリリスの屈辱や嫌悪の表情を見ると愉快でたまらなかつたはずなのに、なんておかしな話だろう。

自分にはないと思っていたはずの感情がただ埃を被つていただけだつたと気付かされて、イルミは面映ゆいような、何とも言えない気持ちを味わっていた。

36. 弱り目

嫌な夢を見ていた気がする。昔の夢だ。

リリスはまだうすぼんやりとする視界の中で、無意識に人の姿を探していた。それは孵化したばかりの雛鳥が、本能的に親を探すのと似ている。ただ残念ながら人間であるリリスの場合は、音を発して動く物であればなんでもいいというわけではない。

「ようやく気が付いたんだね」

焦点が定まった先に苦手な男の顔を見つけて、リリスは反射的に眉をしかめた。そうしてゆっくりと回り始めた頭で、ああ、自分は失敗したのか、と静かに理解したのだつた。

「……試験は？」

身を起こして周囲を見回せば、明らかに行きと同じゾルディック家の私用船の中だつた。リリスは一応ベッドに寝かされていたものの、その左手首はベッドのフレームと手錠で繋がれている。皮肉なことに、この光景は睡眠中に悪癖を抱えるリリスにとって非常になじみ深いものだつた。唯一いつもと違うのは、ここ最近ずっと目障りだつた薬指の指輪がなくなっていることくらいだろうか。

「終わつたよ。不合格者はキル。先に家に帰つてる」

ベッドの脇に置かれた椅子に腰かけたまま、イルミは実に簡潔に答えを返す。でも、それきりだ。普段の彼の性格ならば嫌味の一つや二つ寄越してきてもおかしくなかつたのに、リリスが最終試験で取つた選択に対して、何のコメントもなく黙り込んでいる。

リリスはそのことにやや拍子抜けする思いだつたけれども、挑発されたところで食つてかかるほどの元気もなかつた。全身が泥につかつたように怠くて重いし、せつからく覚悟した死すらも阻まれて何もかもどうでもいい気分だ。

「そう……じゃあ、結局全部イルミの思い通りになつたんだね」

どうせ今更強がつてみたところで、リリスの敗北が覆るわけでもないのだし。

すっかり戦意を喪失してしまつてゐるリリスはともかく、イルミを

取り巻く雰囲気までもが今日は不思議と穏やかなものだつた。

「……キルには余計な感情は持つてほしくなかつたんだけどね、欲しいものがあるって言われたよ」

「まあ、欲しいものくらい誰にだつてあるだろうね」

「リリスにも？」

「……」

まるでこちらを見透かそうとするような黒い瞳と目が合つて、今度はリリスが黙り込む番だつた。つい今しがた、誰にだつてあると言つたくらいなのだから、もちろん答えはYESだ。だが、肯定すればその欲しいものを聞かれるに決まつている。もうリリスは素直に欲しいものを口にできるほど、幼くもなければ純粹でもないのだ。

リリスが沈黙を守つていても、イルミは少しも気にならずに勝手に話を続けた。

「ずっと考えてたんだ。リリスが何を目的にうちにやつてきたのか」「私はキキヨウさんに会いに来たんだつてば……」

「そうだつたね。でも本当の望みはそれだけじゃないだろ？　というか人間つてのは欲張りだからさ、一つ満足したら、すぐまた次の望みが湧いてくる」

「……何が言いたいの？」

リリスの望みが何かなんて、イルミには関係ない。興味もないはずだろう。それなのにイルミは話をやめようとはしなかつた。彼の聲音は酷く落ち着いていて、いつもみたいにリリスを甚振る意図ではないだと察せられる。

それでも、リリスは次にイルミの口から出る言葉を認めたくなくて、耳を塞いでしまいたかった。

「家族が欲しくなつたんだろ、リリス」

「……違う」

「いいや、そうやつていつまでたつても子供の病氣にかかるのがいい証拠だよ」

ちらりと手錠に視線を走らせるイルミに、リリスは何も言い返せなかつた。身体が弱つてゐるせいで、心まで弱くなつてゐるのかもしけ

ない。悔しさよりも怒りよりも、惨めで、情けない気持ちが込み上げてきた。そんなリリスの気持ちを知つてか知らずか、イルミは呆れたように息を吐いた。

「馬鹿だね。いくら母さんに気に入られたつて、本当の娘になんてなれやしないのに」

それを聞いた心臓がぎゅっと縮こまつて、冷え切った肺は空気を吸い込むのをやめてしまつたみたいだつた。本当の娘になれるわけがないことくらい、当のリリスが一番よく知つている。わざわざ言われなくたつて、痛いほど理解している。「……イルミに、何がわかるつていうの」つんと鼻の奥が痛んで、声が震えた。俯いたリリスは涙が決壊してしまわないよう、必死でまばたきを堪える必要があつた。

「最初からちゃんと家族を持つてるあなたに、家族を大事にして、大事にされてきたあなたに……大事にされなかつた人間の何がわかるの」「ふうん、それがオレを憎んでた動機？ 結局羨ましかつたつてこと？」

流石にあんまりな言い方だと思つたが、リリスは他に取り繕う言葉を持たなかつた。彼の言つた通り、リリスはイルミを羨んだのだ。他にもいる彼の兄弟を妬まなかつたのは、きっと彼だけがリリスをゾルディイツク家から排斥しようとしたからだろう。家族に大事にされているだけでもするいのに、僅かばかりのぬくもりさえリリスに許さないイルミの姿勢が酷く恨めしかつた。それほど自分の家族を愛しているのなら、その家族が気に入つたりリリスに何百、何千分の一でいいから愛情を分けてくれたつて罰は当たらないだろう。

イルミの言葉を認める代わりに、大粒の涙がぽたり、ぽたりとシーツを濡らす。その様子をじつと見ていた彼は、リリスの固く握りしめられた拳の上に手を重ねた。

「だつたらやっぱり結婚しよう、リリス」

「……は？」

驚きのあまり顔をあげれば、やはりそこにはいつもと変わらぬ無表情が鎮座している。イルミの手はその青白さからは想像できないほど熱を持っていて、振り払おうにも手錠で繋がれた左手では身動きが

とれなかつた。いや、仮に自由が利いたとしても、リリスは指先一つ動かせなかつただろう。

それくらいイルミの発した言葉は、リリスの思考力を容易く奪つた。

「なに……言つてるの？」

「だつて、結婚したら家族になるでしょ？リリスが憧れた家族だ。一體何の不満があるの？」

「不満つて言うか、意味がわからないんだけど……言つておくけど、私にはもうキルアの足枷としての価値はない。メリットないんだよ？」
「あるよ」

間髪入れずにそう返されて、リリスは一瞬息を呑む。疲労と衝撃でただできえ鈍くなつてゐる頭では、突拍子もないイルミの言動を理解するのは難しかつた。そうでなくとも常々何を考えているのか読めなかつた男だ。どうせまた、訳の分からぬ自分理論を展開してゐるのだろう。

「……確かにキキヨウさんは喜んでくれるかもしないね。もしかして、また親孝行や自己犠牲の一環？」

「違う。これはオレの望みの話」

「……」

「オレはね、リリスが麁されてゐるのを見て、リリスのこともつと知りた
いつて思つた……リリスが死のうとしたとき、死んでほしくないつて
思つた……リリスとこれまで無理矢理一緒にいて、やつぱりオレのも
のになつてほしいと思つた」

イルミの訥々とした語りを聞いてゐるうちに、いつの間にかリリスの感情の奔流はすつかり勢いを失つてゐた。今では濡れたまつ毛と少し赤くなつた目元が涙の名残をどめているに過ぎず、慘めさや悲しさは綺麗さつぱり消え去つてゐる。だが、イルミに言われた言葉を何度反芻してみても理解できず、困惑の感情を胸に、彼の顔をまじまじと見つめることしかできなかつた。

「これではまるで告白ではないか。」

リリスがイルミを嫌つていたのは嫉妬からだが、イルミだつて實際

相當にリリスのことを目の敵にしていたはずだ。それがいつたいどうして、どういう風の吹き回しで、こんなごく普通の男女みたいなことを言いだすのか。

混乱を極めたリリスは、かえつて自分が冷静になつていくのを感じていた。

「待つて。イルミの言つてること、全然わからない」

「要約すると、リリスに結婚してくれつて言つてる」

「……なにそれ、なんで？」

「うーん、なんでつて言われてもな。確かに今リリスと結婚するメリットは見当たらないし……母さんと父さんの例を参考にするなら、好きつてことなんじやない？」

「は？」

こんな大事なことを他人事みたいに言うなんて、一体どういう神経をしているのだろうか。リリスの方こそ訳がわからなくて困つているのに、当の本人ですら曖昧な感情だというのならどうすればいい。馬鹿にしているのかと、怒つていいものなののかすら判断に迷う。

しかし、イルミは戸惑うリリスを置き去りにして、さも素晴らしい提案をするかのように少し口調を強めた。

「リリスは家族がほしい。オレはリリスがほしい。オレたちが結婚すれば、両方の願いが叶う」

「だから、なんでイルミが私のこと欲しがつてるの。ほんとに意味がわからんないんだけど」

「正直、オレもだよ」

「なつ……ふざけてんの？」

やつぱりイルミはリリスをからかつて馬鹿にしているみたいだ。

そう判断して、リリスが眦まなじりを決したのも束の間――

「だけど、欲しいんだから仕方ないだろ」

ぽつりと呟かれた言葉に、喉元まで出かかつて怒りの言葉は霧散してしまった。「……なんの」代わりに漏れたのは、行き場のない感情をのせた吐息だけだった。

「別に、今すぐ返事をくれなくてもいい。今向かつてゐるのも家じやな

くて仕事先だし」

「……イルミ、」

「手錠の鍵、置いておくから」

サイドテーブルに金属製の鍵を置いたイルミは、リリスが引き留める間もなく立ち上がって部屋を出ていく。今まで監視されていたことを考えると、ものすごくあつさりとした態度だった。てつきりイルミのことだから、代わりの指輪とまではいかなくとももつとしつかり拘束するかと思つていたのに。

しかしそくよく考えてみれば、ここは飛行船の中。逃げ場などないから放つておかれただけかもしれない。

一人ぽつんと残されたリリスはしばし呆然としていたが、舐められてるな、と思い至つて復活してきた怒りにほつとした。かといってぶつける相手はもういないし、心も身体もへとへとだ。他にすることも思い当たらず、仕方なく目を閉じる。

そういうば眠るのが怖くないのは、随分と久しぶりだ、と思つた。

37. 鏡映のモノポリー

仕事を終えて、飛行船に乗り込んで、まず真っ先に向かつたのはリスの部屋だった。

いつでも逃げられるように自分で手錠の鍵を渡したくせに、焦燥感を募らせているなんて本当に馬鹿げていると思う。

それほど手放したくないのなら、確実に拘束してしまえばよかつたのだ。

だがいくらイルミでも、リリスに快く思われていないことくらいはわかっているつもりだった。初対面からあれほどわかりやすい敵意を向けられて気づかないのは妙な話だし、その後の関わりを通して彼女の態度が軟化したようにも思えない。

それでも、今回は無理矢理言うことを聞かせるのではなく、リリスの意思で望んでほしいと思った。眠っているときのリリスみたいに、リリスのほうからイルミを求めてほしかった。

「ただいま」

勢いよく扉を開けて帰宅を告げても、当然ながら返事は戻つてこなかつた。ベッドは当たり前のようにもぬけの殻で、それを見た途端、イルミは言葉にできない脱力感に襲われる。

やはり彼女は逃げたのだ。いくら飛行船とはいえ、停泊のタイミングがある。その気になれば逃げられないことはない。

この状況は予想していたし、逆の立場ならイルミだつてそうしただろう。頭ではわかっているのに、どうしても失意が隠せない。脅すのでもなく、従わせるのでもなく、生まれて初めて真剣にぶつかつてみた結果だからだろうか。なんでも解決できる針が便利すぎて、今更それ以外の方法で他人の気持ちをどうやって自分に向ければいいのかわからなかつた。

（……冷たい。）

往生際悪く、触れたベッドはとつぐに温かみを失つていた。それがどうしようもなく苦しくて、イルミはそこへごろんと横になる。リリ

スを諦めたくはなかつた。だが、イルミに提示できる条件は全部示したし、リリスの望みだつて同時に叶うのに、それでも逃げられるなんて相当な嫌われようだ。自嘲するしかない。

これまで母親に勧められた結婚話を断つてばかりだつたイルミとしては、自分が振られる身になつてやりきれなさでいっぱいだつた。望んだ相手に拒まれるということが、こんなに苦しいなんて知らなかつた。

「そこ、私のベッドだから退いてくれる？」

けれども不意にがちやりと扉が開いて、驚いて起き上がつた視線の先にはリリスが立つていた。予想外の彼女の登場に、困惑と嬉しさと、少しの気まずさを感じてイルミは乱れた髪を撫でつける。「……まだいたんだ」恥ずかしい姿を見られたな、とは思ったが、この期に及んで取り繕うのもかえつてみつともないかも知れない。どうせ好感度はマイナスに振り切つている。これ以上、下がることはない……はずだ。

「いて悪かつたね」

「ううん、安心した」

半ばヤケになつて素直に返せば、リリスの表情がわかりやすく歪んだ。ただそれは不快感ではなくて、どちらかと言えば居心地の悪そうな表情に見える。

彼女は諦めたようにため息をつくと、後ろ手で扉を閉めて、ゆっくりこちらに近づいてきた。

「ほんとあなたつてなんなの」

「……リリスはオレのこと嫌い？」

「うん」

取り付く島もない即答に、イルミは言葉を詰まらせる。色よい返事は期待していなかつたものの、もう少し言葉を濁してくれてもよかつたのではないだろうか。

イルミがベッド、リリスがそのすぐ傍の椅子に腰かけるという状況は、先ほどとまるきり場所が逆転したものだつた。

「でも、試験中イルミと一緒にだつたらよく眠れたよ。四次試験とか一

週間もあつたし……それはちよつとだけ感謝してる」

「……気づいてたの？」

「もしかしてそうかなつて思つて言つたけど、今確定しちやつたから最悪な気分」

最悪だと言つたわりに、リリスは酷く落ち着いているように見えた。最初の、トリックタワーのときのように取り乱すこともなければ、イルミに向かつて逆切れするようなこともない。

彼女は目を伏せると、ややあつて躊躇いがちに口を開いた。

「……イルミこそ、私のこと嫌いなんじやなかつたの」

「嫌いだつたよ」

一体いつから嫌いで、いつからその感情が裏返つたのかはイルミ本人ですらもはつきりとしない。だが少なくとも不快感が確かな形を持つたのは、自分の家族と楽し気に過ごすリリスの姿を見てからだつた。

キキョウと親密にお茶を飲み、弟たちにも当たり前のように慕われて、キルアの教育においても認められて。

「オレの家族を奪おうとするリリスが憎かつた」

このままいけば、自分の居場所が盗られるかもしれないと危機感を抱いた。ゾルディック家が大事だつたのもそうだが、その大事なものを作ることそつくり奪われるのが嫌だつた。

「オレもたぶん……リリスが羨ましかつたんだと思うよ」

「え？」

「リリスのことは監視させてたから、うちでどんな風に過ごしてたのか、ビデオの映像を見たんだ。リリスはオレよりも姉弟きょうだいだつた。母さんにも頼られてたし、父さんやじいちゃんもリリスのことを受け入れてた」

リリスはイルミが家族に大切にされていると言つた。確かに、彼女の境遇と比べるとどうなのかもしれない。けれども大切にされているのはこれまでのイルミの努力があつての物だ。その努力をもつても、後継者はイルミではない。とつこの昔に納得はしているけれど、今はむしろキルアに家を継がせることが使命だとすら思つている

けれど、ゾルディイツク家の子供たちの中には暗黙の優先度が存在している。

血の繋がりはないけれど家族の振る舞いをしていたリリスと、血こそ繋がっているものの責任や柵で雁字搦めのイルミの、一体どちらを羨ましがるべきなのだろうか。互いを妬んで、幻の立場を必死になつて奪い合っていた二人は、実は似た者同士だつたのではないだろうか。

「そんなこと思つてたの？ イルミの方が本当の家族なのに？」

リリスは信じられないとも言つよう大きく目を見開いたが、内心ではイルミもひどく驚いていた。自分の奥底に仕舞い込まれていた気持ちを、こうして言葉にする経験などなかつたのだ。これまで形を持たなかつたもやもやとした感情が、すとんと胸に落ちて妙に納得する。

リリスは難しい顔で少し考え込んだあと、イルミを窺うかのようにまっすぐと視線を合わせてきた。

「あのさ、イルミ……私やつぱり、すぐにはイルミのこと好きにはれない。殺されかけたり、脅されたり、利用されたりしたこともそうだけど、キルアに対する行動とか考え方とか全然共感できない」

「みたいだね。散々邪魔されたし、それはよくわかってるよ」

「イルミのしていることが、家や家族のことを考えた行動だつてのはこれでも理解してるつもり。だけど私はイルミからすればきっと、キルアの教育の邪魔にしかならないよ。それでもいいの？」

いいも悪いも、イルミは初めから決定権を持たない。今回のキルアの家出だつて最終的に沙汰を下すのは父親だし、イルミは決められたそれに従うだけだ。ゾルディイツク家を繋いでいくことが、陰からそれを支えるのがイルミに与えられた使命だから、仮にもし他の弟に白羽の矢が立つようなことがあれば、今度はそちらに注力するだろう。

そういう意味では、リリスのほうが余程家族を“個人”として大事にしてくれているのだろうと思つた。家族に受け入れられるリリスも羨ましかつたけれど、リリスにそうやつて想われる家族もイルミは羨ましかつた。その何百、何千分の一でいいから、イルミにも愛情を

向けてくれればいいのに、と思っていた。

「……リリスは最終試験で命を張れるくらいキルアのことを家族だと思つたんだろう？」

「……」

「逆に言えばそれで十分だ。リリスがオレのことを嫌いでも、オレの大切なものを大事にしてくれるのならそれでいい」

「ほんとに？」

「……できれば、オレのことも同じように思つては欲しいけどね」

最後の最後で、小さな嘘をついてしまつた。

本音を言えば一番がいい。使命を持ったイルミではなくて、ただのイルミとしてリリスに感情を向けられたい。ゾルディック家の名には興味がなく、純粹にゾルディックの家族を愛してくれるリリスだからこそそれができるのだと、キルアの懐き具合を見ていればよくわかつた。だが、

「それは無理」

現実は無情なのだ。イルミがこれまでしてきたことを考えれば、自業自得だとも言える。「……だよね」苦い想いで呟いたイルミは、ずしりと心が沈むのを感じたが、すぐにリリスが屈託なく笑つてることに気が付いてぽかんと口を開けた。彼女の珍しい笑顔に、思わず見とれてしまつていた。

「そんなすぐには好きになれないよ」

「すぐには」

「でも、キキヨウさんたちに何も言わずにさよならするほど、私も恩知らずじやない。先に帰つたつていうキルアのこと気になるしね」「……じゃあ、このまま一緒にうちに帰つてくれるの？」

「帰るんじゃない、行くだけ」

リリスはそこまで言うと、戸惑うイルミを無理矢理ベッドから押しつける。「まだ疲れがとれないから。着いたら起こして」簡単に言ってくれるが、ゾルディック家に帰ればいいよリリスは逃げられなくなるだろう。それはイルミの望むところでもあるけれど、本当にいいのだろうか。仮にこれまでの全てが演技だつたと告白したところで、

今更あの母親が引き下がるとは思えなかつた。絶対に外堀を埋めにかかるだろうし、なによりリリスはイルミ以外の家族に対しては柔らかい態度だ。強気の姿勢で断れるとは思えない。

「自分から檻に入りに行くなんて、リリスもほんとはオレのこと好きなんじやないの」

「自意識過剰。私が好きなのはイルミじゃなくてイルミの家族」「それはもう、オレが好きってことと同義だよ」

「全然違う」

シーツを肩まで被り、くるりと背中を向けた彼女は鬱陶しそうに耳を塞いだ。一目でそうとわかるほど拒絶の姿勢だが、それでもこの距離で完全に遮音できるはずなどない。

「リリスはオレの家族目当てかもしれないけどさ、オレはリリスと家族になりたい」

なるべく抑揚を込めて伝えれば、ぴくりとリリスの肩が小さく跳ねた。その表情はここからは見えなかつたけれど、どうせ起きているときは彼女は素直ではない。

イルミはどうしようもない愛しさが、胸を満たしていくのを感じていた。

「一人で眠れる？一緒に寝ようか？」

「つ、一緒に寝るとかありえない！こっち見ないで！」

頑なに振り向こうとしない彼女は、今度は枕を乱暴にひつつかんで自分の顔面に押し当てた。その声がくぐもつているのは押しつぶされたせいか、何かを堪えようとしているからか。

「何もしないよ。ていうか、試験中のことを考えたら今更だろ。一緒に寝たらリリスのことすぐ寝かしつけてあげられるよ？」

お互いまつともない姿は散々晒したのだ。今更少しくらい弱さを見せたところで、何を幻滅することがあるだろう。

結局、リリスもイルミと同じようなことを考えたらしく、しばらくして蚊の鳴くような小さな声が聞こえてきた。

「……じゃあ、寝るまで。私が寝るまでの間、そこにいて」「泣き出すのはいつも寝たあとなんだけど」

「今日は泣かないし、途中で起きたりもしない」

「わかつたよ」

彼女の声が既に涙声だと指摘するのは、いくらなんでも野暮という
ものだ。

イルミは小さく肩を竦めると、飛行船に乗った時の焦燥や後悔が嘘
だつたと思えるほど、穏やかな気持ちで呟いた。

「(ノ)にいるから、ゆっくりおやすみ」

38. きつと、解けてなくなる

リリスとイルミの婚約話はやっぱり嘘だつたらしい。

家出から帰ってきた弟からその話を聞いて、まあそりゃどうなとミルキは思った。元からあの色々と欠落したところのある兄が、誰かと想い想われてという事態になることが想像できない。お家柄打算で政略結婚することはあるても、兄が選ぶにはなんの後ろ盾もないリリスは少々メリットに欠けるはずだった。キルアを家に縛る道具としても役立たないことが判明した今、婚約話が嘘だと発表されるのも実際にわかりやすい。

それからキルアは、結局ライセンスを取らずに帰ってきたとも話した。まあそれは正直イルミが妨害したのだと察しがついたが、腹の傷の恨みもあるミルキは盛大に不合格を馬鹿にしてやった。

しかし予想に反して、キルアはいくら煽つてもつつかかってくるようなことはなかつた。イルミにこつてり絞られて落ち込んでいるのかと思いきや、別にそういう風でもない。それどころか信じられないことにミルキとキキヨウに謝つて、自ら反省のために独房に入ると言い出したのだ。

ミルキにしてみれば、弟の考えが読めずに気持ち悪くて仕方がなかつた。

気持ち悪いと言えば、兄のほうもそうだつた。イルミは試験後そのまま仕事に向かつたらしく、帰宅したのはキルアが家についてからさらに三日後。

こちらは普段通り家族に嘘をついていた件についての反省はほどんど見られなかつたが、リリスに対する態度というか、雰囲気というか、うまくは言えないがとにかくがらりと変わつたのだ。

もともと親の前では親密そうに装つていた二人だが、人目がなくなれば空氣をぴりぴりさせていたのは知つている。面倒事を避けたミルキはあえて介入しなかつたものの、明らかにリリスのほうもイルミを嫌つっていたはずだ。

それなのに今の二人には、前のように不自然な仲の良さも険悪さのどちらもなかつた。婚約話は嘘だと明かされた今のはうがむしろ、婚約していると言われても信じられる距離感だ。特に、イルミの側の執着が露骨だった。いつもは見合いを勧められても仕事が忙しいとそぶいて顔すらみずにお断りしていたくせに、今は仕事から帰るなりすぐリリスだ。おそらく当初の監視とは別の目的で、イルミが不在の間の彼女の行動をミルキは逐一報告させられている。どうやつて手に入れたのかは恐ろしくて聞けないが、今の兄の待ち受け画面がキラアとリリスのツーショットなのも衝撃だつた。

そして、イルミがおかしいのはそれだけでない。

試験でできたという、キルアの自称“トモダチ”が敷地内にまで来ていると聞いても、特に妨害する素振りをみせなかつたのだ。かといつて歓迎している風でもないけれど、話を聞いてもふうんと言つたつきり。今までの兄貴からすれば考えられない態度である。

蓋を開ければキルアの家出をきつかけにして、ミルキの知らない間に周りの人間が一変してしまつていた。これはもう、UMAの仕事を疑つたり、オカルト板に出張して教えを請わなければならぬレベルである。

とりあえず考えれば考へるほど腹が減るため、ミルキは脳みそが求める糖分を探しに、ついでにお清めの塩を調達しに、やむなく自分の城から出ることにしたのだつた。

「ものすごく険しい顔してるけど……どうしたの？」

しかし、噂をすればなんとやらだ。

自室を出て幾ばくも行かないうちにばつたりとリリスと出くわして、ミルキは少し警戒する。今のところ付き合いの長い兄弟たちの変化のほうが顕著に感じられたものの、彼女もまた急に変わつたうちの一人なのである。

第一、今のこの家のリリスの立場は一体何になるのだろう。婚約話は嘘だつたと知らされても、キキヨウは欠片ほども諦めていなかつた。お陰でリリスは今日も当たり前のように花嫁修業をさせられて

いたらしく、ちよつぴり袖のあたりが焼け焦げている。

だが過酷なはずの訓練とは対照的に、彼女の表情はとても明るく、不思議なくらい幸せそうに見えた。

「……わかることだらけなんだよ」

「わかること？」

キルアは独房に入ってしまったし、イルミに聞くのはもつてのほかだ。となると後は、リリスくらいしか聞ける相手がない。そのリリスもイルミに囮われているし、修行は忙しそうだしで、これまでなかなか二人になる機会がなかつた。ミルキが部屋を出た当初の目的はお菓子だつたのだけれども、ちようど疑問をぶつけるチャンスなのではないだろうか。

「試験から帰ってきて以来、キルアもリリスもイル兄もさ、みんな変だよ。一体、何があつたんだ？」

「うーん、色々かな」

「その色々を聞いてんだろうが……」

返ってきた答えにミルキは思わず半眼になるが、リリスも別に誤魔化そうとしているわけではないらしい。本当に色々なことがありますぎて、上手く説明できないと言うのだ。ひとまず、彼女らが自分の変化を自覚しているとわかつたので、そこはミルキもほつとした。

「たぶんね、変わつたように見えるのは、みんな自分の欲しいものを見つけたからだと思う」

「は？」

欲しいものと言われて、ぱつとミルキの脳裏に浮かんだのは限定物のフィギュアやら新型のグラフィックボードを搭載したパソコンだつたが、他の三人が何を望むのかなんてこれっぽつとも想像がつかない。かろうじてキルアが友達を欲しがつているのは知つていたけれども、それなら自分から独房に入つて今も大人しくしているのは妙な話だ。試験で知り合つた人間たちがここまで訪ねて来ている話は、キルアにだつて伝わつていてるのだから。

「キルアとリリスの欲しい物もどうだけどさ、イル兄の欲しい物なんてもつと謎だぜ。イル兄に欲しい物とかあるのか？その気になりや、

なんだつて買えるだろ……」

ミルキは仕事人間という言葉が相応しい兄の姿を思い浮かべ、ますます難しい顔になる。イルミには趣味らしい趣味もなさそうだし、たまに家にいてもキルア達の訓練にかかりきりだし、使う当てもないのにあんなに稼いで一体どうするつもりなのかと思つてゐるくらいだ。

しかし、ミルキのぼやきを聞いたリリスはようやく答えられる質問が来た、と口角をあげると、重大な秘密を打ち明けるようにわざとらしく声を落とした。

「私なんだつて」

「へ？」

「イルミは、私に家族になつてほしいんだつて」

「……は？」

開いた口が塞がらないとは、まさにこのことだろう。聞こえてきた言葉が信じられなくて固まるミルキに、リリスは悪戯が成功した子供のようにくすくすと笑つた。そのせいでからかわれたのかと思つたが、リリスの発言をただの悪い冗談であるとは切り捨てられない。

というのも、リリスを探してこちらにやつてきたと思われる、イルミの姿を右目の端に捉えたからだ。

普段の無表情もどこへやら、一目でそうとわかるほど苦い、苦い顔をした兄の姿を。

「……リリス、」

「なに？」

声をかけられて視線を向けたりリスは、イルミの存在に気付いていたようだつた。堂々とした態度の彼女と、否定もせずに何とも言えない表情になつた兄を見ていると、いよいよ先ほどのリリスの発言が信憑性を増していく。

「馬鹿じやないの」

「んー、なにが？」

「もう黙つて」

普段威圧的な態度の兄が、こうして誰かに主導権を握られているのは見たことなかつた。黙れ、と短く命令することはあつても、きまり

悪そうに黙つて、と頼んでいるのはありえない。「私はほんとのこと言つただけなのに」どうやら、新しい関係は完全にイルミ側の一方通行らしい。これまで散々甚振られた分、リリスは甚振り返すつもりでいるのだろうか。

ミルキは全てを知つてゐるわけではなかつたが、敵対した時の兄の容赦のなさを知つてゐるだけに、今のこの状況は兄の自業自得なんだろうなと思った。今更と言つていゝほど的好意を向けられたりリスが、嫌悪感を示していゝようなのは内心で驚いたけれども。

「……ふうん、そつちがそういう態度取るなら、もう一緒に寝てあげないから」

「なつ！ ちよつと！」

が、どうやらイルミもただやられっぱなしといわけではないようだ。

誤解されるようなこと言わないでよ、とぱつと赤くなつたりリスは、勘違いするなと言わんばかりにミルキに視線を向ける。その表情は怒りよりも、どうみても羞恥の方が上回つていた。「イルミのそういう、自分に都合よく解釈するところほんとに嫌い」口ではどんなに悪く言おうとも、その声音には敵意ではなく、気安い家族に向けるような親しみがあつた。

確かに二人の空気が変わつたことには気づいていたが、まさかここまでとは……。

「……はあ、あほらし。惚氣はどうかよそでやつてくれよな」

この際勘違いであろうが、二人が間違ひを犯そうが、もはやどうでもよかつた。とにかく全て丸く収まつてもう胃の痛くなるような思いはしなくていいんだということさえ分かれば、兄弟の恋愛事情など知りたくもないのだ。

「違う！ 違うから、ちよつとミルキ！」

「あーはいはい。俺は腹が減つてんだよ」

その日、どこか遠い目をしながら廊下を徘徊するミルキの姿が、執事たちの間で目撃されたとかされなかつたとか。

次兄の彼が部屋から出るのは珍しい事なので、その真偽のほどは不

明である。



「……なんだ、結局リリスもイル兄から逃げられなかつたのかよ」
石でできた地下への階段は、足音を立てないようにするのが難しい。鎖に繋がれ、吊り下げられた格好のキルアは、リリスが独房へと足を踏み入れる前からその訪れに気付いていたらしかつた。

「そうみたい」

キルアがここに入つてゐるのは、本人の意思であると聞いた。本当ならもつと早く様子を見に行きたかったのだが、一応イルミとの婚約を解消して宙ぶらりんな立場のリリスでは、罰を受けているキルアに気軽に会いに行けなかつたのだ。そのため今回、こうして足を運ぶことができたのは、『キルアの様子を見に行つてやつてくれんか』というゼノの取り計らいがあつてこそだつた。

「調子はどう?」

「最高だね。絶好調だよ」

氣絶してしまつたりリスは彼とイルミが最終試験でどのようなやり取りをしたのか知らなかつたけれども、比較的元気そうなキルアの表情に少しホッとする。憎まれ口を叩けるくらいだ。心を閉ざしてしまうような事態は避けられたらしい。「イルミに、友達が欲しいつてちやんと言つたらしいね」核心に触れてみても、キルアは穏やかな、それどころかむしろ満足そうな顔をしていた。

「……まあね、否定されたけど」

もつと、全てを諦めたような瞳をしているかと思つていたのに。

もつと、苦痛や絶望の張り付いた表情をしているかと思つたのに。

リリスは自分の予想が裏切られて、それだけで酷く安堵した。その身に付けられた傷の痛々しさには眉をひそめたくなるものの、ゾルディック家におけるこの仕打ちを虐待と一口に言つてしまふのは躊躇われる。それは花嫁修業と称して様々な訓練を受けさせられているリリスだからこそ、『必要なこと』もあるのだ、と理解しているからだつた。

「急に肯定されても気持ち悪いでしょ」

「はは、それは言える」

キルアにはキルアの考え方があるように、イルミにはイルミの考えがある。キルアの置かれた境遇を可哀想だと言うのは簡単だったが、ゾルディック家という特殊な事情を考慮すれば友達が不要だと言うイルミの教えも一理あった。

そもそもそのイルミの考え方だつて、誰かが小さい頃の彼に教え説いたものなのだろう。

「で、否定されて、キルアの気持ちは変わつた？大人しく家に帰つたのはそういうことなの？」

「いいや」

はつきりと否定を返したキルアには、彼が最終試験前に見せたような不安定さは微塵もなかつた。もつと言ふと家出をした頃のキルアと比べて、随分と心が自立したのではないかと思う。

「俺は今でもゴンと友達になりたいって思つてるよ。だから、」

「今は会えない、なんて伝言したんだね」

「ああ」

ゴンたちがゾルディック家にやつてきているという話は、イルミ経由でリリスも聞いていた。というか、彼らにこの家の場所を教えた張本人がイルミらしい。イルミがゴン達を害するつもりなら、リリスが彼らを追い返すつもりだったが、イルミも他のゾルディック家の人たちも拍子抜けするくらい手を出そうとはしなかつた。

「今の俺にできる最善は、関わらないことだからな。来てくれたのはすっげー嬉しかつたけどさ、今の俺じや皆を庇つてやれねーし」「別にゴンは庇つてもらうつもりなんて無いと思うけど」

「そろは言つても、実際兄貴にも親父にもゴンは勝てないじゃん」

「そのシルバさんがさ、ゴンたちに手を出すなつて言つてるつて、知つてた？」

「へ……？」

ぱちぱちと目を瞬かせたキルアはやはり何も知らなかつたらしい。イルミも、あのキルアを溺愛しているキキヨウも本音で言えば『トモダチ』なんて排除したくてたまらないだろう。末弟のカルトだつて、

キルアに家を出てほしくないと強く思っている。本当ならばキルアを迎えて来た”トモダチ”なんて目障りでしかないはずだった。

だが、それらの感情は全て、シルバの判断で押さえ込まれている。キルアに”レール”通りの生き方をさせようとしたのも、キルアの”トモダチ”を見逃しているのも、どちらも同じシルバの行動なのだ。『イルミに言つたみたいにさ、シルバさんにも望みを言うだけ言つてみたらどうかな。私からするとここの家族つて、すづく水臭く見えるんだよ。別に想い合つてないわけじゃないのに、それぞれ大事に思つてるのに、皆すれ違つてるように見える』

キルアを囮い込もうとするのも、歪んではいるが愛情だろう。キルアに代々続いてきた誉れ高き家業を継がせたいと思うのも、親心だろう。

キルアは自分が人殺しの道具扱いされていると感じているみたいだが、本当に道具として産み落とされたリリスからすればわかりにくいけで愛情は注がれていると思う。少なくともキルアの両親は、キルアのささやかな成長を喜んでくれそうだ。刺されて喜ぶくらいなのだから、多少のことは反抗期が来たと感慨深く思つてくれるに違いない。

「ま、どうせ、親父には今回のこと申しあげなきやなんねーし……」

キルアはリリスの話を聞いてもまだ半信半疑のようだつた。が、あるかもしれない父親からの愛情に、ほんの少し照れくさそうな顔になる。きっと、彼は強制された”レール”が嫌なだけで、家族自体のことは憎んでは無いのだろう。殺し屋という仕事をしていても、父親のことは心の中でちゃんと尊敬している様子だつた。

だから勇気を出して向き合つてみれば、知らない間にできてしまつていたわだかまりも解けてなくなるのではないか。

「ていうか、リリスこそゴンたちに会いに行かねーの？俺は無理でも、リリスならその気になれば旅に出ることだってできるだろ。婚約も解消できたって聞いたし

「えつと……ごめん、私には私の優先順位があるから」

「優先順位?」

首を捻ったキルアに、自分の変化を話すのは少し恥ずかしい。偉そうなことを言つておきながら、リリスの中のわだかまりも最近になって少しがけ始めたばかりなのである。

リリスは自分でもどうかしているなど思いつつ、口元が緩く弧を描くのを止められなかつた。

「……あのね、実はこのままいけば私の望みも叶いそうなの。だから、キルアが私の分も元気ですつて皆に言つておいてよ。夢遊病も治つたつてクラピカに伝えて」

夢遊病、とリリスが自分から口にしたことで、キルアはものすごく驚いたようだつた。無理もないと思う。以前にその話題を振られた時は、とてもじやないがこんなあつさりと認められなかつた。

この発言でリリスにも何かしら心境の変化があつたのだと察してくれたらしのキルアは、吊られながらも器用に肩を竦める。もうそれ以上リリスをこの家から救うために、旅に誘うようなことはしなかつた。

「なんだよ、俺をパシるつもりかよ」

「弟つてのはね、姉にこき使われる運命なんだよ」

「……しようがねーな」

ぼやいたキルアは身を捩ると、よつ、と繋がれていた鎖を簡単に引きちぎる。手枷も足枷も玩具みたいにあつさり壊されて、改めて誰も彼を縛ることはできないのだと思わされた。

「じゃあ、俺行くよ。ひとまず、親父と話に」

「うん」

「その……色々サンキューな、リリス」

——行つてらつしやい。

キルアと最後に交わしたやり取りを思い出しながら、リリスは自室のバルコニーからゾルディック家の広大な敷地を見下ろした。もちろん、本邸からでは執事邸の屋根すら目視できなかつたが、今頃キル

アはゴンたちに会えただろうか。

「リリスが唆したんだろ」

自分の家のゲストルームは出入り自由だとでも思つてゐるらしく、当たり前のようにソファで寛いでいたイルミは、少しばかりの非難の色を滲ませて呟いた。けれどもその声にはこれまでのような敵意や苛立ちはなく、むしろ拗ねているような響きすら感じられる。キルアが出て行つたこと自体もそうだが、未だにリリスが姉ぶつてキルアを気にかけるのも面白くないらしい。

「最終的に許可を出したのはシルバさんだよ」

結局、父子の話し合いを通して、キルアは自由を勝ち取つた。リリスに様子を見て来いと言つたゼノのほうも、キルアが外の世界に触れることには賛成だつたらしい。

立ち上がり同じようにバルコニーへと出てきたイルミは、リリスの反論には何も言わなかつた。ただ黙つて隣りに立ち、見えるはずのない弟の姿を、果てしなく続く深緑の中から見つけ出そうとしているように見えた。

「……リリスこそ行かなくてほんとによかつたの？」

「私は友達よりも、家族を優先したいから」

「リリスが命を張れるぐらい大事な家族つてキルアだろ。一緒に行こうつて誘われたんじゃないの？」

先ほどよりもずっと拗ねたような響きが強くなつて、リリスは景色から彼へと視線を向ける。相変わらず彼は正面の森を睨みつけるようにして前を向いていたけれど、その横顔を見たりリスはまたひとつ、わだかまりが解けていくのを感じていた。

「家族になつてほしいつて言つたのは、キルアじやなくてイルミでしょ」

イルミに『羨ましかつた』と言われたとき、もしかするとこの人も自分やキルアと一緒にいるかもしれないと思つた。ただ、リリスやキルアが道具扱いから逃げようとしたのに対して、道具でいいから存在理由があることに固執した結果が今のイルミなのではないかと。

あの時は突然すぎて吐露された感情を信用できなかつたけれど、今

ならなんとなく自分達が似たもの同士だったのだと理解できる。そして互いの欠落を埋め合える可能性に、小さな喜びも感じていた。

リリスにとつてもイルミは、初めて“リリスをリリスとして”家族に望んでくれた相手だつたのだ。友人に気に入られるための道具でも、あの母親の娘としてでもなく、ただのリリスとして望まれたことが泣きたくなるほど嬉しかつた。

「じゃあ……」

「これは取引だよ、イルミ。私の望みを叶えてくれるなら、イルミの望みも叶える。そのほうが私たちにはわかりやすいでしょ」

「なるほど、それもそうだね」

イルミは珍しく口元を緩めると、それからにわかに生き生きと始めた。「だけど取引なら、改めて条件をはつきりさせる必要があるね。隠し事があるまま交渉なんてしたつて無意味だし」そう言つた彼は話の途中だというのに、すたすたと歩いて室内へと戻る。何事かと驚いて追いかければ、彼は部屋に備え付けられたクローゼットの前で立ち止まつっていた。

「イルミ、」

「オレはね、一番がいいんだ。リリスの家族の中で一番になりたいつてのが、本当の望みだとしても呑んでくれる？」

「……今度の指輪に、あんなふざけた神字を彫らないならね」

「その代わりもう二度と、リリスもオレに偽物なんか使わないでね」

イルミがクローゼットの扉を開くと、中から“リリスの本体”がぐらりと倒れるようにして飛び出してくる。それをなんなく抱きとめた彼を見て、リリスはどうとう観念することにした。他の誰にも気づかれなかつたのに、イルミだけが気づくというのならもう仕方がない。

リリスは泣き笑いのような笑みを浮かべると、参つたと言う代わりに二人に相応しい言葉でもつて返事した。

「いいよ、交渉成立だね」

遠いパドキアの山のお城には、お姫様と王子様が住んでいるらし

い。

母親から聞かされていた話と現実は随分違っていたけれど、リリス
はそれでもここ以上に幸せなところはないだろうなと思った。
大切な家族と暮らす、このパドキアの山のお城以外には。

End